

TITANUS—THE TITAN
MONSTRAS—

神乃東吳

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類と「外宇宙から差し伸べられた助力」により怪獣災害は根絶され、第一次大怪獣時代から20年あまりが経過した時代。

かつての怪獣の魂を宿した少女たち「怪獣娘」が現れ、これに対応すべく国際怪獣救助指導組織「GIRLS」が誕生し「怪獣娘」の保護活動などを行っていた。

そんな中、突如出現した正体不明の超常生物「モンス」による新たな脅威がこの「世界」に迫っていた。

これに対抗するべく亡き祖父に変わって宮下アキの後見人として現れた「逸保志ダグナ」、「ゴジラ」の能力を宿したアキの兄「宮下ユウゴ」を始め一般社会に溶け込む「怪

「獸王」の能力を宿した男たち「怪獣戦士（タイタヌス）」と特務機関「MONARCH」が極秘裏に活動していた。

（追記）

WEB限定オマケ短編付き

目次

祖父の遺志

2

怪獣戦士（タイタヌス）

32

鎧の戦士

65

力の戦士

99

鋼の脅威

134

青い抑止力

162

青と鋼の行方

190

大いなる力

224

怪獣探偵

252

ベーコンパニック

289

怪獣王の任務

330

怪獣王の帰還

364

パーティー会議

405

超電子の護衛者

444

王女の来日

479

不正の誘惑

526

公の守護者

573

姉妹と教師

631

祖父の遺志

老人はパタンツと呼んでいた読み古した本を閉じて目元にかける老眼鏡を外し、棚に置いた。

深い息を吐き出すように読み続けた本の内容に思いふけるとばかりに窓の外を見る
：正確には見上げていた。

窓の外から見える木の枝から飛び立った小鳥の自由さに対して老人の無力なまでの身動き取れないベットのの上、老人は病弱な病人であり、ここが老人の病室だった。

そこへスライド式のドアが開いて少女が入室してきた。

「おじいちゃん、御見舞いに来たよ」

少女は袖の長いセーターの下に学校制服、淡いオレンジ色のリュックサック、本来長い髪型であるが敢えてそれを一束で纏めて肩より垂れ下げた所謂サイドテールと呼ばれるヘアスタイル、今時でありながら今時の子にあらぬおとなしめで飾り気のない女子高校生だった。

「また、来てくれたのかい…：学校の方はどうかね、アキちゃん」

老人は自身の血縁で唯一の家族である孫に対して優しく穏やかな表情で彼女の顔を

伺う。

「うん、学校も生活も順調だよ……おじいちゃんこそ調子は大丈夫？」

「私の事は私がよく知っているさ……心配しなくても時期に遠くもなく、近くもあると言ったところだよ」

「また難しい言い方してボクを困らせないでよ……家から持ってきた本、読んでいたの？もう読み終わった？」

少女はイスを老人の病床の傍に置いて自分から腰かけると横になっている老人の顔を見つめる。

何らかの医療用の機械、何らかの症状緩和の薬、病院でしか見ないようなガラス製の急須とコップ、そして鼻からチューブに繋がれた老人自身、鼻だけではなく脈から繋がれた点滴に医療用の機械からわかるであろう何らかの情報、当然ながらそのすべてが老人の容態を伺うことができなから一般人である孫娘の少女アキは老人の顔色で判断するしかなかった。

「おじいちゃん……ボクが怪獣娘だつてわかった時、全然驚かなかったよね……なのに、おじいちゃんが倒れたつて聞かされた時のボクの方が驚いちゃつた……情けないよね」

アキは己の不甲斐なさを自虐しながらも祖父の事を尊敬する。

「そんなことはないさ、アキちゃん……寧ろ、必然だつたと私は確信しているよ アキちゃ

んが怪獣でも怪獣娘であつても、
“であつた”事に意味があるんだよ…それを運命と私
は思っているよ」

老人はアキを励ますように穏やかな表情を再び向けて来た。優しい表情であつた。

「両親の居ないボクを今日まで育ててくれた分、これからもずっとボクがおじいちゃんを守るよ…だつてボクは怪獣娘だから…だからおじいちゃんには安心していてほしい」
「私は何も心配はしていないさ、アキちゃんは強い子だ…だからいい加減、本当のことを話そうと思う」

「本当のこと？」

老人は突然、『本当のこと』と称した重大な何かをアキに伝えようとした。

「実はこの本、読みたくて持つて来てもらったわけじゃないんだ。読むことに変わりはないが読まなくても内容は知っているし覚えている…なぜならこの本、おじいちゃんが書いた本なんだ」

「えつ、そうなの？…でも名前…」

「違つて当然さ、いわばペンネームみたいなもの…もういろんな名前で作ってきたけど
いづれも大成もせず知られもせず、あるいは知られていても誰も覚えていないだろう
ね」

「でも…ボクは知つたよ…おじいちゃんの本…ボクだけはおぼえているよ…だから、

また教えてよ おじいちゃんだけが知っていること」

「…そうだねえ……おじいちゃんねえ “本物の大怪獣” にあったことがあるんだ」

「その御話かあ…なんでも聞いたよ、おじいちゃんが怪獣に襲われた話…」

「襲われたかあ…まあ、ある意味では襲われかけたりもしたし、関りもした、十分すぎるほどに私と怪獣は今もこうして関わり合っている」

そういうと老人は弱々しい手を掲げ上げた。

「おじいちゃん、どうしたの急に？」

アキには突然のことであつてもその行動の意味を理解するやアキは老人の手を両手で握った。

「いや何、アキちゃんの手にまた触れて見たくなくなっただけさ……変わらず優しい手だね、お母さんにそっくりだ」

「やめてよ、おじいちゃん…ボクはどこにもいかなからさ…ゆつくりしてね」

「ああ、ゆつくり…させてもらおう……だからアキちゃんも寂しがらないでほしい…アキちゃんは一人じゃない、これから、いつまでも…ずっ……とっ……」

突然、祖父の様子に変化が起きた。握っていた手に力が入らなくなり両手から擦り抜けるように落ちて、目はゆつくりと閉じたまま開かなかった。機械も突如、聞いたことのない音が鳴りだして異常を検知した。

何が起きたのか分からなくても既に行動が無意識の内に病床の傍に置かれていたナースコールをアキは押ししていた。

これを押しても押さなくても機械が異常を検知した時点で既に医者も看護婦もこの病室に向かつて来ている。現に廊下から慌ただしい駆け足の音が近づきつつあった。

そして、医師と看護婦が病室に入つて来るなり…看護婦がアキを老人から離し、医師が老人の脈を図る。

「——時——分、ご臨終です」

それは突然の別れであった。いくら身構え、覚悟を決めていても必ず訪れる事だとしてもいざ起きて見るとジワジワと実感させられていた。

「すみません…後のことはよろしくお願いします…少し、連絡を…させてください」

そういうとアキは事後処理を医師たちに任せ、病室を出てすぐの通路からスマートフォン型のデバイスを起動させメッセージアプリを開いて『ピグモン』と言うアカウントにダイレクトメッセージで祖父の事、今起きていること、何う予定を断る連絡を簡潔に打ち込んで送信するなりすぐに既読が付いた。そしてすぐに『ご冥福をお祈りします』と言う内容のメッセージで帰ってきた。

「……あつ……あれっ?」

送られてきたメッセージを最後まで読み続けようとした途端に目の前がぼやけ視界

が遮られた。

そして、デバイスの画面上に大粒の水滴が落ちて来た。

デバイスに水は禁物、水滴の元を拭おうと右手の長い袖で目元を擦っても水滴が溢れ出て止まらなかつた。

「ふっ……うっうっ……」

抑え込もうとしていた感情はその水滴と共に喉の奥から口で塞ぎたくても僅かな口の端から咽び漏れていた。

それは紛れもない「別れの悲しみ」だった。

—コツコツコツコツ……

悲しみにくれるアキの傍に白地のスーツを着た男性が革靴を病院内の廊下より音を立てながらやってきた。

「宮下 アキさん……ですね」

「うッ……えっ、ええ……そうです」

「お悲しみの所、無粋に訪ねてしまい申し訳ない……私は君のおじいさまの代理人として遺書を預かっている者と言えば理解してくれるかな？」

そういうと男はスーツの内側から封筒を取り出してアキに手渡した。封筒には『アキちゃんへ』と書かれていた。

「おじいちゃんの手だ…」

「それと、こっちは代理人として私がおじいさまからお預かりした法的効力のある『遺言書』…この内容に従い、宮下アキさんは本日より身元後見人として私、逸保志ダグナの保護下に置かせていただきます」

「…へっ?」

それは突然の別れからの唐突な通達にアキの表情は固まった。

…一週間後…

—国際救助指導組織・GIRLS東京支部—

『怪獣娘』、それは嘗て世界中に猛威を振るった巨大生物『怪獣』の能力や体質など宛ら怪獣を生き移したかのような突然変異を起こす女性たちが相次いで目撃されるようになっていった。

国連は早急に彼女たちの社会的孤立を防ぐために結成された組織『GIRLS』の庇護下の元で今日までの怪獣娘は人類にとつて友好的な存在であることを発信し続けている。

「ねえ、ウインちゃん…今日だよね」

「まっ、間違いないです…ですけど、まだ心の準備が…」

そんなGIRLSでいままさに緊張が広がっていた。

慌ただしくオドオドしい様子の健康的な小麦肌のポニーテールの少女と知的で正確な性格の現れている眼鏡を掛けたシルバーブロンドの少女は御互いに異常は無いか確認しあっていた。

「おつ、御二人とも！先ほども申し上げたとおり…いつ、いつも通りでお願いします…アギアギだつて今が一番辛い時期なのです だからこそ変わらずに接してあげて下さい」
慌ただしい二人の様子に見かねた見た目の幼さとは裏腹にしっかりとした赤髪の少女が落ち着きを持つように諭す。

すると、ビル内エントランスロビーから自動ドアが開いて待ちかねた人物が来館してきた。

「あれっ？みんな集まって…どうしたんですか？」

その人物とは…

「アギちゃん!!」

唐突に来館してきた少女よりも小柄な少女が飛びついてきた。

「あっ！ゴモたんがフライングした!!」

「ゴモたんさん！作戦と違いますよ!!」

「んっくもう、我慢できへん！ウチは悲しんだ顔したアギちゃんを見過ごすなんてでき

へんよ！辛かったなあ〜アギちゃん！」

突然の事に困惑するアキは頭上にハテナが浮かびながらも『えっ、なにっ、なんなの？』と声が漏れた。

「おい、ゴモラ！アギラから離れる…無理に慰めようとするな…こういう時はそつと肩をだなあ」

ゴモラと呼ばれる大胆な少女に変わって大人な対応とばかりに縦ロールの筋肉質な少女もアキの肩に手を置いて慰めてくる。アキにはワケがわからなかった。

「アギアギ、御辛い中でGIRLSに足を運ばれていただいたのですが…その、まずは心より冥福を祈ります」

「ああ〜その事ですか…もう大丈夫ですよ」

アキは少女たちが気掛かっていたことに対して返答を返す。皆が気にしていた『祖父の他界』にアキが一週間の内にすっかり立ち直っていると意思を示した。

「そうですか…それでもアギアギにとつて大切な御家族とのお別れですので私とここにいるGIRLSの皆さんも同じ気持ちですのでお力に成れることがありましたらなんでも言ってくださいね」

「ありがとうございます、ピグモンさん、ゴモたんも、ミクちゃんもウインちゃんも、レッツドキングさんも、心配していただいて…」

「みずくせえこと言うなよ、アギラ！同じ怪獣娘、悲しいことがあっても辛いことがあっても互いに乗り越えてこそだぜ！」

畏まった言い回しをするアキに対して力強く背中を叩かれたアキは『うっ！』と前のめりになった。

「まあ、いろいろバタバタしていましたけど何とかGIRLSの一員として気持ちは固まりました」

「そうですか…これ以上は過剰な心配ですね、アギアギの御気持ちを尊重しますのでこれから頑張っていきましょう」

「はい、それとピグモンさんにお伝えしたいことがあるんですけど…本人に直接伝えてもらいますね」

「はいい？本人…？」

和氣に固まる少女たちの元にアキの後見人と語ったスーツの男が少女たちの前にやってきた。

・
・
・

「ねえ、見えないよ！」

「ミクさん、押さないでください」

皆が互いを押しあいながら扉に設けられた僅かな隙間の建て付けられたガラス越しからGIRLSの怪獣娘たちは物珍しい光景を目にしている。

女性職員が殆どと言っても過言でないGIRLSと言う組織の名の通りその多くが年頃の少女たちで構成される同組織の中に突如現れた別世界人「男性」が来ているのである。さらに聞けば先週亡くなったアキの祖父に変わる『宮下アキの後見人』を名乗る特殊な人物であった。

そんな人物の目の前にティーカップに紅潮色の紅茶が出された。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

その男を表すにはまず一般的な日本人ではないこと、髪色は老いた白髪とは違う透き通ったプラチナブロード、純白のスーツがよく似合う出で立ちと清潔感、極めつけは海外のモデルとさえ見間違えような整った顔つきは年端のいかない子供から老年迎えたお年寄りにすらも好かれやすい僅かに微笑み浮かべるはにかんだ表情、何から何まで同組織内の怪獣娘たちには刺激の強い男性だった。

「えっ……ええっと、逸保志ダグナさん、でよろしいでしょうか？」

「はい、そうです」

「逸保志さんはアギアギ…怪獣娘アギラの宮下アキさんの後見人、すなわち法的上の保護者に該当されると認識してよろしいでしょうか？」

「はい、そのように」

「でつ、では改めまして国際怪獣救助指導組織GIRLS東京支部へわざわざ足を御運びいただきありがとうございます。私は当支部の代表者ではありませんが現在代表者こと支部長が不在のため臨時で代表挨拶をさせていただきます、怪獣娘ピグモンこと岡田トモミと申します」

「補佐をいたします調査部所属の怪獣娘エレキングこと湖上ランです」

二人のGIRLSの顔役と向かい合う形でアキとダグナは互いに鎮座する。そして、アキは顔馴染みのピグモンことトモミとエレキングことランの2人の怪獣名以外の本名を聞く姿を見たことに新鮮さと緊張が入り乱れる複雑な気持ちであった。

「それではこちらにも名乗るのは名前だけでなく素性も明かすべきですね…私はあなた方GIRLSとは別の国際怪獣組織に席を置く者と申しませう」

「私たち以外の国際怪獣救助指導組織の方…ですか？」

「私も存じ上げません」

トモミはランと顔を合わせてお互いにそんな組織があるとは知らないということ

共有した。

「正確には救助指導を目的とした組織ではありません。もつと言えばあなた方GIRLSよりも古くから存在する組織、それこそ世間一般で認識される『第一次怪獣時代』よりも以前、発端をさかのぼれば第二次大戦以前からと飛躍してまいりますので明確な年代を申しますと…1954年からと言うのが組織内の公式見解です」

「そんな昔から!?…いつたい、どういった組織なのでしょううか?」

「英語名にはなりますが『Secret agency Monster search』前文の直訳は『特務機関』通称は“MONARCH”、それが我々の組織名であり目的は旧巨大生命獣『怪獣』の調査、保護、監視を生業とする組織です」

調査部のランは顎に手を当てて考えても見当の付かない組織名に頭が少し傾く。

「モナーク…さん?それは分かりましたが…肝心の当組織の所属怪獣娘アギラと、彼女の祖父とあなた方の組織とはどういった御関係か御訊ねします」

ランは分からないことを優先的に質疑する形で尋ねる最初の内容はアキと先週に亡くなった祖父と極秘の組織『MONARCH』がどう関わっているのかを問う。

「宮下アキのおじい様は我が組織創設に関わる『開拓者達』と呼ばれる重要人物の一人でした。現在国際的な怪獣調査機関や研究機関、果ては軍事機関に至るまでの怪獣関連専門に見ればすべてに繋がり関わる基盤を作り上げた方と承知しております」

トモミもランも目を丸くする以外驚く表情が浮かべられなかった。それもそのはず、これ程に身近でGIRLSも含めた国際的に怪獣を専門に扱う組織の始祖的人物である孫がGIRLSの怪獣娘アギラであることにますます首が傾げてしまうような気持ちであった。

「俄かにどう返答してよいものなのか…一先ず驚きました。アギアギのおじい様…大変重要な方なのです」

「ボクもおじいちゃんが亡くなってから知りましたけど…ボク自身、おじいちゃんから何一つも聞かされていなくて…」

「ちよつと待ってアギラ、肝心のおじい様の御名前を聞いていないわ…それだけすごい方ならネット、ひいては検索したらトップに事典サイトに名前が載らないのはおかしいわ」

「御調べしても無駄でしょう、申しました通り我が組織は『特務機関』です。ご本人の名前、素性、経歴、すべてにおいてあの方に『存在』はありません…ソレは家族であつても例外ではないのです」

「ボクも、実はおじいちゃんの本名を知らないんです…ずつとおじいちゃん呼びで通していたんですけど保険証や戸籍、個人情報殆どが違う名前だったり、まったく関係ない情報ばかりで何がなんだか…正直、おじいちゃんがいることをボク自身が証明できる

ものが無いです」

この世に個人を証明できない人物がいるのだろうか、それは半ばその老人が最初からこの世に存在していないようなものだ。

「故に先週亡くなられた人物は『名前の無い者』ですがアキさんに宛てた『遺言書』のみが彼女との繋がりを唯一証明するものになります」

ダグナの懐から例のアキに宛てた『遺言書』が出てきた。

それすなわちソレを書いた人物は生前までこの世に確かな存在を認識させられる唯一のキーアイテムだった。

「こちらの内容は法的内容も含まれますので一部は割愛させていただきますが、遺言には……」

『本遺言に従い、私が半生をかけて関わってきたことのすべてを関係各員に伝達および通達し、個人権限で秘匿としていた情報の開示を宣言するものとする』

それは怪獣の多くを知り、多くをひた隠しにしてきた男からのささやかな最後の贈り物であった。

「それと同時に本内容で関わる遺言者の家族親族の保護も明記されています…それだけに彼が関わってきた事の内容はアキさんを覆いに巻き込む結果になるため当方MONARCHから私が派遣されたという次第であります」

「仰っている内容は理解致しますがアギアギを巻きこんでしまうほどの重大事項とは
いったい…」

「申し訳ございませんがその内容も貴方とあなた方GIRLSの怪獣娘さんにも関わる
大きすぎる内容ですので、既に東京支部外のGIRLSに席を置かれる重要人物の方々
にはデータで先ほど御送りしております」

そういうとダグナは手元のスマートフォン画面を見せ、メールアプリで圧縮情報化
したデータを各支部長に一斉送信で送っていた。その人物の中にはGIRLS東京支
部が極東支部名義であった頃から関わる研究者『多岐沢マコト』の名前もあった。

「この方々に御送りした情報を各々の判断で後日あなた方怪獣娘の方にも情報が共有さ
れますが、なにぶんそれまで極秘扱いにされていた内容ですので我々ですら慎重に扱っ
てここまで故、どうか御理解のほどよろしくお願いします」

「秘匿権限を有するほどの重大な何か…ますます我々だけで判断できる内容でないのな
ら確かにこのの方々であれば適切な判断ができるでしょう…この際、重要事項には目を瞑
るとして私たちにとって今一番肝心の知るべきことはアギアギのことです。そんな重
大事情に関わるアギアギは…」

「宮下アキさんには今まで通り怪獣娘アギラとしてGIRLSの怪獣娘として変わらぬ
生活を保障いたします…ですが、警戒的事情により彼女には護衛をつけさせていただき

ます」

「護衛？」

「そんな話、ボクも聞いていませんけど」

「無論、私でも構いませんが……私の立場はあくまで後見人であつて護衛者として適さない立場の者ですので私以外の者に任せるつもりです。勿論、アキさんの生活に支障をきたさない距離で配置させます……見方によれば彼女のそばには最低一人以上付き添いが居ると思つてもらつて結構です」

ダグナの話を聞いたトモミとランは未だ分からないことだらけであつてもアキがアギラとして変わらぬ生活ができるならそれで充分と理解した表情を御互いに確認する。

「わかりました……アギアギのおじい様が一体何者なのか、そんなおじい様が隠している重大な何かについても気になる情報が多すぎますが……最後に一つだけ伺いますが——」

「なんででしょう」

「そのアギアギを護衛する方は……その……男性、ですか？」

トモミの質問に対してダグナの目は上を向いて脳内の何かを精査するように考える表情を見せ、アキは唐突な質問にも関わらずその質問の答えを知っているとばかりに顔を赤面させトモミたちと目も合わせない。

「なるほど、そういう事ですね」

「そういうことなのです…現に今も廊下で…」

今にもなだれ込みそうな勢いでアギラと顔を見知った者たちでドアに張り付いている様子だった。

「大変御見苦しいものを…少々、注意してきます」

「いえ、構いません…寧ろ少し彼女たちと御話をしても？」

ランに変わってダグナは自分から廊下で待ち構える者たちに近づいた。

この応接間の扉は電子ロック方式の自動ドア、開閉は右隣の接触パネル操作で開く仕組み…ダグナはパネルに手を翳すとドアが自動で開いたと同時に固まっていた怪獣娘たちの集団が一瞬で倒れるように入ってきた。

「いでえー」「ふぎやー！」「ぐえー！」「むぎやあー！」

みんなそれぞれがドミノの如く重なり倒れダグナの足元から見上げる。

「大丈夫かな、立てるかい？」

そんな彼女たちにすら手を出してくれる紳士ぶりに怪獣娘たちは自分たちの見苦しさを恥じらいか少し赤面したように自分たちで体勢を立て直した。

「あつ、ありがとうございます…で、それよりアギさんはどうなるんですか!？」

「お兄さんはアギちゃんのお執事とか!?!実はアギちゃんのおじいちゃんは世界一のお金持ちだったの!?!」

「なワケねえだろ、きつとエレミたいな財界の御嬢様とかだぜ、きつと…」

「いやいやあくアギちゃんはどこかの国の御姫様やろ」

「アギラさん、寿退所するってマジイ!？」

「うわあく!!あらぬ噂が立ってる!？」

廊下の中だけでトンデモ話が尾びれ背びれ胸びれと様々な考察が重なりに重なって
おかしなことになっていた。

「貴方たちがアキさんの御友人様方ですね…初めまして、先週より宮下アキさんの身元
後見人となりました、逸保志ダグナと申します。どうぞよろしく」

「はいはい!あたしアギちゃんの一歩の親友、ミクラスです!ミクって呼んでくださ
い。」

「おつ、同じくウインダムです。名は白銀レイカと申します」

「オレはレッドキング!歌川ベニオって名前はあれどレッドキングの方がカッコいい
からそつちで呼んでくれ」

「はいはい!アギちゃんのことを大好きなゴモラことゴモたん!あたしも黒田ミカツ
キって名前があるけどゴモたんでもいいですよ!」

「あたしはザンドリアスです!名前があ…:ダサイから非公開で」

「なんだよ、道理サチコっていう良い名前があるじゃねえかオマエ」

「ああ、言わないでくださいよシショー！」

みんなそれぞれが自己紹介とばかりに怪獣名ともれなく本名まで明かすサービスぶりにアキは『なんで本名まで…』と心の中で疑問符が浮かぶ。

「さっそくつすけど…後見人って、何い？」

ダグナ以外の怪獣娘はミクの発言で全員盛大な喜劇のズッコケを見せることになった。

「まつ…まあズッコケといてなんだけど、実は俺もよく知らねえ」

「ウチもー！」「わっ、私も実は…」

「コウケンニンって何なの？ボランテイアの何か？」

「それは無償で貢献する人だね…君たちの中に親御さんがいるように保護してくれる人や扶養してくれる家族、そういった人たちがもし亡くなったり消えたりしてしまった場合に君たちのようにまだ社会的に成長しきっておらず未成熟者に対して『親代わり』になる者のことを後見人と言うんだよ」

全員がダグナの説明に『ほえ』と難しいことを聞いた時の顔をして納得したような納得していないようななどちらとも取り切れない顔で理解した。『体裁』だけは保つていた。

「えっ!?! ってことはアギちゃん今までおじいちゃん以外親とかいなかったの!?!」

「うん、まあ…一応」

「お父様お母様は!？」

「居ないよ、お父さんは物心ついた時から知らないし、お母さんは中学の時に病気で…」
「めちやくちや苦勞人じゃねえか!?!じいさんが居ただけでもまだ良い方かもしれねえが…」

「うわあ〜!今日からウチがアギちゃんのお母さんになつたる!!」

「今度ウチに遊びに来てください!ママのカレーとか一緒に食べましょー!」

皆がアキの知られざる事情を知るや思い思いに気を使ってアキを励ました。

「別に大丈夫だよ…おじいちゃんのこともお母さんの事も悲しかったけど、今は前向きに生き続けようって気持ちは固まっているから」

そんなアキも強い意志を見せた途端に皆の目は潤いに満ちるかの如き瞳から大粒の涙が零れた。

そして、全員からの無言の抱擁でアキは『ぐえっ!』と怪獣娘たちの人外的力強さの前に締め付けられた。

「はっはっはっ、仲が良いのですね」

「はい、とても…感動しました」

その様子を見て微笑むダグナと感動のあまり涙を流すトモミに呆れながらも口角が

上がっているランと様々な感情を見せた。

「それではこれよりアキさんと私は一旦セーフティーハウスへ向かいますので後の事は我々にお任せください」

「へえっ…セーフティーハウス？」

突然の発言に一同も、聞かされていないアキも図上にクエスチョンマークが浮かぶ。

「大変申し上げにくいのですが…現在、アキさんには高額な懸賞金が懸けられつつありますので貴方達風に言えば…『メツチャヤバ』な状況にあります」

またも唐突にとんでもないことを言い出したダグナの右手に持つスマートフォン画面には『WANTED』と赤字で書かれた西部劇手配者ばりの構図で顔写真に先月GIRLSの広報で取られた食堂でご飯を食べている時の写真が張り付けられている。

しかも現実の手配書はリアルタイムで更新されているようで何らかの数字が常に下がることなくドンドン上がって桁数だけでもとんでもない値がアキにかかっている価値を示していた。

「そっ…それってどれくらいヤバいんですか？」

「1分1秒でもココを離れないとこの手の連中は見境なく『戦争』だって起こせるような連中がきますので…このビル爆破ぐらいは想定されるかと…」

それを聞いた全員が先ほどの抱擁がウソのように解けてアキから2m以上は距離を

取った。

「そのく…ええつとく…」 「うん、まあ…ええつ」

「うくん…ええつと…」 「あつ…はい…」

「まあ、なんだアギラ…骨はできるだけ拾っておいてやるよ」

全員即座に状況を把握して気を使いながらも自分の命を優先した。

「みんなの薄情者おお!!」

「それではお邪魔しました。さあ、アキさん行きましょう」

「行ってくつて、まだ心の準備があー!」

「言つたでしょ…『メツチャヤバ』だと」

「だからその言葉、今時の女子高生でもつかいませんからああ!!」

皆のあまりにもな軽薄さに驚愕していたアキだったが即座にダグナに手を引かれて

応接間からともいGIRLSから連れ出されていった。

「なんだか、アギちゃん…トンデモない事に巻き込まれちゃつてるね」

「懸賞金を掛けられている人つて、初めて見ました」

「あつ、アギアギが…アギアギが…○○●●\$0●●?!&\$% %\$##\$&#&\$*+*+

?.&\$#%\$%&\$!?!」

あまりの衝撃にトモミは背中からバタンツと倒れた。

「わああ!?!ピグモンさんがあまりの事態にゲームのバグみたいに動揺しているっす!」
「おい、ピグモンしつかりしろ!!」

—GIRLS東京支部・地下駐車場—

皆とはぐれた2人はGIRLS職員や来客などで使用される地下の車両専用駐車場に降りて来ていた。

「放してください!一人でも歩けますから!!」

「そもいきません…:護衛でなくても私は貴方の後見人ですので最低限の警護に専念します」

二人が乗る予定の車まであと少しと言う所で駐車していた車は2台、1台はアキたちが乗る予定の車であるなら…:もう一台は予定外の招かれざる来客が2名現れた。

「どうやら我々より先に先客が居たみたいですね…:しかし、おかしいですねえ…:なぜ女性ばかりの名前通り『GIRLS』にガールとは言い難い者たちがいるんでしょうか?」

皮肉を交えたダグナの声に耳を貸す気も無く、共に西洋人種の男性2人、その手にはサイレンサー付き拳銃が1人1丁と無言でダグナに構えた。その表情には一切の躊躇の無いなんらかの動きを見せれば即座にダグナを発砲しても構わないと言った目つきであった。

「ひい!?!銃、持ってますけど!?!」

「あらら、困りましたねえ…仮にも国連の関連施設で拳銃を持った連中がいる…この国の法律も国際法もガン無視と言った具合ですね…でも、抵抗しないとは言っていない。勿論抵抗はしますよ…“車”で」

するとジリジリ全身してきた2名の国籍不明工作員の横からヘッドライトを突如点灯させたワゴン車が2人に向かって突っ込み、2人とも発砲の間も無く引かれて吹っ飛んだ。

「ぎゃあああ!!交通事故起きちゃいましたけど!?!」

「ささっ、今のうちに…」

動揺するアキを引っ張ってワゴン車の中に無理やり乗り込む形で2人はその場から離脱する。

ワゴン車は急旋回したのち駐車場を出ようとしますが後方から引かれたにも関わらず起き上がった工作員2名が拳銃で発砲して流れ弾が後部席のガラスを貫いてきた。

「伏せて!」「ぎゃああああッ!!」

貫いた弾丸はフロントガラス、バックミラー、サボテンのフルフル人形…には当たらずフリフリ動くりズムの隙間を避けて結局フロントガラスに穴が開くも何とか駐車口のバーを突き破ってワゴン車は駐車場出口を脱した。

—首都高速道路—

逃げ切った矢先でいよいよアキの我慢の限界が到達した。

「もう何なんですかさつきからこの状況、ここまでの一週間で『何回目』ですか!？」

あまりの状況に動揺するアキだったが実はこの状況は既に何度か同じ目にもあつていた。

そんな悲痛な叫びをダグナに訴えるが、構うことなくダグナは運転席と助手席に身を乗り出す。

「お疲れ様です。運転変わりましょう」

前方の席には運転する男が1人だけ、隣の助手席は空いているため運転手はダグナと運転を変えるためハンドルを保持したまま助手席に移り、運転席にダグナが切り替わる。

「あの〜!聞いてます!?!ボク、今日まで何か悪いことしたんですか!?!あの人たちはボクに何の恨みがあるんですか!?!おじいちゃんは一体ボクに何を残して行っただんですか!?!」
車内で思う限りのことを叫んでいるがダグナも運転していた男もアキの声など気にせず周囲を警戒しながら高速道路を走行していた。

今は朝方故に車両の往来は殆ど無い…が、高速道路内「は」と言うだけの話である。その上の空からバタバタバタツと聞き慣れないモーター音が聞こえて来た。サイドミラーには空を民間のヘリコプターがアキたちの乗る車に並走して飛んでいるようであった。

「おや、今度は空からお出ましですね…どう見ます?」

「民間ヘリに偽装はしているが本来積まれるはずの無い規格外の多連装砲に30ミリ短砲身機関砲まで丁寧に取り付けられている…十中八九に軍用だ」

ダグナからの質問に対して的確に追跡してくるヘリの戦力を運転手だった男は分析した。

「何を冷静にしているのさあ!もうヤダよ!こりこりだよ、こんな状況!!」

「そうですね…いい加減うんざりしてきたのでここは派手に行きましょう…では「ゴジラ」、いけますか?」

「ふんツ…上等」

「ゴジラ」と呼ばれた運転手だった男は助手席窓を開けて座席に足を乗り上げ始めた。

「ちよつと待って、何する気なの「お兄ちゃん」!?!」

「ああ?決まってるんだろ…上を飛んでいるうるさいハエを叩きに行ってくる」

そういうと男はワゴン車の助手席窓から身を乗り出して車の屋根に上りあがった。

「アキさん、衝撃に備えてください！」

「頭下げている、アキ！飛ぶぞ!!」

「わあああもうどうにでもなれえええ!!」

アキが瞬時に頭を下げた瞬間、屋根から強い衝撃と共にワゴン車は高速道路上でバウンドする形で車両自体が宙を舞って一回転していた。

そして、アキは次の事を考えていた。

（拝啓 天国のおじいちゃんとお母さん…どつかにいるお父さん…ボクは今、車の中で宙を舞っています。生きていることが不思議でなりません。一週間前からずっとこんな調子ですけど…ボクは…生きています…たぶん）

車両は一回転しながらも無事走行面が道路に設置して何とか着地して安定な走行を取り戻した…が、天井は思いっきりへこみ、車内の状況はぐちゃぐちゃ、後部席にいたアキは助手席に頭から突っ込んでいた。

一方、勢いよく飛んで行ったアキが「兄」と呼ぶ男は上空を飛んでいるヘリに近づきつつあったが、ヘリの中のパイロットたちは驚愕した。前方から黒い何か近づいてきて操縦席窓にグワシン!!とガラスを破って巨大な黒いワニの様な怪物が自分たちの操縦するヘリを捕まえていた。

「よう、パラシュートの準備はできてるか？」

巨躯な爬虫類生物は太い腕で操縦者2名を掴んでそのまま外へと放り投げた。

操縦者はパラシュートを即座に開いて難を逃れたが……操作する者が居なくなつたへりはあらゆる方向に回転しながら減速していくが……だんだん……だんだん、速度を増してへりは回転運動を強く増していた。

その中心にはあの黒い蜥蜴生物がなんとへり自体を空中で円を描きながら最高速度に到達するとさらなる上空へ吹っ飛んでいきへりは宛ら宇宙の彼方まで飛んで行つたようだった。

そして、黒い蜥蜴生物は高速道路に降り立つて着地した……だが、空の彼方に飛ばしてもへりはさらに落下を増してあの蜥蜴生物の真上に落ちて来た。

「そうだ……この位置だ……この位置なら、ピッタリだ……コオオオオオオオ——ツ!!」

突如、蜥蜴生物は息を大きく吐き出すようにして体内の空気をすべて抜き出すと背中、サングラスのように色白い背びれが発光してダンダンと尻尾から腰、背中、頸椎、頭部まで伸びる背中の発光はゲージとなりソレが最高潮に達すると超強力な破壊光線を口から発射した。

宛らそれは放出される光の熱線……“放射熱線”を口から発射された眩い光の熱線は落下してくるへりを貫いてへりのエンジン部分に引火してへりは爆発四散したので

あった。

その様子を一部始終見ていたアキはこうも思った：

(それともう一つ、驚いたことがあります……この世には女性だけが怪獣の姿に変身できる『怪獣娘』がいるのなら……男性は怪獣に変身できる場合、『怪獣漢』とかになるのでしょうか……ネーミングセンスに自身は無いけど、現にボクの目の前で口から光線吐いてヘリを跡形も無く消したトンデモ大怪獣「ゴジラ」と言う怪獣が居ます……しかも、それがよりによってボクと同じ血を分けた兄「宮下ユウゴ」であるのはどういう事でしょう？ おじいちゃん、どういうことですか？ お母さん、あなたはあんなの産んだんですか？ と言うかボクにもあれと同じ血が本当に通っているのでしょうか？ 甚だ疑問だらけの今日この頃です)

この思いが今は亡き祖父に、母親に届いているのかは定かではない。

怪獣戦士（タイタヌス）

—GIRLS東京支部・休憩室—

「……………ううん……………」

アキは悩んでいた…魔されるほどに悩んでいた。

「おつ…ルイボスティーあつた」

ここはGIRLS…名前の通り怪獣娘による怪獣娘のための特別な施設だ…がしかし、そこに異様な大男が豊かな品揃えのティーパークコーナーから茶葉を選びティークップにファミレスにしかない押せば水やお茶まで出るドリンクマシンでお湯を注いでいる……異様である。

「……………うんツ」

一旦、頭を抱える、かきむしる、整える……どうにもならない状況だ。

「なにさつきから唸ってんだ…鬱陶しい」

「誰のせいであらうなってると思ってるのさあ」

そう、誰かのせいであることは確かだ。自分か、この大男か、はたまたこの世のすべてか……否、結局巡り巡って考えても結局誰も悪くない。

「何よりも……この状況……」

そう、アキを最も悩ましい気分させるのは……

「ねえねえ、ユウゴさんは今までずっと海外で一人渡り歩いてたの!」

「ああ……主にアジア、中東、東欧圏だな……アフリカ地域にも度々行って紛争が多かったから地雷除去の仕事が豊富だった」

「うわあ……すごいですね、映画みたいな話ですよ」

「民兵需要は特に多く、傭兵契約を結ばなければ仕事にありつけない場合が多かったぞ」
普段はアキ、ミク、レイカの三人と談笑したりしていた憩いの場にあまりにも場違いな男……そう『男』である。男が堂々と腕を組みながら太い二の腕とパンパンに筋肉を詰めたような胴体、3人の両足を合わせても足りない太い足、それに靴はブーツ……頑丈なミリタリーブーツだ。髪型はうねる様なクセ毛だが明るい髪色のアキとは逆いしつとりとした黒色、顔はダグナ並みに整っているがダグナをモデルに例えるならユウゴは俳優と言ったベクトル違いの顔立ちだった。

「他には他には!?!」

「うーん、あとはせいぜい口・サ電撃戦に1年ほど従軍したくらいだ……俺が関わった頃には体感半年ほどでロシリカとサラジアは停戦協定を結んだし、俺の中では早い幕引きだったなあ」

出てくるワードのことごとくが血生臭い経験談がこの休憩所での思い出を掻き消してくる。

みんなで原宿に行くことになった事や、トモミにGIRLSとして活躍するようになってから自分が笑うようになったことを褒められた事とか、そういった大切な思い出をブルドーザーで侵略してくるような衝撃的内容にアキは耳を傷めていた。

「いい加減にしてよ、さつきからおどろおどろしい話ばかりで我慢できないよ!」

「ああ?何がだ…」

「あつ、アギちゃん?」「アギさん…」

「3年も行方知れずだっただけでなく、急にパツと現れてきたと思ったら狙われたり、襲われたり…ワケがわからない一番はなんでお兄ちゃんがボクを護衛する事になったのさあ!」

「俺に言われても知らん…俺はただやりたいことをやっているだけだ。お前らが好きな服やら飯を選んで決めるように、俺もやりたいことを選んだから決めただけだよ」

そう言い返すとユウゴはお茶を飲み、アキはプルプルと怒りにフラストレーションの上を抑制するために冷静になるよう額に手を当てて熱を冷ますと大きな溜め息が出た。

ソレもその筈で言いたいことを多々あるのに肝心なこと『兄は怪獣』であることが言

えないからである。

(お兄ちゃんにもカイジューソウルがある…すなわち『男性もカイジューソウルが宿る』…俄かに信じられないけどあれは確かに怪獣だったけど、怪獣娘とは違う生き物のよう
な気がする)

アキはやり場のない気持ちをGIRLSの怪獣娘として、また指導課の者としても考察をしつつも方針は既に決まっていた。『兄も怪獣の力を持つていること』の事実はGIRLSの怪獣娘を始め世間にすら現段階でまだ公表することは無い。がしかし…

「あつ、アギちゃんが怒ってる…今まで見たことないくらい怒っているよ」
「えつ、ええ…すごい気迫でしたね、これが所謂兄妹喧嘩と言うものですか」

普段仲良しの人間の見慣れない姿にオロオロと驚く2人にアキはハツと我に返って考え込むのをやめた。

「もういい…資料室行って来る」

「んっ」

立ち上がってスタスタと早歩きでユウゴから距離を取るアキだが…やはりとばかりに兄たちが後ろをついてきた。

「んもおっついてこないでよ!」

「ついていなきや、お前を守れんだろう…護衛なんだから」

兄の口から出て来た『守る』と言う単語に思わず固まるアキは俄かに信じられないがほんの少しだけうれしきもあるがやはり複雑だった。二人の時ならいざ知らず、よりによって一番の顔見知りの2人の前で言うものだから余計に恥ずかしかった。

「わあ〜流石お兄さんですね」

「ひゅ〜ひゅ〜、アギちゃん照れてる〜」

「照れてないよ!!」

レイカは褒められ、ミクは赤面するアキを茶化される…宛ら授業参観にやたら目立つ親が来たような気分をまさかGIRLS内で味わうことになるなど夢にも思わなかった。

「けど、ユウゴさんって大きいですねえ〜身長何センチあるんですか?」

「測ったことはねえが…最後に測った時は190以上だったか」

「デカア〜、流石アギちゃんのお兄さん!」

「なんでその情報だけでボクと似てると思えるのさあ…」

「いんや〜器のデカさとか、かなあ〜」

「ボクの器の大きさが内面とかを指してるなら…コレは物理的な大きさじゃん?」

アキは自分と兄を比較されたことに苛立ちを露見させるもミクに『まあまあ』と宥められ感情的になった我を抑えるのに必死だった。

それにしても今この状況…見てる…見ている…見られている…様々な怪獣娘たちや G I R L S 東京支部の職員たち、大半を女性が占める当施設ではユウゴはあまりにも目立ちすぎる。中にはヒソヒソ話で『ちよつとカツコいいかも』など言われる始末、その都度アキは半眼がいつもより鋭くなるほど睨み返しては他の子を怖がらせていた。

「おい、人をそんな目で睨むもんじゃねえだろ…ただでさえお前は目つきが悪いんだから誤解されるぞ」

「誰のせいであらうしてなきやいけないと思ってるのさあ、誰のせいであらう…」

ユウゴの言っていることは間違いないが釈然としないのも事実である。もはや矛盾と言っているほどに注意すべき者とされる者が逆、本来自分が至らない兄の問題点を指摘すべきなのだが…あまりにも無いのである。

「あつ、あの…アギアギのお兄さん…どうですか？ G I R L S でのアギアギの様子は？」

「ええ、いつも知らぬアキの一面を見れて何よりです…いつもウチのアキが御世話になつて感謝しています」

「いえいえこちらこそ…」

アキが腑に落ちない点の一つがこの異様なまでの礼儀正しさである。外見とはかけ離れた腰の低さにアキの先輩たちからサチコたちなど明らかにアキより年下相手でも最初は敬語、後から親しくなつたらタメ口、そうしていく内に外見恐ろしい怪物の内面

が実は優しい生き物だった時ぐらい差のあるギャップに彼女たちが打ち解けられる点であった。早い話が美女と野獣の吊り橋効果である。

「うわあ〜いい！すごい筋肉〜！」

「二人ぶら下がってもビクともしないや〜！」

拳句の果てには右腕にぶら下がるザンドリアスとその友人ノイズラーと2人の怪獣娘がユウゴの腕を遊具のようにして遊ぶ始末であった。

「あたしもあたしも！ソウルライド、ミクラス〜！」

ミクも同じく怪獣娘の姿にソウルライザーと呼ばれる怪獣娘に変身するためのデバイスでミクラスに変身するなりザンドリアス、ノイズラーに続く三人目の怪獣娘がぶら下がるが、これでも顔色一つ変えずに3人まとめて歩ける始末だった。

「アギラさんのお兄さんすげ〜！」

「あたしもこういうお兄ちゃんほしいなあ〜：今日だけ私も妹にしてください〜！」

「いいねそれ！アギちゃんのお兄さんならみんなのお兄ちゃんだあ〜！」

そういうとザンドリアスにノイズラー、果てはミクラスまでも右腕と左腕、胴体にまでしがみついた。

これだけされているにも関わらず肝心のユウゴは特に照れるでもない：宛ら親戚の子供たちを相手にしているかのように下心のまるでない微笑みすら浮かべていた。

それがますますアキの心情に油を注いで顔が赤面から紅潮の怒りに転じていた。

「みつ、ミクさん…あんまりユウゴさんを独占するのはちよつと…アギさん、見たことないリンゴ顔になってきましたけど？」

「ええ〜いいじゃん…減るもんじやないし…ウインちゃんだってホントーは気になってるクセに〜」

さらに茶化さんとばかりにミクラスはレイカを煽るが…

「いえ、私はあと一人でも男性が居たら危なかったですけど…特には」

レイカは決してブレなかった。

「ふうんぬぬっ…いい加減にい〜」

「ユウちゃ〜ん!!」

そういいかけたその時だった。その声、この凶々しき、楽しいことを常に探究するハッピーハンターの声が聞こえたが肝心の「彼女」の姿は見えなかった。

「あれ？今、ゴモたんの声でしたような…」

「おい、もしかしてコイツの事か？」

ユウゴが後ろを振り返ると背中に夏のセミの如く張り付いている黒田ミカツキは怪獣娘ゴモラに変身して既にユウゴと言う新しいおもちゃを手に入れたとばかりに陣地を支配していた。

「ゴモたん！何してんのさ!!」

「見ての通り、今日からここはゴモたんの聖域、アギちゃんはウチにとつて妹も同然、すなわちこの背中も、この体も、このお兄ちゃんもウチのお兄ちゃん！ユウちゃんはウチのお兄ちゃんやあ〜!!」

とんだ極論だった。とうとうアキの沸点は最高潮に達した。

「ソウルライド！アギラ!!」

先ほどから怪獣娘が自らの怪獣の姿に変身するために用いられるソウルライザーと呼ばれるデジタルデバイスはその内部に『アーカライト』と呼ばれる青い鉱石が怪獣娘のカイジューソウルに反応して眩い光と共に彼女たちの身体は怪獣娘へと変身を遂げる。

アキの身体を構成するのは怪獣娘が変身の際に出現させる特殊な素材『獣殻（シエル）』と呼ばれる物質で身体を宛ら覆うようにして怪獣の姿を形とる。アキの怪獣アギラの場合は大きなツノと首回りを覆う襟巻、さらに頭を覆うほどの伸縮する獣殻は宛らパーカーのフードの様に頭部を保護する。そうして出現したのが怪獣娘アギラであった。

「うおお〜！離れなさい！離れい！離れろ！」

「うげっ！」「うぎやっ！」「きやっ!?!」

ミクラス、ノイズラー、ザンドリアスとユウゴの身体から掃い落す形ではがした…が、最後の最後で強敵が背中に張り付いていた。

「うおおおお!!ゴモたん、離れてよおおお!!」

「いややああ!!ウチはここを動かん!テコでも動かへんでええ!!」

ものすごい力でユウゴの身体にへばりつき意地でも離れようとしなかった。しかも逆にユウゴの身体はゴモラの爪が食い込み、衣服が今にも破けそうであった。

(まずい、このままじゃお兄ちゃん服が背中から破れちゃう…こうなったら)

アギラは引きはがそうとするのをやめ、逆に考えるようにした…剥がそうとしてダメなら、擦って剥がす。

「ふあい!?あつ、アギちゃん…なにすんねん!」

「決まってるでしょ!ゴモたんは人にやるのは好きだけど、やられると嫌いなことだよ!」

始めはゴモラの横っ腹を優しく触りじらす…次第に上下でさすり…最終的に脇を鋭い爪でツンツとつくように触れると途端に鋭い爪で皮膚を裂くのではなく傷つかない程度まで擦り、宛ら脇で多足に虫が歩くような動きでゴモラを翻弄する。

「ひやははははははっ!?!やめちくりいい!!…あつ!?!」

するとゴモラの指先に力が入らずユウゴの背中からゴモラがズレ落ちて床に転がっ

た。

さらに『今だ!』とばかりにアギラはユウゴの手を引いてすぐ近くの資料室に逃げ込んだ。

そして、逃げ込んだ中で机、椅子、重量のあるものすべてを扉の前に立てかけて、さらに備え付けのパソコンから部屋のセキュリティにアクセスしてダメ押し資料室立ち入り禁止ロックまで施した。

『こらあくアギちゃん!開けろ!!独り占めするなああ!!』

外ではゴモラたちがやいのやいのと喚いているがアギラは息を切らすほどの大運動に心臓がバクバクと音を立てながら大きく息を吸って吐き出し落ち着かせようとしたが、並みの速さではない鼓動に止まらぬ緊張、ちよつとした罪悪感、しばらく収まるまで時間が掛かりそうだった。

「ものの見事に籠城だな…こんなことしてどうするんだ」

「ごっ…ごめん、ちよつと休ませて…疲れた」

思わぬ動きに身体が付いて行かず、口の中は吐血などしていないにも関わらず全速力で走った後の鉄の味がする。

「おい、大丈夫か?…そのソファアで休め」

今度は逆にアギラがユウゴの手に引かれソファアまで連れて行ってもらいソファア

に腰かけた。

「ふああ……ありがとう」

「少し赤いぞ……日頃の運動不足が祟ったな」

まるで子供扱いだが、大男から見たら怪獣娘の少女など子供と変わらないかと言いつつ、さすがに気分も無い、寧ろ今は動きすぎて気持ちが悪かった。

「お……お兄ちゃん……もう……どこにもいかないで……一人は……ヤダよ……一人は……寂しいよ」

「……どこにも行かぬえよ……なんなら傍に居といてやるから少し休め」

そういうとユウゴはアギラの傍に座ってお互い同じソファで二人きり……そんな状況に安心しきったのかアギラはユウゴの側に寄りかかる。

そして、不思議と深い眠りに落ちていくようだった。



それは……中学一年生の頃の事だった。母を早くに病で亡くし、自分よりも大きな大人たちが母の遺影を持つアキを見てどうするべきかをそれぞれで話し合っていた。

母方か、父方か、どちら側の親戚かもわからない、殆ど顔も合わせたことも無く、そ

の日初めて親戚と呼ぶ者たちと顔合せた……残されたアキを見て彼らは何を思うのか、アキをどう思っただうしようとしていいのか分からない。

そして、肝心の兄は居ない。行方不明だった。なんの連絡も音沙汰もない。頼れる者も居ない……自分はどうすればよいのか分からない……おそらく何もできないだろう。

まさに……無力だった。

「アキちゃん……私と一緒に暮らそう」

そんなとき声を掛けてくれたのが祖父だった。彼は母方の祖父、すなわち亡くなった母の父親だ。

そんな祖父の顔は……

○

○

○

真つ白だった。

火葬場の中で祖父の棺桶が焼かれている中、遺族が故人の顔を忘れないようにするための大切な遺影には写真が納められていなかった。

そんな写真の無い遺影の人物が煉獄の業火で焼いている人だ。それはもはや人なのかもわからない。

「……………」

「では、何かありましたら…御申しつけください」

そういつてダグナはアキを一人、火葬場で祖父と最後の別れに無粋に自分が留まる必要は無いと気を使い外で待機すると言い残して先に外へ出た。

「……………」

延々と燃え続ける祖父の棺桶の入っている火葬炉の前はアキのみの静寂だった。見送る相手がアキ一人…母の時とは大違いだ。生前はどんな人かと問われてもごく一部しか答えられないだろう、それ以外はと聞かれても答えられない。顔も既にノイズが掛かっているようにピンポイントで祖父に関する記憶が穴だらけだった。

—コツツコツツコツツコツツ…

たつた今ここに祖父を見送りに来た者が現れた。

「…あの爺さん、写真はおろか痕跡一つも残さず消えるとはなあ…：対した徹底ぶりだ」
「こういう時ぐらい…喪服できたらどうなのさあ」

「お前だつて学校制服じゃねえか…」

「これ、学校制服じゃないよ…：GIRLSの制服だよ」

アキもユウゴも、それぞれが喪中にふさわしくない出で立ちだが…特に注意する親族も居ないためせめてもの見送り方としてアキは自ら怪獣娘として居場所をくれた所の

格好、ユウゴは自分が渡り歩いてきた数々の地での姿：祖父に今の自分たちを最後の最後に見てもらいたく喪服ではないどちらかと言えば普段着な姿が「建前」であった。

「ふん…遺言に従つて来てみれば…：…ここが爺さんの故郷唯一の火葬場か」

「この町で唯一らしいよ」

「なるほど、『顔の無い者』の最後の地か：想像も出来ねえな」

アキたちが葬儀として訪れていたのは祖父の遺言にあつた関東内の某所、町名は地図に無く、村自治体すらも無い、コンビニ商業はおろか殆ど何も無いと言つて差し支えない…そして、この火葬場もスタッフはおらず全て遺族が各々で取り行かう方針だった。

それはつまり、祖父は生前から自分が碌な死に方をしないと知つていた上で誰に迷惑も無く、痕跡すらも無い、葬儀と言う儀式的形式すらも省略した供養無しの速攻焼却処理にて祖父は完璧にこの世から存在していたことを自分から消し去つた並々ならぬ決意のある終わり方であつた。

「…少しは泣いたらどうなんだ…水分干上がつたか」

「だれのせいで泣けないと思つているのさ…碌におじいちゃん顔合わせもせず、火葬場で3年ぶりの再会…：…この火葬場で大泣きした人つてたぶんボクが初めてかもね」

アキの目には涙で目元が赤くなつて少し荒れた痕がくつきりと残つていた。その理由は今日初めてユウゴが3年ぶりにアキの前に姿を現したのがよりによつて祖父が亡

くなつた翌日、すなわち今日に限つてわざわざ祖父の火葬のためだけにあつさりと顔を見せたからである。

そのことに対して大いにアキは感情が溢れた：否、爆発したと言つて過言ではなかつた。ユウゴを責めたり、罵つたり、果てには非力ながらも掴みかかりもしたが：ユウゴはただ『言いたい事とやりたい事はそれだけか』とまたもあつさり返した。受け入れていたのだ。

兄の大人ぶりに対して成長の無い子供染みた感情表現に我に返つてみればユウゴに比べアキ自身がまだ子供とゆうことを自覚させた。あの様な姿、GIRLSの仲間にする見せたことも無く、特にゴモラなど後々に弄つて来るに決まっているとさえ思えた。しかし、裏を返せばGIRLSとゆう心の支えが無ければアキは今もユウゴと向き合えず、何ならギクシヤクさえも起こしていたであろう。

そんなことを思いながらも火葬炉のランプが焼却完了の合図を出した。

「…開けてやろうか」

「…うん」

ユウゴは率先して焼却炉の扉を開いて中から祖父の棺桶を乗せていた台を引き出したが：中から煤の匂いが充満し、台の上には「祖父だったもの」が散らばっているだろうが：アキは目もあてられなかつた。

「見たくなきや、俺の後ろにいろ…代わりにやっておく」

アキはそう言われユウゴの背中を合わせるようにして祖父の遺骨はユウゴが骨壺へ丁寧に一欠片ずつ収められているのが音でもわかるほどに鮮明だった。

「随分…慣れてるんだね」

「人を燃やすのも吊うのも慣れちまっただけだ…ああつ、まだ話して無かったなあ…俺の3年間」

「ボクもまだ話して無いよ、おじいちゃんとおごしてきた事と…怪獣娘として向き合ってきたことも…」

こっそりとそれとなくアキは怪獣娘として変化してしまった自分の事を言ってみるも…

「…そうか」

「…ねえ…さつきから淡泊すぎない…今、ボク盛大なカミングアウトしてるんだけど…ボク、怪獣娘になったんだよ」

「ダグナから報告を受けてる…大して驚かんよ」

「なんだ、驚かせがないよ…一世一代の大出来事なのに」

「…そうだな、ほら…終わつたぞ…先にダグナの所へ行っておけ、後の片づけは俺がやっておく」

そういうとアキに骨壺を託したダグナは台の清掃と後片付けに回った。

一方のアキは頷いて骨壺を抱えたままダグナの元へと向かった。

「……なあ、じいさん……あんたに魂とやらがあるなら言わせてくれ……俺の代りにアキを見守り育ててくれたことは礼を言う……だが、俺やアキ、お袋や親父、この世にいるすべての怪獣たちを大きな渦に巻きこみやがったことは許してねえぞ……テメエの身勝手な招いた結末を天高くで見下ろしてるともりだろうが、とつと成仏してこの世のどこか、あの世のいずこか、怪獣と二度と関わらない人生を歩め……ソレがあんたに俺がかけてやれる最後の言葉だ」

もう何も残っていない台の上でユウゴは亡き祖父へ手向けとも皮肉とも取れる言葉をかけてアキの前では言えなかった思いのたけをぶつけたユウゴは綺麗になった台を焼却炉の中に戻して、扉を閉めたら祖父の弔いはこれにて完全に終了した。あとは遺骨を遺言に従い「ある場所」まで持っていくそこで散骨するだけとなった。

後片付けを終えたユウゴは火葬場の外へ出て最寄りの駐車場に出た。

「おや、お疲れ様です……ユウゴくん」

「ああ……おい、アキはどうした？」

外で待っていたダグナの元へ先に向かわせたはずのアキが見当たらなかった。

「ええっ？一緒にいらっしやっただけ……まさか！」

「そのまさかだ…アイツ、先走りやがって！俺は先に『山』に向かう、あんたは反対斜面に回って探せ！」

「わかりました お気を付けて！」

そういうとユウゴはとつきに走り出し、ダグナはすぐさま車に乗り込んでエンジンを掛けると猛スピードでとある山に向かった。

・
・
・

火葬場からしばらく離れて小一時間ほどで辿り着いたアキは標高の高くない山の麓にいた。

「ここから…北に10m…そこから…」

アキはソウルライザーのマップ機能を使って祖父が遺言書に記載してあった場所へ向かっていった。

しばらくして山の中の道なき道を草木かき分けて進んでいくと山頂の切り立った山のど真ん中で先ほどもでいた火葬場のある街を見下ろしていた。

周囲を森で囲まれ、他の地から見えない作りになっているこの町に人は住んでおらず見せかけの街である。

多くは財界人や著名人がこの世に未練なく完璧に己の最後を葬り去るためだけに作られた土地だとダグナから聞かされていたが……

「おじいちゃん……おじいちゃんは本当にここでいいの？……ボクは、おじいちゃんを忘れてたくない……いい思い出もたくさん作ったし、一緒に過ごしてきたことが何より楽しかったのに……おじいちゃんが亡くなってまだ日がそんなに立たないのに、だんだんとおじいちゃんとの思い出が薄れて行ってきてるよ……忘れたくないよ、どうしておじいちゃんはおじいちゃんの事をボクから消し去ろうとしているのさあ……おじいちゃんは一体誰で何者なの……もう分からないよ」

アキは骨壺を抱えたまま涙ながらに亡き祖父に語り掛けても返答はあるはずがない、仮に近くに居たとしても声など音声を発せれる事の出来る肉体がない、それはもはや地目も同然であった。

しかし、それでもアキは涙をのみ、袖でふき取って決意を固めた。骨壺を空けて、祖父の遺灰を撒こうとした時だった……——グルルルッ！

「えっ!？」

アキの背後から悪寒の様な寒気が走り振り返ろうとしたとき……ドンッ！と強い衝撃と共にアキは断崖絶壁の前へと突き落とされた。

「うわあああ!!ソウルライド、アギラ!!」

非常事態でもアキはすぐさまソウルライザーを取り出してアギラへと変身を遂げる。
—ガシッ!

間一髪のところ崖に生えていた枝につかまって落下を逃れた。

「ううっ…一体なに!?!」

アギラは上を見上げると…そこには見たことも無い二本足で直立に立ち上がったようなトカゲの怪物がアギラを見下ろしていた。

「なっ、何ッ!?!誰なの!?!」

二足歩行のトカゲはアギラにグルグルツと唸りを上げながら口を開いた。

「ダゴン…グレイ・フタゴン、ゾイグ!!」

トカゲの怪物はアギラを見るなり何かの呪文を唱えて来た。

すると、アギラのぶら下がる足元に何らかの魔法陣の様な陣形模様が浮かび上がり、その中心から勢いよく周囲の物を吸い込み始めた。

「わっ、わああああああ!!助けてええええ!!」

アギラは今まで味わったことの無い恐怖に、絶望に、為す術がない状況に誰もいない山奥の森の中で誰かに助けを求めた。しかし、無慈悲にも切なる願いも聞き入れてもらえない残酷に覆らなかった。

その様子を見ていたトカゲの怪物はその表情に薄っすらと笑みが見えるほどに口元

がつり上がっていた。まるで自分が出した魔法陣に吸い込まれていくアギラを見て楽しんでる様であった。だが…

「お前がいけ！」

今度はトカゲの怪物が背中から押されて自分から自分が出した魔法陣へ突っ込んでいき…魔法陣はその場から消失してトカゲの怪物も消えていった。

「アキー今、助けに行つてやるから少し待っている！」

その声は紛れもなくユウゴだった。アギラの願いがユウゴまで届いたのか、一先ず助かつて安心した時だった。

アギラの頭上から崖下を手先の爪で滑り落ちアギラの位置で止まったが、その姿は先ほどのトカゲの怪物とは色の違う黒いトカゲの怪物であった。

そして、怪物がアギラを捕らえるようと手を伸ばしてアギラを抱え掴んだ。

「うわあああ!!放して!!放せえええ!!」

アギラはそのトカゲの怪物に捕まったと思い、必死ばかりの抵抗をするが…

「おい、暴れんな!落ちるぞ!」

怪物の声はアギラが良く知るユウゴの声がしていた。

「へえ?おつ…お兄ちゃん?…お兄ちゃんなの?」

「ああ…まあその、なんだ…実は、俺も怪獣なんだよ」

「ええええええええええええッ!」

衝撃の事実がまさかの危機的な状況下でアギラを困惑させた。

何とか崖を上りきって一命をとりとめたアギラは変貌を遂げたユウゴを見るなりに目に映った姿は正に“怪獣”にふさわしいフォルムをした存在だった。

全身を黒曜石のように硬質な皮膚と色合い、尻尾は棍棒のように太く、背中サンゴ礁型に生えた鍾乳石の様な色をした背びれ、顔はワニを思わせながらも口先は短く、牙は一本一本が鋭利なナイフのように生え揃えている。宛ら恐竜の中でもテイラノサウルスをマツシブアツプさせたような外観だった。

「お兄ちゃんも…怪獣…」

「まあお前と比べればもう怪獣そのものみたいな姿だが…それでもお前より怪獣歴は長いぞ…おっと、まだいるな」

「ええ、その様ですね」

難を逃れたアギラたちの前にダグナが後から辿り着いてきた。

「ダグナさん、一体どういうことですか!？」

「そうですね、彼らの目的は現状…アキさん、あなたであるという事でしょうか」

「そうじゃなくて…ああもう、どれから話すべきかわかんないよ!!」

「喋ってる暇はねえぞ!ダグナ、あんたは先にアキを連れて離脱しろ 露払い俺がし

ておく 行け!」

「わあっ!」

トカゲの怪獣に変身したユウゴはアギラをダグナに押し出すように託した。

「わかりました、では…お気を付けて さあ、アキさん行きましょう」

「えっ、えっ、でも…お兄ちゃんが」

「大丈夫です、彼の事はコレと言つて心配する事ありません…なぜなら彼は “怪獣王” ですので」

そういつてダグナに手を引かれアギラたちは山を下り降りていく…しかし、それとは反対方面の “怪獣王” へと姿を変えたユウゴが向かつていった側から大きな衝撃音が響き、森の中の鳥や動植物が我先にと逃げるのが見えた。森が揺れるという異常事態に野生動物の方が勘良く気づいて避難する。そしてアギラたちもダグナが止めていたワゴン車まで到着してすぐに乗り込みエンジンをかけて森から離脱した。

「このまま国道を突っ切ります」

「ちよつと待つて! お兄ちゃんは!? お兄ちゃんはどうかなるんですか!」

「アキさん、今は貴方の身の安全を優先させていただきます、奴らの狙いはあなたなんです」

「どうしてボクが狙われるんですか!? あれはいったい何なんですか!? シヤドウとは違

う、まるで生き物と人間を組み合わせたような…」

「正解であり不正解ですね…少し説明している暇はないです、飛ばしますよ!!」

ダグナはアクセルを急発進させ猛スピードで山に沿って作られた国道を突き進んでいった。

それと同時に後方から山より先ほどと同種の怪物が空中に放り出されて発射された光の線が怪物に直撃して怪物は消失した。しかし、森から車を狙って飛び降りて来た怪物の仲間がアギラたちを捉える。ードンツ!

「うわっ…さっきの奴が屋根に!!」

「揺れますから掴まって!!」

そういうとダグナは蛇行運転で車体を大きく揺らし屋根に乗っている怪物を振り落とした。

転げ落ちた怪物は追うことをやめ再び立ち上がって猛スピードでアギラたちの車と同等のスピードで追いかけて来た。

「まだ追ってきますよ!?!」

「少々しつこいですね…こちらディープワンス、ディープワンス! 『ゴジラ』、聞こえているなら 『ミレニアム』で迎撃してください! 現在、時速90キロで走行していますが彼らの速力なら十分に追いつかれる…あなたはソレを上回る速度で迎え撃ってください

いー」

ダグナはカーナビゲーションの何らかのアプリで誰かと通信をして援護を要請した。
『わかった…今、追いつく!』

その声は先ほど分かれて何かと戦いに向かった怪獣に変身したユウゴの声だった。

「お兄ちゃんの怪獣…ゴジラだっけ?…一体何をやる気なの」

何が何だか分からないアギラだったが森から更に2体の同種が出現して計三体のトカゲの怪物が走行しているワゴン車へ徐々に距離を詰めて来た。

それと同時に約50m離れた地点で怪獣に変身したユウゴが森から出て来た。

「よくし…少し、加速してやろう…形態変化 ミレニアム」

そう口に出した途端、マツシブな恐竜と言う印象が強かった身体は徐々に変化していき重心深い足腰はより細めに引き締まって宛ら獣脚類を思わせる足つきへと変化した。

背ビレは鍾乳石の様な乳白色からアメジスト並みの光沢輝く眩い光を発しながら…その色と合わせて目の中の瞳の色も宛らアメジストの様な深紫に変化した。

「レディ…ゴオツ!!」

その速さの衝撃は蹴り上げた舗装された道路さえも抉る様な衝撃が地上にソニックブームを発生させ一気に音速を超える速さで加速した。

「ダグナさん、また後ろから何かが来ますよ!」

「あれはユウゴ君です! どうやら間に合ったようですね」

全速力で走行する車、それを追う三体の怪物、それらを上回る速度で最後方から追いかける紫の怪獣…そして、とうとうアギラたちを追いかける怪物たちに速度で捉えたユウゴは三体の怪物の内まずは2体の首を大きな手で鷲掴んで飛び上がり、2体の怪物を1体の怪物に向けて宛ら二刀の剣を振りかぶって叩きつけるかのように振り下ろした。

怪物たちはその衝撃と出していた速度の二重に重なる物理の壁に激突してか三体は宇宙を舞って滞空する…その隙にユウゴの怪獣の最大能力を引き出し、背ビレの発光が最高潮に高まった瞬間、一気に放出…三体の怪物は空中でユウゴの怪獣の口から放出された破壊光線の餌食となり爆発四散した。

そして、すべての脅威が消えたことを確認したユウゴは窓をコンコンツと叩いて車と並走していた。

「追ってはもういませんね」

「ああ、扉を開けてくれ」

ダグナは後部席のスライドドアを運転席からのスイッチで操作し開いた。そこへユウゴは怪獣化を解いて中に入り込むと人間の姿へと戻った。

「あつ、あつ、えつ、ええつ、はあつ!?」

何から何を話すべきか困惑するアギラは言葉の呂律が回らず目が回して混乱をしていた。

「落ち着け…まあ言いたいことは分かるが…」

「私から説明いたしましたよう…アキさん、あなたのお兄さん『宮下ユウゴ』くんは『ゴジラ』と呼ばれる怪獣の『能力』を宿した『怪獣戦士（タイタヌス）』なんです」

「お兄ちゃんが…怪獣で…怪獣の力がお兄ちゃんにいつ…ふあつ、へつ、えつ…キユウウウツ—」

とうとう認識が追い付かなくなったアギラの頭は煙を噴き上げて気絶するように倒れると変身が解かれ元のアキへと戻った。そして、そのままアキは深い眠りへと落ちていくのであった。

「おいおい、コイツぶっ倒れたぞ」

「無理ありません…疲れすぎたんでしよう、ゆっくり休ませてあげて下さい」

「はあ…本当に大丈夫なんだろうなあ…コイツがこんな調子ならあと何体の俺と同じ奴らを目にしてもこんな調子なら先が思いやられるぞ」

「まあまあ、そこは長い目で見てあげましょう…もう猶予がありませんよ、奴らがアキさんに接触してきたということはいずれ他の怪獣娘たちにも同じ事が起きるでしょう」

やがて車は追われることがなくなったことで一気に減速していき40キロまで速度を落として走行していった。

そして、ゆっくり走る車の中でアキもまた深い眠りの中で記憶が整理されていく…兄の事、正体不明の怪物、これからどうなるのか、様々なことが頭の中で整理されていく中で一番に過つたことは…祖父の骨壺がどうなったかだけが気がかりだった。



目を覚ますと朦朧とした意識の中でアキは寝ぼけた目を擦りながら体を起こし上げた。

すると、肩から衣類がズレ落ちる。それは先ほどまでユウゴが羽織っていた黒いジャケットだった。

「ふあっ…ボク、いつまで寝てたんだろう」

起き上がったアキはふらつく足取りのままユウゴのジャケットを片手に掴みながら部屋の中からユウゴを探す。

「お兄ちゃん…どこ？」

「おう、ここだ…」

そこには資料室のパソコンから何かを調べているユウゴがいた。

「何してるの?」

「お前がここの部屋の扉を締め切ったから解除しようとしてるけど…おまえ、コレどうやって開けんだよ」

「ふうえ?…あつ!」

アキはふと脳内にある人物の注意喚起を思いだした。

『この資料室は緊急時に皆さんが身の危険がある時にのみ資料室をロックできる仕組みになっていますが、緊急性を有する際は皆さんでもロックできますが解除の際は専用のパスワードでなければ開かなくなりますので注意してください』

それはピグモンことトモミが以前GIRLSでの侵入者騒動で全部屋のセキュリティ変更があったことを思いだし顔が青ざめる。

すぐにソウルライザーで電子ロックにアクセスしてもエラーが表示される。しかも解除の際のパスワードはトモミ以外共有されていないためアキでは解除できない。すなわち完全にこの資料室から閉じ込められているのであった。

「やっちゃったああ!!どうしよう、開かないよ!!」

「落ち着けや…なんで閉めるはできて開けるができない使用になってんだよ」

「不審者対策でこの間変更されていたのすっかり忘れてた」

「はあ…あほらしい…まったく、後先考えないからこうなるんだよ」

そういうとユウゴは資料室の窓を開けて片足を乗り出し外へと足を出した。

「ほら、ここから出るぞ」

「えっ!?ここ10階以上あるんだけど…」

「そういう時こそ怪獣だろうが…なんのために怪獣の力を持つてる」

半ば強引だが背に腹は代えられず仕方なくアキはユウゴの手に触れた次の瞬間、ユウゴはアキを強い力でひっぱり、窓の外へと落とした。

「うわああああああああああああ!!」

「うるせえな…たかがビルから落ちてるだけで」

「たかがで済む問題じゃないよ!どうするのさあ!?!」

アキとユウゴ、二人して落ちていく先はコンクリートの地面だった。

「うわああああああああシヌうううううう!!」

「死なねえよ…ほらよつと!!」

ユウゴはアキを捕まえ地面に足が接近する瞬間に足をゴジラの足へと変化させそのまま着地、身体は強い衝撃を受けたがアキを抱えたままユウゴは高層ビルに匹敵するGIRLS東京支部の資料室窓から玄関口まで最短で降り立った。そして、その足元には大きな怪獣の足跡がくつきり付くほどに陥没していた。

「何の音だ!?!」「外からや!?!」

大きな音を聞きつけ怪獣娘たちが玄関口に続々と集まってきた。

「うわあっ!?!なんだこれ!?!」

「一体どうなつとるんやアギちゃん!?!」

「いや、これにはその…」

「いやゝすみません、ウチのアキがお騒がせしたようで…なんか資料室のドアが開かなくなつたからアキが『窓から出よう』って言いだして…あつ、この陥没穴はアキの足跡です」

咄嗟に出したウソにアキは思わずユウゴを二度見して自分が開けた足跡をアキのアギラに擦り付けられた。

「アギちゃん…そんなに重かつたっけ?」

「まあ、そのなんだ…おまえ、ここ最近よく食べるとこしか見てないからさあ…食べるの、控えろよ」

ミクラスとレッドキングは気を使うもまるでアキの質量が増量したと勘違いしてしまい『アギラは重くなつた』と言うあらぬ勘違いが広まり、アキはプツクリと頬を膨らませユウゴの腕に握り拳を連打で叩きこんだ。

「気にすることないよ、アギちゃん!アギちゃんはムニムニのほつぺたにもちもち肌と

抱き心地抜群なのがチャームポイントやし…」

「全然フオローになつてなああああいい!!」

アキの悲痛な叫びだけが空を切るのであった。

鎧の戦士

昼を超えて太陽の日が傾きつつある午後の夕方に1人の男を先頭に1人の少女、3人の浮かれた女子がキャツキャとはしゃいでいた。

「なんでこんな事に…」

「新居、新居、アギちゃんちの新居お〜!」

「おまえらはしやぎすぎだろう…」

正確には2人だけ大はしやぎして1人が宥めるも内心は少しワクワクした表情をしていた。

「ホントーに連れてくの?ボク、なんだか不安なんだけど…」

「信頼する友人なんだろ…別にやましいこともねえんだっから見てもらった方が早いし」

「そういう問題じゃないよ!ボクにだって対面くらいあるんだからね!」

「何なにいくなくにを二人だけでヒソヒソ話し合ってるのかなあ〜ゴモたんセンサーがピンピン反応しとるでえ!」

厄介な時にゴモラこと黒田ミカヅキに嗅ぎ付けられアキは『うわっ』と内心嫌な気配

を感じて嫌な顔が表情に現れていた。

「もおくなんでそんな嫌な顔すんねん！これもれつきとしたGIRLSのお仕事なんやから、家庭ホーモン、家庭ホーモン！」

彼女たちが私服でなぜアキが現在住んでいる家まで向かっているのか：ソレはさかのぼる事を数時間前に、ピグモンことトモミから『アギアギの現住所変更に伴ってアギアギの御家を近く訪問させていただきます』と言う鶴の一声が発端だった。

それを聞きつけてかまず最初にミカツキ、次にレッドキングことベニオ、一番親しいミクラスことミクが名乗りを上げ多忙で行けないトモミに変わってこの3人がアキのセーフティーハウスもとい新居へ急遽今日向かうという事になったのであった。

「どうしてこんなことに…」

「すまねえアギラ…こいつらが変なことしないように見張つといてやるから」

唯一の良心はベニオただひとりだった。本来ならベニオ一人だけでかまわないはずが：オマケ二人が一抹の不安要素であった。

特にミカツキとミクはおしゃべりマシンガンと表現しても差し支えないほどに口が緩い、あらぬことをベラベラと喋られても困るが悪気があつてついて来ている訳ではなくただの興味本位からの好奇心だった。

「新居、新居、アギちゃんの新居ツク!!」

そして現在のこの調子であった。

「ホントにめぼしいものは無いからね…二人は特に自重してよ」

「はあくい!!」

返事だけは元気が良いがアキはやはり不安の種が取り除けない気分であった。

「着いたぞ」

そんなこんなで歩くこと数時間で辿り着いたのは…意外にも何の変哲の無いマンションだった。周囲は同じタイプのマンションが隣接する中の一面にある多層階マンションがアキのセーフティーハウスだった。

「これがアギちゃんの新居？」

「セーフティーハウスっていうもんやからもっと嚴重な一軒家かと思っとったけど…なんか…地味ッ！」

「ついて来ておいて失礼だろ…お前ら」

期待していたものと違った事にミカヅキとミクは肩を下してがっかりと分かりやすかった。

「まあ、見た目はいかにもだけど…中身が肝心やし、んじゃあアギちゃん案内よろしゅ」

「ゴモたん、ミクちゃん、レッドキングさん、こつちだよ」

アキたちはいつの間にか3人から離れた距離にあるマンションとマンションの間にある狭い路地裏に向かっていた。

「アギちゃん、どこいくねん！マンションこつちやる？」

「ボクたちは特別でこつちから行けるんだよ」

そういうとアキが裏路地に入っていくと奥でユウゴが扉を開けて裏路地で見えなかった隠れ家的な入口があった。

「うっそ、そつち!？」

「行ってみましよう先輩たち!」

「おっ、おう…」

三人はアキたちの後を追って裏路地の隠れ家へと入っていった。

「うわあ〜!?!何これえ〜!?!」

そこには外では扉一枚、あとは壁しかない裏路地だったが…中に入ってみるなりそこに広がっていたのは内装を整えたお洒落な店であった。

「バーカウンター、テーブル席、なんかいい感じの照明、ここってユウゴさんのお店なんですか!?!」

「まあな」

「すつげえ〜隠れ家店舗ってやつかあ〜」

3人は突如として舞い降りた裏路地の異世界に目を輝かせながら店の中を見て回った。

「それで、こつちに行けば従業員通路でボクの部屋に繋がるエレベーターが……」

再びアキが三人を案内しようとしたが……

「ねえねえ、ウチ一度やってみたかったことやっていい!……ふつ、マスター……いつもの」

「今日来たばつかりだろうが……」

「お店の名前はなんていうんですか!？」

「BAR『1954』」

「なんで数字なんつすか」

「ここの番地号」

「『テキトーおろ!!』」

三人は和気藹々と勝手にバーカウンターの席に座ってアキの新居などそつちのけではしゃいでいた。

「じゃあとりあえず生四つ!!」

「テメエら、未成年だろうが」

「あたし、お腹すいたー!なんか食べる物くださいー!」

「ねえよ、そんなもん……」

「じゃあなんのために店出してんつすか？」

「別に……趣味だ」

「維持費とかどうしとんねん」

「株、FX、CFD取引」

「カブウ？ファックス？シーデー取引？なにそれ？」

「バカ、投資だよ投資！最近CMとかでやってるだろ」

「じゃあレツドちゃん知つとるんか」

「知らん!!」

「……………」

唐突なミニコントをしている中、そつちのけにされているアキだが…肝心の新居への関心が薄れたことに内心ホツとしてこのまま3人を店の中に留めようと余計なことは言わなかった。

「ねえねえ！今度ここでGIRLSのみんなをつれてパーティーしようや！」

「いいねえそれ、みんなでお菓子とか飲み物とか持つてきてさあ」

唐突にミカツキが提案したことにミクも賛同して話が徐々にユウゴの店『BARI9 54』でパーティーをする話に流れて行った。

「おい、何を話勝手に進めてんだ そんなのアギラのお兄さんが許すわけ」

「俺は別に構わんが…」

「うっそ、マジっすか!」

思いもよらないOKにベニオの目が丸くなった。

「イイの、お兄ちゃん!」

それを聞いたアキも半眼の目を丸くして驚くアキも尋ねた。

「別にこんな場所どう使われようが客を呼ぶ気も無い店だし…俺自身も愛着も何もねえから別に構わんよ」

「あんたそれでも店主かい!?でもこれで決まりや…今スグにみんなへ伝えにいつてパーティーの準備や!」

「うおおおお盛り上がってきたああ!!」

「パーティーかあ…楽しみ」

思わぬ決まりごとに少女たちは舞い上がって高鳴る気持ちを抑えきれそうにも無かった。なんなら今すぐにもパーティーを開きたいが完璧な準備をしてからでなきやつまらないとばかりに思い思い想像を掻き立てられた。

「よおし、それじゃ早速GIRLSのみんなで楽しいパーティーにしようやあ!!」

「「おお〜!!」「おっ、おっ」

かくしてやる気に満ちた3人とちよつとはしやぎのれないはベニオが店を出ようとした時だった。

—ガチャン!

扉が突如開いて、外から女性が入ってきた。

「たのも〜!!この店主はどこだ!!」

その女性は黒髪の長髪を一束にまとめたロングポニーテールにワイシャツ、スーツボン、黒革靴…なぜか妙な水晶玉を持った謎の女だった。

「だっ、だれ?」

「フフフツ、私は貴様らの店より少し離れの場所にあるカフェ『ブラックスター』の店主…ワケあって本名は明かせないが敢えて名乗るならノワール・ブラック・シユバルツ! ノワール店長と呼んでくれ」

堂々と高らかに名乗りを上げて素性を明かすも…

「ノワール・ブラック・シユバルツって…」

「ネーミングセンスがクソダサイねえ」

「つうかオマエ、どつかで会ったことないか?」

「あやしいい〜」

「うっ…そっ、それは…」

突如店に乱入してきた謎の女性ノワール店長に睨みを聞かす怪獣娘たち4人からの視線にノワール店長の頬から冷や汗が垂れる。

「ええい、うるさいうるさい!!この店主は誰だ!」

「俺だが」

「んっ?…ぎよっ!?!なっ、なんだ貴様!?!」

ノワール店長が振り返った目の前には全身に筋肉を搭載した人の形を持つデカイ筋肉の壁の前にノワール店長は生まれたての小鹿の如く足がガクガクしていた。

「なっ、なんでっ、お前たちのどっちかではないのか!?!」

「ウチらなワケないやん!」

「さつきからなんなんだ、お前」

「ネーミングもクソダサイし…」

「何、ノワール・ブラック・シュバルツって…もう少しマシな偽名ないの?」

「ノワール・ブラック・シュバルツって全部『黒』じゃねえか」

「ええい、うるさい連中だ!家賃支払い…んっんっ、我がカフェの売り上げのため、邪魔になる愚かな他店など潰すに限る!尊い犠牲となれ!!」

一瞬、私念の混じりだが邪な理由でユウゴの店に喧嘩を売りに来たノワール店長の言い分を要約する所によれば堂々と宣戦布告とばかりに店をたたためと訴えて来たのであ

る。

「いきなり店たたためって、そんな横暴が許されるか！」

「そうやそうや、せつかくパーティー開こうって時に！」

「ネーミングクソダサいくせに！」

「そんなこと、ボクのお兄ちゃんが許さないよ！ねえッ！」

—ボキツボキツ…チャキンツ！

4人はそろって来訪者からの宣戦布告など到底受け入れられないと訴え、その後ろのユウゴはバーカウンターから指を鳴らしてアイスピックを指の間に挟めるだけ挟んで実力あるのみと無言の圧力を向ける。

「ひいつ！まつ…待て、何も暴力で解決しようというワケではない。ここは一つ、料理対決でどうだろう…2時間後に各々の店から自慢の5品を持ち寄っての対決形式ならどうだ！」

「うち、バーだけど…」

力で解決しない料理比べと言う対決方式にユウゴは納得いかないが…

「なんだと!?!料理い!?!」

「ぐうつ、それなら…仕方ないやん」

「料理かあ…クソツ、理になってる」

「いいでしょう、その勝負ボクたちが受けて立ちます」

「なんでお前らが決めてるの…」

料理での対決方式になぜか納得のいった怪獣娘たちはなぜかやる気に満ちた目つきで勝負を勝手に乗った。

「では2時間後に…せいぜい無駄な足掻きをするんだな」

そう言い残してノワール店長は退店していった。

「せつかくみんなでのしくパーティーができる場を得たのに…潰そうなんてウチが許さへん！」

「おうっ、こうなったら1時間で食材を近くのスーパーから選んで料理してやろうじやねえか！」

「うおおお!!燃えて来たっす、先輩!!」

「ボクたちみんなでお兄ちゃんの店を守ろう!!」

怪獣娘たちは目にやる気を漲らせ天高らかに拳を掲げ『エイエイツォー!』の掛け声と共に全員が一致団結して店を勢いよく飛び出して呆然とするユウゴのみ残して行ってしまった。

「……ウチ…バーだけど…」

一方、その頃…

「フフフツ、うまくいったねえブラックちゃん…」

「まさかお前の催眠術が通販で買った水晶でやつらが素直に引つかかるとはなあ」

「フフフツ、まさか他店にGIRLSの連中が店を出店してきたとは…この際、GIRLSも店も潰して一石二鳥！ 店主がまさかのゴツイ大男だとは思ってもよらずビクリして『料理対決』とか変なことを口走ったらあいつ等なぜかノリに乗ったようだったけど、まあいい」

「でもどーすんの？ 家賃が払えないし、バイトしたくないからって店を出したのつい昨日なのに料理なんてできないよ？」

「フフフツ、案ずるな…私にいい考えがある…フフフツなあはっはっはっはっはあああ!!」
不敵な笑みを浮かべる謎の少女2人とノワール店長は行動に移った。

1時間後、両手にいっぱい食材を抱えて帰ってきた4人がバーカウンターにドンツと荷物を置いた。

「よし！ 早速料理に取り掛かろう…：…んで、この中で料理できる奴は？」

「ウチ、たこ焼きしか作ったこと無いでえ」

「あたしもできないっす！」

「ゆで卵なら……」

「「「……………」」」

全員の口から沈黙が走り……そして…

「「お兄さん、お願いします!!」」

「お願い、お兄ちゃん!」

「なんでお前らが引き受けといて自分ら全員が出来ないんだよ……あとウチ、バーだからなッ」

もはやユウゴに丸投げのおんぶ抱っこに縋るしかなくなった状況にユウゴは呆れ返って頭をかくが……バーカウンター裏手の部屋は一応の調理場を完備していたため、料理はできるが……

—さらに1時間後—

—バタンツ!

「さあ、負ける準備はできたか! 愚かな店のものたちよ!!」

扉を勢いよく開いて袋を抱えたノワール店長が店を訪れた。

「きやがったな、胡散臭いカフェの店長さんよ! 悪いがオレたちだって負ける気はねえ

ぜ！」

「ウチらの実力、見せたるでえ!!」

なぜか誇らしげに胸を張ってノワール店長を待ち構えていた怪獣娘たち4人は堂々とノワール店長を迎えうった。

「なお、勝負を公正にするため我が店からも従業員も審査に参戦させてもらう」

「やつほく！おいしい料理、期待してるよ」

「家帰ってゲームしたい…」

1人は審査するよりも食べることを楽しみにしている長袖の少女と料理よりもゲーム機のことと頭がいつばいな雨も降っていないのに赤いレインコートを着ている少女が審査員に加わった。

「いいだろう、どつからでもかかってきやがれ！」

「絶対、負けないよ！」

ミクとアキも自信満々でいざ対決に臨むが…

「フンツ、まあ我々から仕掛けたことだ…先行は我々から出してやろう…まずは、このふわふわオムレツをくらえ!!」

ノワール店長の持ち寄った袋の中からお持ち帰り用プラスチック容器に入った小判型に形成したケチャップライスに小判型のオムレツを乗せたオムライスを出した。

「ヘンツ、そのどっこがオムライスだ！」

「フフフツ、恐れおののけ……このナイフで、すうーッと開いてやれば……ふわふわからトロトロの卵の登場だ！」

「……なっ、なにいいいい!?」

それまで質素なケチャップライスと楕円の卵焼きのように見えていた料理が一瞬にしてオムライスの完成を見る事となった。

「どうだ! 恐れ入ったか、なあはっはっはっはああああ!!」

「ぐうぬぬう……こんなものを最初に出してきやがって……だがこつちも負けてらんないぜ!……お兄さん、お願いしやす!」

「……………」

なんだか納得が行かないユウゴだが、否応も無しに仕方なく作ってみた逸品を出してみた。

「さあさあ、そつちはどんな料理を出してきたのやら……」

ユウゴが出してきたのはダンゴ状のコロッケのようにきつね色に揚げたものだった。

「なんだこれは……」

「フアラフェル」

「なんてエツ!?!」

ユウゴが出してきたのは日本ではあまり見慣れない料理『フアラフェル』だった。

「なんだその聞いた事の無い名前の料理は!？」

「フアラフェルは中東圏で大豆などの豆類を潰して香辛料で混ぜ合わせ揚げたものだ」

「フンツ、ようはコロツケのまがい物ではないか…そんな料理で私の料理に勝とうなど片腹痛いわ! さあ、勝負は見えた、さっさと実食と行こうではないか!!」

そう言つてノワール店長の部下と怪獣娘たちによる実食が行われたが……

「へえ〜大豆とひよこ豆の味がしてちよつとピリ辛なあ」

「物が小さいからいくらでも食べれちゃうね」

「めちやくちやおいしいっすよ、コレツ!？」

「ツナギは片栗粉かなあ…それでいてなぜかお肉みたいにジューシーさもある」

「うん、うまいな」

「おいひい〜」

ユウゴが出したフアラフェルの方に真つ先に手が伸びて6人それぞれが『おいしい』と絶賛する…一方、ノワール店長のオムライスも手を出さず結局長袖の少女が1人で食べきってしまった。

「ぐっ…判定は」

ユウゴに1票、2票、3票、4票、5票、引き分けに一票だけと言う散々な結果だつ

た。

「なあぜだあああ!?!」

「いや、どしよっぱなオムライスはおめえわ」

「ウチも無理」

「あたし昼にオムライス食べたし…」

「お兄ちゃんの料理の方が手に取りやすかった」

「右に同じ」

「どっちもおいしかったあ〜」

散々な結果な上、仲間内の一人までユウゴ側の料理を選んだことで出鼻を挫かれたノワール店長だったが…

「なっ、なあっ、なあはっはっはっはっはあああああ!勝負はまだ始まったばかり、じゃんじゃん行こうではないかあ!」

「メンタルすごいな、お前」

強靱な精神力を見せつけたノワール店長だが、次なる料理ではある条件を提示した。

「だが、次のヤツでは皆が知っているような料理を出せ!できなければその時点で失格とさせてもらう!!」

「なんでお前が条件提示してくんだよ」

そんな状況の中で出したのは…

「デミグラス煮込みハンバーグ!」

これまた確かに知られている物がノワール店長側から出たが…

「ケバブ」

ユウゴ側もかなり最近知られた物が出た。

「うわっ、めちゃくちゃ知ってる!?!」

「駅前とかに外国人が売ってたりするよねえ〜」

「お肉が何十にも重なっていてポリューミー」

「このオーロラソース…カボスとか柑橘系の果汁も混ぜてあるから、止まんないよ」

「食べやすい…ゲームやりながらも食べれる」

「おいひい〜!」

またしても同じ状況だ。ユウゴのばかり集まって、ハンバーグはまたも長袖の少女が食べ尽くす。

「判定はあ〜」

ミカツキの掛け声と共に5人がユウゴを指して、1人は引き分けだった。

「なあんでだああああ!?!」

「どう考えても惨敗だろ…」

「ハンバーグ嫌いちゃうけど…食べ慣れてるから味知つとるわ」

「やっぱ普段食べ慣れてない物ってそそられるよねえ」

「ケバブ、久しぶりに食べた…」

「食べやすい」

「どっちもおいしかったあ」

殆ど変わらぬ結果…そんな状況下にドンドン条件が追加される。

「今度は米を使え!!」

一方的な条件を突きつけるも…

「ちらし寿司!!」

「コシヤリ」

三品目もユウゴに5票1引き分け。

「横文字禁止だ!!」

また更に無理難題を押し付け…

「天ぷら!!」

「馬拉~~×~~(マラーカオ)」

四品目もユウゴに5票1引き分けと言う結果が続いた。

「なんでだああああああ!!」

なぜ自分がことごとく惨敗したのか理解できないノワール店長は悶絶した。

「いい加減あきらめろよ…あんたことごとく負けてるぜ」

「ぶつちやけ味勝負と言うより食べやすき勝負やったわ」

「ていうか後半カフェとか関係ない料理出て来たよね」

「ホントに何がしたかったのか分かんないよ」

「まったく、リーダーが勝てると言うから乗ってやったのに…」

「どつちもおいしかったあゝ」

この散々な言われ様にノワール店長は膝をついて最後の5品目を出す前に撃沈寸前であった。

「そもそも、最後に横字禁止にしたではないか！」

「中国語だよ」

無理難題を押しつけといてそれにさえも合わせて出された料理に現在進行で完全敗北だった。

「くそおお！正直、最初の二品のだけで勝てると思ってた、後のは適当に選んだのが裏目でたあ!!」

「いい加減降参しろよ…無理難題を途中から押しつけといて惨敗とか敗北以外の何者でもねえぜ」

「ウチらを相手にしたのが運の尽きやったなあ！」

「おとといきやがれ！」

「ボクたちの絆と結束のおかげだね」

「なんでお前らが勝ち誇ってんの？」

一切の料理に手を貸しても居ないアキたちが堂々と胸を張って勝ち誇り、それを冷めた目で見るユウゴだった。

「ううっ…もはや焼け石に水だが、せめて最後にこれだけでも…」

その手に最後に取り出したのは以外にも水筒だった。

紙コップから注いで一杯ずつに黒いコーヒーが出てきた事…これすなわち食後にと出すつもりだったが、もはや料理ですらなかった。

「んっ、コーヒーか…じゃあそろそろ冷えた頃だからアレ出すか…」

そういうとユウゴは調理場へ向かっていった。

そして、最後の品は…

「自家製豆の焙煎コーヒー…」

「アプリコットのプディング」

もはや自身も形も無いノワール店長はコーヒー、ユウゴは真っ赤な色合いのゼリー、さながらコース料理の最後みたいな組み合わせだった。

「おお…これもまたうめえな」

「甘酸っぱくっておいしい〜」

「プディングってプリンだよな？甘酸っぱいゼリーの下に蒸しプリンとかオシヤレ〜」

「アプリコットって何？」

「あんず」

「これもまた食後のデザートとばかりに変わらざるのうまさに満場一致であった…が、次に一応飲んでみたコーヒーには…」

「あれ、飲みやすい？」

「うっそ、ブラックコーヒーやのに」

「甘くも無いし、苦くも無い…」

「でもコーヒーの味はしっかり引き立ってる？なんで？」

それは今まで飲んできたブラックコーヒーにある独特な苦みや渋みと言った子供や女性には特に嫌煙される要素だけがない特別なコーヒーだった。

「…普通にミルで引いただけのコーヒーなのに妙に好評だぞ」

「ブラックちゃん、コーヒーだけは妙なこだわりあるもんねえ」

「コーヒー だけ」 はうまいな…」

仲間内でヒソヒソと耳打ちで話し合うノワール店長は思わぬコーヒーの好評に戸惑

うも確かな手ごたえを感じていた。

「ふっ、どうやら勝負はついたようだな…では最後の判定を！」

判定は…満場一致で「引き分け」だった。

「はあ!?なぜだ…」

「いや、料理ではないけど…まあ味は悪くないし…」

「あくまでユウちゃんのだザートの引き立てにはちようど良かったでえ」

「ブラックコーヒーだったけど…飲めないわけじゃないけどやっぱあたしコーヒーの色とか好きじゃないかなあ」

「ボクはどっちもおいしかったから」

「右に同じ」

「どっちもおいしかったあ〜」

まったくと言っていいほど負けからあいこに変わった程度の差であった。

「くそおお!!コーヒーで1230円提供を予定していたのに…料理はボロ負け、コーヒーは引き分け、ぐう…しかたない、今はお前たちに勝ちを譲ってやろう。だが次は必ずお前たちに完膚無き敗北の苦みを味合せてやる…ソレまではせいぜいナンバーワンカフェの座に居座っているんだな」

まるで苦し紛れの負け惜しみを吐き捨てて行きながら腰を抜かして立てなくなつた

ノワール店長を2人の部下に肩を貸してもらってようやくユウゴの店から出て行った。

「なんだったんだ、あれ？」

「さあ…なんでウチら変に熱くなつとたんやろう」

「う〜ん…妙に心の内から熱くなつていたはずなのに…」

「急に終わると冷めちやつたね」

「…………ウチ、バーなんだけどなあ…………」

まるで大きな嵐が去っていったかのように盛り下がったテンションが店内だけに残っていた。

そんな静まり返っていた店内にピリリリッ！と着信音が鳴り響く…

「んっ、誰の着信だ？」

「あつ、あたしっす…ウインちゃんからっす 大事な用があるって断つてたのにどうしたんだろう？」

大事な用事を優先してアキの家庭訪問へは行けなかったレイカからの着信に一同は首を傾げる。

そして、ミクが電話に出ると…

「はい、もしもどうしたのウインちゃん？」

『はあつはあつ…たつ、助けてくださいミクさん！近くに他の怪獣娘さんたちがいらつ

しやったら…:できるだけ多く…:たす…:ザアーザアー…:けて、キャアアアア!!」

突如、プツンと連絡が途絶えて通話は終了音と共に画面が暗転した。

「ウインちゃん!ウインちゃん!!」

「ダム子の身に一体何が!」

「おい、コイツは只事じゃねえぞ!至急GIRLSへ連絡しねえと!ウインダムの所在は?」

「ソレが…:なんでも大好きな漫画家のサイン会があるって言ってエレキングさんと中野で待ち合わせるって…」

「中野って…:ここからえらい遠いでえ!」

ミカヅキが調べたマップに表示された現在地との距離は車でも1時間以上かかる距離だった。

「どっ、どうしよう!」

「どうしようもねえだろうが!一刻も早く助けに行かなきゃウインダムが…」

ミクたちが慌しく非常事態に動揺していると…

「…:その携帯をちよつと借りるよ」

「えっ、はっ、はい!」

ミクは涙目にユウゴはソウルライザーを借りて通話アプリから電話番号キーで連絡

しようとしている番号を入力してその電話番号の主にかけた。

『……………』

「ああ、俺、俺、ユウゴ…お前、今は中野でサイン会をやってるらしいな…おお、そう
だ…そっちに向かう予定だったお前のファンの一人が「奴ら」に襲われてるかもしれ
ん、感じ取って先に向かつて行ってくれ…おう、頼んだ」

通話が終わるとユウゴはミクにソウルライザーを返す。

「ユウゴさん…誰、連絡してくれましたか」

「ん、そのウインちゃんだっけ？その子、中野にいるんだろ たぶん俺の知り合いが近
くにいるから連絡した」

「ホントーですか!?!助かりますっす!!」

ミクラスは深々と頭を下げてユウゴに礼をした。

「オレらも急ぐぞ!ユウゴさん、御飯ご馳走…あれっ?ユウゴさん」

ベニオも礼を言おうと振り返るればいつの間にかユウゴがその場から消えていた。

「お兄ちゃんならさつき裏口から…」

アキが指を差す先の開いている裏口からユウゴが音もたてずに出て行った事にベニ
オたちは驚いた。

一方、都内の国道では…

—ヒュウンツ!

「んっ?なんだ…」

「今、何か通ったか?」

国道から通って移動するユウゴが変身したゴジラが“ミレニアム”と呼ばれる形態でユウゴの店から中野まで最短距離を超高速で向かっていった。

遡る事…数分前—中野のとある商業施設。

そこでは有名漫画家のサイン会が開かれていた。長蛇の列を為して何とか最後尾に並んでいたのはレイカを待ちすぎて最後の後手に回ってしまったエレキングこと湖上ランが並んでいた。

最後尾故にその緊張と焦り、いよいよ尊敬してやまない存在を前に髪が乱れていないかなどをチェックしつつランには拭えないもう一つの不安があった。それはこの列に本来一緒に並ぶ予定だったレイカが来なかったことだ。

こんな大事なイベントに彼女が遅れるどころか来ない事にだ。…異常だ。どう考えても何かがおかしいと感じてはいるが、相手は長年待ち続けようやくサインをいただける間に話だつてできるファンにとってまたとないチャンスだが…

「ありがとうございます…それでは次の方あ〜」

とうとう自分の番が来た…そう決意を固めた時だった。

―ピリリリリッ!―ピリリリリッ!

同時に2台のスマートフォンを着信音が鳴った。

「はい?どうしたのピグモン…落ち着いて、ウインダムのスウルライザーのシグナルが消失した?」

「はい、相沢トオルです…なんだって、ユウゴそれ本当かい?」

ランと同時にサインをするイラストレーターもランと背を向ける形で電話を取る。

一方、ランは待ちに待った自分の番になってもGIRLSからの急な連絡に戸惑うことも無く真つ先に彼女は憧れより今を優先してサインをあきらめた。

「申し訳ありません、急用が入ったのでサインはいただけません…それじゃ」

「あつ、ちよつとッ!」

最後のランの番に回ってきていたのに唐突に彼女が立ち去って行った事に戸惑う設定スタッフだった…

「……………ああつ、わかつた…ボクもすぐに向かう」

そんな彼女を見ていた漫画家の男、相沢トオルも電話を切るなりその場を走り出す。

「ちよつと先生!サイン会は!?最後尾の方へのラストワンプレゼントはどうされるんで

す!？」

「あとで僕から手渡ししておきます!それまで取っておいてください!!」

そういうと相沢トオルはサイン会の会場から従業員出入り口通路を通って商業施設の避難扉を開けて外へ出ると数十メートル以上もある高さから躊躇なく飛び降りる。

そして、あつという間に相沢トオルの身体は別の生物の姿へと変貌を遂げ、背面からジェットエンジンのブースターのように燃焼させて商業施設を文字通り「飛び出して」行った。

—中野区・平和の森公園—

あたりは暗くなつて人氣が殆ど無くなつた中野区内の広大な敷地を有する公園でレイカは息を殺して隠れていた。

「はあ、はあつ、はあつ…助けて!」

恐怖心を押し殺して迫りくる脅威から走って逃げていた。

「フガ、ヤオモハギダバゴモザ!」

「バムギザ、ドゴザミガゴーズ、ダゴン、フタグスイ」

聞いた事の無い言語を喋る謎の怪物2体がレイカを追っていた。

しかし、相手がなんであれ怪獣娘のレイカが何もせずただ逃げていることしかでき

ないのにはワケがあった。

(どっ、どうしましょ…あの怪物に驚いて逃げた時の拍子にソウルライザーを落としてしまいましたあッ)

怪獣娘が怪獣の姿に変身するためのツール『ソウルライザー』を落としたレイカはウインダムとして戦えない状況に陥っていた。

「ダモザ、コドパガ！」

「アドギダ、マーソ！」

——ドオオオオオンツ!!

「キヤアアアアアア!!」

突如、何かの光弾が怪物たちから放たれ外れはしたもののその衝撃波でレイカ諸共吹き飛ばされ路上に転がり回った。

「うっうっ…」

転がった拍子に眼鏡もどこかに行き、右目が真っ赤に染まるほど頭を打ってしまい、朦朧としていく中でレイカは意識を失って気絶した。

気絶したレイカを確認しようと怪物たちは大きな手でレイカの髪を掴み上げて睨む。

「『ダゴン』・フングルイ？」

「…『ダゴン』…フタゲン！」

レイカで何かを確認を取り合う怪物は意見が合致したのかレイカを1体が脇に抱え、もう一体が謎の魔法陣を目の前で展開した。

しかし、そんな怪物たちへゴジラが怪物諸共突進してきた。

「フングバダツ?!…ガグツ?」

更に上空を怪物が見上げると燃烧煙を放出しながらレイカを抱える怪物に硬質な鎧を見に纏った新たな怪獣戦士（タイタヌス）が怪物とレイカを捉えた。

ゴジラと鎧の怪獣戦士（タイタヌス）は互いに急旋回して抱える怪物に加速を強めゴジラと鎧の怪獣戦士（タイタヌス）が交差する形で怪物同士を激突させた。

怪物2体は互いに激突し合った衝撃で地面に倒れ伏したが…それでも立ち上がってゴジラたちに威嚇とばかりに吠えた。

「…『ゴブリンタイプ』だったか…こいつらどれほど潜伏しているんだ」

鎧の怪獣戦士（タイタヌス）は怪物2体の姿を見て瞬時にゴブリンタイプと認識できるほどに怪物に精通していた。

「さあな…それよりその子、怪我しているぞ…こっちで手当てしておく」

「ああ、頼むよ」

鎧の怪獣戦士（タイタヌス）はレイカをゴジラに託して、体色が緑の耳が尖った身の丈同じほどの醜悪な怪物2体を相手に鎧の怪獣戦士（タイタヌス）が前に立ちはだかる。

「ガバファイウィツガ!!」「ハガナバアアア!!」

怪物たちが鎧の怪獣戦士（タイタヌス）に向かって何かを吠えると魔法陣から剣や槍などの武器を取り出して襲い掛かって来るも…鎧の怪獣戦士（タイタヌス）は怪物たちが振り下してきた武器を硬質な鎧の腕で防ぎ、打撃と蹴り、さらには肘から生えたブレードで2体を切り付けた。

「グカマヒアア!!」「ガアバアハアア!!」

そして、鎧の怪獣戦士（タイタヌス）は口腔内に火力を集中させると…一気に放出して2連撃の火球攻撃を直撃させとどめを刺し、怪物2体は爆発炎上した。

「さすが『ガメラ』…相変わらずやるこゝろがえげつねえな」

新たな怪獣戦士（タイタヌス）の『ガメラ』は公園のベンチでレイカを手当てしているゴジラの元へ向かいレイカの位置まで腰を下ろした。

「相変わらず完璧な手当だね…もう傷がふさがっている」

「ただ怪獣因子を粒子化させて体内のアドレナリン量を増大させただけだ…回復力はこの子次第だったか」

ゴジラとガメラはレイカに傷が無くなったことを確認すると、意識を失っていたレイカが目を覚まし始めた。

「うっ…うっ…あなた、たちは？」

意識を取り戻したレイカが薄めで助けてくれた者たちの素顔を確認しようとするも

…

「…俺たちは、君の幻だ」

「ここには誰もいなかったし、君は誰にも傷つけられたりしていないさ」

そう言い残して朦朧とする意識の中のレイカを子供でもあやすように目を再び閉ざして、転がる時に落としたであろう彼女の眼鏡を頭の上に置いた。

「ウインちゃん!!どこなのおお!?!」

やがて公園の入口の方からミクラス達の声がしたのを耳にしたゴジラたちは音も立てぬ速さでその場を離脱してレイカの周りには誰も居なくなつた。

「みんな、ダム子いたでえ!!」

「ウインちゃん!ウソツ、血流してる!!」

「おい、ウインダム!しっかりしろ!!」

仲間たちに意識確認と無理やり頬を叩かれながら目を覚ましたレイカは身体を起こし上げた。

「みつ、皆さん…」

「ウインちゃん!どこか怪我してない?頭、怪我してるよ!?!」

「う〜ん…特に痛みは…」

「確かに…コレと言った傷はねえな…何があった、シャドウか？」

「いつ、いえ…その…変な大きな怪物に追われて、また大きな怪物と言うか怪獣さんが居たような…」

「大丈夫か？ 頭打っているかもしれないがとりあえずエレたちが合流するまで安静にしている」

「はっ、はい…」

レイカの安否を確認できたことで安堵した怪獣娘たちだったが、ふとアギラが振り返ったビルの屋上から自分たちを見下ろす月夜の影に輪郭が映える2体の怪獣戦士（タイタヌス）が居たが…居たことを確認できたのは一瞬だけでスグにどこかへと去っていった。

「…？…どうしたの？アギちゃん」

「うんうん、何でもない」

「なにになに…なんかやけにニヤついてるんよねえ」

「それは…ウインちゃんが無事だったからうれしくって…」

アギラは自分だけが知っているレイカの恩人たちをかばって知らないふりをしてやり過すのであった。

力の戦士

—東京都千代田区—

・霞が関：警視庁

そこは東京都内を管轄区域とする警察組織の本部だ。都内102カ所に及ぶ警察署の総本山であり万人規模の警察官が都の治安維持に努めている。

—敵性有害生物関連事件捜査本部—

警視庁はGIRLSの怪獣娘にしか対応できないシャドウによる超常的事件が立て続けに発生しているため警視庁は兼ねてより大規模な合同捜査本部を本庁内の会議室に看板を掲げて設置された。

「それではこれより、都内で発生している敵性有害生物事件の報告を開始する。兼ねてより発生している一連の『敵性有害生物』通称“シャドウ”に関連する事件を本庁管轄各署より諸君らに集まってもらったのは他でもない、シャドウ生物から都民含め国民の安全を守るため些細な情報でも構わない、一課から並び三課、少年課、生活安全課、あらゆる全部署の力を上げて捜査してもらいたい」

捜査本部長の号令の下、同本部内の捜査員たちは全員満場同意で“了解!!”と声が上

がると捜査情報の公開が開始された。

まず1人目の捜査員が挙手の後に始めの公開情報を開示した。

「都内で発生したこれまでの『敵性有害生物』に関連する事件ですが通称シャドウ生物に見られる行動は建造物破壊など多岐にわたって様々でしたが人的被害は二次被害での傷害事件が過去3年間で256件、加えて政府公開情報で開示された個体はまず粘体型の『S型』、更に有害獣型の『B型』、つい先月に出現した新たな個体として『G型』、またミストなる名前の通り霧のように微粒子での人体感染例も報告され身体に影響は無いものの明らかに精神に異常をきたす例も報告されているため『M型』もカテゴリーされますが、シャドウ生物は今後とも『国際怪獣救助指導組織』通称『GIRLS』の怪獣能力者による駆除と規制線の強化にて対応が検討されます」

また更に別も捜査員が挙手をした。

「先日、国道1号線のNシステムが検出した新たなシャドウ生物と思われる画像を出します」

捜査員がプロジェクターに投影してホワイトスクリーンに映し出されたのは国道1号線を車など抜き去って走りぬける黒い線の様に伸びた残影だけが映っていた。

「なんだあれ?」「あれが生物なのか?」

「伸びているぞ」「どれだけ早いんだ」

捜査本部内の捜査員達の間でザワつくほどに動揺が走るが更に情報が追加される

「画像分析の結果、この生物の推定される移動速度は時速500キロメートルと推定されます」

また更に動揺が走った：現行の警察車両でソレに追いつけるだけの速度を出せる警察車両などありません、追跡はできたとしても捕獲駆除を視野にはできないからであった。

「今後ますますシャドウ生物の出現に対して現段階での警察及び自衛隊でも対処の難しい案件を部外の組織に委託してきていたが、今回新たに出現したシャドウ生物などにも対応するため防衛省では既に対シャドウ戦力構想が持ち上がっている：そこで、本庁も警備部内より新たに対シャドウ対策班を新設してこれに対応するものとするを本日付けで決定された：では、緒確警視お願いします」

捜査本部長より紹介されて捜査員たちの前に現れたのは男性とも女性とも受け取れるような中世的な見た目だが、れっきとした男性警察官であったが、階級は誰よりも上に位置する人物だった。

「ありがとうございます、ご紹介に預かりましたが新たに対シャドウ生物対策班を指揮することになりました。緒確タケルです：昨今のシャドウ事件被害を鑑みた警視庁が私の指揮の下で開発と訓練を重ねてここに漕ぎ付けたことを心から御礼申し上げますま

す。ではまず、開発した同システムの御説明からさせていただきます」

プロジェクトは画像から映像に切り替わり『対シャドウ生物対策班』の紹介と共に「ある特殊装備」の資料が現れる。

『Antishadow Version. Actuator Link. Order. automation』開発コードは『Avolon (アヴァロン)』、対シャドウ生物を想定した新型装備群の総称です…ではまず同システムのテスト映像をご覧ください」

映像が進むと何処かの演習場らしき映像が流れて映像の中央に歩いてくるロボットのような出で立ちの人物が現れた。

すると、ブザーが鳴った瞬間に標的の砲丸クラスの弾丸標的が射出されると即座に対応、射撃にて破壊、拳銃はコルトパイソン6インチバレル357マグナム弾と破格のサイズの拳銃を使用しての対応にも関わらず特殊装備の隊員は一切の反動も挙動も無い。秘密は装備に搭載されたアシスト機構による行動補助による即応耐用サスペンションが作動していることが映像内でも解説付きで説明された。

「我々はこれを城南大学機械工学研究室と東都大学電子工学研究室とで共同開発を進め、今日ここに同システムの完成したことを宣言いたします」

緒確警視は自身を持って捜査員たちに自身が手掛けた装備開発完成を宣言したのち

に対シャドウ生物用戦力としての運用を開始したことを告げた。

捜査員たちの驚きの表情を浮かべ中、緒確は目を捜査員たちの端に女性にアイコンタクトの合図を送ると女性警察官は本部を後にしてどこかへと連絡を入れる。

—八王子演習場—

開発システムの完成宣言より一報が入ってきた事により「アヴァロン」の開発チームにも連絡がいきわたった。

「たった今、我々が開発した「アヴァロン」の正式採用が決まりました！」

同システムの開発チームは両手を上げて万歳三唱の下に大いに喜び合うも一人浮かない顔の男がいた。

「どうされました？ ジャックさん」

研究員の一人が気にかけて相手は研究者と言うにはあまりにも図体の大きな２メートル越えの身の丈を持つ大柄なアメリカ人であった。

「…いえ、あれは本当に『対有害生物用』なのかと考えていました」

「何言っているんですか…苦節3年、やっとのこと漕ぎつけられたのはあなたが去年か

らOS分野に協力をしていただいたから、今日こうして完成に辿り着けたんじゃないやありませんか！」

「そうですよ、既に自衛隊にはあの『温厚の魔女』が開発した『スーパーXシステム』の実戦配備すら噂が上がっていました。それが、それよりも早く発表完成に漕ぎつけられたのも貴方のおかげですよ……じゃあ早速命名を決めなければ、誰かいい案は無いかな？」

最大の障壁として名前問題が浮上した途端、全員が一段と開発時よりも深く考え込んでいる中、大男ジャックが口を開いた。

『アルトリウス』……と言うのはどうでしょう？」

「アルトリウス……ですか、由来は？」

「同システムの名は『アヴァロン』、それにちなんで『アーサー王』伝説のアーサー王の名前から思いつきました」

「アヴァロンにちなんだ男性名ですか……いいですね、『アルトリウス』異論はありません」

全員が『同じく』とこれまでシステム開発時まで意見などのぶつかり合いが多かったはずの同開発チームのメンバーは驚くほどすんなり受け入れ、寧ろオプシオン装備にもアーサー王の武器にちなんだ名前にしようとなればこれやと意見を出し合い始めた……が、しかしやはり気がかりで難しい表情を変えなかつたジャックは同システムの装着服『アルトリウス』に対して懐疑的な視線を保管ケースから睨んでいた。

—GIRLS：東京支部—

アキは今まさに身動きができない状態だった。

「むうううううっ…」

指先一つ、動作すらも許されない：ソレが何より辛い。

「~~~~♪」

なぜなら…一人の男による現在進行でアキをモデルにデッサン中だった。

「もお…無理イイイ！」

「うん、できた…ほら、こんな感じかな？」

男は深緑色のパーカーにジーンズとラフな格好に頭頂部の一部が逆立った髪型、その手にはマジックペンとGIRLSが広報用にサインなどをするために用意された備品のサイン色紙、そして流れるように絵を描ける技術、彼はプロの漫画家であった。

「うわあくこれがボク…味があつてなんだか本当に漫画の中のキャラクターになった気分です…ありがたいとございます、えっと…ガメラさん、ですよね」

「しいく、怪獣名は言わない約束だよ」

「あつ、そうですね…GIRLSの癖でつい」

「まあ、僕もいろんなペンネームで活動していた時期も多かったけど、結局は名が売れたのは『アイザワトト』だからね…本名は相沢トオル あんまりパツとしない名前でしょ、大怪獣に変身できるのに…」

そう、この男は先日ウインダムことレイカが謎の怪物に襲われた時にGIRLSの怪獣娘たちより一早くゴジラと共に駆けつけてくれた怪獣人間（タイタヌス）の『ガメラ』その人であった。

「ええつと…じゃあトオルさんでいいですか？」

「うん、いいよ…いやここはネタの宝庫だね、いろんな書きたいことがポンポン浮かぶようだ」

トオルは再びペンを走らせながら漫画やイラストなどのデッサンを続ける絵描き師として好奇心が擽られるGIRLSに取材をするが、今日はあくまでアキの護衛の1人としていたのであつた。

「あつ、あの…今日はお兄ちゃんの代りに来ていただいてありがとうございます」

「うん構わないよ、僕も描くことが増えてなによりさ…なんでも今日は用事があつて彼も忙しいみたい 花瓶は花柄つと…」

会議室内の花瓶などを持ち上げながら細かい僅かな所も見逃さないトオルの絵への

姿勢は驚異的であった。得意な事に得意なままにするのではなく徹底的に分析してどのような詳細になっているのかまで記載する…まさにプロフェッショナルな作業であった。

「すごい見ますね…物とか」

「まあ、本当は見ただけで大体の構図と僕の絵力だけで完成するけど真のリアリティーは直接触れて観察し実感することで生まれるからね…あとは持ち前の想像力」

「ほへえ…」

絵に対する熱意にアキはトオルに脱帽した。普段何気ない物にすらプロの漫画家たるトオルにとつてすべてが絵や作画のネタとして昇華されることに驚かされてばかりであった。

「あの…ウインちゃん、大丈夫でしょうか？」

「一応、ユウゴ…君のお兄ちゃんが手当てをしたから傷痕も残らずに完璧に治っているよ」

「…重ね重ねありがとうございます」

「そういうのお兄ちゃんにもいいなよ」

「うーん、こういう時どうしても言いつらくて…トオルさんになら緊張せず言えるから」
「はははっ、ユウゴの代りか…僕も一人っ子だったから妹が出来たみたいで新鮮な気持ち持

ちだね」

「えへへっ……あつ、それはそうと」

ユウゴとは違うベクトルで緊張するアキだが、ユウゴには聞けなかったことも同時に聞けそうな雰囲気にはアキはトオルに尋ねる。

「実は……ボクもウインちゃんと同じ……じゃないけど同質の怪物に襲われかけたけど、あの時はお兄ちゃんに助けてもらったんですが……トオルさんなら何か知っているんじゃないか……今はまだ教えられないかなあ……君たちには君たちの世界、僕らは僕らの世界、それでいいでしょ」

うまい事はぐらかされたがやはりユウゴを始めトオルなどの怪獣の力を宿す怪獣人間（タイタヌス）たちがカギを握っていた。

「アギちやくん！」

そんなときにミクが会議室へ慌しい様子で駆け込んできた。

「ミクちゃん、どうしたの？」

「アギちゃんアギちゃん！大変だよ！ウインちゃんとエレキングさんがああ!!」

「おつ、落ち着いて……ウインちゃんとエレキングさんがどうしたの？」

「ふうくん……少し僕も見に行つてあげよう」

不穏な様子を察知したトオルはアキたちと共にレイカとランの居る大会議室に向

かった。

—大会議室—

「エレキングさん…本当に申し訳ありません」

レイカは深々と頭が地面につきそうなほどの距離まで何度も何度も謝っていた。

「別に謝らなくていいと言っているでしょ…いいかげんにして」

「そつ、それでも…エレキングさんにとっては大切なサイン会を台無しにしてしまったのは私の落ち度です」

「関係ないわよ…得体の知れない怪物に襲われ、ソウルライザーも無くして、血を流すほどの怪我をしていた…それだけの事よ」

誠意を込めて謝罪をしているレイカに対してランは半ば彼女を突き放すような態度だった。そして、ランの指先はパソコンに向かい合って調査部としての襲撃事件の報告書作成のためレイカは問い詰められていた。

「それで…見ず知らずの正体不明の存在に助けられてあなたは公園のベンチに寝かされた…ねえ、あなたこれを自分で報告する立場となったらあなたはなんて言うの？あなたがまともな報告書を掛けないから私がこうして代筆して書いているの…都合よくその場に居合わせた何かが助けてくれてハッピーエンド？三文芝居も甚だしいわ」

「しっ、芝居!? わつ、私は何も一切虚偽など…」

「あなたが信じてても、上はこんな報告信じないって言っているのよ!! もつと現実的に考えなさい!!」

「はひいひい!!」

涙目になるほどレイカを問い詰めるランには少々感情を乗せた八つ当たりに近い様子だった。

それは立ち合いとしてレイカの元へ先に駆けつけていたベニオとミカヅキもランの報告作成のため駆り出されていたが…ランのやけっぱちな態度にレイカを同情する。

「エレ、そんな言い方はないだろ…ウインダムと言っていることは間違いじゃねえんだから」

「せやで、うち等も見て来たけど確かに只事じゃないほどに公園が荒らされとつたでえ」
ミカヅキのソウルライザーには現場の証拠写真として陥没した穴、何かが燃えたような痕、血を流したはずのウインダムの無傷ぶり…だが、完全に襲われたと示す物が何もなくなかった。

敵の肉片、戦いの痕跡、そういった「襲撃」と認定できる要素があまりにも欠如しているせいか報告書は難航していた。

「はあ…わざわざサイン会まで抜け出して来てみれば…事は終わっていて肝心の物的証

抛もない…お手上げよ」

「本当にすみませんでした…私が不甲斐ないばかりに…うつつう…」

「ああ、エレちゃん泣かせた〜」

ミカツキがここぞとばかりに茶化すと場は和むかと思つたが…ドンツ！と机を叩いたランは…

「泣けば問題が解決するの!?!さつきからあなた謝つてばかりでなんの参考にもならず報告書の体裁なんてあつたものじゃないわ!このままじや当事者が錯乱して誇大妄想による幻覚と錯覚、そういつたことを報告書に書けば“虚偽”として扱われることくらいあなたにもわかるでしょ!?!」

「ひいひい!すみません、すみません!!」

「エレ、さすがに言いすぎだぞ!こつちだつてお前の大事な用事がどうか知らねえよ、たかだか紙に名前が書かれるだけの用事だろうが!!」

「たかが!?!あなたに何が分かるつて言うの!?!私は長い時間を費やしてようやく得たチャンスを手を振つた損害を“たかがその程度”つて勝手に決めつけないで!!」

「二人とも落ち着いてえな!」

普段の冷静なランが取り乱すほどにベニオと口論になるほどの怒りが彼女を怪獣娘の本能が少しだけ暴走しかけていた。怒るベニオ、宥めるミカツキ、泣き続けるレイカ

：場の空気は悪くなる一方であった。

「はわわっ、あんなエレキングさん見たことないよ」

「それよりもウインちゃんもかわいそうだよ…聞いててあたしもムカムカするよ、レッツドキング先輩の言ってること正しいもん！」

半ば覗き見る形で大会議室のドアの隙間からミクとアキ、そしてトオルも一部始終を見ていた。

「ふくんっ…ねえ、ちよつといい」

「はっ、はい？」

トオルは耳打ちで2人に話しかけると…

言い争いはヒートアップしていき…

「大体あなたたち私が居なければまともにGIRLSとして——」

ランが白熱した言い争いに更なる拍車を掛けようとしたその時だった。ランの目の前には自身が愛してやまない『お前にピットイン！』通称“おまピト”のキャラクター『西湖』の書かれたサイン色紙が『はい、ストーツ』と間に遮った。

「えっ…」「なあっ!？」

「えっ、誰だ?」「どちらさん？」

突然現れたトオルにランとレイカは固まり、顔知らぬベニオとミカツキは突然現れた

「殴り書きだけど…コレどうぞ」

「へっ?…フギヤアアアアア!!」

その色紙にはレイカが愛してやまない『諏訪』と『木曾』が背中合わせで水墨画調に躍動感のあるタッチで描かれていた。そして斜め角度で『アイザワトト』とサイン文字で書かれていた。

「ありがたい?ダム子…ひゃあっ!しっ、死んどるッ!」

「勝手に殺すなよ」

ミカヅキが驚くのも無理はなく、レイカは魂が昇天するほどにうれしさのあまり身体は真っ白のもぬけの殻と化していた。

「よかったね…ウインちゃん」

「それよか、エレキングさんも…あれ?」

トオルの後ろからひよっこり現れたアキもうれしそうなレイカにホッと胸を撫で下せたが、ミクが確認したランの様子は…

「ゴモたん隊長、エレキングさん気絶しているであります」

「彼女の犠牲は尊い犠牲であった」

「だから勝手に殺すな」

なにはともあれヒートアップしていた口論もトオルの鶴の一声で丸く収まり…

「じゃあ僕がその怪物の似顔絵を描けば証拠品になるかなあ？」

「ぜつ、是非！お願いします！」

そう提案するとトオルは色紙にマジックペンを片手にレイカの証言を元にレイカが見た怪物の印象似顔絵の作成に取り掛かった。

「まず全体的印象は？」

「フォルムは一般男性より長身でスラツとした感じですか、所々に筋肉質な感じでした……あつ、一番特徴的なのは耳が尖っていましたね」

レイカの証言通りに描き進めていく内に漫画アニメに疎いベニオも思わず驚いてしまふほどの繊細で精巧な絵に驚かされていた。

「すっげえ……流石プロの絵……もう形がハッキリしてるぜ、マジックペンで良く描けるなあ……こりゃあ確かに文字書き以上の価値があるぜ　“たかが”　って言つて悪かったな、エレ」

「お見事です、先生」

ベニオの謝罪などそつちのけでトオルの描く絵にランは見惚れて目を輝かせながら絵が完成するのを誰よりも楽しみにしていた。

「うん、こんな感じかな？」

「うわあ〜そつくりです……そつくりどころか、こつちの方が……なんか……無駄にカッコよ

すぎますうツ!!」

書いたトオルとラン以外全員がズッコケた。

「わかるわ、ウインダム!見た目はファンタジーゲームの雑魚キャラのゴブリンっぽいのにアイザワトト味が強すぎるわ!」

そんなレイカに同調するかのように肩に手を置いて同じ目の輝きを放つランが共感した。

「コレはコレでメチャクチャにされてもいいって思えますけど…この2体同士の絡みもまた見てみたいですよウ腐腐腐腐腐腐腐腐腐ッ♡」

思わず本性が露わになってきていたレイカとランにただならぬ笑い声が口から洩れていた。

アキたちは心なしか逆にレイカを襲った怪物たちの身の危険を心配したくなるほどだった。

「はははッ、個性的な子たちだね…面白いから絵の参考にさせてもらおうよ」

「はっ、すみません!つい、いつもの癖で…先生の前でお恥ずかしいです」

「構わないよ…表現は自由だ。僕は絵を描く事の自由が好きだから描きたい物を描く、その絵をどう受け取ってくれるかは読者の自由だからね…まあ、まさかライバルキャラの方が人気出るとは思わなかったけど…」

自分が描いた漫画絵に自虐的なことを語るトオルの前にズイツとランが詰め寄る。

「先生！次はぜひと『富士のクニマス』を主体にした回を是非ッ！」

ランは詰め寄りすぎてファンとしては若干暴走気味の痛い姿が現れていた。

「エレちゃん、めっちゃくちや積極的になってきたやん」

「あんなエレ、見たことないぜ」

普段の冷静沈着なランを見て来た仲間であるミカツキとベニオも呆気に取られていたが…

「なるほど…君、そんなに『西湖』が好きなんだね」

「えっ…：そういうえば、どうして私の推しキャラをご存じだったんですか？」

ランは苛立つて仲間にも八つ当たっていた時に止めてくれたサイン色紙になぜレイカのように推しの事を話しても居ないのに分かったのか疑問符が浮かんだ。

「昨日のサイン会、君のスマホに着いたストラップ…あれが『西湖』だったからさ…：リクエストはさすがに出版社と原作者と要相談しなきゃいけないけど、西湖も富士のクニマスも、『お前にピットイン』を好きでいてくれてありがとう」

さりげなくランを傷つけないリクエストに対する断り方をして最後にランが心から『おまピト』愛してくれたことにまで漫画家として最大限のファンサービスを感謝と言う形で返した。

「あつ、そうそう…これサイン会の最後尾者に渡すように出版社から言われていた品なんだけど」

それはずつとトオルがアキの似顔絵を描いていた時から脇に抱えていた紙袋から『おまピト』のマスコットキャラクター『ピットくん』のフワフワぬいぐるみを追撃ファンサービスでランへと手渡された。

「おつ、なんだ可愛いモン手渡されたなあ〜エレ」

「よかったやん、エレちゃん」

「エレキングさん、よかったですね」

半ば仲間たちに茶化されているような状況下でもエレキングは自分の冷静な性格を崩さぬがクールビューティーな怪獣娘エレキングだった…

「うっうううっ…ありっ…ありがとうございます」

そんな彼女が我慢の限界を超えて突如泣き出してしまった。

「あれっ!?!なんか悪い事したかなあ?…ごめんごめん」

更に涙を浮かべるランに対して頭をポンポンツとした上で優しく撫でる気遣いぶりにランは自分が尊敬してやまない相手に自らの涙目姿など見せたくないとはかりにぬいぐるみで顔を隠した。それは同時に普段見せない顔を顔見知りたちに見られたくないという気持ちからでもあった。

「まったく…エレもいかげん素直になれよなあ」

「まあ、そこがエレちゃんの良いトコでもあるけどねえ」

ベニオとミカツキは普段見られないランの姿を見てご満悦した表情も束の間だった…ピリリリリッ！

「ピグモンさんからだ！」

アキたちのソウルライザーからピグモンことトモミを通じて連絡が機能に続いて今日もまた新たに入った。

『大変ですうみなさん！また他の怪獣娘さんたちのソウルライザーシグナルがロストしました！』

「誰のソウルライザーだ、ピグモン！」

『ロストしたのはザンザンとノイノイのシグナルですう！！GIRLS近くの河川敷を最後に突然消えてしまいました！！』

慌てた様子でトモミは皆に詳細を伝えるとベニオは即行動に移った。

「よしっ、今すぐあいつらを助けに行くぞ！時間もそんなに経っていない今なら間に合
うはずだ！」

「ハイッ!!…って、あれ？先生は…」

全員が一丸となって仲間の救出に向かうも、その場には誰よりも先にトオルが居なく

なっていた。

—GIRLS 近辺・河川敷—

「いやあああああああああああ!!」

突如、金切り声のような叫び声をあげたのはザンドリアスの怪獣娘。『道理サチコ』だった。

そして彼女は友達にしてバンド仲間ノイズラーの怪獣娘。『鳴無ミサオ』の背中に隠れているが：彼女たち2人の前には出で立ちからして『蛮族』と言う形容が似合うであらう姿かたちの『鬼』がいた。

「ガジャバサダガヴァザゴミカ。『ダゴン』。『ダゴン?』」

「ロウシ、『ダゴン』。『フタグヌイ』。エマ、『ダゴン』。『フタグン』」

鋭利なツノを生やした謎の鬼型の怪物2体は双方ともに2m越えの大怪物だった。1体はサチコを指差して、もう1体は何かが違うと首を横に振って今度はその個体が逆にミサオを差すともう一方の個体も同意するように頷いた。

「はっ!?!ちよっ、なんであたしッ!?!」

巨体の怪物に捕まえられそうになったその時、上空から飛翔してきて二体の怪物の間から突っ切って怪物ごと吹き飛ばしミサオとサチコ2人を飛翔してきたガメラが両腕

で抱え助けた。

「危なかった！怪我はない？」

「えっ!? あつはい…えっ? えっ?」

「ちよつとくどこ触つてんのよ!」

助けてもらつておいて動揺するミサオとギャンギャンと吠えるサチコとで対照的な二人をそのまま河川敷上の歩道に下してあげた。

「早く逃げて! あいつらは僕が何とかしておく!」

そうしてガメラは怪物2体を前に戦闘態勢の構えを固めた。

「だつ、誰だか知らないけど…助かります! 行こう、ザンドリアス!」

「ふえっ!? 何ツ、どうゆこと!」

ミサオはワケが分からないサチコの手を引いて走り去つていったのをガメラが見計らうと2体の怪物たちは魔法陣を展開して棍棒状の武器に槍斧の様な武器を手にガラへと襲い掛かつていった。

「はあッ!!」

ガメラもそれに対抗して2体の怪物相手に武器も無しに立ち向かつていった。

ガメラは硬質な鎧状の体表を駆使して武器を弾き、怪物たちに拳から爆発が起きる打撃技で衝撃を与えて吹き飛ばすも怪物たちは巨体を駆使して耐え凌ぎ武器を持ち構え

て再び襲い掛かった。

一方、助けてもらったサチコたちは逃げると言われていたのにも関わらず離れたところに隠れてやり過しながらガメラと怪物2体の戦いを見守っていた。

「どっ、どうしよう!?! あたしたちも加勢した方がいいのか、これ?」

「んなことできるわけないでしょ!?! いま、あたしたちソウルライザー失くしてんだよ!」
彼女たちが怪物を前に変身できなかったのにはワケがあった…:

「聞かせてもらおうじゃねえか…:なんでソウルライザーを失くすようなことになったんだ?」

「ソレは…:そのお…:喧嘩の勢いでっていうか、投げたというかあ…:って、ひえっ師匠おお!?!」

「レッドキングさんたち、来てくれたんですか!?!」

「来てくれたじゃねえ!! それよりあれやこれやとどういう事だ!?! あそこで戦ってるのは誰だツ!?!」

変身して駆けつけて来たレッドキングたちは目の前の光景に驚いていた…:ソレは怪物2体に対して1体の怪物が互角の戦いを繰り広げていたことに驚いていた。

「あつ、あの方です! 先日、私を助けてくれた人…:と言うか、怪獣?」

その様子から見ても2体の怪物の方は武器を持って1体の別の怪物と戦っている様

ンヒットして怪物は爆発四散した。

類人猿の怪獣コングが叩きつけた怪物は意識を無くして沈黙したと同時に突如としてサラサラな砂のように消失して消えていった。

「お〜い！あんたらあああ!!」

戦いに結着が付いたと見た怪獣娘たちが駆け寄ってきたのが見えた。

「まずい、一旦離脱しますよ!」

「私は飛べん…頼む」

ガメラはジェットを噴出してホバリングしながらコングの両手を掴んで更に放出を最大化させると2体ともどこかへと飛び去っていた。

一方、あたり一面を煙で覆いつくしてゲホゲホツと言いながら怪獣娘たちが煙を手で払いながら進むとそこには既にガメラ達は居なかった。

「アイツら、消えちまったぞ!?!…一体、何モンなんだ?」

「わつ、わかりません…けど…敵ってわけじゃないみたいっす、あたしらを助けてくれたんで」

ミサオの証言で駆けつけた怪獣娘たちは消え去った2体の怪獣に対して明確な“敵性”ではない事だけは伺えた。

そんな河川敷での出来事をビルの上から見下ろしていた何者かがいた。そして、その手にはソウルライザーが“3つ”手の内にあつた。

「ねえ……あなた、何をしているの」

得体の知れない何者かの背後に気配すら察知させぬまま現れたのはGIRLS怪獣娘最強を誇るゼットンだった。

「……………」

何者かは一切を語らずボロボロに布生地で覆われたボールの中にのみその正体が唯一ある。

しかし、ゼットンは一切の躊躇もなくそんな得体の知れない相手に向かって殴りかかった。

「!?!」

ゼットンは驚愕させられた。自分の拳は怪獣娘の拳、レッドキングほどのパワーに振り分けられた攻撃型のファイターではないにしろ怪獣娘の拳に変わりない……しかし、目の前で起きたのはそんな自分の拳を2本の指だけで止められていることだった。しかも骨で言う所の中指の末梢骨部位、拳を握れば最初に突き出る拳の先端を2本の指で押さえられている。物理的にありえない上に今現在もゼットンは“触れられている”感触すらも感じていない。宛ら霞を相手にしているとさえ認識させるほどの何者かで

あった。

ゼットンが即座にレポート、距離をとって躊躇しない最大火力の応戦を決めた。それは通常赤い炎のはずがより強く確実にシャドウを葬り去るためにも何度か使った事のある青い火球である。それが今ゼットンにできる最大火力の技であり、受ければ周囲にまで被害が生じるが幸い相手がいるビルは解体予定のため被害は少ない。

そして、躊躇もなくゼットンは青い火球を放った……が、得体の知れない何者かは青い火球を素手で受け止めた。次第に青い火球はその者の手の内で徐々に圧縮していき……火の粉サイズにまで縮小すれば手を祓うだけで焼失してしまった。

「あなた……一体、だれ……」

そして、ゼットンは自身の最高火力すらも無効化された得体の知れない相手に更なる戦慄が走った。

既にいるのである。レポート能力を有するゼットンをして背後に回られた。即座に振り向きざまに攻撃を加えようとしたが……首筋に電流の様な何か走って、滞空していた場所からビルの屋上に落ちた。

屋上で倒れたゼットンは意識があるものの動くことができない麻痺状態と言う状況であった。

そして、床にはゼットンのソウルライザーが転がっている……頭上からポロ布のロープ

を羽織った者が下りて来た。これでゼットンも万事休す、止めを刺されるのを覚悟した……が、何者かはゼットンになど興味を示さず……寧ろ、ゼットンが落としたソウルライザーを拾い上げて手を翳すと青い光を放って手が光を吸収している様子だった。何を吸収しているのか分からない……が、何かをソウルライザーを介して抜き取っているのは明白だった。しかし、何もすることができない。初めての敗北感、空虚感、何より弱さの孤独感がゼットンに拳を握らせた。悔しさの拳だった。

そんな時だった……紫色の閃光が何者かに激突して何者か分からぬ相手は壁際まで吹き飛んで4つのソウルライザーが宙を舞ってそのもの手から離れた。

「いやな気配を感じて来てみれば……只事じゃねえよなあコレは……」

それは「ミレニウム」と言う形態に変化して超高速で駆けつけてくれたゴジラだった。

「あつ……あなたは……」

そうゼットンが問いかけても声の小ささで届いていないのか倒れているゼットンの事など気にもせず、ただ吹き飛ばした相手の方を優先的に向かっていった。

「!!」

相手は何が起きたのか分からないと驚く隙も与えずゴジラは超高速で相手の胸元を蹴り抑えた。

「おい、俺の質問に答えろ…お前は誰だ？」

しかし、質問になど答える義理は無いとゴジラの足を掴もうとしてきたが、掴ませず即座に超高速の連脚撃でその者にダメージを与える。

「!!？」

そして、一通りの攻撃を通した所を見計らってゴジラはその者の顔面に大きな手を掴み取った。

「人の前に出るときは顔さらしやがれ…形態変化 バーニング」

すると今度は体形が高速に適した流線の形状から重筋力を増したような剛力の体形に変化し、紫色の背ビレが赤く爛れた業火の熱気を背負って別の形態へと変化した。

その熱はゼットンをして熱いと認識させる驚異的な熱量であった。

「!!？」

そして、ゼットンを襲った何者かのローブは一瞬にして燃え盛り煤色に変化して燃え尽きると正体不明の何者かの姿が晒しだされた。

「!?…テメエ…」

その姿にゴジラもゼットンも驚愕した。歴史上幾たびも怪獣や侵略者から地球を守ってくれた『光の巨人 ムウトラマン』…しかし、今の目の前にいるのはそんなウルトラマンと同じ体色、同じ胸部の発光器官、同じアルカイツクスマイル形状の顔…しか

し、その顔には右頬から走るヒビ割れが目立つ過去のウルトラマンとは唯一特徴が異なるが…その姿こそ正しく『ウルトラマン』だった。

「なんなんだ…お前は何者だッ!？」

謎のウルトラマンは一切の言葉を発さず…顔を覆い隠しながら即座にテレポーターションでその場を離脱…ゴジラもゼットンも気配を感じできない距離へと逃げられた。

「チツ…逃げられたか…おい、あんた…立てるか？」

ゼットンはゴジラに声を掛けられて首を縦に振ると…ふらつきながらもようやく立てるまでに回復して立ち上がった。

「…そうか…悪いがこっちも急ぎの用がある あんたはコレ持つて帰んな」

ゴジラはソウルライザー4つを拾い、ゼットンに託して何処かへとまた紫の『ミレニアム』形態へと変化させて超高速でその場を離脱していった。

「……今のは…一体…」

ワケが分からない状況にゼットンは困惑していた…得体の知れない者の正体は『ウルトラマン』、そこへ駆けつけてくれたのは謎の怪獣、何から何まで謎であった。

ゼットンたちから姿を消したウルトラマンに酷似した謎の人物はひと気の無い路地の様な場所へとテレポーターションに成功して辺りを見渡して完全に人が居ないこと

を確認すると光と共に変身を解除した。

「…………あれ？（ここはどこだ…）」

変身が解けた姿は先ほどまでの記憶がないごく普通の青年だった。それも黒いスーツに無地のワイシャツ、宛らサラリーマン風の成人男性の様な出で立ちだが…青年の懐から携帯電話の着信音が鳴った。

「はい、木條です。 あつ、緒碓警視…はいッ、はいッ、本当ですか!? では『アヴァロ
ン・ユニット』が警視庁で本格始動ですね はい、はいッ頑張ります！」

青年は携帯を耳に当てながらどこかへと去るのであった。

— 関東拘置所 —

「ええっ、期待していますよ 木條くん…では、私はこれより用事が済み次第に本庁へ戻りますので…はい、お気を付けて」

そういつて携帯電話の通話終了ボタンを押し切ると緒碓警視は関東県内の某所にある『関東拘置所』の玄関口へと足を運ぶのであった。

刑務官に案内された緒確はある人物に会うためにここを訪れたが：そこは外のよう
に明るくなく、地下のように真つ暗でもないが、光は極僅かな篝火程度の蛍光灯のみ
だった。

「全国に拘置所は8カ所とされていますが：ここは国内9カ所目の『存在しない拘置所
』です：拘置所収監者の多くは重大事件の刑事被告人や懲役受刑者、死刑確定囚が収監
されることが相場ですが：本所に死刑囚や懲役囚はおりません」

拘置所員は無機質なまでに表情を変えないまま警察官と格好は同じ制服を着た刑務
官が緒確警視を連れて所内の案内を進めるにつれて刻々とその人物までの距離が近づい
てきていた。

—ガコンツ！

扉が開かれ、別の刑務官が初老の男性を腰縄と手錠引きながら緒確の待つ面会席まで
連れ来ると腰縄と手錠を外され、その席に座らせた。

「これより10分間の面会時間となります：終了次第、御迎えに上がらせていただきま
す」

そういつて面会が始まった。驚くことにこの拘置所収監者の面会には刑務官の立ち
合いが無く、刑務官は外へと出て行った。

「お久しぶりです 天城『教授』」

「…君は…緒確くんか…思っていたより元気そうだね」

「ええつ、御陰様でミイラが水を得たような気分です」

「……そうか……ミオはどうしている？」

「ご息女“ミオ”さんは現在新宿区内にて『ブルーコメット』と言う名の私立探偵を開業されていると新宿署の開業届で確認しました…それ以外は特に…」

「ああ…元気であるなら何よりだよ……ここは家族との面会すら許されない場所だからそういった情報だけでもありがたい」

初老男性は安堵した表情を浮かべて安心しきった様子でパイプ椅子の背凭れに寄りかかった。

「さしあたって、私の近況もご報告させていただきます…この度、警視庁は正式に『“特殊生物群”対策班』を設置いたしました…名目はシャドウ生物対策に趣を置いた組織ですが、国民に有害な生物は『シャドウ』だけとは限らないと本庁も判断しての決定です」

「…と、言うところ？」

「『シャドウ』はあくまで副産物…それらを生み出す元凶は排除および駆除、監視も辞さない所存です」

「…そこに…『怪獣』も含まれると？」

「無論、この世界に『怪獣』は…存在してはならないと上は判断しております」

初老男性は緒碓の言葉に息を詰めて…口を手で覆い深くも長い溜め息を吐き出して口元を抑えていた手は膝へと落ちた。

「…：わかった…：これも私の罪だ…：ミオが人間として生きられるのなら、それもまた正しい判断だとしておこう」

「ご理解のほど、ありがとうございます。 つきましてはわたくし緒碓タケルは本日より正式採用された『対特殊生物群対策班』改め“アヴァロン・ユニット”を指揮させていただきます」

最後の言葉が交わし終えた時、刑務官が面会室へ入室して時間終了を告げた。

「…：天城教授、ご息女様に何か言伝は？」

「…：…：何も…：私は十分、あの子に父親として残せたものを残してきたつもりだよ」

そう言い残して初老男性は刑務官に手錠を掛けられ、再び面会室より外の領域へと足を進ませ戻っていった。

鋼の脅威

—埼玉県・入間市—

陸上自衛隊入間駐屯地内演習場

—ビィーツ!! 『これより、対特殊生物対応装甲服 “スーパースーパー” の戦闘シミュレーションマヌーバーを開始します』

演習場のスピーカーを通して陸上自衛隊内において一役を担うであろう最新装備の起動実験が開始された。

「パトリオット12、7ミリ弾装填！ SX—W01アクティブ！」

男性オペレーターが防弾ガラスの向こう側で深緑色の装甲服を纏った自衛官が武器を手持って銃火器の弾丸が安全に装填されているかの確認をすると構えて瞬時に演習場の奥の的に目掛けて発砲した。

「SX—W01 残弾数13、稼働標的命中率99.78%！」

「スーパースーパー、ギアコントロール正常！ 対ショックアブソーバーも正常に稼働しています！」

オペレーターの男女が特殊装甲服から送られてくる情報に目を通しながらすぐに指

揮者のオペレーターたちよりも若い女性へと伝わった。

「了解しました…では神子さん、SX-W02にアクティブしてください」

若年女性は耳元に付けたインカムを通して特殊装甲服『スーパーX』を着た自衛官に向かつて次の武器を使用する事を支持すると自衛官は首を縦に振って別の武器を取り出した。

「ファルコンRAMランチャー装填！SX-W02アクティブ！カウンターマス位置、後方人影なし！射出、許可します！」

オペレーター女性が自衛官に武器の使用を許可する支持を出すとスーパーXが持つ大型ランチャーより引き金を引いて発射されたロケットランチャー弾は標的に弾頭が着弾すると標的共々爆発した。

「ファルコンRAM命中！標的ロスト！スーパーX、機体衝撃ダメージ確認されず！」

「命中確率98.74%、SX-Wシリーズの稼働効率8.72%上昇」

「スーパーXのAI制御機能『ケラウノス』、発射時のサスペンション機構に修正を開始！現在SX-W02使用時の反動対策を最適化中！」

オペレーターたちは特殊装甲服スーパーXよりもたらされる情報を精査して主任指揮者へすべて情報が彼女の手を持つタブレット端末へ転送された。

「了解しました…それでは以上を持ちまして第12回の戦闘シミュレーションマヌー

バーを終了とします！ 神子二尉、お疲れ様です」

オペレーションルームからインカムを通して戦闘シミュレーションが終了したことを告げられたスーパーX装着員の自衛官はスーパーXの頭部ヘルメットを着脱して素顔を晒した。

「(こちら)そお疲れ様です…湯原主任」

装着員の自衛官「神子」はオペレーションルームにて自分へ指揮し続けてくれた湯原と言う女性に礼を返した。

『ありがとうございます 心拍数が訓練初期より大分落ち着いています。 この調子なら実戦出動も問題と思われれます』

「出動とあればいつでも…ソレが自衛官としての責務ですので覚悟はしております」

スーパーXの頭部ヘルメットの通信を介して返答する中で神子は自衛官としての責務とは『常に実戦とあれ』と言う心がけがあることを伝えた。

しかし、それは唐突に実現する事になるとは彼自身も思わなかった。

ービィービィビィビィ!! 『県内秩父炭鉱跡地にて異常現象発生！特殊不明生物群対策分隊直ちに出勤されたし!』

突然アナウンスの一報で齎された緊急連絡から僅か5分でヘリコプターのローターが回り始め、様々な装備の弾倉に補給が入りいつでも臨戦態勢に移行できるだけの強化

武装が施された。

そして、現地に出動するメンバーは2名のオペレーターたちと1人の専従開発主任『湯原サラ』と特殊装甲服“スーパーX”を既に装着していた『神子ヒデオ』の計4名から選出され一同移送用のヘリコプターに登場して現場へと急行するのであった。

大怪獣時代終焉と共に怪獣災害自体が無くなった現在、新たに出現した正体不明の怪物『シャドウ』とは怪獣娘の出現後に世界各地で目撃されるようになった存在はいつか“人類の敵”として共通認識が広まった。

しかし、『シャドウ』に対抗できる戦力が今現在では怪獣娘のみと言う現状を打開すべく陸上自衛隊内で新たに『特殊不明生物群対策分隊』が創設された。

大怪獣時代に組織されていた第4の自衛隊『対特殊生物自衛隊』通称“特自”はその装備一式を国際法新規定に基づいて解体されたが、ノウハウは他三軍に生き続け対特殊生物に対しての陸上自衛隊内にて対抗組織として新設されたのが同分隊であった。

世界中の軍事部隊が『対シャドウ生物』を掲げる中での遅れての設立ながらも数年間の沈黙を経ての出動は今回が初めてとなったが：

— 埼玉県・秩父郊外：鉾山跡地 —

到着して早々に分隊が直面したのは異常中の異常な光景だった。

あたりは季節外れの雪が積っている一面の銀世界が広がる。

「なんだ……ここだけえらい季節違いですね……もうすぐ初夏なのに……」

「秩父鉾山を中心に半径一キロ圏内が異常寒波レベルの気温低下が見られますね……いかなれば森の一部だけ凍り付いたという感じでしようか？」

湯原は手元のタブレットで出勤時に現場情報を先発の陸上自衛隊調査班に解析してもらった現場周辺の情報と照会して確認していた。

「あつ、今新たに入ってきた情報です……発生源は中心ではなくここより南西地点から放射状に発生したようです！ これより分隊は発生地点に向かいます」

「了解……」「了解しました！」「了解です」

4名の分隊は南西に進路を変更して先に進むことを決定した。

やがて、一同が辿り着いた局所寒波発生地点は先ほどの雪景色とは打って変わって突然の水世界に驚愕する。

「コレは……水ですか？」

「それにしても……なんだか水分を感じない水ですね」

「分析結果が出ました」

「……で発生した水は水から凍ったものではなかった。物質が極超低温にさらされ分子が維持できなくなり原子が崩壊して分解消失、形だけが水となって残った状態で目の

前の氷の世界の様な状態になったことが湯原のタブレットから分析されたデータが湯原目線で紐解けた。

「この条件において発生できる瞬間冷気温度は：マイナス273.15度!」

「湯原主任、それって確か絶対零度では？」

「そのまさかです…ここはいわば絶対零度現象の爆心地に私たちは今立っている状況です!」

全員が息と同時に固唾を飲みこんだ。自然界では到底発生させられない、宇宙の最低気温が270度であるのに…たかが埼玉県のいち郊外で発生した異常気象と片づけるには可笑しすぎる事態だった。

埼玉県・秩父市内

山間部に囲まれた中央部には市街があった。公共の施設を始め、住宅などの居住地が密集する地域の中に病院も存在しているが…今日に限ってその病院内が騒然とする出来事が起きていた。

秩父中央病院へ白い救急車両がいつにもなく騒がしくサイレンを鳴らしているが…

同時に警察車両のパトカーもそこには赤橙のランプを光らせて到着していた。

「お巡りさん！こつちですう!!」

白衣の中年医師が警察官を呼びつけて自分についてくるように誘導した。

「埼玉県警の前原です あなたが通報者ですね…それにしても寒いですね」

中年医師はこの秩父で発生した異常気象事件の通報者であり、その通報者であるかと尋ねた男性刑事『前原』は夏場も近いこの季節にトレンチコートが手放せないほどに秩父市内の気温が下がっていることが自分の体感でもわかった。

「寒さだけじゃありません…山間部から噴き出す冷気で市内の温度が急激に真冬並みの寒さ変わったかと思えば自衛隊機のへりまで出る始末でおまけに山間地域から呼吸不全の肺炎症状を訴える患者が後を絶ちません」

「一体、山の方で何が起きたんですか?」

「私が聞きたいですよ!突然大きな音と地響きが発生したと思えば…山が凍ったんですよ?!しかも山からの酸素濃度が一気に低下して普段市内住んでいる方々の中には高山病に近い症状から眩暈や立ち眩みと言った症状も報告が上がっています」

唐突な気温の変化に市内の住民は急激な環境変化に身体が異常を起こして病院に駆け込む騒ぎへと発展して病院内は過密状態になるほどの患者数に院内の医師看護師らは半ば局所的なパンデミックだった。

「こいつは大事だ……他の病院も同様ですか？」

「ええっ、なるべく軽傷者は遠くの市外の病院にまで回しましたが……ここには重症患者のみを率先して治療にあたっています」

そんな院長たちの前に看護婦が慌てた様子で駆けつけて来た。

「先生！ICUの患者さんの容態が……」

「なんだって!?!分かった、すぐに向かう……申し訳ありませんが私はコレで」

「いえ、お忙しい所をありがとうございます」

前原は礼とばかりに頭を下げて院長を見送ると腰に手を当てながらあたりを見渡し、
ても患者から患者、すべて患者で締めき合うこの現状に頭を片手で抱えた。

「まるで怪獣災害にでもあったようだ……一昔前に戻った気分だぞ 岡田くん！」

「ハイ、前原警部補 どうされました？」

前原は部下の所轄警察官『岡田』を呼びつけた。

「この中でなるべく症状の軽い話ができる人を探してくれ……とにかく今は情報が欲しい」

「わかりました、それなら先ほど自分が話を聞いていた男性が……」

岡田が前原に呼びつけられる前に話を聞いていた小さな女の子を抱える若い青年が前原の目の前にいた。

「ちよつと…話、いいかな？ 県警の前原だ…具合はどうかかな？」

「はあ…はあ…自分は大丈夫です」

「うん、そうか…その子は大丈夫かい？」

青年が抱える少女はタオルブランケットに包まれて前原側からは顔が見えないが、妙に白い後ろ髪が氣に成った。

「その子、怪我をしているのか？ 順番待ちなら看護師に見てもらって応急処置を…」

「いえ、この子なら…大丈夫です」

明らかに挙動が不自然な青年に前原は違和感が過った。

「大丈夫って…その子、ピクリとも動かないじゃ…うっ!？」

前原が少女の首に触れた瞬間、まるで氷にでも触れたようなイメージが頭の中で過るほど体温が驚くほど冷たかった。抱えている青年が人肌で温めているにも関わらず全然体温が戻っていない様子から見るに少女自体が重症のようだった。

「彼女、もしかして重症なんじゃないのか？ なんで医者に言わない！ 早く見てもらいなさい!!」

「いえ、結構です！ 何も問題ないんです!!」

頑なに医者にも見てもらうことを拒否する青年は立ち上がってその場を立ち去ろうとするが…

「君ッ！待ちなさい……名前は何？」

前原は青年を引き留めて怪しいと判断した為、急遽職務質問を出した。

「分かりません……」

「はあ？分からないワケないだろう……身分証は？」

「ありません……」

青年は自身の名前も身分を証明する物も持ち合わせていない特異な状況に置かれていた。

「じゃあ、その子は？」

「わかりません……山の中で自分と一緒に倒れていて……助けようと彼女を抱えて山を下りていたら……」

「局所の大寒波に襲われたわけか……それは災難だな」

「だい……寒波？」

「君、山で何が起きたかわかっていないのか？」

「はい……慌てていたので……」

青年の答える内容に前原はますます疑いの気持ちに偏り始めていた。名前も知らない状態の彼が見ず知らずの女の子を抱えて山の中の森を抜けてあの大寒波災害を抜け出して来れたことに……そもそも山付近に居住を持つ住民すらも何らかの症状が発生し

ていたはずが彼にはそういった様子も見られない。呼吸器も発声できているあたり正常、受け答えも意識もはつきりしている。ただ唯一、彼の抱える少女だけがまるで氷のように冷たくなっている事だけが気がかりだった。

「はあ……こんな時なんだが、君……署まで同行願えるか？」

「……どうしてですか？」

「いや、任意の同行だ……断りたければ、断って結構だが……この病院は既に重症患者を優先して治療に当たっている。君とその子は見たところ軽症のようだから署の医務室ならその子の手当ても出来るが、その代わり君には少々事情聴取を取らせてもらう」

前原は青年に選択の余地を与えた。青年は悩みに悩んでいる様子だが……腕の中に抱える少女の事を考えた末に……

「お願いします……御話なら出来るだけお答えしますのでこの子を……」

「うんツ、いいだろう……車内をなるべく暖房で温めておく、岡田くん！」

「はい、どうされました？」

「悪いが私はこれから彼と県警に戻る……後の事は頼めないか？」

「あつ、はい！もちろんです」

「すまない……それじゃあ行こうか………便宜上、君はなんて呼べばいい？何かその、名前の様なものは何かないか？」

「あつ、それなら……自分のポケットに入っていた手帳が……」

青年は腰元のポケットから一冊の手帳を前原に渡した。

「手帳？どれ……」

前原が手帳を開くとどこどこにページの敗れた個所がある……しかし、唯一書かれていた『3つの単語』があつた。

一つは殴り書きの様な『きりゆう』とひらがなで書かれており、もう一つは『しゅん』これもひらがな……そして最後に『I』とこれだけ英数字で書かれていたのがこれだけだった。

「きりよう……しゅん……I………どういう意味だ？」

「自分でもわかりません……目を覚ましたら、この子とその手帳だけが自分の身近に……」

「……そうか……なら、一旦こう呼んでいいかい？」

前原は懐から取り出したボールペンで青年の手帳の開いているページに『桐生シユンイチ』と書いて見せた。

「あつ……はい、なんだか自分の名前のような気もしてきました」

「……そうか、何らかの手掛かりになると良いが……とりあえず私の車まで行こう、前原ケイジだ」

「前原刑事さん？」

「ふっ…よく言われるけどケイジは名前だ…同僚から刑事になるために生まれて来たような名前だからかわられる始末だがね」

前原は自分の紛らわしい本名を名乗って気さくに語ると無表情であった名も無かつた青年『桐生シュンイチ』は次第に笑顔を見せるようになっていた。

院内の駐車場に回ると黒いセダン車にシュンイチを案内して先に前原が後部座席のドアを開けた。

「その子が横になれるように座席を倒しておこう」

「あつ、はい！ありがとうございます、前原刑事さん」

「前原で言い…刑事だと名前と同じすぎて紛らわしい」

「そう…ですか、じゃあ前原さん…気を使ってもらつてなんです、俺も後ろの席でこの子と一緒に横になっていいですか？」

「それは…構わないが、どこか具合悪いのか？」

「いえ、単に傍に居てあげたいだけです」

シュンイチの変わらぬ優しさに怪しんでいた前原も少し疑う気持ちも変わる所も無いができる限りの要望をかなえてあげようと努力した。

「わかった、暖房を後部席に集中して回しておくから…しつかり、その子を守ってあげな

やう」

「はいッー！」

前原はシュンイチにポンツと激励ついでに背中を叩いて後部席に入らせたらドアを閉めて、前原も運転席の方に座ってキーを挿入して回すとエンジンが掛かり、車内の無線受話器を手にとって口元まで持ってきた。

「県警07から本部へ、県警07から本部へ、現場病院より参考人移送のため秩父PSに向かいます、どうぞ」

無線機に向かって警察でしか聞かない独自の用語を交えた慣れた無線応答に前原は本部からの指示を仰いだ。

すると本部から応答が帰ってきた。

『本部より県警07へ、現在秩父PSより一般通報からの入電で市内に出現した『未確認不明体』の応援にあたっているため受け入れは困難を極める』

帰ってきた返答は最寄りの警察署が市内に現れた謎の存在との対応に追われているため受け入れられないとの答えだったが前原には無線の意味する『未確認不明体』とは警察無線ではあまり聞かない単語に本部から再度の応答を求めた。

「県警07から本部へ、『未確認不明体』について存じ上げない 秩父PSの入電内容を確認されたし」

『本部から県警07へ、一般入電より『市内にロボットの様な攻撃性の高い存在が出現した』と言う内容のため所轄の秩父署がこれに当たっている状況である』

ますますワケが分からない内容に前原は困惑するが、後部席のシュンイチは運転席側に身を乗り出して顔を近づけた。

「奴だ！奴がまだいたんだ!!」

「奴?…君は何か知っているのか」

突然目の色を変えて強張った表情を見せたシュンイチは何らかの情報を知っているかと判断した前原はシュンイチに尋ねた。

「自分は追われてたんです…突然、目が覚めたらこの子と一緒に山を下っていたら奴らが何体も現れて…俺を狙っているというよりこの子を狙っているようでした」

そのロボットの様な存在はシュンイチが言うに後部座席で横になっている少女を狙っているとのことだが…

「状況が見えないが…わかった、今は君を信じよう…最寄りの警察署は無理そうだが、町外れの署に向かうぞ」

「ハイッ!」

前原はエンジンを蒸かしてアクセルペダルを踏んで前へ発進しようとしたその時だった…

「ドオオンドオツドンッ！」

1トン以上ある救急車両が前原たちの乗る警察車両の目の前を転がり横切ってきた。あと数センチ前へ進んでいたら横から飛び転がってきた救急車両に衝突していたが、前原も何が起きたのかワケが分からなかった。

「なんだッ!?!何が起きている!?!」

「前原さん!あれですッ!!」

シュンイチが指さす先には無線の報告に上がっていた一般通報からの入電にあつた『ロボットの様な存在』と言葉通りのロボットが目の前に居たのである。

奇怪な電子音に器用そうなマニピュレーターいわゆる手先と前傾姿勢、その体長は優に2メートル以上を有していた。

「なんだあれは!?!」

「アイツです!アイツが僕らを襲った奴です!」

到底理解しがたい浮世離れた存在を前にシュンイチだけがロボットの様な存在を知っていたが…前原はすかさず懐のホルスターから拳銃を取り出した。

「君はその子と一緒に車内に居なさい!いざとなったら君が運転席に回って急発進して逃げなさい!」

「待つてください前原さん!俺も戦います!」

「コレは警察の仕事だ！一般人の君が口をはきむな!!」

前原はシュンイチの服の襟を掴みかかって怒号をあげた。前原は襟を手放して車両から出るとロボットに向かって発砲し続けた。

外では前原を始め、院内から出て来た警察官たちが携帯するリボルバー拳銃を全弾使用して発砲するも警察官数人の発砲する弾丸もそれより口径の大きいオートマチック拳銃を使用する前原の発砲でもロボットはズンズンツと重い足取りを止めることは無く次第に前原の前まで近づいていた。

「くっ…なんなんだ…お前は一体…」

理解できない存在を前に弾切れとなったスライドカバーがズレた拳銃を下して最早抵抗の意味を無くして半ば諦めかけていた。

そして、前原に巨大な手を棍棒のように振りかぶってロボットは前原に攻撃を銜えようとした…その時だった。

「うおおおおおおおッ!!」

突然、前原の背後からロボットに向かって飛び掛かりジェット噴射の勢いを利用してロボットを後方まで押し出して突っ込んでいった銀色の新たなロボットの様な存在が前原を襲おうとしたロボットを吹き飛ばした。

「なっ、なんだ!?今度は…」

その姿はロボット然とした最初のロボットと比べるとフォルムは角張った形状、鋭利な指先、尻尾の先まで角張った背ビレのような物が付いた：まさに怪獣そのもののような姿かたちの銀色のロボット怪獣だった。

一方は異形の機械のような戦闘マシン、もう一方は戦うためだけに作られたようなロボット怪獣、どちらも機械仕掛けのロボットであることに変わりないが：

「はっ、それよりも…あの二人ッ！」

前原が振り返った自分の警察車両内で保護している二人の安否を気に留めたが：後部席の扉がブランケットに包まれた少女のみを残して例の青年が姿を消していた。

「まさか…あれは、彼なのか!？」

総合的に考えた前原が導き出した結論は怪物染みたロボット兵器に相対する怪獣型のロボットのような存在こそ姿を消した青年の正体であることを突き止めた。

あの青年は今まさに異形の存在と真っ向から戦うロボット怪獣だということに疑いよりの余地がなかった。

「があああああああアッ!!」

ロボットのような怪獣はロボットの尖兵を翻弄するかのような超高機動な動きで立て続けに反撃の隙も与えない手数が多い攻撃を何度も繰り返し、鋭利な指先でロボットの四肢に繋がる関節部位を貫き手が直撃して脆い箇所から宛ら腕や脚などを引き抜く

ようにして行動を奪った所を更に心臓部へと直接指先で貫いて動力部を破壊しロボットの機能を停止させた。

やがて沈黙したロボットは見る形も無い砂粒ほどの塵と化して消滅して跡形もロボットなど最初からいなかったかのような状態になり、ただ唯一青年が突如変身したロボット怪獣のみがその場にだけ立ち止まっていた。

「ヴオオオオオオオアアアアアアアアアアッ!!」

ロボット怪獣は消えたロボット兵器に対して勝利の咆哮をあげるかのように吠え叫んだが：ソレがかえって他の警官たちを刺激して勝ち残ったロボット怪獣が自分たちを含め市民の安全も脅かす危険な存在になる危険がある事から即座に全員がロボット怪獣に向けて拳銃を向けた。

「構えろ!!撃テエエエエ!!」

警官たちは躊躇なくロボット怪獣に向けて発砲をするが無意味なことだ、鋼鉄に鉛の点粒をぶつけたところで弾きとぶだけだったが彼らの警察官としての面子を保つために常日頃の異常事態に対応する訓練が無意識に発揮させられてしまうほどに脅威を排除しようとする躍起になっていた。

「ヤメロッ!!撃つな!!止めるんだ!!」

指揮の居ない無作為な発砲に対して前原が静止を促すも警官たちは我が身と職務を

全うに防衛することが精一杯だった。

しかし、無作為に拳銃を数発程度撃つても必ず終わりがやって来る…弾を撃ち尽くして撃てなくなったりボルバ―拳銃、方や無傷の2m越えのロボットの怪獣、明らかに劣勢に立たされたのは自分たちの方であることを理解するのにそう時間は掛からなかった。

全員が発砲終えた銃火器を下した時だった…目の前のロボット怪獣に突如飛んできた何らかの物体が着弾して爆炎が立ち上がった。

「今度はなんだッ!?!」

飛んできた方角を見ると上空を旋回する深緑色の輸送ヘリがホバリングしてヘリの中からロープを垂らして滑り降りてくる重武装の装甲服を纏った自衛官だった。

「陸上自衛隊です。 病院内で特異不明生物出現の連絡を受けてきました!」

重武装の自衛官と同時に武装した自衛官たちが続々と降りて来てロボット怪獣に向けて銃火器を向け構えた。

「目標、特異不明生物!撃ちかた始め!!」

重武装の装甲服を纏った自衛官の合図とともにロボット怪獣に向けてアサルトライフルの射撃が堂々と開始された。

「よせッ!!(っ)は病院だぞ、何を考えているんだ!!」

「ちよっ！危ないですから離れてください、危険です！」

前原は無作為に銃撃をする自衛官たちに静止を促すも聞く耳を持たずにロボット怪獣に向けて攻撃を繰り返すが：ロボット怪獣は先程の炸裂する弾丸からの攻撃も今現状撃ち続けているアサルトライフルでの集中砲火もコレと言った決定打になつていなかった。寧ろ、ロボット怪獣は動こうとしていない、なぜなら彼の背後には先ほどまで自分に拳銃で撃ってきた警察官たちがいるため彼が避ければ警察官たちに当たつてしまふため自ら遮蔽物となつて一切動こうとしなかつた。

「やめろと言っているだろうが!!あんた達の射線中にはウチの警官がいるんだぞ!!」

同じく県警の警察官たちを守るがために前原は装甲服を纏つた自衛官に向かつて全身全霊を持つて妨害するが…

「離れてください！自分は上からの指示で対応しているだけです！」

「だったら今すぐ上に掛け合え！射線上にいる同じ公務員をハチの巣にしているいいどおりがどこにあるツ!!」

前原は身勝手なまでに任務だけを優先する装甲服を纏つた自衛官に対して断固抗議して集中砲火をやめさせることに必死だった。

そんな彼の装甲服内より文字通り「上」を旋回するヘリ機内から通信が入った。

『神子二尉！射撃を中止してください！彼の言う通りです、発砲の許可は出していませ

んよ!!」

「しかし湯原主任！緊急時の射撃命令は自分に一任されています！」

『いいから、発砲をやめなさい！これは命令です、でなければスパーXの出力機能を緊急停止させます』

「貴方にそのような権限は無いはずです！」

『今、この場の指揮権限は私にあります！これ以上は命令違反とみなします』

装甲服を纏った神子に対して一切指揮権を譲らぬ開発主任の湯原は半ば正義の暴走状態にあつた神子の部隊に対して強気の姿勢を一貫して緩めなかった。

「…自分はあなたより『上』の命令に従うことを正義とします…コレは国民の安全を守るためです」

『神子二尉！』

「ヤメロオオ!!」

前原は神子の行動に異変を察知してすぐにまた妨害しようとするも装甲服の手甲で肋骨を叩きつけられ吹き飛んだ。

「邪魔しないでください！ SX—W02 『サジタリウス』使用解禁します！」

それは拳銃型の武器に搭載された最初に発砲したグレネードランチャーとは破格の武器、背中に背おつたロケットランチャーを手に取ってロボット怪獣に照準を定めた。

『やめてくださいい神子二尉！あなたは自分が何をしているのか分かってるんですか！直ちに“機龍”への攻撃をやめてください！！』

「はっ？機龍…」

唐突に自分の知らない情報が耳を通して飛び込んできた神子に一瞬のスキが生じた…その時、頭部ヘルメット内の攻撃アラートが鳴り響いた。

「後ろッ!?ガハアアッ!!」

不意打ち気味の攻撃を受け装甲服を着た重量もそれなりにある神子が突然吹き飛んだ。

受けたのは後方より一閃の尾を引く高出量のビーム攻撃だった。

隊員たちは攻撃が跳んできた方向に銃を構え直すと…そこには見慣れない女の子…否、怪獣娘、白髪の子黒い装甲を纏った怪獣娘が胸部下の発射口から煙を出しながら立って居た。

「(…もおっ…」

その形状はGIRLSの怪獣娘としてごく一部のマニアには名の通った怪獣娘『ゴモラ』に酷似している特徴的な3本角の白髪の子怪獣娘だった…が、この場の誰にも彼女の正体分からず、突然攻撃してきた得体の知れない怪獣娘に対して隊員たちの銃火器のトリガーに指が触れ始めた。

得体の知れない存在を前に隊員たちは脅威認定の速さが仇となり彼女を認識するなり躊躇なく彼女に向かってトリガーを押し込んで発砲した瞬間に銃火器の射出口から弾丸が何十発も連射で飛び出してきた……しかし、それよりも早く動き出していたのはロボットの怪獣『機龍』だった。

機龍は白髪の怪獣娘に覆いかぶさる形で自分を盾にして彼女を庇った。

『発砲中止!!発砲をやめてください!!』

へりの無線通信から全隊員に向けてスーパーX開発主任の湯原が指揮権を行使して発砲をやめるように促すと正義の暴走ぎみな神子とは違って聞き分けよく隊員たちは発砲を撃ちやめた。

銃撃を雨が止んだことを見透かした機龍は白髪の怪獣娘を抱きかかえながら背部のジェットノズルから燃焼ブースターを点火させ即座に上空を旋回するへりよりも高い位置へ飛び立って一気に水平加速してどこかへと飛び去っていった。

その様子を見ていた湯原は彼の名前を知っているように彼の事を誰よりも気づいて気にかけた。

「やっぱり……あれは『機龍計画』の……『機龍』……行方不明になっていたわけじゃなかった……と言うことは、変身者は……『アカネ』さん……」

湯原は現場から逃走した機龍の飛行煙を見上げながら彼のことを女性名の『アカネ』

と呼ぶほどに彼の秘密を知っていた。

— 秩父盆地・河岸段丘 —

高推進力を行使してなんとか逃走した機龍だったが…ジェットノズルはバスタブスツと不規則な音を立てながら減速して高度も下がり山中の下流の河川に水飛沫をあげて墜落した。

墜落しても機龍と白髪 of 怪獣娘は無傷であり、機龍は河川の流れに逆らって川岸に進み抱える怪獣娘を川岸の砂利の上に横たわらせた。

(はあっ…はあっ…一体、どうなっているんだ…僕の身体はどうなっている……なんなんだ、この手は…)

機龍は自らの手を眺めて見ても鉄銀のように硬質で指先は鋭く、手先の感覚で全身を限なく触れ回っても同じ硬さの身体、そして首から頭部、自らの状態を確認しようとする川を流れる水面の中の自分の虚像を通して確認すると…その姿は鋼鉄の肌に黄色く光る鋭い目、額から後頭部にかけて伸びているブレードアンテナ、まさに怪獣、機械仕掛けのメカの怪獣が今の機龍の姿であった。

「どうなっているんだ、僕の姿は…なんなんだ、この感覚は…感触があるのに、水の冷たさを感じない…あれだけ暴れ回ったのに疲れも、乾きも、空腹すらもない…：僕の身体はどうなってしまったんだ」

思っていたことが言葉を通して出てしまうほどに自分の身に起きたことに対して激しい動揺が起きていた。

「恐ろしい」、唯一つの感情が機龍を支配していた。自分と同じく正体不明のロボットの怪物を暴れるがままに蹴り、砕き、壊し、最後は貫いた感触までハッキリと残る…同じ機械仕掛けのものを手にかけて事への共感覚なのか、あるいはその姿が明日の我が身なのか、これから先をどう生きて行けばいいのかも分からない中で機龍は頭を抱えて砂利の上に転がり横たわる。

押し寄せる言い知れない感覚に投げやりにも横向きになってみれば…ふと、自分が銃弾から庇って抱えて逃げて来た時に連れてきてしまった同じロボット怪獣の怪獣娘が目に入った。

「…君も…同じなのか…：僕と同じ…：苦しめない身体なのか？」

機龍の問いかけに閉じていた目を開いた怪獣娘は起き上がって機龍の傍まで赤子か這いつくばって近寄るように機龍の元へとやってきた。

「…モお…」

「…君、名前は？……僕は…桐生…シュンイチと言う名前らしい……コレが本当の名前なのかは分からないけど…」

「…メカゴモはメカゴモラ、ゴモ…」

「メカ…ゴモラ？……何かの怪獣の模倣品のような名前だね……僕も、きつと何かの模倣品なんだろう…だから、君を助けたいって思えたのかもしれない」

機龍は思いかえしてもなぜこの少女を助けたのか自分でも分からなかった。

単に同じ姿勢を持つ者同士の共感か、同情か、少なくとも仲間意識での行為とは違うような何か彼女と機龍を無意識に引き合わせたのは確かなようだった。

「ゴモオ…メカゴモ、キリユウ、助ける…」

白髪の怪獣娘メカゴモラは機龍の手を引いて起き上がらせようとするが…体重差のありすぎる故か起こし上げられないようだった。

「君には無理だ…君に僕は重すぎる……そんなことしなくても僕は一人で起きれるよ」

横になって起きているばかりもいられない機龍はメカゴモラに手を引かれながらも自力で重たい自重を起き上がりさせて立ち上がった。

「ゴモツ…キリユウ、メカゴモと同じ…」

「…ああつ、そうだね…同じ、模倣の機械同士だ……これから先、どうするか…」

機龍はメカゴモラの両脇に手を回して持ち上げると彼女を抱きかかえたまま辺りを

見渡した。

「ゴモオ…メカゴモ、スリープ…モ…ドオオツ…Zzz」

抱えたメカゴモラは機龍の腕の中でゆっくりと休眠状態に入ってしまった。

機龍もいつまでもこの場に留まるわけにもいかず、メカゴモラを抱えたまま機械怪獣2体、共に森の中へと消えていった。

青い抑止力

特定有害生物『シャドウ』、それは怪獣娘の出現と共に突如として現れた人類に害を為す存在、現在これに対抗できるのは怪獣娘だけと世間で認知されているが…

「ゴモラ、気をつけろ、今日に限って数が多いぞ！」

「わーてるでえレッドちゃん！」

今日も都内に突如出現したシャドウに対応するため先に現場に到着していたレッドキングとゴモラが様々な形状に変化したシャドウと戦っていた。中にはスライムの様なゼリー状の軟体質な個体も居れば、頭部にクワガタの様な顎にあたる形状を突き出した個体を次々に怪獣娘の力を全力で戦い抜いてもまた新たにシャドウがレッドキングたちの前に現れてくる。

「クソツ…こいつ等、今日に限ってしつこいぞ!？」

「レッドちゃん!アレ、なんかおかしいでえツ!？」

シャドウたちの行動は次第にレッドキングたちと相対すると言った敵対行動とは別に1つに纏まり初めて更なる別の形態『ビースト』あるいは『ジェネラル』と言った集合体に変化する前兆が現れた。

「おいおい、これって…」

「ヤツバア…メチャクチャヤバイやん!」

やがて先ほどまで2人の怪獣娘たちと戦い合っていたシャドウは1つの集合体に変化しきったが…その姿はこれまでに相対してきた大型のビーストとは違う、人型のジェネラルとも違う新たな姿に変身を遂げてレッドキングとゴモラの前に姿を現した。

そして、そのシャドウには口に相当する部分からニヤリツと不敵な笑みを引き攀り上げるように笑っていた。



—数時間前—

GIRLSの怪獣娘に襲い掛かる正体不明の脅威に対して『シャドウ』を始め『怪獣娘たちの前に現れる怪物』に対しても大掛かりな対策会議が開かれていた。

「それでは改めて…最近、GIRLSの怪獣娘さんたちの前に突如現れる『正体不明の怪物』への対策会議を始めさせていただきます」

トモミの司会進行と共にGIRLS内の集まれる怪獣娘だけが大学講堂並みの広さを誇る大会議室と呼ばれる教室に会議が始まった。

「ではエレエレ、お願いします」

「ええつ、アギラの報告とウインダム^①の証言、私たちが直接目撃した怪物：呼称はまだ決まっていないけど、この生物たちにはシャドウとは違い『言語』に相当する何らかの意思表示を同族同士で確認しあっている様子が確認できたわ」

大会議室のホワイトボード型のスクリーンヴィジョンには相沢トオルが参考資料として描いた『怪物』の絵が3個体を映し出された。

「トカゲみたいなのと…緑色のやつと…鬼か、これ？」

その見た目を直接的に表現したベニオは絵を見たままの姿を答えるがランは首を横に振って違うと返した。

「これらは所謂順番に言えば『リザードマン』『ゴブリン』『オーガ』と呼称される『空想上』の生物だった存在よ」

「なんか聞いたことあるねえ…エレちゃん^②はゲームに出てくるとか言ってたよね」

ミカヅキが先日^③のランの発言を思いだして『ゲームに出てくる奴』と言う認識が強かった。

「こういう存在の出自については様々だけど、大元の原典を辿ると伝承や神話などにも描かれていることから多くの作品などにも描かれて形を変えて伝わってきた怪物たち…ソレがどういうワケか私たちの前にソレが出現した」

「GIRLS上層部はまだ回答を控えています。正体不明の怪物は私たちを狙って襲ってきますが、それと同時に私たちをまるで助けるようにその怪物たちに立ち向かう謎の存在にも調べておきたいところです」

トモミは怪物の作画資料をドロップして縮小させると開いたスペースに新たな資料画像が添付された。

それはユウゴが変身した『ゴジラ』を始め、未だ彼女たちは彼らが怪獣の力を宿した男性『怪獣戦士（タイタヌス）』であることを知らないが知らないなりに彼らを知ろうとすることから始まっていた。

「彼らはあの怪物たちと明確に敵対及び対抗し、私たち怪獣娘を助けようとする」

「更にこの怪物たちとは違い明確に私たちも理解できる『日本語』を話せる…つまり怪物とは違って意思疎通ができる存在と見たところ怪獣娘に酷似した点が挙げられます」

「怪獣娘は主にシヤドウと相対して戦える力がある…けど怪獣生物はわたしたちが知り得ない正体不明の怪物と秘密裏に敵対して内々で処理する、立場は違いど行動原理は同じとするあたりを見れば彼らもまた世界を救うために現れた新たな怪獣の姿といったところね」

「今後もしまた皆さんの前に正体不明の怪物が現れ、彼らから私たちを守ろうとする謎の怪獣さんたちが現れましたらなるべくコンタクトを取ることによみましょう。もしか

したら私たちと協力し合える存在かもしれません」

怪獣娘たちをどこかへ連れ去ろうとする謎の怪物に対して怪獣型の生物たちがその怪物から怪獣娘たちを守ろうとする行動を取ることからGIRLSの怪獣娘たちの見解は彼らを友好種、怪物を敵対種と認識することが決まりつつあった。

こうして会議の内容は一纏まりを見えたところで各部所の怪獣娘たちが各自解散してゾロゾロと会議室を後にする中、指導課の代表であるアキの元に1人の怪獣娘が近寄ってきた。

「ア〜ギツ、調子はどう？」

「ガッツ…特に問題は無いけど…」

その怪獣娘は異星人型と言う珍しいタイプのカイジューソウルを宿す『ガッツ星人』の印南ミコだった。

「それでさあ〜：風の噂と言うかあ〜、目映りしちやたと言うかあ〜：お近くにいらっしやる清潔イケメン様の事、紹介してッ！」

ミコが先程から気にしている相手は今だけ大会議室の外の廊下で待機しているダグナの事について尋ねて来た。

「ああ…ダグナさんのこと…：ボクの後見人だよ」

「ねえねえッ！聞けば更にアギって俳優顔のお兄さんまで居るんでしょ!?何ッその少女

漫画みたいな急展開ッ、コレはもう事件よ、事件！」

「事件つて…大げさな」

ミコのその目は興味津々な輝かしい目つきにアキは戸惑った。

「お願あ〜い！紹介してよお〜！」

「紹介も何も、自分から挨拶すればいいでしょ…」

「…最近アキを仲介してユウゴやダグナと御近づきに成ろうとアキは連絡窓口扱いされていた。」

「だって緊張するもん！アキばかりズルいよ、あんなイケメン連れてきちゃつてえ〜にくいねえ〜コノコノオ！」

「だからそんなんじゃないよお…あくまでボクの付き添いみたいな人だよ」

「普通でも付き添いなんてつけないわよ、一体どういう関係なのよ」

「おじいちゃんの部下と言うか仕事仲間と言う事しか聞いていないけど…まだボクもダグナさんの事をよくは知らないよ」

「ふうくん…本当にそれだけなのお〜？…なんかガツカリと言うか、つまんないというか…でもせめてお兄さんの事だけでも教えてよ！なんでも料理が得意な人なんですよ、ゴモから聞いてるわよ」

口の軽いミカツキつてで聞いたミコはユウゴについても深く聞き出そうとして来た。

「もおくゴモたん口が軽いんだからあ…」

肩を落として愕然とするアキだが、今日この場にミカツキは先に大怪獣ファイトのイベントで出払ったため文句の言いようがなかった。

「ガッツウゝあんまりアギアギをいじめちゃダメなのですうよお〜」

そこへ背後からミコの静止を促すトモミが会話に割り込んできた。

「ピグっち、違うわよ！アギの側にいる人の事を教えてほしいだけよ！」

自分に意地悪な印象を抱かれまいとミコは必死になつてトモミに弁明をはかった。

「ならいいですけど、アギアギも生活一変して慣れない状況に戸惑っているんですからね」

「心配してくれてありがとうございます。ガッツもただ下心があるだけなんで別に問題ないです」

「ちよ、アギイ！その言い方だとあたしががつついてるみたいじゃん!」

「ガッツが、がつついてる…：…ダジャレ？」

「こくら！茶化し返さないでよお〜！」

祖父が亡くなつてから数日の内に変わらないアキの様子にトモミはニコニコと笑顔になつた。

一方その頃、大会議室の出入り口付近でアキの会議終了を待ち続けるダグナは時間潰しの間にどこかへと電話を掛けていた。

「はい…はい…では、アキさんを襲った連中はCIAと言うわけですね…わかりました。引き続き警備を強化いたします…はい、では…芹沢代表、後の事はお任せください」

そういつてどこかの相手との通話を終了してスマートフォン画面は通話中から通話終了に切り替わって電源ボタンを押して画面を暗転させスマートフォンをスリープモードに切り替えた。

「お待たせしました…今、会議終わりました」

「ご苦労様です、もうすぐお昼ですが…お食事はGIRLSの食堂で御済まされるのですか？」

「うくん…今日はちよつと外食してもいいですか？」

「ええ、構いませんが…」

アキ自らの提案で近場のレストランで食事することを決めて一旦GIRLSの支部外へと出た。

場所はいつものファミリーストランではなく、顔見知りが入らないような格式が少しだけ高い喫茶店にダグナと向かい合った席で早速アキはテーブルに額を打ち臥せた。

「ヴウウウウウツ——…」

「どうされました、何かお悩みの御様子ですが」

「ありますよッ…お兄ちゃんのことやお兄ちゃん以外の怪獣さんたちの事とか…秘密にしていることが辛いです…会議に出席する時にボクだけ知っていることを隠し通しているのがみんなに嘘ついていて辛いのに来るたび来るたびみんなからお兄ちゃんの事やダグナさんの事を半ば尋問されているように聞かれ続けるから誤魔化すのも辛いです」

今日まで変わりすぎた常識の中にあるアキだが、ユウゴが怪獣の力を宿していることをGIRLSの怪獣娘たちに隠し続けていることに悩み切っていた。

「なにより、ダグナさんがちよくちよくこうしてGIRLSに顔を出すおかげでボク専属の執事説が浮上してボクがお金持ちの子って事にもなっているんですけど…」

「御辛い中、彼らの事を内密にしていたきありがとうございます」

アキの辛い気持ちを汲み取ってかダグナは丁寧に頭を下げてアキに礼を伝えた。

「むう…：ダグナさん、なんでお兄ちゃんの秘密を言っちゃダメなんでしたっけ？」

アキは段々と自分が兄の事をひた隠す理由さえも見失いかけてる中でユウゴが怪獣であり、男性の中でも怪獣の能力を有する存在の事を秘匿するワケをダグナに再度尋ねた。

「ユウゴくん以外…例えばガメラの相沢トオルくんなどは世間一般で既に認知された著名な方です。早い話、彼らにも隠し続けた中で得た“生活”があるからですよ…今は日本国内にいらつしやるMONARCHが認知する怪獣戦士（タイタヌス）自体は全体の僅かですが、彼らにもやはり変え難い生活があるが故に事を荒立てたくないという理由があるのです」

「はあ…まあ、確かにお兄ちゃんだつてまさかボクの為に用意された家の下にお店を持つていたりするから…変わらない生活をしながら怪獣であることを隠すかあ…ボクら怪獣娘たちとは違う生き方をしますよね」

怪獣娘は自身の能力が発覚した時にいくつかの条件によって引き起こされる“本能的現象”に振り回されることが多い。例えば『突然叫びたくなる』『軽い外傷ならすぐに治る』『力が増し、加減できずに物を壊してしまう』など異変と言つて差し支えない怪獣の本能が年頃の少女たちに分けても思春期の少女たち故にその力が時に暴走して事例も報告に上がってきた結果GIRLSと言う組織が発足するキッカケとなった。

しかし、ユウゴを始め他にもユウゴと同様に怪獣の能力を宿した男性たちが未だに世間から取りざたされていけない所を考えれば相当な自制心が働いていると考えればユウゴの事を少し違う視点で尊敬できる点だった。

「男性の怪獣能力者…怪獣戦士（タイタヌス）…彼らはボクたちと同じく怪獣の魂を宿

して生まれて来たんでしようか？」

「うーん：正解なのかもしれないですし、不正解かもしれませんが、国際的に怪獣娘は『怪獣の魂を宿した少女』と定義されていますが日本国の見解で魂と言う定義はあくまで無知覚概念とされているためこの国での怪獣娘の扱いは『怪獣の“能力”を宿した少女』とする：同じなように全く違う意味合い、怪獣戦士（タイタヌス）は特に後者の面が強いのかも知れません：私自身、ユウゴ君からそういった魂の様な概念を感じたという御話はあまり聞きませぬね」

「捉え方次第で感じですね：確かに突然、『あなたには怪獣の“魂”が宿っている』って言われてもボクも最初は戸惑いましたし：」

「何より怪獣娘が世間に最も速く受け入れられたのにはあなた方がまだ『人間』としての部分が他者の目線からすれば極端に見れば『擬人化』された容姿に親近感が湧くことも一種の要因でしょう：しかし、残念ながら怪獣戦士（タイタヌス）にはあなた達のように人間の部分は極端に少ない 世間が彼らを目撃すれば敵対か共存かの二極でしょう」

ダグナの言う通り、怪獣娘にはまだ人間としての姿形に面影はあれど、怪獣戦士（タイタヌス）にはそういった部分があまりない。そんな事実が知れ渡れば世論が傾くのも想像がつく：もつと言えば特番のオカルト番組の特集で『歩くトカゲ』としてならイメージが湧けた。

「アキさん……いま、ユウゴ君に対して変なイメージが浮かびましたね」

「ギョッ!……べつ、別に……」

凶星を付かれたアキは慌てて乱れた表情を整えようと頬を捏ね回して表情筋を引き延ばした。

「お待たせしました、アイスコーヒーとオレンジジュースです」

そうこうしていると店員が注文していた飲み物を席に届けに来た。

「う〜んツ……今後一層に気が落ち着かない日々が続きそうですね……」

「アキさんにはご無理をお掛けします……私も精一杯の協力は惜しみませんので何なりと御申しつけください」

そういつて運ばれてきた飲み物を口にしながら2人は一時の会話の休憩に入った。

「……………んっ!？」

そんな時、アキの背筋から悪寒が走る妙な感覚が本能的に察知した。

「どうかされました?」

「いえ……何か嫌な気配が……これってまさか……近くにシャドウが!」

怪獣娘のアキだから感じ取れる強い気配が僅かながらも皮膚の上の産毛が逆立つ所謂『鳥肌』が立ち上がるほどの強い気配をアキの中のカイジューソウル『アギラ』が感じ取った。

「私に構わず、お先に向かってください」

「ごめんなさいダグナさん…御言葉に甘えてッ！」

アキは急いで店を後にすると外で強い光と共に怪獣娘アキラへと変身を遂げて駆け足でシャドウを感じ取った場所へと向かっていった。

—スウウツ…ゴクツ…

一方のダグナは見送ったアキの後に一早くコーヒーを飲み切った。

「…御馳走様です」

「ありがとうございます」

店員に支払いを済ませたダグナはジャケットを羽織り直して目の色を変えた。

「さて私も、私自身の使命を全うしましょうか…」

そういつてダグナはアキとは違う方向に足を運んだ。

・
・
・
GIRLS屈指の人気コンテンツ『大怪獣ファイト』に出場する大怪獣ファイターの怪獣娘たちとの交流イベントが行われていたが…会場には黒煙が立ち込めるほどに設営などが見るも無残に破壊されていた。

自らの姿を模倣されている事に不快感を示したゴモラは再び激しい攻撃を銜えるも決定打には至らなかった。

次から次へと怪獣娘屈指の戦闘力を有するゴモラの攻撃も合わせてレッドキングの攻撃すらも、2人の怪獣娘による息の合ったコンビネーション攻撃もまともに喰らいながらも猛々しい咆哮と共にレッドキングとゴモラを弾き退かせた。

「ちいつ！なんて固さだ…」

「全然ウチらの攻撃が効いてへん!?強さならシャドウビースト以上やでエツ!!」

「うおおおおおおおおお!!」

今度はアギラが猪突猛進な速足での突進攻撃を加えて突っ込むも怪獣娘型シャドウはアギラの角を掴み取って投げ返し、手を放してあらぬ方向へと投げ飛ばした。

「うわああああああ!!」

強い衝撃と共に未だ地面にもつかぬままだこかの方向へとドンドンと怪獣娘型シャドウと距離が離れて行った。

しかし、そこに…

「ぐえっ!!」

「おいおい、自分から向かって行ってにおいて投げられてどうする?」

「ふえっ…おっ、お兄ちゃん!」

そこにアギラたちの窮地に変身を済ませたゴジラが駆けつけてくれた。

「おっ！アギラ、大丈夫かあ!?!…って、ウワツまた新手のシャドウか!?!」

レッドキングとゴモラがアギラを心配して駆けつけてきたがゴジラの黒い体表を見るなり新たなシャドウと勘違いしてファイティングポーズを取った。

「だっ、大丈夫ですレッドキングさん…それよりあつちのシャドウがこつちに来ますよ
!」

アギラが指を差した方向から重い足取りをズンズンと迫ってきた怪獣娘型のシャドウがレッドキングたちに向かってきたが…突然、何かに困惑して足が引き下がった。

「おっ、おいどうしたんだアイツ?」

「なんか急に怯えたように見えたけど…」

怪獣娘型シャドウが見つめる視線の先には飛んできたアギラを脇抱えるゴジラと視線が合っている。

体格は御互い同じくらいにも関わらず恐れ引いた怪獣娘型シャドウの方がまるで小動物が大型肉食動物を前にして無意味な威嚇をかましている様だったが…一方のゴジラは何ら動じることも無い、寧ろ強い目線だけで怪獣娘型シャドウに退かせる驚異的な覇気が近くにいた怪獣娘たちにもジワジワと首筋が熱くなるような感覚さえも抱かせた。

「なっ、なんなんだこいつら…仲間割れ？」

「でも、どう見ても仲間言う感じには見えへんけど…」

困惑するレッドキングとゴモラが見守る中で怪獣娘型シャドウが動けないことに痺れを切らして先に動き出した。

しかし…

「下がれ」

たったその一言を発したゴジラの声に従ったかのように突如怪獣娘型シャドウが地面を逆方向に蹴り上げて地面は下がった拍子に抉れた跡のみが残った。

それまで猛々しくも狂暴な破壊力で会場を蹂躪していた大型のシャドウは大きさが見える形もなく丸くなつて縮こまり怯えた。

「何がどうなつてんだ？」

「一体、どういうこと？」

（お兄ちゃん…）

たった一声発しただけでシャドウを退かせる得体の知れないその怪獣の驚異的な威圧感を表すなら野生の縄張りに無作為にも侵入しようとしたシャドウが自分より更に凶悪にして強大な力の前に逃げ出したとしか表現が難しかった。

「せんぱあ〜い！ゴモたあ〜ん！避難完了しましたっす…ってウワツなんすかソイツ

!？」

避難誘導に回って遅れてやってきたミクラスも駆けつけてきたが…怯えるシャドウに頭の高さが誰よりも一番高いゴジラの前に驚愕した。

「んっ?…つてえアギちゃんか捕まってるうう!？」

脇に抱えられたアギラを見るなりミクラスは取り乱すがどうしていいか分からず慌てた。

「おっ、おい！誰だか知んねえがアギラを助けてくれたのは礼を言うが…あんた一体何者だ？この間の連中の仲間か何かなのか?…ウツ!？」

率先して怪獣娘の代表としてレッドキングはゴジラに声を掛けるが見下ろされたその目はどんな怪獣娘よりも鋭く険しい目つきにレッドキングの背筋も一瞬で固まる様な強い強張りが起きていた。

見下ろされたその目に映るレッドキング…獲物を見る目ではない、だがその目にレッドキングの記憶の中で見たことがあった。それは嘗て子供の頃に何度も見て来たフィクシヨンの中の大迫力な“恐竜”、博物館の中で骨格から肉付けされた肉食恐竜の全身像、まさに“ティラノサウルス”そのものだった。それが目の前に凝縮して1つの個体となつてレッドキングの目の前にいるかのようにであった。それと同時にあの怪獣娘型のシャドウが怯える理由も身をもつて知った。レッドキングの額にはゼットンにさえ

恐れてこなかった感覚と共にビツシヨリと汗が湧き出ていた。

「れっ…レッドキングさん、落ち着いてください…本当にボクも大丈夫ですから」

「おっ、おう…アレどうするかあ」

ゴジラの覇気にもはや戦意喪失したシャドウをどう処理するべきなのか頭を抱えたが、そんな時、シャドウ出現の一報に警察車両のサイレンが辺り一帯に鳴り響き始めた。「ありやりや？こんな早く警察が来ちゃったでえレッドちゃん!」

サイレンと共に遠くから見える警察車両が会場外を取り囲むようにして赤橙ランプの光がチラつく包囲網が出来上がっていた。しかも、そこには見慣れない警察車両にゴジラの目の色が変わった。

(輸送用の装甲車両だと?…なんで警察がそんな大層な装備を出してきた…何かがおかしい)

自衛隊など軍用にしか普及されていない装甲車両の後部よりハッチが開かれて中から重々しい重金属が足音を為して歩いてきた。

「なんだありやあ!?!」

レッドキングたちは目にした存在にまたしても驚かされた。警察車両と思しき14トトラックほどの装甲車両より重々しい青い装甲を着込んだ誰かが重武装を携えて現れた。

「アルトリウスX1からユニットへ、シャドウ生物と思われる脅威を確認 A T R — X
03 『セクエンス』のAとBの使用許可を願います」

『アルトリウスX1、『セクエンス』の使用を許可します』

青い装甲服の何者かはどこかより受信された通信に武器使用の許可を得るとズンズンとシャドウに向かって歩いて行った。

新たに現れた別の驚異の前に一度は大人しくなったシャドウが再び興奮し始め威嚇し始めるも…威嚇で止まる様な存在でないとすぐに察知したシャドウは装甲服の何者かに向かつて襲い掛かったが、装甲服の何者かの腰に装備された拳銃2丁をホルスターのロックを外して躊躇なくシャドウに向けて発砲連射した。

—ガアギャアアアアアアアアアアアアアアアツ!!

撃たれ続けるシャドウは姿形が怪獣娘に酷似しているせいかな…アギラたちにもその姿がまるで自分たちにまで向けられているような気分の良いものではなかった。

2丁の拳銃を打ち尽くした青い装甲服の何者かの攻撃が終わると…ハチの巣になったシャドウは沈黙して膝をついた途端に地面にうつ伏せになって倒れた。

そして、シャドウを形成する肉体がドンドンと溶け出して消滅しかけていたが…即座に装甲服の何者かは何らかのカプセルを取り出して何かサンプルの様な回収していた。

「なんだありやあ…」

呆気にとられていたレッドキングたちだったが：装甲服の何者かが振り返ってゴジラたちを目にした瞬間だった。

背中に装備した大型の銃口火器をパージして右手にトリガーグリップを握り込んでその銃口はゴジラ達の方に向いた。

「ッ!？」

ゴジラはすぐに脇に抱えたアギラをミクラスの方に投げつけた。

「うわあっ!」「ふぎやつ!」

そして、太い棍棒の様な尻尾でレッドキングとゴモラにぶつけてその場から弾いた。

「ぐわっ!」「ぐえっ!」

強い衝撃と共に2人は転がり倒れて意識を失った。

そして、4人の怪獣娘を咄嗟の機転で弾き飛ばしたゴジラだけがその場に残った。

すると物騒な銃火器は銃口部分から回転音を発して銃口から弾丸が連続で射出してゴジラに牙をむいた。

—ドウルルルルルルルルルルルルルルル—

毎秒何発もの弾丸が跳んできてゴジラの体表に当たるも硬質な体表に穴を開けることはできなかった。

一方、警察車両として出動した装甲車両内では混乱が起きていた。

「アルトリウスX1！ATR-X02の使用は許可してません！直ちに攻撃をやめてください！！」

「ATR-X02の緊急ロック作動しません！」

装甲服のオペレーションを遂行するための用意された車内専用のキーボードで何度もコンピューターに対して武器の制限を試みようとするオペレーターの男女が必死に対応するが…

「いえ、これでいいです…そのまま任務を続行させてあげて下さい」

オペレーターたちの後ろには緒碓が腕を組んで装甲服の者の行動を咎めようとしなかった。

「しかし命令違反ですよ！装備既定の使用許可も経ずに…」

「彼の視界に映ったこの生物…コレは先日国道を時速500キロで移動していた生物ですよ、防犯カメラの解析で特徴は一致しています」

緒碓がキーボードに打ち込んだモニターに映像を画像解析したクリアな画像が出た。

「背ビレの色が違います…特徴は酷似していますね」

「しかし、『ロンランス』の使用規定では周囲確認を経ての使用が必要では？」

「緊急使用です…想定外脅威に対しての使用であれば緊急規定外条項に適応されます」

2人のオペレーターは緒碓の言う通りに従うしかなかった。

そして、すべての残弾を撃ち尽くした装甲服の者は撃てない銃火器と化した武器を捨て近接武器の剣型の切断兵器を金属製の鞘から取り出してキュイインツと言う高周波の音が響いてジワジワとゴジラに近づいた。

「……………」

しかし、ゴジラは逃げることもせずに向から受けて立とうという意思を露わにするかのように装甲服の者を鋭い目で睨みつけていた。

「うっ…うっ…はっ、ミクちゃん？ゴモたん!?レッドキングさん!!」

目を覚ましたアギラが先に他の怪獣娘たちを揺さぶって起こそうとするも強い衝撃で意識を失っていて簡単には起き上がれなかった。

「あっ、お兄ちゃん…お兄ちゃんはッ!？」

咄嗟に自分たちを庇ったゴジラの方を見るとゴジラと青い装甲服を着た何者かが激しい死闘を繰り広げていた。

鋭利な高周波のブレードを振り回して襲い掛かる青い装甲服の何者に対してそれを見事なまでに紙一重で躲すゴジラ、宛ら人々の脅威となる怪物に相對するヒーローが悪い怪物を倒そうとしている。

青い装甲服の何者かは近接武器で次々とゴジラに迫ってきて徐々に攻撃は激しさを増してきた。

近くの木々は綺麗な切断面と共に2つに分かれるほどの鋭利さを誇る武器で何度も攻撃してくるが一向にゴジラには当たらなかつた。それ以外は近接格闘で応戦するという徹底ぶりだったが：それでもゴジラ相手には決定打にはなっていなかつた。

戦闘技術では互角、武装面では得体の知れない装甲服の者の方に分があるにも関わらず戦力差に段々と開きが現れ始めた。

ゴジラの肉体に紫のプラズマ状のエネルギーが放出し始めドンドンと装甲服の何者かを追いつめるようになってきた。

“加速”だった、加速する驚異の攻撃速度がゴジラを目にも視認できないほどの速度で打撃の応酬が硬質な装甲に次々とヒビ剥がれ始めて来た。

[!:]

だが、ゴジラはそんな生物的に出せるはずのない速度で攻撃をしても逆に装甲服の何者かも段々とその速さに合せて来た。とても人間の動き：否、脊椎生物が反応できる速度ではなかつた。

(コイツ、ミレニアムについてきやがったどツ?)

その速さに加え、常人ならざる攻撃力、さらにはゴジラが目にした瞬間に感じた喉の奥からザワつく異様な気配も感じ取っていた。

『傷のウルトラマン』と同様の気配だった。今、戦っているこの装甲の奥にはあの顔に

傷のあるウルトラマンと思しき存在を感じていた。

ゴジラは即座に装甲部の腹に蹴りを入れて相手との距離を離れた。吹っ飛んだ装甲の何者かは転がりながらも衝撃の勢いと共に態勢を立て直す原理は受け身と同じ手法でダメージを分散させた瞬間にすぐさま立て直して剣を構え直した。

「お兄ちゃんッ！」

「来るなッ！こいつは普通じゃない!!」

ゴジラに加勢しようとアギラが近寄ってきたが：装甲服の何者かは一瞬アギラに視線を反らすとすぐに近くににあった弾倉が空になった先ほど使用していたバルカン砲の様な大口径火器を手にとって武器の組み換えを始めた。

その先端には槍状の射出徹甲弾が装填されてゴジラにその武器を向ける：かに思われたが狙いは変えてアギラにその武器を向けて来た。

そして、トリガーを押し込まれると即座に徹甲弾が射出された。

「あぶねええッ!!」

ゴジラは紫色の閃光を描いてアギラを抱え離れた。

徹甲弾の狙いは反れて怪獣娘たち用に設営された特設ステージに着弾するとステージに大規模な爆炎を巻き起こしてステージから数メートルは粉々になり爆炎であたりが燃え盛る火の海と化していた。

そんな過剰な武器がアギラに牙を向こうとしていた事実にはアギラ自身も絶句した。いくら再生力に優れた怪獣娘であってもあの様な武器を1度でも喰らえば怪我だけでは済まなかつただろうことに背筋が凍りつくようだった。

それでも戦う事をやめない装甲服の何者かはまたズンズンと重たい足を歩み出してきたが…突然、静止した。

『もう結構です…その場から離脱してください』

通信を介して穏やかな声が装甲服の者の耳に静止を促され持っていた銃火器の銃口を上に向けて構え直し…ゴジラ達に強い視線を向けつつもクルツと方向を変えて警察の装甲車両に向かって戻っていった。

戻った装甲服の何者かを收容した装甲車両は急発進にて後方にバックした後に轉身して現場を離脱していった。

激しい戦闘後を見据えたように周囲を取り囲んでいた警察官たちが次々と駆け付けて来てアギラたちが闘っている時から散々遠目から離れていた警察官を始めスーツ姿の捜査官も駆けつけて現場保存と言う名目で手際よく集まり始めていた。

「救急を呼んで応援を要請しろ!」「はい!」

更に待機していた警察車両の中から救急車両も到着して救急隊員がアギラを始めレッドキングたちに救急の処置が施された…だが、そこにゴジラは既にいなかった。

???

そこは警視庁の管轄する特殊な施設に例の装甲車両が収容されていた。

「……おや、君ですか…例の物は？」

「はい」だ

一切の照明が殆ど無い暗がりの部屋の中で男が緒確にあるカプセルを渡した。

それはあの怪獣娘型のシャドウから採取したシャドウのサンプルだった。しかもカプセル内で今も蠢いていた。

「…確かに……それで、これをどうすると？」

「人工細胞で培養して肉体を形成する…そこにこの『カラータイマー』を取り付けて私のための『猟犬』となつてもらおう」

男の手にはかつてウルトラマンの胸部に装着されていた代物『カラータイマー』と呼ばれるウルトラマン特有の発光器官だった。

「光の巨人の危険信号…そんなものを取り付けてどうするおつもりで？」

「こいつは新しく『怪獣娘』とやらに変異させ…使命を終えれば殺処分する…私の使

命、この星に巣食う害獣どもを駆除すること……いや、駆逐することだ」

その顔は復讐に燃える鬼の様な形相だった。

「そのためなら怪獣の力を使うと？……だいぶ矛盾されていますね」

「かつての宇宙警備隊にも緊急時に怪獣を使役する規定があつた……扱いの訓練は受けて
いる」

「そうではありません……あなたにも同胞の形見を怪獣の為に使うとは思ひもよらない
と申しているのですよ」

「言つただろう……害獣たる怪獣をこの世から消し去るならなんだつてすると……もうこの
世にM78星雲光の国は……どこにも存在しない……まずは故郷を私から奪つた奴を消
す、そのあとに同胞の無念を晴らすために怪獣娘とやらも例外なく対象だ」

男は緒確に嘗てウルトラマンだった誰かのカラータイマーを託して身体を反転させ
て後を去ろうとした。

「……ソレなら構いませんが、最後にもう一つお聞きしますが……このカラータイマー……
一体誰のですか？」

男は立ち止まって振り返り緒確に問いに答えた。

「……ベリアルだ……」

青と鋼の行方

—警視庁管轄部署—

—アヴァロン・ユニット分駐所—

都内のどこか、100カ所以上存在する警察署のどこかに存在する試験的警察部隊である特殊な部隊『アヴァロン・ユニット』の為に用意された分駐所であった。

駐在と言う常に24時間体制でいつ如何なる時に出勤の要請が発令されてもすぐに出動できる状態が維持できる利点があった。

「うっ……うっ……かつ、身体が動かない……」

そんな分駐所には24時間体制と言えど休憩なしに身体の保証はなく、福利厚生として休憩での仮眠などができる休憩所と言う名の体制でユニット員のための部屋が用意されていた。その1つ部屋にはある男が長い仮眠を終えて床に敷かれた布団から重い体を無理にでも起こす。

「うっ……んっ……」

「はあっ?」

ところが、布団の中には自分の身体とは違う何かが蠢いて自分の身体に強い力ですが

みついているようだった。

「なっ……なんだ?……はぁあッ!」

恐る恐る掛布団を捲つて見ると……布団の中で自分の身体にしがみつく赤い三日月型の角を生やした殆ど全裸と言つて差し支えない姿をした年端のいかない少女だった。

「はあッ!?!ふあッ!?!えっ!?!」

「うう……」

思わず大きな声で騒いでも赤い角の少女は起きる所か布団の中で丸くなり縮こまつたが……ハッキリと全身像を確認すれば身体に至る個所に人間とは思えない鋭利な手先の赤い爪から肘に至るまで動物の皮の様なもので覆われていた。更に足はゴツゴツとした体表に腕と同じ質感の皮膚が内側に……そして、臀部からは皮膚とは異なる体表と同じ材質の尻尾が映えている……その姿は紛れもなく怪獣の少女、*“怪獣娘”* だった。

更に不運なことが立て続けにやってきた……部屋のドアをノックする音が響いて男の背筋が凍った。

「はいりますよ、木條くん」

「あつ、いや、ちよつ待つてくださあい!!」

しかし、相手はそんな待つてと言う声も届かずドアが開かれ入つてきたのは緒確だった。

「おや、昨日はお楽しみのようでしたか？」

絶対に何か勘違いされるとんでもない誤解を前に男は首を横に振って違うと意思表示をした。

「ちがいます！ちがいます！なんで自分の布団に知らない少女がいるのかこつちが聞きたくて…」

思わずどう答えればいいのか分からず男は困惑のあまり説明口調で弁解をするが…

「そう慌てなくても事情は私が説明しましょう…：昨日の出勤は御見事でした、シャドウ生物に巻き込まれた少女を救出して見せたことで本庁は『アヴァロン・ユニット』を高く評価されましたよ」

「はあ…ソレはどうも…って、じゃなくてこの少女は誰なんですか緒確警視!!」

男は質問の趣旨に反して本庁から評価された話など頭に入っていない。知りたいのは今自分の布団の中で丸まっている少女について訴えた。

「その子がそのシャドウとの交戦時にあなたが救助した子と言うわけですよ」

「じっ…自分が助けた？」

俄かには信じられず記憶も披露故か曖昧で思いだせなかった。

「うっ…うっんッ」

そんな中、少女が起き上がって身体を仰け反るほど腕をあげながら身体を伸ばした。

「おっ…起きましたね」

「ええっ、起きたみたいですよ」

眠い目を擦ってつぶらな瞳が傍ですつと寝ていた男の方が視界に映った。

それでもまだ眠たいのか寝ぼけた眼のまま這いつくばって近づいて来て…そのまま自分が抱き着いていた物へと抱き帰っていくように足にしがみ付いた。

「なんで自分にいい!?!」

「とりあえず君はいい加減ズボンをはいた方がいいですよ…構図だけ見ればかなり事案です」

足に怪獣娘がしがみ付かれた男の格好はトランクス1枚にタンクトップ姿は確かに事案だった。

「いやちよ…まっ、この子見た目に反して結構重いんですけどツ!?!」

男はハンガーに掛かっているズボンの取ろうにも足にしがみ付かれた怪獣娘の重さが足枷と為っていた。

—グツグツグツグツツ…

鍋で湯を沸かし乾燥麺を束のまま入れてひと煮立ちさせると鍋のお湯の中で硬い面は徐々に湯を吸収してふやけて細かった麺は太く喉越しの良い物に変わった。

「…あのく、緒確警視…いつまでこの子は自分にしがみ付いているんでしょうか？結構、苦しいです」

あれから男から離れず、何なら今も大の成人男性の胴体に幼い少女が強い力で締め付けられている。

「どうやら彼女、警戒心が強いようですので一度安全と認識した物にしか興味がないでしょう…さあ、うどんが出来ましたよ」

休憩所の台所を使って緒確はエプロン姿でゆで上げたうどんをザルに抱えて男と怪獣娘の方へ持ってきた。

「この子、どうします？一度GIRLSに連絡した方が…」

「そうしたいのもやまやまですが…君からその子を離すのが最難関ですねえ…すつかり君に懐いているようですよ」

確かに男の胴体に顔をうずめているほどに男の側が気に入っている様子だが…

「そういうワケにもいかないでしよう…自分たちはアヴァロン・ユニットとして出勤しなきゃならないじゃないですか！」

男には妥協できない職務があった。

「ねえ、君…いい加減に自分から離れてくれないか？…ぐえっ!!」

離れると言えば言うほどに強い力で腹が閉まっていく中で男の意識が段々と遠のき

そうだった。

—ジユウウツツ…パチパチパチツツ…

何かを挙げる音に興味が湧いたのか赤い角の怪獣娘は男の腹から降りてスタスタと台所へ向かっていった。

「おや、天ぶらが気になりますか？」

「てん…ぶら…？」

「ようやく喋ってくれましたね…食べて見ますか？」

緒確は菜箸で油の中から衣を纏ったエビの天ぶらを取り出して小皿に乗せると怪獣娘に差し出した。

怪獣娘はエビの尻尾をつまんで匂いを嗅ぎつつも小さな口を開けて丸々一本を頬張った…が…

「は…ふっあ…ふっ…あっちい!？」

「緒確警視、あの子そっちに…アツツ!？」

飛んできたエビの天ぶらは男の額に激突して彼の手の平に落ちた。

「つううう…なんですコレ?…エビ?」

手に持ったエビの天ぶらの前に怪獣娘はジツと見つめて来た。

「どうやらまだ熱かったみたいですね」

「ダメですよ、警視！熱いままの天ぷらを食べさせちや…ちよつと待つてて…ふうふう…うん、はいもう熱くないよ」

先ほどの事もあつてやはり警戒心が強くなった怪獣娘はヴウウツと唸り声をあげながらも再度匂いを嗅いで今度は舌先で温度を確かめてから恐る恐る齧ると…目を丸くして残りのエビの天ぷらを男の手ごと齧ってきた。

「あいたたたつ！それは自分の手、自分の手だから!？」

エビの天ぷらと間違えて齧られた手は歯形がビツシリと付いてしまつたが怪獣娘の少女は彼の手にまだエビの天ぷらの匂いが付いているのか単に痛いことをしたことへの慰めなのか歯形の付いた手を嘗め回した。

「あつ、ちよつ…あんまり舐める物じゃないよ」

男は怪獣娘の少女の頭を優しく撫でながらも自分の手を彼女の口から離そうとするが逆に彼の指先が気に入つたのか人差し指を銜えて口の中で転がされた。

「(こらこら)ツ赤ちゃんじゃないんだから…：はあくツ…君、名前は？自分は木條キセキつて言います。階級は巡查長、つまりは警察官だ」

男は自らを『木城』と名乗り明かしてみた。

「私は緒確タケル、警視だ…と言つても警察階級はまだ流石に理解できないでしょうね」
緒確も一応名乗りはしたが2人の言葉など意に介さず木條の指先をずっと銜え続け

た。

「…ふう…ふはふほごは…」

「えっ、なに？ 銜えたままじやわからないから取るよ」

木條は何かを喋り訴える少女に銜えられている自分の指を彼女の口から離して喋らせた。

「スカル…ゴモラ…」

「スカルゴモラ？ 聞いたことないなあ…」

木條は一般教養で多少なりとも怪獣の事は常識範囲で知ってはいたが『スカルゴモラ』と言う名前には聞き覚えが無かった。

「ゴモラなら聞いたことがあるけど…スカルが頭に着く怪獣だったけ？」

「おそらく親戚種なんでしょう…生態系には分岐して分かれた種族が同じ名前を持って違う種とすることもあるでしょ」

緒確に納得させられた木條はなるほどと頷いたが…赤い角の怪獣娘ことスカルゴモラは再び木條の人差し指へと銜え戻っていった。

「あつ、コラツ…はあ…これじゃあ子牛の世話じゃないですか」

「はははっ、だいぶ懐かれましたね」

「うんツまあこんな状況…見られたのが警視だけで幸いでしたよ、他の人に見られた

ら社会的にままずいかったです」

「よかったですね、ユニット長たちが出払っていて…」

「あつ、そういえばユニット長と他の二人は？」

「本庁の捜査本部に陸自の『特生隊』との意見交換に3人とも出向いていますよ」

現在彼らの居る分駐所には残り3名のユニット員が在中しているはずだったが今現在には木條と緒確を残すのみだった。

「特生隊って例のスーパーXの？」

「ええつ、けど残念ながら本来意見交換として湯原サラ氏と御逢いする予定でしたが、先方から湯原氏の謹慎が下つたらしく彼女は来られないので私が出向く意味を無くしたので仕方なく君と一緒に御留守番です」

「ああ…だからユニット長が出向いたんですね」

「理解されたのはいいですが…君、そろそろ腕までイカれますよ」

「うわつ、本当だ!?!」

納得がいった木條だがスカルゴモラに指を超えて手首まで丸々銜えられていた。

―警視庁・捜査本部別室―

敵性有害生物関連事件捜査本部が置かれた本庁内の本部とは別の応接間では『アヴァロン・ユニット』のユニットチームの3名と陸上自衛隊から『特殊不明生物群対策分隊』から部隊員3名による意見交換会が行われていた。

「では改めまして、アヴァロン・ユニット統括ユニット長の御前トモエ、警部補です。本日はよろしくお願いたします」

アヴァロン・ユニットを統べる者でありながらも凜とした表情で一見は絵にかいたような黒髪美人のトモエ警部補から挨拶が始まった。

「ユニットオペレーションの沖田ソノコ、巡査長です」

美人の御前と変わって可愛らしい見た目の沖田も順序よく挨拶した。

「同じくオペレーションの坂本タツミ、巡査部長です」

紅一点が二人もいるユニットの中で少し老け顔ながらもユニット側の中で唯一の男性である坂本を最後に三人の挨拶が終わった。

「陸上自衛隊特殊不明生物群対策分隊の部隊長を務めます、如月アズサ三等陸佐です」

「こちらも御前警部補と双壁為すように向かい合う女性自衛官の如月三佐が深々と頭を下げて敬礼した。

「同じく部隊通信士の長尾トウコ陸士長です」

また同じく沖田と相対して如月と同じように女性自衛官の長尾も深い敬礼で挨拶をした。

「同じく部隊通信士の武田ケンジ陸士長です」

最後にも紅一点2人とかけ離れた壮年の男性自衛官の武田を最後にそれぞれの挨拶が終了した。

「それではこれより敵性有害生物関連事件での警視庁、防衛省、合同意見交換を始めさせていただきます」

アヴァロン・ユニットのユニット長である御前が進行を進めると同時にホワイトスクリーンにプロジェクターで投影した映像が映し出された。

「コレは先日出現した新たなシャドウ生物に対して当ユニットが開発した『アヴァロンシステム』通称『アルトリウス』による討伐記録です…当システムは対敵性生物に対してこれまで有効打となっていた『セシウム弾頭』の使用により対象を沈黙に成功。この実績からシャドウ生物にはセシウム系光子物質が有効であるということが実証されました」

アヴァロン・ユニットで運用される『アルトリウス』が使う銃火器にはかつてウルトラマンなどが光線などに使用していた『セシウム物質』を組み込んだ弾丸兵器を用いての十分なシャドウ撃退に貢献したことを発表した。

そこへ質疑として部隊長の如月が挙手をした。

「現在一般配備に使用される『スペシウム物質』に関して国交省との精査の結果、日本国内では国際法に明記の通り『軍用での禁止兵装事項』があるため陸自ではスペシウムの管理運用は困難を極めるため極端に言えば装備としての制限があるため難しいかと……」
「では、敵性有害生物に限定した使用ではどうでしょうか？ 国際法上はあくまで『軍事利用』の観点であつて大量破壊兵器に成り得る兵器の使用禁止が条件ですの……」

それぞれの視点でシャドウに対して対策案が徐々に固まり始めた中で警視庁と防衛省側の代表者として共通の議題が浮上し始めた。

「……からが本題なのですが……先日アルトリウスと遭遇したシャドウ生物とは構造が異なる生物とシャドウの交戦を確認しましたのでご覧いただけます」

御前が出した新たな映像はシャドウ出現場所から近くの街中に設置していた防犯カメラの映像からだった。

その映像にはシャドウとゴジラと怪獣娘たちが映っていた。そして、シャドウがゴジラに向かつて行き……ゴジラの中の何かにシャドウが怯えて丸く縮こまった一部始終、更にそのあとでアヴァロン・ユニット開発装甲服アルトリウスとゴジラの僅か3分間のアルトリウス側の視線カメラ映像にはハッキリとゴジラの姿形まで捉えていたが……3分以降はゴジラの打撃でカメラ映像が途切れてしまった。

「この生物は以前本庁の捜査本部が提出した国道1号線に出現した当初はシャドウ生物関係と認識されていましたが明確に今回コレがシャドウ生物とは他生物であることが解析で判明しました」

「……怪獣……みたいですね」

長年怪獣と相対してきた自衛隊の視点から見てもその姿には『怪獣』と言う言葉以外形容できなかつた。

「いえ、みたいではなく……怪獣そのものと認識できます」

更に武田も手を挙げた。

「待ってください！怪獣と言う事でしたら警視庁さんはこの生物を『怪獣』であると認識されるのですか？」

「少なくとも我々アヴァロン・ユニットはこの若干2メートルほどの正体不明の生物にはアルトリウスが交戦した限りでは怪獣に匹敵する戦闘力を有しているとログ解析で判断しています。我々は非公式ながら『特異生体不明怪獣』とカテゴリーします……他にも都内ではこの生物とは異なりながらもシャドウを超える能力を有する存在を捉えています」

更に端末内のデータをドロップして防犯カメラ映像からの切り抜き画像からゴジラを始めとした同種の存在をハッキリとその姿を捉えていた」

更に沖田が映像からカテゴライズしたデータを踏まえてゴジラを始めとした怪獣戦士（タイタヌス）を符号順で分けていた。

「まず国道1号線を時速500キロで移動してユニットのアルトリウスと交戦した『特異生体不明怪獣』略して特生怪獣第1号は硬質な体組織で覆われておりアルトリウスが使用するATR—X02『ロンランス』の20ミリ弾をまともに受けても決定打にならず切断に優れたATR—X01『カリバーン』の使用に移行しましたが格闘能力も訓練を受けた戦闘技能者級であることが伺えました。他にも第1号よりも硬質な体表を有する飛行能力を有する第2号、第1号以上の体格を有する高層ビルを跳躍力だけで飛び交い高い機動力を有する第3号、現時点で警視庁が把握している特生怪獣群の資料になります」

沖田はスクリーンに映し出された第1号とカテゴリーしたゴジラの画像と、カメラと思しき第2号、コングと思しき第3号の画像資料をプリントアウトした物を特殊不明生物群対策分隊の面々に1部ずつ渡した。

「ここに来てシャドウとは違う新しい脅威ですか。如月分隊長、例のヤツも出しますか？」

「…ええつ、いよいよ本格的に被害が出ている以上は無視できないと私は判断します。警視庁さん、我々も追加で新たな情報を開示します」

如月は武田と情報の精査をする中で出すべきと判断したとある事件についての資料を今度は尾長がユニットメンバーに一部ずつ手渡した。

「…コレは…先日の旧秩父鉾山凍結事件の…」

「はい、未だマスコミへの報道規制を敷いていますが被害規模が大きく調査が終了次第にと思っていました。コレはあなたの方が分類した『特異生体不明怪獣』が発生させた現象であることが分かりました」

更に長尾が挙手をしてスクリーンの前に立った。

「ここからは私が説明いたします…今回埼玉県の新秩父鉾山で発生した局所寒冷現象はマイナス27.3・15度での絶対零度現象によって山中の約20ヘクタール、推定20万平方メートル規模が『完全凍結』した状態でした」

「東京ドームの約5倍…人なんかがそこに居たらどうなっていたんだ…」

無人の山であったことが幸いだったがその発生規模に坂本は絶句した。

「待ってください防衛省さん…たしかこの事件の最大の被害状況と言えは…」

沖田が特生隊に挙手をして尋ねた通りであるとばかりに如月が頷いて意思返答した。

「御存じの通りこの事件の最大の被害は発生から数時間で秩父市内西部地域で呼吸器に異常をきたす症状にて救急搬送者が相次いだのも事実です」

「更に説明いたしますとこの局地的絶対零度現象で発生した氷は水分を含まず酸素を大

量消費して二酸化炭素による凍結が確認されました…二酸化炭素の氷と言えば御存じの通り『ドライアイス』です…が、この氷は解けるのではなく空気中に分解されて極微量なドライアイスが形成され、これらが人間の呼吸器などに呼吸と共に吸引されてしまい肺炎症状を引き起ってしまったというのが秩父市内で発生した肺炎症状の真相です」

埼玉県警の報告で聞いていた事と陸自の調査で発覚した事実ユニットメンバーは驚愕した。

「極小のドライアイス…そんな物が人の肺の中に…」

「はい、しかもこれは本来通常のドライアイスには無い現象です。通常これ程の小さなドライアイスが空気中に発生することなどありえませんが、絶対零度下と言う特異的な現象が発生しない限り検証のしようがないのも事実です」

新たに出現した脅威と事件に対して警視庁側と防衛省側も沈黙が走った。

「…では最後にもう一つ…コレは埼玉県警からの報告ですが、『秩父鉾山凍結事件』後の市内の病院で出現した未確認の特生怪獣『第4号』が正体不明の無人兵器と交戦した件についてあなた方、陸自が出勤した時の様子もお願いできますか？」

御前は沈黙を破って上から「ある事」を尋ねた。

「御前警部補…それについては…御答えできません」

御前は独自のルートから事前に秩父市内で発生した事件の中で市内の病院で発生し

た出来事まで把握していたが特生隊側の回答は『答えられない』と言う返答だったが、この場でソレを嘘だと追及することができなかつた。

「では、これにて警視庁と防衛省の合同意見交換を終了とさせていただきます…本日はありがとうございました」

「いえ、こちらこそ…今度はアヴァロンシステムを生み出した天才緒碓タケル警視とは非顔合わせを願います」

「こちらこそ…スーパードXシステムを設計された湯原主任にも再度の意見交換の場にてご尊顔を拝見したいです…」

お互いに意見交換と称した腹の探り合いを経てその場を先に去つたのは陸自の特生隊側だつた。

そして、双方が分かれて先に退出した特生隊の武田が如月に耳打ちで声を掛けた。

「どう思われます、部隊長」

「今回は開発者と装着者不在ではあつたけど大きな収穫ね…今後も彼らとは綿密な協力が必要不可欠にはなります 『特異生体不明怪獣』ですか…特に“4号”の機龍には彼らに対応してもらいましょう…我々も機龍の件は捕獲もしくは抹消あるのみで進めるつもりです」

アヴァロン・ユニットが提供した特生怪獣の画像資料の最後のページには『特異生体不明怪獣『第4号』』と記載された機龍の画像が添付されていた。

— 埼玉県警・警備課 —

慌ただしい県警本部では秩父鉾山で発生した凍結現象の対応に追われて捜査員たちが段ボールなどに書類などを抱えて走り、埼玉県内の各警察署からの連絡などを請け負う事態に発展していた。

「前原警部補、前原警部補……すみません、前原さんは？」

そこへ制服姿の警察官『岡田』が前原を探していた。

「岡田君、俺ならココだけだ」

前原の声をする方に振り返っても前原は見えず、書類の山しか見えなかった。

「こつちこつち」

書類の山の中から声がすると思いきや前原がその書類の山の影に隠れていた。

「前原さん、大丈夫ですか？」

「いやなに……今度本庁側から『不明生物関連事件』の捜査本部に合流する事になったから

秩父鉦山の凍結事件関連の資料をまとめている最中だよ」

度重なるシャドウによる超常的事件に対し増員として埼玉県警から派遣されることになり身辺整理に前原は追われていた。

「はあ、(´)苦労様です…って、そうじゃなくて前原さんに面会ですよ」

「俺に？」

岡田から自分へわざわざ県警を訪ねて来たものに対して心当たる人物が居ないことに首を傾げた。

— 埼玉県警・応接室 —

応接室の扉を開けて中に入った前原が見た人物は意外にも女性だった。

「ええっと…始めまして、埼玉県警警備課の前原です」

前原を待っていた女性は前原と同世代くらいでありながらも自分よりも幼く見える一見は少女と見間違ってしまうほどの容姿端麗な人物が律儀にスーツを着ているような印象の女性だった。

「あつ、はい…始めまして…と言うワケじゃないです。直接顔を合わせはしませんでしたが秩父市内の病院に派遣したスーパーX装着員の直属の上司で、『陸上自衛隊特殊不明生物群対策分隊』開発主任者の湯原サラと申します」

サラは前原に自らの長い名称の素性を簡易的に記載した名刺を渡した。

「スーパーX…？ ああ、病院で出会ったあの陸自の…」

「はい、正式名称は『特殊防護装甲装備試験機』ですが長いので陸自では『スーパーX』と言う呼称で運用しています」

「私も後で上層部から聞きましたけど…湯原さん…そうですか、あなたがあれの開発者だったとは…」

前原はサラの苗字を聞いて初めて彼女が何者なのか理解した。先日機龍に対して仰々しい武装をした部隊を率いて更には被害を顧みないような判断を下す装甲服を着た人物の上司に当たる人物であることに驚いた。

「その件につきましてはウチの神子二尉が大変失礼をいたしました」

「いえ、国防に関わる方の判断ですので結果として被害はなかったもので何よりです」

「そう言っていただけだと気が引けますが…謝罪に上がっておいて凶々しいお願いをしてしまうのですが…」

サラはただ先日のお事を謝罪しにきたわけではなかった。

「実は秩父鉾山の凍結事件には先日あなたと私が指揮する分隊が遭遇した機械の怪獣の搜索をお願いしたく…」

「ええつと…行方不明者の搜索でしたら刑事課の方が…」

「あなたですからお願いしているんです！あの時、彼を庇ってくれた…あなたで…あれ

ば幸いです」

「……あの怪物、もとい『彼』に心当たりがあるのですね」

前原に強く機龍の搜索を求めるサラはレディーススーツのスカートを握りしめるほどに語れない理由があると考えた前原は口に手を当て考えると立ち上がった。

「ワケは後で御聞かせ願いますが……あなたの心当たりを頼りにできるだけの事はしましょう」

「あつ、ありがとうございます！前原さん」

サラは自ら機龍の搜索に協力してくれることを承諾した前原に深く一礼をした。

そして、応接室を出ると前原の目に後輩の岡田が横切った。

「あつ、岡田君 これから俺は現場付近まで彼女を案内するから資料の整理頼めない？」

「ええっ！前原さん明日日本庁に向かうのにッ!？」

前原が先程まで整理していた資料を岡田に無理言って肩代わりさせる形で後を託した。

一方、その頃……

—チャポンツ…

秩父市内から脱した機龍ことシュンイチは山林の中で近くを流れる川から水を汲んでいた。

「……………」

水は拾った金属桶で救い上げ元居た森の中へ再び戻った…しかし——

「ツ!?……………まただ、誰かに見られている気がする」

消して人より見えないものが見えるような意識は無い…が、森に入ってからここしばらく誰に見られているような気配がしてならなかった。

（この身体になってから人一倍警戒心が強くなったのか?…いや、感覚が強いからなのかもしれない）

あれから様々な事を自分の身体を通して試したシュンイチは機龍の能力を手探りで試し続けた。特に感覚に関する能力が飛躍的に研ぎ澄まされている様であった。聴覚は遠くの鳥の声から水の落ちる音まで聞こえ、視界は望遠レンズで見えない距離まで見えた。

だが、味覚や触覚はこの機械仕掛けの身体には感じ取れなかった。それは同時に食欲もわからない心から機械のようになってしまった恐怖心から最近になって徐々に心身も

疲弊し始めていた。

(変なものまで見え始めたらこんな身体もいよいよ不便を超えて不気味だな)

やがて森の奥に進むと古い坑道跡のような場所に辿り着いた。

「メカゴモ……どこだ?」

声を上げてメカゴモラを呼ぶと奥の岩陰からヒョコツと顔を出してきた。

「ゴモオツ……」

「また地べたで寝てたのか……と言っても君に座って寝るなんて難易度高いか……」

シュンイチは座り込んで水の入った金属桶を横に置いて自分の膝上をポンポン叩いて座るよう促した。

メカゴモラはコクリと頷いてシュンイチの膝の上に腰かけた。そこにすかさずメカゴモラの土で汚れた顔を汲んできた水を手で掬って頬周りを濡らし磨いた。

「うん、少しはマシになったかな……」

「ゴモツ……」

汚れが取れて少し濡れた頬をシュンイチの胸に擦り付けつつ抱き着いてきた。

「……どうした?」

「ゴモオ……スウーツスウーツzzzz……」

シュンイチの膝に乗ったことで安心感を得たメカゴモラはシュンイチの胸の中で熟

睡し始めた。

「はあ…唯一手間が掛からないのはこういう時だけだなあ」

食の必要のない身体の2人だが、未だにシュンイチに頼りきりなメカゴモラに対してシュンイチは不安が拭えなかった。

(このままこの子を守りながら逃げ続けるのも限界があるなあ…また“ヤツら”が襲い掛かってきた時は…)

メカゴモラが自分の胸の中で眠る中…シュンイチは自ら機龍として力が発現した時のことを金属桶に映る水面の自分を見つめ直す。



「うつ…うつん…」

目が覚めるとそこは見覚えの無い場所だった。

室内であることは理解できるが…そこはまるでこの世に存在するあらゆる構造には人間の手が加わっているとは思えない機械的な空間だった。

「なんだ…ここは…ぐっ…腕が…身体が…動けない」

目覚めた矢先に身体を動かさそうにも手足に何かが結ばれて動けなかった…それど

ころか何か実験台のような物の上に乗せられて手足が金属製のバンド状の拘束具が巻き付いていた。

「なんだこれ……ぐっ……がああッ！」

歯を食いしばって全身に力を込めても外れない、相当な硬度を有する金属で構成された高密度の純金属拘束バンドだった。

—バロロロロッ…

そんな動けないシュンイチの側に不快な機械音を発する何者かが重々しい足音を響かせてこちらに近づいてきた。

「だれだ……僕をどうするつもりだ！」

拘束されているシュンイチの前に現れたのは不快な機械音を常に発し続ける一見はブリキ人形の様な姿のロボットだった。

更に気づけば部屋の3か所にある出入り口から同じようなロボットが何体も現れてきた。

まるでシュンイチをこれから実験台とするかのようにゾロゾロとロボットたちがそれぞれ役割分担を実行するかのようによろかの装置に起動操作が行われ始めた。

—ブウウウウウウウ…

「ぐあああああああ!!」

身体が焼けるように熱い…さながら電子レンジの中にいる食材だ。マイクロ波による高温照射でシュンイチを焼き殺すつもりだった。

「がああああああああ!!」

しかし、シュンイチの中で何かが爆発的に増殖する感覚が発生して全身を液体の金属がシュンイチの身体を覆うようにして纏い始め…金属粒子はやがて形を成してシュンイチから機龍を出現させた。

「ぐわあああああ!!」

その力は絶大であり生身の時とは打って変わって四肢を拘束していたバンドを引きちぎって破壊した。

「はあ…はあ…なんだこの姿…僕は一体どうなってしまったんだッ」

両手で変化してしまった自分の身体を確認するも…そんな感情に浸る余裕も与えず不快な機械音を発するロボットたちが一斉に手を銃火器の様な物に変化させて機龍に對してレーザー攻撃を仕掛けてきたが…機龍にはそのすべてが危険予知として即座に瞬発反射で避けて1体のロボットの後ろに回り込んで逆にそのロボットを盾にしてロボットごともち上げてロボット同士をぶついたり、ロボットたちよりも速い反射速度で次々とロボットのゼンマイの回る頭部に貫き手で貫いたり、拳で砕いたり、果てには胴体に蹴りを入れ持ち上げ引き裂く、荒々しい戦い方で部屋中にはロボットだったものが

散乱していた。

「はあ…はあ…疲れも…痛みも…消えた…どうなっているんだ、僕の身体は…」

先ほどまで焼かれる痛みが確かにあったのに…これだけ暴れたにも関わらず機龍として今は姿を変えてしまった事により身体から感覚が僅かに失われている様であった。

「とにかく…ここを出なければ…」

機龍は駆け足でこの謎の空間を走り回るが出口と思われる場所に辿り付けない。

「どうなっているんだココは…出口はどこだ」

何度も何度も走り回ってもも出口と思えるような場所にはたどり着けない…そんな中でふと立ち寄った別の部屋で何か機龍の目の中で激しく火花のようにプラズマ状の何が迸るエネルギーを検知していた。

「なんだ、このエネルギーは…」

すると、エネルギーが次第に大きくなって空間に裂け目の様な亀裂が走った。

「なんだ一体ッ!？」

その裂け目の奥には見たことも無いようなこの世のものとは思えない大都市空間が広がった世界だった。

すると、そんな裂け目からフラフラと歩いてくる小さな何かがやってきた。

「い…も…お…」

「おっ…女の子?」

それは硬質な金属のような角と足回りと腕周りに同質な金属で構成された体表…そして白髪の髪に額から一本の角が生えた少女…否、それは怪獣娘のメカゴモラだった。

メカゴモラは何やら怪我をしているほどにボロボロだった。ふらついた足取りで倒れそうになったところを機龍に支えられ、抱きかかえた。

「誰なんだ、この子は…」

しかし、裂け目から現れたのはメカゴモラだけではなかった。更に奥から無数の流線型状を模したロボットのたちが続々とこちらに向かってくる。

「まずい、逃げなきゃ…」

機龍はメカゴモラを抱えて走り出したが…走りぬけた様々な部屋からもブリキ型のロボットたちも現れたが裂け目から現れた流線型のロボットの方に交戦に入った。

逃げる機龍の後ろではブリキ型のロボットたちが流線型のロボットたちに次々と破壊されている…ソレはまるで古い物が新しい物に淘汰されていく様の用であった。

しかし、機龍は余所見が祟って足に何かが引っかかって床に身体が叩きつけられた。その拍子に腕に抱えていたメカゴモラが腕より抜けて機龍の頭の上に転がっていった。

「君ツ…ハッ、コイツ!」

それは先程まで機龍を謎の部屋に台の上で焼き殺そうとしたロボットが半壊しても

まだ動いていて機龍の足を捉えていた。

「クソツ……こんな時に……」

放そうとしない半壊のロボット……迫りくる未知の流線型のロボット……しかし、更に機龍の胸の中から急激に溢れかえるエネルギーの高鳴りが起きていた。

「ぐあああああ!!ぐつぐるしいいい!!」

胸が今にも弾けそうな様な苦しみ……手を突っ込んで体表を剥がしたいとさえ思える様な感覚……痛みも感じないはずの身体がその中から込み上がって爆発的に苦しい感覚が出てこようとしていた。

「ぐうああああああああああああ!!」

機龍は胸部装甲を無理矢理こじ開けようとして腕を突っ込むと胸部から3枚の開門口が開いて中から高出力の三点放射盤が露出して、そこから青白い高エネルギー物質が蓄積されて一気に放出された。

その青い光はブリキ型ロボットも、流線型のロボットも、空間すべてに広がる謎の施設ごと諸共に衝突してすべてを完全凍結させた。

空間を始め、空間を包む土、土の上に生い茂る木々と支える山諸共、一気にすべてが凍り付いて物質はすべて氷に変化してしまい生命溢れる大地は突如として氷の大地へと変貌を遂げてしまった。

「はあ……はあ……何が……起きたんだッ!?」

機龍が目の当たりにしたのは自分が胸の中の何かを空けただけで目の前にある物すべてが開けた空の下で凍り付いた世界が広がっていた。

「ゴモオ……」

そんな時、声をする方に振り返ると身体をさすって痛みに悶えるメカゴモラが居たのを思いだした機龍は彼女を抱えて凍った世界に飛び込むようにして謎の空間から抜け出した。



思いだせるシュンイチの記憶の中でまだ新しい出来事は自らの力の影響で山が1つ氷の世界に変わった……否、変えてしまった記憶だった。

「……………」

改めて自分の力を考えてもやはり恐ろしい力が自分の中に宿っていると考えると人間ではない自分が恐ろしく思っていた。

—ヒタツヒタツヒタツヒタツ…

「!!」

またしてもあの感覚だった。水を汲んだ時も、森を歩いている時も、そして今メカゴモラと共にいる時も誰かが近くにいるように感じる。

坑道の奥か、はたまた光指す出口からか……それとも今、目の前にいるのか……誰かがシュンイチを見ていたが、誰もそこには居ない……シュンイチは機龍となつてからずっとこの得体の知れない感覚に襲われていた。

—カツンツ……カツンツ……

今度もまた妙な音がするが……ソレは紛れもなく現実の足音だった。坑道出口の方から何か光を手を持ってこちらに向かって来る2人の男女がいた。

「そこにいるのは誰ですか？」

男女の1人の女性がシュンイチに向かって懐中電灯の光を向けた。

「このシグナル……あなたが機龍？……アカネさんじゃない、男性？」

「あなた達こそ誰ですか……」

「桐生！私だ、埼玉県警の前原だ」

男性の一人にはシュンイチも心当たりがあつた。

それはあの病院で唯一機龍を庇ってくれた刑事の前原だった。

「前原さん……それと、あなたは……？」

「私は湯原サラ……やつと……やつと会えましたね」

前原と共にやってきた湯原は膝をついてシュンイチの顔を両手で触れて確かめた。

「そう……あなたが、『今』の機龍なのですね」

「『今』の？……あなたは、僕が誰なのか知っているんですか!? 教えてください、僕は誰で……なんでこんな力が……ぶっ!？」

シュンイチは湯原に聞きたい事を聞こうとする前に彼の話すことなど遮って湯原はシュンイチを強く抱きしめた。

しかも、シュンイチの耳元ですすり泣く声が聞こえるほどにシュンイチは彼女にとつて何か悪いことをしたのか、それとも今しているのか分からない状況に困惑した。

「よかった……あなたが無事でよかった……」

「はっ……はあ……」

ワケが分からぬシュンイチは一旦湯原を自分から離そうと両肩を掴んで彼女の顔を確かめた。

「僕は……桐生シュンイチと言います……と言っても本当の名前ではなく、あなたと一緒に来てくれた前原さんが付けてくれた名前です」

「桐生……シュンイチさん……はい、わかりました……ワケが分からないでしょうけど、すべてを御話します……だから一度、私と来てください」

湯原は真つ直ぐな瞳で機龍を見つめ自分と来るように促す……が……

「ええつと…その子は？」

「ああ、この子は成り行きで拾ったメカゴモラです」

シュンイチの傍らで眠る怪獣娘メカゴモラは自分の名前をシュンイチに呼ばれるや目をパツチリ開けて起き上がった。

「ゴモオ…UMGモード解除」

すると、途端にメカゴモラが急に光り出して見る見る身体を覆っていた獣殻（シエル）が消えて彼女の無垢なる姿が露わになる…それはメカゴモラが何も着ていない。//全裸の状態になった。

「うわっ！なんで何も着てないんだ!？」

「ゴモオ…メカゴモ…充電完了……キリユウノ、ソバニイル…スキイイツzzzz」

寝て起きてまた眠って、しかも今度は何も来ていない姿のままシュンイチの胸の中で再び眠る…大変気まずい状況だった。

「いや、こっ…これはその…ちがくて…えつ…湯原さん？」

湯原は俯いて身体をプルプルと震わせて、顔が上がると真つ赤な顔をしてシュンイチの顔目掛けて撓る腕先の手の平から左頬に直撃した。

「フケツウウツ!!」

パアアアンツ!…それは痛々しくも大きな音が坑道内を響かせた。流石のシュンイ

手にもこれは肉体が痛くなくても心が痛かった。

大いなる力

— 埼玉県内・国道線 —

気まずい状況だった。助手席には頬を手の平の形で腫れあげた青年、その後ろには頬を膨らませ不機嫌を絵に描いたような女性、その傍らにはブランケットで身体を覆い隠す白髪の少女が警察車両で移送中だ。

「君…大丈夫かい？」

「痛みは無いですけど…心が痛いです」

心配した前原は声を掛けシュンイチの安否を気にかけるも存外大事には至っていない。心配したが、やはり何度見ても痛々しい姿に変わりなかった。

「ええつと…正直、よく彼の居場所が分かりましたねえ湯原さん」

「事前に彼の周波数シグナルを特定していたのでスマートフォンに搭載した私独自の電波探知アプリを使っただけです…まさかこんな穢れた人だとは思いませんでしたけどねえ 桐生”さん”」

刺々しい言葉が湯原サラの口よりシュンイチの身体に鎌として突き刺さる。何を話しても彼女はすぐにシュンイチへの攻撃を続けること数時間が一方的だった。

「ええつと、とりあえず県警に戻りますか？」

「それより先に向かつてほしいのですが…」

そういうとサラがスマートフォンアプリでとある施設に向かうように告げた。

着いた場所はさいたま市内の商業施設、所謂ショッピングモールだった。

「着きましたよ」

前原がモール内の駐車場に車を停めると先に車から出たサラが助手席側に回ってドアを開けてシュンイチを引きずり出した。

「えっ？…えっ!？」

「さっさと行きますよ！まずはあの子の衣服と靴です！」

サラが求めに向かうのはメカゴモラの人間体としての姿に為っても全裸にならないための衣服などを買い揃えるためにモールへ向かう。勿論、シュンイチを連れ出したのは荷物持ちのためだ。

「え〜つと…前原さん一人で大丈夫なんですか？」

「結構です！あの方は立派な警察官ですよ、あなたと違って邪な心はありません」

シュンイチよりも前原の方がメカゴモラを預けられる信頼度の高さにシュンイチの

男としての威厳が皆無であることに肩が落ちる。

そして、次々とモール内のありとあらゆるブランド店舗を回りに回って行く中で明らかにメカゴモラ用は既に買い揃えているはずがドンドンとそれ以上に買い続けるのはサラの私用の買い物が殆どだった。

そして、その度にシュンイチの両手は彼女の買い物荷物でいっぱいになっていったが、不思議と物の重さを感じないためいくらでも持てた。機械の身体であったことの初めての利点が生まれた瞬間だった。

そして、再度買い物を終えて戻ってきたサラたちに前原は驚愕した。

「えっ、服だけじゃなかったのかい？」

「すみません…色々見て回っていたら歯止めが利かなくなっちゃって…えへへッ」

「前原さん…ちよつと手伝ってください」

サラのその後ろでは両腕に手提げ袋いっぱいと身体が隠れきるほどの箱荷物と言うシュンイチの原型がないほどの大量買いだった。

「はあ…じゃあ私と桐生君は外で待っていますのでお好きなように…」

「ありがとうございます！さあさあ、お楽しみの時間だわ」

「ゴツ…ゴモツ？」

なにやら恐ろしげな表情を浮かべるサラに本能的危機感が過るメカゴモラはブラン

ケツトを口元まで覆い隠した。

—ギシツ…ギシギシギシツ…

前代未聞である。仮にも埼玉県警の警察車両が見たことも無いほどに揺れ動く姿に前原は目を覆い隠した。

「はあ…終わるまで少しコーヒーでも飲もうか」

「あつ、はい…」

未だ激しく揺れ動く警察車両を放置し、前原はシュンイチを連れて近場の自販機まで向かった。

—ガコンツ…

自販機から購入したコーヒーを2つ取り出して前原はシュンイチに手渡すついでに彼の今後の事を切り出した。

「それで…これから君たちは一応彼女の保護下に置かれる…身元引受人の手続き等が私
が県警の方で整理しておくよ」

「あつ、はい…ありがとうございます 何から何まで」

前原は身寄りのないシュンイチとメカゴモラをサラの下で保護されることが決まった。

「私も一応君がどういふ存在なのかは彼女から君を見つけるまでにすべて聞いている…

まあ本人の口から直接聞くのが手っ取り早いだろう」

「はあ……でも、やっぱり不安です」

「何がだ？」

「その……機龍と言うのが何なのか……あんな暴れるだけ力を自分が持っている事に不安で……」

シユンイチは心に抱える不安を前原に打ち明けた。それは自分が他とは違う特異な能力を持つて存在していることに思い悩むほどの懸念が払拭できないことだった。

「……桐生君……いや、あえて桐生と呼ばせてもらうよ」

「はっ、はい」

「私から見た君のあの姿は怪物なんかじゃない、あの時に私が君を守るべき立場だったのに守られてしまった……正直、警察官としては失格だ」

「そんなこと……」

「だが、それは同時に君に助けてもらったから私はこうして生きている。これが事実だ……君には誰かを救えるだけの力があることを忘れないでほしい……その力は良いようにも悪いようにも見えるかもしれないが、決して自分がどうい存在なのかを見失わないでほしい。これから先に君は君自身を見つめることが多くなっても『本当の自分』だけは失うなよ」

前原はあの秩父市内の病院での出来事を引き合いに出してシュンイチの肩に手を置いて激励した。

「はいッ！」

「ついでにあの子たちの分も買つていこう……一人は紅茶くらいならいいとしてあの子はジュースにするべきか」

前原は年頃の子供がどういう飲み物を好むのか悩みつつもサラとメカゴモラの分も買つて行つた。

車まで戻るとメカゴモラは完全にサラの着せ替え人形と化してあらゆる服の試し着を何度も何度も晒し続けられてその顔はゲツソリとしていた。

「やだ〜こつちも似合うう〜！流石私、サイズも見ただけで分かったからピッタリだわ」
「ゴツ…ゴモオ…」

見た目はようやく全裸よりマシな服装にはなったが…シュンイチたちからすれば色が違う程度にしか分からぬサラにしか分からない感性に理解が追い付いていなかった。

「ああく…んんっ！飲み物、買つてきましたけど…」

「へっ？あらやだすみません…ありがとうございます」

サラはペットボトルの紅茶とミニサイズの乳飲料を受け取った。

「それで…とりあえず県警に戻る状態じゃないですが、この荷物はどこまで？」

「あつ、じゃあ私が泊っているホテルまでお願いできますか？」

またしても前代未聞だった。警察車両内はサラの買物物が溢れんばかりに詰め込まれ：一旦は県警に戻らずサラが泊るホテルに向かう事となった。

—さいたまニューデイズホテル—

高層のホテル一室のスイートルームにサラたちは到着した。

「ふあく疲れたああ!!」

シュンイチを探し出すこと以外、殆ど買物とメカゴモラのおめかしにしか労力を使っていないサラはキングサイズベッドに飛び込んで仰向けで大の字になった。

「よいしょつと…」

そしてシュンイチはサラが買い溜めた荷物を棚の上に置いた。

「じゃあ桐生、私は一度県警に戻るが：何かあったらここに連絡してくれ」

「はい、色々ありがとうございます」

玄関先で前原はシュンイチに自身の電話番号が記載された名刺を手渡して県警に戻るため部屋を後に去って行った。

「さあ〜つてメカゴモちゃん！まだまだ着せたい物があるからこつちにおいで〜」
「イヤ、イヤ!!」

未だ着せ替え足りない欲求がサラを支配しており、大量の買い物荷物のごく一部しか開封していない事にシュンイチは『まだ続けるのか』と心に思った。

「キリユウ〜：サラ、コワイ！メカゴモ、ニンギョウサレル〜！」

あまりの恐怖にメカゴモラはシュンイチに助けを求めて彼の足元に抱き着いた。

「ちよつと〜人を悍ましい存在みたいに言わないでくれますう〜：ほらつ、シュンイチさんもどいたどいた！」

「まあまあ…：ほどほどにしてあげてください」

見かねたシュンイチはメカゴモラを抱えてサラの魔の手から彼女を庇うが…

「その手を離さなきやあ〜あなたを児童健全育成法令違反者として告発しますよお〜！」

悍ましい事を悍ましい動きをしながらジリジリとシュンイチたちに迫りくるサラにメカゴモラのみならずシュンイチまでもが恐怖を覚えた。

そして…

「じゃあメカゴモちゃん、一緒にお風呂入りましょ〜：シュンイチさん、覗かないでくださいよ〜！」

「ゴモオ〜！キリュウ、タスケ……」バタンツ……

悲痛な叫びと共にメカゴモラは風呂の扉を閉められ遮られた姿を最後に見た。

女子二人が風呂に入った事により束の間のシュンイチだけの時間が訪れた。

「……やることもないし、テレビでも見るか」

そう考えて何気なくテレビのリモコンの起動ボタンを押してテレビを付けたが……

『次に埼玉県秩父市で発生した異常現象による被害は近隣住民に肺炎などの症状を訴え市内の病院に運ばれ、幸い死者はおらず、重軽傷者が多数出た今回の『秩父鉾山凍結事件』は埼玉県警の発表によりますと……』

テレビが付くなりニュース番組が秩父市で起きた多数の被災状況を報道していた。

「……………」

シュンイチは黙ってその内容を見聞きする中でこの山一つが凍り付いた現象を起こした張本人が自分であることを改めて認識させられた。

— GIRLS・東京支部 —

その頃、GIRLSの大会議室に集められた同組織所属の怪獣娘たちが神妙な面持ち

で集まっていた。

「どういうことだよ、ピグモン！GIRLSのシャドウ対応を自粛するだ?!」

意見を真つ先に机へ手を叩きつけて訴え出したのはベニオだった。

「すみません、警察からの要請でGIRLSは今後シャドウが出現した際には即交戦するのではなく通報をするようにとのことで…」

それまでGIRLSが担当していたシャドウへの対応が急遽に交戦行動の自粛と言う形で国から戦う事すら禁じられるようになったことにGIRLSの怪獣娘に動揺が広がった。

「今までずっとオレたち任せだった奴らが手の平を返しやがって…何をいまさら…」

「ですが戦ってはダメと言うワケではなく飽く迄も自粛であって極力の戦闘を避けてもらうということ…」

必死になって感情的になる怪獣娘たちの憤りを抑えるようにピグモンはあたふたと説得を続けるが…

「その…警視庁さんからの要請もそうですが、追加でこれも御見せします…」

なにやらトモミはDVDディスクを壇上のドライブスキャナーにセットするとホワイトボード型のモニターを通して映像が流れだした。

『警視庁警備部特異生物対策課、それは日夜出現する広域指定有害生物『シャドウ』に対

して皆様の生活と安全を守るため、新たに新設した対特異生物編成組織の御紹介です」
それは見る者には警察からの広報の映像のようだが、見方によればこれは警察からの
メッセージとも取れる内容の映像だった。

「次にATRXI『アルトリウス』の御紹介です」

映像が進むにつれてこの間のシャドウとの戦いに突如として現れた青い装甲服の機
械の様な警察官が映像には律儀に手を額に翳す敬礼までして映し出された。

「……」の人……

その姿に唯一アキだけは嫌な記憶が脳内にフラッシュバックするかにようにアルト
リウスに対して嫌悪感が込み上がってきた。

「昨今のシャドウ被害に対して新たな切り札として正式導入した対特異生物対策装備の
1つです。 主要兵装はATRWシリーズによる特殊光弾薬によるシャドウ生物への
高いアドバンテージを獲得し……」

映像にはアルトリウスのいかにもな宣伝が流れて来た。さながらテレビの特殊撮影
ヒーローの如き扱いと映像編集、さらには映りばえの良いカットを交えて心理的な影響
と頼りたくなるような安心感を与えんとする手口、そのすべてをして警察がGIRLS
の怪獣娘たちに対する回答であった。

『以上が特異生物対策課の御紹介でした。これから都民及び国民の皆様様の生活と安

全、安心を御守いたします。——警視庁広報課——」

GIRLSの怪獣娘たちのリアクションには1人1人が異なる表情を向けていた。

「なっ…なにこれ…めっ…メチャクチャカッコイイじゃん、なにあのロボット刑事みたいなツ!？」

目を輝かせてはしゃぐミクの様な者もいれば…

「まあ、今後シャドウと戦う必要もなくなるって思えば確かに…」

もともと戦闘向きでないレイカなども見た映像に安心感と期待度を寄せる者もいた。

ただ一人は…

「納得が行かないよおツ!!」

「あつ、アギちゃん?」

「アギさん?」

突然の憤慨に隣同士で固まっていたミクとレイカもビツクリして顔に陰るアキの表情を目の当たりにする。

「ボクは納得が行きません!!こんな映像を送りつけておいて『もう君たちは必要ない』って言われているような物じゃないですか!!」

「アギアギ、落ち着いてください!…結果的に怪獣娘さんの戦闘による被害の軽減にも繋がるのですよ」

普段大人しいアキが感情的になる姿を見るのが初めてな面々にとつては驚くことだった。それほどまでにアキの目線から見たアルトリウス含めた警視庁の対応にはGIRLSとしての問屋を卸せぬ気持ちが強よかつたが：GIRLSの方針は飽く迄も怪獣娘の保護及び救助が目的である以上、シャドウに対して警察が対応できるようにするのなら警察に任せる方針が固まっていた。

「ムキに為るなよアギラ、そうはいつても相手は国だぜ：俺たちがどうこう言つてもしょうがねえだろ」

「レツドンの言う通りです：それとこれは警視庁が纏めた新たなシャドウを含めた『特異生物分類表』をお配りします」

トモミが両手を使つても胴体が隠れるほどの分厚い部数のプリントを各自に回り始め手渡されていった。

「ほへえ〜：ウチらよりもしつかり纏められとるやん、さすがお役所仕事」

感心するそのプリントの内容はシャドウを生物群として様々な個体を『アルファベツト型』に合せて分類されていた。

『S型』に『B型』、『G型』：ふへえ〜細かあ〜

「こうしてみると私たちGIRLSが今まで戦つてきたシャドウっていろんな種類がいらっしゃるんですね」

細かな詳細まで記載されている事に目から鱗が落ちる気持ちになるミクとレイカだが…その隣のアキには別のページが目に入っていた。

「何これ…『特異生体不明怪獣』…なんなんですかコレッ!？」

そこには驚くべき内容が記載されていた。その写真に映る黒いシルエットの怪獣：見間違うはずもない『ゴジラ』だ。

「『特異生体不明怪獣』第1号?」

「2号と3号ってあたしたちを助けてくれた人らじゃ?」

首を傾げながら見たことない怪獣の姿にハテナマークが頭に浮かぶサチコと2号と3号に助けられた時の事を覚えていたノイズラーことミサオは驚愕した。

「おい、4号って何だこりゃ…1号となんか色が違うけど形が似ているぜ」

1から3号までの姿は見たことある者たちには4号こと機龍の詳細を始めて目にして驚愕した。

「秩父鉦山凍結事件の関連ありってあのニュースになっていたツ!？」

4号に関連する『秩父鉦山凍結事件』は既にレイカが認知するほどに報道が開始されて連日テレビで報道されているため彼女たちにも広く伝わった危険度がシャドウでも怪獣娘でもない謎の怪獣と関係する生物に対して危機感が過るが…

「ウソだツ!!こんなデタラメな情報なんかボクは信じない!だいたいなんで今までボク

たちの窮地を救ってくれたのに今度は敵みたいな扱いになってるんですかッ!」

「アギさん落ち着いてください!」

「今日のアギちゃん変だよッ!」

「またも感情的になったアキを押さえようと左右からミクとレイカが庇うが…」

「アギラ! わがままみたいな態度はザンドリアスだけで十分だろ!」

「ふえっ!? ししよ!」

「見かねたベニオはサチコを引き合いに出してアキが取る自らの行動を咎めた。」

「アギアギ、警察も何も彼らと敵対しているワケではありません…彼らも怪獣である可能性があるならGIRLSとして対話を持ち掛けるための情報提供なのですよ」

「そんなのウソに決まっています! だいたいあの青いのにはボクは…うっ…ぐっ…」

「言っても信じてもらえない…なぜなら既に何度もアルトリウスの事を皆に伝えてい
るがベニオもミカヅキもミクも、あの時いた当事者の3人は意識を失うほどのダメージ
を負わされていた為に見ていなかった為に理解してもらえなかったことがアキの頭
中で過る。」

「まあ、この1号には俺たちも直接対面しているけど…ありやあ怪獣の域を超えている
感じがしただぜ」

「せやなあ、なんかぶっとい尻尾で突然殴られたけど…まあ喋れるんやから話は通じる

んちやう?」

碌に何も知らない者たちが勝手にあれこれと意見を話し合う姿にアキは信じる自身
が失われていた。

居心地も悪いし、プリントに記載されたゴジラ達が危険な存在であるかのように書か
れていることなど読みたくもなく、アキは咄嗟に大会議室を飛び出した。

「アギちゃん!」「アギさん!」

「アギアギいゝまだ会議は終わっていませんよ!!」

耳を貸さないアキはそのまま飛び出してGIRLS支部にまで背中を背けた。

GIRLSを飛び出して辿り着いたのは近くの公園だった。いつもの河川敷は顔見
知りも多くよりつく場のため普段は誰も立ち寄らないであろう場所にアキは公園内の
ベンチに腰かけていた。

「はあ……どうしてお兄ちゃんの事になるとムキになるんだらうボク……」

深い溜め息を吐き出すとソレに答えるかのように強い突風が吹いて公園内の遊具の
1つであるブランコが左右共にキコキコと音を立てながら揺れ始めた。

「…………おじいちゃん…………」

そんな揺れるブランコを見てアキは亡き祖父の事を思い出していた。

中学の時に母を亡くして1年くらいたった頃に祖父が唐突にブランコに乗ったアキの背中を押して見たいと言いだした。歳ゆえかそこまで大きく揺らせなかったが、後に聞けば祖父は母とそのような事をしてあげられないほどに気づけば母が大人になってしまい、親より先に旅立った。母に何の思いも残してあげられなかったことに生前の祖父は口癖のように母への気持ちの口にしていた。

『あの子は……私が憎かったんだろうね……』

その言葉の真意は未だに分からないがどれだけ慰めても祖父の考えは変わらない。否、考えではなく後悔の様な念があるようだった。

「……………」

ふと思えば身体がブランコの方に引き寄せられてブランコの鉄パイプ製の支えに手が触れていた。

さすがの良い歳にブランコに腰かける酔狂は無いが……ただやはりアキには亡き祖父が残した何かが今日までに続き続けている事象に強い因果を感じてしまっている。

「教えてよ、おじいちゃん……おじいちゃんはボクに何を残して行つたの?」

「ならばどうして御遺書を読まれずにずっとしまつていらつしやるのですか?」

不意にアキの背後から声を掛けて来たのは後見人のダグナだった。

「なんだ、ダグナさんか……」

「失礼しました、物思いにふけられている状況に水を差すのもやぶさかでしたのですが……つい……」

「今日は一度も顔を見せてくれないと思っていたのに……」

「姿は見せずとも御近くであなたの側についております……距離は関係ありません、私の姿はあなたの生活に不便な御様子でしたのでなるべく適度な距離に居ました」

「……………」

神出鬼没なダグナだが彼の言う通りアキは未だに祖父からの遺書を読めていなかった。

「……怖いからです……ボクの知らないおじいちゃんがボクにどんな事を書き残したのか……」

アキの知っている祖父は普通の老人だった……しかし、その裏ではアキの知り得ない彼の素顔が今まで認識にすら浮かばないほどに鮮明に隠され続けてきた事……そして、死後になってからその存在感は日に日に増しているようであった。怪獣戦士（タイタヌス）の出現、謎の生物たち、沈黙を続けて来た国さえもそれぞれが彼の死を引き金に抑えられていたパンドラの箱を開けられたような混沌とした状況にすべての秘密が宿るのが祖父からの遺書であった。

「お気持ち察します……が、そうして哀しまれては“ヤツら”の思うつぼですよ……アキ

さん、この世界にあなたは欠かせない御人なのです。どうか悲しまないでください」
そういつてさりげなくハンカチを涙が滴るアキに差し出した。

「…ヤツら…？」

「この世界はいわば牧場の様なものです…孤独になり、悲しみに溢れる者が彼の者たちにとつての条件です」

「ダグナさん…一体何を言つて…」

「お気づかれませんか？…ヤツらはなぜ、あなた方が『哀しむ』状況下に突如現れるのか…アキさん、あなたはおじいさまの御遺灰を持ち出して御一人で山に登られた時に一体どんな気持ちを抱かれました？」

まるですべてを見透かしているような透き通つたダグナの瞳にアキの足は自然と引き下がっていた。

「ボクが…思つていた事…」

思い返したアキはあの時に一人で祖父の骨壺を抱えたまま山に登つて、襲われかける瞬間までの間に抱いた気持ちは思えば確かに『哀しみ』の感情だった。しかもそれだけにとどまらず…

「あの時、ボクは…『居なくなりたい』と思つていました」

「どうして？」

「なんでか分からないけど…でもほんの一瞬だけです、ほんの一瞬だけですけどおじいちゃんも居なくなつたことへの反動なのか心に思つただけです」

ただ一瞬にアキはその時の状況を思い返して出て来た記憶に“世界からの消失”を望むような気持ちがあつたことに辿り着いた。

「そうですか…打ち明けてくれてありがとうございます。ですが、それを抱かれたからこそ彼らはこの世界に“収穫”に現れたのですよ」

ダグナの語る事にアキはただならぬ意味を含めているような気がするが…突然、背筋が凍る様な嫌な気配をハッキリと感じ取つた。

それはシャドウとは違う、別の何かの気配だ。怪獣娘としての本能が別の何かに対して激しく警戒している様だつた。

「どうやら現れた御様子ですね」

すると周囲から次々と魔法陣の様な曼荼羅模様様の輝く円が出現して、その円の中からアキを襲つたトカゲの怪物、レイカを襲つたゴブリンの様な怪物、ミサオとサチコを襲つたオーガの様な怪物とそれぞれの異なる姿をした怪物たちが一同にそれぞれが2体ずつ計6体も出現した。

「ガバフアラマ、ギガハバヴァガア！」

「グオドバマガギザドドグザ！」

またしても理解不明な言葉を発する怪物たちにアキとダグナは周囲を囲まれ、さらには魔法陣を展開して武器を取り出し、魔法陣を媒介に謎の炎などを出して戦闘態勢に変わった。

「はわわわっ！ダグナさん、この怪物たちって…」

「いずれもアキさんたち怪獣娘さんと直面した者たちと同種ですね…しかし、こうも多く集まるということはそちらも逼迫しているのでしょうか」

まるで人に話しかけるかのように言葉を発したダグナは怪物たちとコミュニケーションを取る様な真似をしたが…

「グフアカナバナア『ダゴン』ラエアババツ！」

「…いい加減おやめなさい…そのような事をしてあなた方の『世界』が修復されるとは限りません…何よりも『ダゴン』がそれを良しとしないでしょう」

「ダゴン？」

まるで彼らの言葉を理解しているかのように会話が成立するダグナと怪物たちとのやりとりはある種の交渉のようだが、どうやらそれも決裂したように怪物たちがダグナとアキに向けてとうとう本気で攻撃する動きを見せて来た。

「なるほど、引き下がるおつもりは無いと……立場をわきまえない、『侵入者』！」

その言動は今までの温厚なダグナとは思えない険しい表情と物言いだ怪物たちには

だならぬ気配を感じさせそれぞれに1歩引き下がらせた。

「ダグナさん……」

初めて目にする後見人としてのダグナが本来見せる姿とは別の側面を持った得体の知れない気配にアキの中のアキラのカイジューソウルが警鐘を鳴らしているようにダグナの周囲を歪ませるほどの瘴気に対してアキの肌の上の産毛が逆立った。

しかし、彼が何らかの力を有しソレを行使する前に怪物たちは公園内を高速で移動する何かと衝突して吹き飛んだ。6体の内3体の怪物たちは目にも止まらない高速で移動する何かに吹き飛ばされると上に向かつて的確に1体ずつ光線を浴びて空中で爆発した。

「うわあっ!?!」

爆炎と光線の閃光に眩みそうな目を閉じるもアキの前を大きな体格で彼女に身を挺してダグナは庇うが…残り3体の怪物たちは周囲を警戒しつつも蠢く何かに臨戦態勢は解かなかった。

しかし、次の瞬間にはもう1体の顔面に赤い拳が叩き込まれ2体の首を両手で掴んで最後の敵も灼熱の業火で消し炭にした。

「おい、なんでわざわざ狙われに来てんだよ」

一気に6体の怪物を瞬殺したのは背ビレと瞳の色が真っ赤に染まる『バーニング』に

形態変化させたゴジラだった。

「そう言いながらもミレニアムで駆けつけていただけのあたり良心的ですね」

「やかましい」

アキたちの窮地に最速で到着したゴジラは肉体を元の人間時のユウゴの姿へ戻した。

「一体どういう事なんですか!? ダグナさんはあの怪物の正体を知っているんですか!?!」

アキはダグナが怪物たちと対話ができる様子を目の当たりにして確信した。

祖父が亡くなってから後見人として現れたダグナ、怪獣娘以外に男性が怪獣の姿に為る『怪獣戦士（タイタヌス）』、そして哀しいと言った感情を抱いた怪獣娘の前に突如として現れる謎の怪物、アキの身近な世界が次々と変わる状況の中ですべてを知っているであろうダグナに詰め寄った。

「そうですね…そろそろアキさんには御教えしてよろしいかと思えます」

「ああ、いい加減隠し通すのにも限界がある…アキ、お前や俺のように怪獣の力を宿した連中がどうして突然現れるようになったかわかるか?」

ユウゴはアキに怪獣の力を宿す怪獣娘や怪獣戦士（タイタヌス）がなぜ現れるようになったのかを問いただした。

「そつ、そんなこと急に言われたって…ボクなんか知るわけないよ、GIRLSでも怪獣娘の起源について諸説があるんだから詳しくなんて知らないよ」

「まあそうだな…だが俺は3年前にその起源に触れたことがある…俺たちのルーツ、怪獣はすべて『ダゴン』って言う存在から始まったらしい」

「ダゴン…あの怪物やダグナさんも言ってたけど…なんなのダゴンって!」

ユウゴが口にする『ダゴン』と言う聞き慣れない単語が、アキたち怪獣娘たちの前に突然現れて襲い掛かってくる怪物も同じように『ダゴン』と言う言葉を中心に彼らが行動する何らかの理由であり動機である言葉に追究しようとするが…

「アギちゃ〜ん!」

GIRLSから大勢の怪獣娘たちが会議を飛び出していったアキを追って、アキの居る公園まで迫っていた。

「みつ、みんな…あつ!あれ?ダグナさん、お兄ちゃん!」

一瞬で目を離れた際にダグナとユウゴはアキの目の前から音もなく消えていた。

「アギちゃ〜ん!!」

「ミクちゃ…ぐえっ!」

アキを追って先に辿り着いたミクは人間体のままであるにもかかわらず強い突進力でアキの胴体にタツクルするが如く強い衝撃が襲い掛かってきた。

「アギちゃん!どこ行ってたのさあ!みんな心配したんだよ!!」

「みつ、みみみつミクちゃん…ごめんって…はなじで…ぐつぐるじい…」

泣きじやくつて心配していたことを強く訴えるミクだがアキ一人を軽々と持ち上げて腰から腹回りを掴み抱きしめて無自覚に絞めてきていた。

「ミクさん！それ以上やるとアギさんの中身が出ちゃいますよ！」

「ああ、そうだった…ゴメン」

レイカに咎められてようやく我に返ってミクは力を緩めてアキを解放した。

「はあ…はあ…なっ、何事なの？」

「何事なんはアギちゃんやでえ…突然会議室を飛び出してえ…ウチはアギちゃんをそんな子に育てた覚えは無いでえ！」

「育てられた覚えもないし、そんな子がどんな子を指しているのかもわかんないよ」

ワケが分からないアキは膝と手を付きながらも起き上がって土埃を祓いながら息を整えた。

「んでえ、アギちゃくん…なんかウチらに隠しとることあるやろ！」

突然ミカヅキに追及された指摘にアキの身体はビクツとなって冷や汗がダラダラと滴る分かりやすい動揺が身体に現れていた。

「べっ、別にそんなこと…あっ、そういえばウインちゃん」

「はい？私ですか…」

「ウインちゃんはさあ…中野までサイン会に向かう途中に何か哀しい事があったの？」

アキから突然指摘されたことにレイカは『えっ!』と心当たる表情を浮かべた。

「哀しいこと……まあ確かにあるにはあるんですが、別に関係ないと思ってピグモンさんにも言わなかったんですが……実は私あの時にエレキングさんとの待ち合わせに遅れそうだったんです。メッセージには遅れるかもしれない時は先に並んでくださいと伝えたんですが……」

「じゃあその時、『いつそ居なくなりたい』って思ったりしていない?」

「あつ、アギさん……どうしてそこまでツ!」

凶星を付かれたかのようにレイカはビクツと身体が反応する様子が見えた。

「はっ……はい……実はちよつとだけエレキングさんにお会いするのが怖かった節があります……アイザワ先生のサイン会なんて滅多に開かれるものじゃないので遅れようものなら怒られるじゃ済まないと思って……一瞬間かにそんな感じのことを思っていました」

普段の彼女が思うはずもない感情『居なくなりたい』とってしまうほどの状況下に突如現れる謎の怪物たち……その引き金をダグナから通じて理解したアキは確信に辿り着いた。

あの怪物の狙いは怪獣娘たちが『この世から居なくなりたい』と思うほどの精神状態が「ヤツら」の達成条件、それがアキたち怪獣娘をどこかへ繋がる謎の魔法陣に押し込もうとする動機だった。

そして、あの怪物たちが度々アキたちの前に現れて口にしていた謎の単語『ダゴン』とは何なのか：ダグナたちだけが知っているのにアキたち怪獣娘はソレを存じない何か裏で動きつつあるようであった。

—
???

そこはどこかの水族館の様な場所だった。前面には身の丈以上のガラスで覆われたガラスの向こう側には満杯に満たされた水と海と同じような水棲環境に整えられた水質：そして、その中を自由に泳ぎ回る無数の魚や海洋生物を眺める者がいた。

「…人は…人のままでなければならぬ…」

その姿は水槽の中の水棲生物、蛸やイカなどの軟体動物を思わせる様な触手器官を口に生やしてかぎ爪のように鋭い指先から全身を多くの水棲生物と特徴を共有する鱗状の体表、そして背から翼竜のように関節は太く、膜は薄い、蝙蝠の様な翼を生やした人ならざる怪物がいた。

「仰るとおりかと…大いなる主よ」

その隣では付き人のように傍らに佇む怪物に付き添う顔をフードで覆い隠した法師

が怪物の言葉に同意する。

「この世界は…ダゴンとなるべき人間たちが溢れてしまっている…だが、私はそのような人間たちであっても見捨てることはできない故に機会与えてはいるが…どうやらそれ拒む者たちがいる」

「おそらく怪物戦士（タイタヌス）共かと…」

「ふむ、*ダゴンの戦士たち*…人が本来持つてはならない力を高めた者たちか…いずれ彼の者たちにも私は向き合わなければならない」

水槽の奥から小さな魚たちの集団の中から大きな魚が横切った。

「すべては御身のままに私は従います…大いなる水を司る主*クトウルフ神*よ」

陰の法師が深々と頭を下げる者に水槽内の天窓から光差し込む太陽の輝きが禍々しい姿とは裏腹に神々しい古代神官の様な出で立ちの怪物『クトウルフ』が姿を光に晒した。

怪獣探偵

— GIRLS 東京支部・会議室 —

そこは大会議室とは別の部屋。大会議室ほどの広さはないがトモミとベニオにラン、そしてアキ、レイカ、ミサオとサチコが向かい合って集まっていた。

「では再度確認いたしますけど…アギアギは以前にもこのトカゲの姿をした怪物に襲われたのは確かですか？」

「はい、ボクがおじいちゃんのお葬儀後に火葬場から離れた地点にある山中で遭遇しました…あの時はダグナさんとお兄ちゃんが何とか助けてはくれましたが…ボクはその時まで心の内に…なんと言うか『居なくなりたい』と一瞬だけ考えるほどに精神が追い込まれていていたのは確かです」

次にレイカ…

「私もエレキングさんと待ち合わせしていたにも慣れない地域だったため道に迷って少し遅れそうだったので合わせる顔がないって思ってしまった瞬間はあります」

そしてミサオとサチコ…

「あたしとザンドリアスはこの間のライブの事で意見が対立して口論からの喧嘩になっ

て…特にあたしはそこまでムキになった自分には後悔しましたけど消えたいとかは特に…」

「あつ、あたしは…哀しいってのもあるけど消えたいとかよりも『この場から居なくなりたい』ってのは思いましたけど…」

謎の怪物に襲われかけた4人3組の怪獣娘たちの中で3人に特徴が合致するのはその瞬間的とも言える悲観思考による『居なくなりたい』だった。

「やはりアギアギの言う通り…あの怪物たちが皆さんの前に突如として現れる条件は『居なくなりたい』と言う気持ちに呼応するように現れるからなのです」

「ちよつと待つてください！そんな事を心に思ったザンドリアスならまだしも狙われたのはあたしつすよ!?!」

その条件に唯一合わないミサオはなぜ自分が怪物たちの狙いになったのかを説いた。

「まあザンドリアスじゃ弱つちく見えたんじゃねえの…目的はただ強い怪獣娘を狙ったのかもしれねえぜ」

「ふえツ!?!ししよ、あたし狙われたくは無いですけど…なんか酷くないですか!?!」

「とはいえ、その瞬間の中でアギアギ達が思った感情が関わっているのは確かです…シヤドウミストのように弱った心のスキを突つように、この怪物たちは弱った心を持った状態の怪獣娘さんたちを狙うようですね」

『居なくなりたい』と言う気持ちかどうかは知らないけどそういった言葉は条件口実なのかもしれないわ…あなた達の弱った心がああ怪物にとつて何かが好都合であり、あなた達が奴らの目的に一致すればたとえ2人以上居てもその中から条件の見合う者を選出すると言った所でしよう」

ランの見立てでは怪物の中で特定の目的に見合う怪獣娘たちがマイナスな感情に晒される状況下にあることに加え、かつ能力がある者を選出する、そういった一連の構図を電子パッドの中の絵画アプリで図を作成し会議室内のモニターに映し出した。

「エレキングさん、絵うまいっすね」

「この程度、プロの目線からしたらお絵描き程度…アイザワ先生に比べれば陳腐な絵よ」

ミサオの誉め言葉に決して靡かぬランは髪に隠れた耳をたくし上げる仕草をした。

「それと、その怪物たちの目的には『ある言葉』が関わっている気がします」

「言葉？それは一体何ですか、アギアギ？」

アキは怪物たちが一同に違った言葉を口にしても同じ単語だけは共通で喋っているように感じたことを話した。

「それは…『ダゴン』と言う単語です」

「ダゴン…？確かになんかそんなこと言っていたようなあ…」

「聞いたことあるか？ザンドリアス」

「うーん…必死だったからどうだろう?」

皆が首を傾げている中でランはすぐさま手元のソウルライザーの検索アプリから『ダゴン』と言う言葉を検索するが…

「いくつか候補が上がったわ…古ルレイエ神話に登場する海の神、メソポタミア文明では海から現れた魚の賢人、ウガリット神話では穀物を意味し神話内の豊穡神の父…『ダゴン』『ダガン』『ダーゴン』『ディーゴン』、類似単語はあるけれど意味合いは同じみないね」

「よく気づいたな、アギラ」

「ええつと…まあ、なんだか強調的で特徴的な言葉だったからです…」

本当は謎の怪物たちの言葉が分かるダグナを介して知ったアキは冷や汗をかきながらもなんとか誤魔化した。

「『ダゴン』…ソレが意味を持った言葉であるなら怪物たちにも独自の言語があると見るべきでしょうね…それこそシャドウ以上に社会性を持った生物である所を見ると人間に近い感じがしますね」

「シャドウに警察が対応し始めたからって気の休まらねえことが立て続けに起き始めたなあ…ピグモン、このことは警察には?」

「もちろんお伝えするつもりですが…対応には遅れが生じるでしょう、GIRLSの怪

獣娘さんたちには各自警戒を広めましょう」

現時点での結論は要警戒態勢を発令することを東京支部として決定するが、GIRLSの獣娘にはそれぞれ独自の仕事や対応に追われる日々があるためになるべく単独で行動することを控える程度にしか対策のしようがなかった。

「うーん、しばらくは気を付けることが増えますね…何より未だシャドウに対しても私たちは分かかっていないことが多いのに今度はそれ以上に分からない敵が増えてくるのは困りましたねえ…ですが、警察が提示してくれた『特異生体不明怪獣』さんと言う方々ならもしかしたら言葉が通じ合うのかもしれない」

トモミは警察が符号分類する正体不明の怪獣を第1号から第4号まで記載された怪獣たちを頼る案が浮上した。

「確かに…この怪獣たちは明確に『日本語』を喋っている節があつた…つまりはその正体も人間と言う可能性が高いわ GIRLSとして調査をする必要がありそうね」

ランも調査部の獣娘として気に為り、調べる意欲が湧くようだ。

「エレエレは先日発生した『秩父鉾山凍結事件』の現場周辺を含めて埼玉県内へ向かってください…あの事件には少なくとも怪獣娘と関わる何かがあるかもしれません」

「了解したわ」

『特異生体不明怪獣』…通称：特生怪獣…もしかしたら相当能力の高い『怪獣娘』さん

たちなのかも知れません」

ピグモンは自信満々にゴジラ達を分類する『特異生体不明怪獣』を“怪獣娘”と見ている様子にアキは少しこげそうになった。

「どうされました？アギアギ」

「いつ、いえ…なんでも…」

無理もない、彼女たちにはまだ怪獣の力を宿した男性たち『怪獣戦士（タイタヌス）』たちについて話していかない上に知りもしていない。常識的には女性にしか怪獣に変身できないことが固定概念化されていることに唯一事情を知っているアキとの弊害が現れていた。

「それとアギアギには第1号さんから第3号さんに関する調査をお願いします」

「へっ？ボク…」

本来GIRLS未所属の怪獣娘などの調査はエレキングたち調査部が担当のはずが何故か自分に振り分けられた事に驚愕した。

「申し訳ありません、調査部は第4号関連で埼玉県警からの要請で専門家としてガッツとエレエレの派遣が決まっていますのでアギアギには残りの調査に協力をお願いしますんですか…」

本来、調査部から怪獣娘の情報などを事前に調べてから指導部が動く手はずだがゴジ

ラやガメラならまだしも分類第3号に該当する類人猿の様な怪獣戦士（タイタヌス）についてまだ何も知れていないのが現状であった。たとえこの3人を事前情報なしで調べると言われても無理と言っていたが…

「もちろん、御一人で調べてくださいとは言いません…流石に人探しとなれば専門的な技術が必要になりますので、ここに向かっていただけです」

そういうとトモミはソウルライザーのトーク機能から画像を送信してアキのソウルライザーはソレを受信されてきた内容を確認すると…

「新宿の…『ブルーコメット』？」

「はいッ、G I R L S 所属の怪獣娘ではありませんが、こちらに人探しが御専門の怪獣娘さんがいらつしやるので是非お逢いして見て下さい」

それはG I R L S 部外の怪獣娘が経営するとある探偵事務所の案内地図だった。

新宿区内 都庁前

新宿区を象徴する二対一棟の東京都庁を前にアキはそびえる天辺まで見上げていた。

「ほへえ…都庁って大きいなあ…」

新宿の中心である都庁からスタートしてビル群立ち並ぶエリアに目的の『ブルーコメット』なる場所がある…と言うのがアキのソウルライザー内の画像には簡易的な地図が記載されているが…アキが初めてGIRLS東京支部への案内と同クオリティであるため非常に見にくい。特に新宿は東京都の中でも一番ビルしかない街であるため高低差の無い平坦な地図は逆にどのビルを指しているのか分からなくなるほどだった。

「こつち……いや、こつち…」

何度ソウルライザーをグルグル回して自分の現在位置と目線に合せた地図の見方を変えて見るもどのビルのどういう建物を指しているのかも一切分からない。

「なにをスマホなんぞグルグル回してんだよ」

その横でアキの下手な地図操作に見かねたユウゴが声を掛けた。

「だって、こんな大雑把な地図じゃわからないんだもん」

「ダグナに連絡を受けて来てみれば…あの赤いのに俺らを探してほしいって…：言われなくても俺が居るわ」

トモミからの指示で『特生怪獣』の第1号から第3号までの搜索に回されたアキだが、実際は呼ばば来るレベルの距離感にいたのであった。

「そんなこと言ってもピグモンさんからの指示なんだから…お兄ちゃんたちのことを隠している以上、辻褄合わせに付き合っつてよ」

アキは律儀にトモミからの指示とユウゴたちの事を隠すための辻褃を合わせるためにわざわざブルーコメット探しに探すべき本来の相手のユウゴと共に探させていた。

「あほらしい…だいたいまさかよりによつて『あそこ』に行くことになるとはなあ…」
「ふえっ? お兄ちゃん知ってるの?」

「…知ってるも何も…ああ…世話になったのは確かだが…」

「…?…どういふこと…」

アキはユウゴの何やらワケありな表情に首を傾げつつもブルーコメットを求めて新宿のさらに奥へと進んだ。

「どこかで聞いてみるしかないかなあ…あつ」

アキたちは丁度目に入った配達前のピザ屋の女性店員が目に入り彼女に『ブルーコメット』についてきいてみることにした。

「すみません、こちらへんに『ブルーコメット』って言う私立探偵事務所がある筈なんですけど…知りませんか?」

「ブルーコメット…ああ知ってるよ、あそこの雑居ビルの中にあるよ」

『BEAST THE PIZZA』と書かれた帽子を目深に被った女性店員は丁寧にアキに『ブルーコメット』の場所を教えてくれた。

(んっ?…この人どっかで…)

「どうもありがとうございます…それじゃ」

アキもまた丁寧に女性店員に御辞儀の礼を尽くして感謝を表すとピザ屋の店員から教えてもらった雑居ビルに向かった。しかし、ユウゴだけは最後まで女性店員を見ながらどこかであつたような気がするままアキに付いて行つた。

逆に一方の女性店員は軽くスキップしながらウインと開く自動ドアのピザ店舗へと戻つて行つた。

「あらつお帰り、ミオちゃん！どうしたの、スキップしながら…イイ事でもあつた？」

女性店員は店内の女性店長にルンルン気分のワケを尋ねられた。

「いや〜今さつき本業にお客さんが入つたんです！」

「本業って…あの探偵の？」

「はい…じゃあ私これで上がりま〜す…あつピザもらいますね♡」

配達用のコートを脱いだ制服には『天城』と苗字の入つた名札がついていた。

・
・
・

アキたちはピザ屋の女性店員から聞いた場所に着くと…確かに扉には私立探偵事務所『ブルーコメット』とまるで喫茶店のような名前と字体が掲げられた事務所があつた。

「ここ…だよねえ？」

「どう考えてもここだなあ…」

アキが何度見直しても確かに画像のブルーコメントと看板のブルーコメントは表記字体もロゴも同じであった。

「うっ、うん…よろし、お邪魔します」

アキは勇気を振り絞ってドアノブ引いて開けた先には誰も居ない探偵事務がシーンツと静まり返っていた。

「〃御用の方はお席に座ってお待ちください…ただいま外出中です〃？…留守なのかあ」

アキは玄関口横の靴棚に置かれている立て札を見て「天城ミオ」なる人物が留守であることを理解した。

「出直すのもアレだし…言う通り、待っておこう」

「いや…おそらくあと数分で来るぞ…何となくわかったがここに〃アイツ〃がピザ抱えて帰って来るわ」

「へえ？どういふこと…」

「なんでもいいからお前、ソファーに座ってる…勝手に茶でも作っておく」

そういうとユウゴは玄関でブーツを脱いで客間のソファーには座らずに台所へ回っ

た。

「ちよつとお兄ちゃん、勝手に入って大丈夫なの？」

「別に構う必要ねえよ…コレ、俺のコップ…まだあつたのかよ」

ユウゴは食器棚の位置から台所の隅々まで慣れた手つきで物色して茶葉まで簡単に見つけてヤカンにお水を注いだ後にコンロに火をつけるも…火が出ない。

「お兄ちゃん、来たことあるの？」

「あるどころか住んでいたレベル…場所も正直知ってた」

火が付かないため、ユウゴは手だけゴジラのバーニングに変化させて水を急速に湯へと変えた。

「なんでそれ先に言ってくれなかったのさあ！」

「聞かれなかったから」

アキの怒りはヤカンの沸騰口から出る水蒸気の如く不貞腐れて頬を膨らませながらも客間のソファアに座った。

するとドタドタドタドタツ…

アキたちが先ほどまで居た玄関外からやけに慌ただしい足音が聞えて…ガチャンツ！と勢いよく玄関ドアが開いた。

「いらつしやい、ようこそブルーコメントへ！ご要望は何ですか、人探し、浮気調査、な

んでも御座れ、ブルーコメント所長の天城ミオでーす!!」

上機嫌なまでの笑みを浮かべて勢いよく入って来たのは…先ほどのピザ屋の女性店員だった。

「えっ…ピザ屋の…店員さん!？」

「あれっもしかして気付かれていたの、私の変装!？」

しかし、ドアを勢いよく開けたのは束の間…玄関に山ほど乗った書類と本の棚から紙媒体の雪崩が降って来た。

「へっ?…ふぎやああああああああ!!」

「だっ大丈夫ですか!？」

山ほどの紙媒体に埋もれた女性は体が見えなくなるほどの紙に隠された。

「だっ…大丈夫…ピザは無事よ」

女性が自らを代えても守り抜いたのは箱詰めされたピザだった。

「何やってんだよ…あんた」

「いや〜申し訳ない…御見苦しい所を…あれ?この匂い、コーヒー?…ウチ、ガス止まってるはずなのに…」

女性が紙の山から立ち上がると可愛らしいクジラかカエルか分からないギョロ目のキャラクターの書かれたマグカップに注がれたコーヒーを飲むユウゴが目飛び込ん

だ。

「ちよつと、それウチを出て行ったかわいい弟分のマグカップ！何勝手に使ってるの!」
「誰がかわいい弟分だよ…テメエの弟になった覚えはねえよ」

「へっ?…:…もつ…:…もももつ、もしかして…ユウゴ君ツ!」

女性は指先を震わせながらユウゴを指差して声が震えていた。

「へっ…:…はっ…:…やっ…:…やだあく!!超久しぶりに来たと思ったら何ッあなたお父さんにソツクリになつちやつてえく、顔もまあ俳優さんみたいに凛々しくなつてえく」

それまで少し抜けているが容姿端麗な美人の女性が打つて変わつてユウゴの変わり果てた姿を目の当たりにしてか突如としておばさん口調になつてユウゴの身体にベタバタと触れ始めた。

「あつ、あのく…:…お兄ちゃんどどのような御関係で…」

「んっ?お兄ちゃん…:…もしかして、妹のアキちゃんツ!」

「あつ…:…はい、初めまして…:…宮下アキと言います、G I R L Sで怪獣娘アギラとして指導課…:…に…:…」

ユウゴの隣でアキが女性へ丁寧な挨拶をするが…突如として女性の目の色が変わつてジワジワと計り知れない何らかの感情が女性の中で込み上がつてアキに抱き着いてきた。

「ひやあく！あなたが噂に聞いてたユウゴ君の妹ちゃんねツ！おおくかあいいよおく！
あなたも今日から私の妹分よ！」

抱き着くなり女性はアキの身体を強く抱きしめた後に顔を餅が如く頬をこねくり回してきた。

「ふへえくらめえてくらはあいい〜！」

「んんつも〜かあいいなあ〜！昔のユウゴ君みたいにかわいいよおく〜！」

今度はさらに強く抱きしめて頬と頬を擦り合わせて来たが：呆れたユウゴはソファアに座ってコーヒをテーブルに置いた。

「おい、それよりも：あんた探偵まだ続けてたのかよ 存続はしているけど風前の灯火って気配がするぞ」

「ふふふつくよくぞ気づいてくれた、流石私の弟分よ…」

ユウゴに聞かれてアキから手を放した途端に女性は笑顔のまま客間より奥にあるアントイーク調の机に重なる椅子を引いて腰かけた。

「ようこそ、怪獣探偵事務所『ブルーコメット』へ！所長の天城ミオこと怪獣娘のペムラーです！」

そして女性ミオは大手を広げて私立探偵でありながらも自身が怪獣娘であることを明かした。

「ベムラー…?…あつ、もしかして『御徴川決壊事件』の始まりの怪獣娘さんツ!」

アキは以前、大阪に遠征でゴモラの手伝いに来た時にウインダムが言っていた怪獣娘が発見された事件の名前を思い浮かべた。大阪遠征終了後に個人的に調べた時の怪獣娘ベムラーの写真とその記録を見たのを思い出した。

スレンダーな体系に肌は少し焦がしたように褐色で髪の色は鮮やかなブルーの怪獣娘ベムラーとミオを記憶頼りに見比べると確かに面影はある。

普段着もカイジューソウルの影響か好みの色か、ベムラーの黒い獣殻と同系色の衣服を着用していた。

「さすがGIRLSの怪獣娘ね…私を御存じとは有望な助手に為れるわ」

「はあ、それはどうも…えっ?助手?」

何か喜ばれながら不穏な事を口にしたミオにアキは足が一步下がった。

「アキ、あきらめろ…ここはガス代も払えないような貧乏探偵事務所だぞ」

「ピンボー言うな!ただ最近仕事があんまり無いだけだもん!」

見た目とは裏腹に事務所経営が破綻しかけている探偵だった。

「故郷の福島から上京して早3年…地元じゃ商売あがったりだからって新宿に事務所構えたのに、東京時価が高いよお!まともに食べてけないよお!ピザ食べさせてあげるから仕事手伝ってえ〜!」

大の成人女性が机に突っ伏したまま泣き言を吐き出し始めた。とても見るに堪えない惨めさを感じ得ない状態だ。

「仕方ない…困った怪獣娘さんが居るのならGIRLSとして協力させてください」

見かねたアキはミオの肩に手を置いて一時的に協力することを約束した。

「ホントツ!!?ありがどお〜我が妹分よ!!」

「ううっ…制服が…」

突然泣きじやくるミオに抱き着かれアキの制服が涙で濡れられた。

ミオに連れられて新宿区内の駅から東口に位置する大型ヴィジョン前に3人は訪れた。

「今日はここで待ち合わせている依頼主さんから迷子探しを請け負っているの」

3人が広場を歩いていると広場内で1人の怪獣娘がミオを待っていた。

「あつ、あの〜ブルーコメットさんですか?」

「はい、ブルーコメットの天城ミオです…ご依頼された方ですね」

待っていた怪獣娘は二束で髪の毛をまとめ上げた所謂「ツインテール」と言う髪型

にドレスの様な特殊な獣殻（シエル）を纏った少女だったが…

「あつ、君は確か…芸能課の…」

「えつ、アギラさん!？」

アキはその怪獣娘と顔見知りであり、同じGIRLSの怪獣娘だった。

「あら、お知り合い？」

「あつ、はい…GIRLSの芸能課でアイドルタレントをしている『ツインテール』とい
います」

怪獣娘ツインテールは丁寧に深々と頭を下げ御辞儀したが…何やら悲しげな表情
を浮かべていた。

「ツインテールさん、どうしたの？」

「ううつ、実は…家族が…居なくなっちゃったんです!」

ツインテールの依頼は迷子探しのはずだが家族の失踪ごとであろうことを打ち明
けた。

「家族が?…ソレは一体どんな方なんですか?」

ミオはまずツインテールから逃げてしまった家族の特徴を尋ねた。

「家族と言いますか、唯一無二の友達であり姉妹のつもりで一緒に居続けたのに…昨日
忽然と…だから一緒にグドンちゃんを探してください!」

「グドンちゃん？」

アキとミオは聞き慣れない名前に首を傾げた。

「はい、私のカイジューソウルは少々特殊で：ツインテールとして怪獣娘に覚醒したと同時期に私のソウルから小さな怪獣が生まれてしまったのがグドンちゃんなんです」

ツインテールのソウルライザーの待ち受けには確かに小さなぬいぐるみの様な両腕が鞭になっている刺々しい怪獣だった。

「へえ〜怪獣娘からこんな小さな怪獣が生まれることもあるんだね」

「はい、それはもう生まれた時からずっと友達として家族として片時も離れず：私のお尻を噛んできたたり、髪を食べちゃったり、執拗に私の足に鞭でじゃれついて来てくれたり：もうかわいくてかわいくてえ」

彼女のカイジューソウルの特異性が生み出した怪獣グドンとの思い出を語るがその思い出一つ一つにアキたちは共感できないツインテールに対するグドンの様子に別の意図を感じ得なかった。

「それ本当に家族なの？」

「家族ですうッ！グドンちゃんは確かに隙あらば私の首を鞭で締めて来たり、私のソウルライザーが何故か『おいしいエビの食べ方』とか調べられていたりもするけどそれでも私にとっては大切に無くてはならない存在なんですうッ!!」

ツインテールは両手をブンブンと振りながらグドンがいかにかに自分にとつて無くてはならない存在であることを強く熱弁するが、その熱弁したエピソードもまた愛玩動物のじやれつきとは明らかに違うような気がしてならなかった。

「ミオさん…今、ソウルライザーで調べたんですけど…グドンと言う怪獣は元々新宿地下から出現したツインテールを捕食するために出現したと記録されているんですけど」
アキのソウルライザーには『地底怪獣グドン』に関するGIRLSのアーカイブに記載されていた。その内容から要約するには確かにグドンはツインテールの捕食関係にあることがハッキリと明記されていた。

「うっ、うん…まあ、どんな形であれ愛情表現は人それぞれ！どんな依頼であつても御引き受けいたしますよ！」

ミオは自信満々にグドンの捕食本能には目を瞑って依頼遂行に専念するが…

「…と言うワケで、ユウゴ君 出番よ！」

「お前が調べるんじゃないのかよ」

ミオは一切探偵としての責務などユウゴにすべて丸投げてきた。

「私の類まれな調査力ならすぐに見つかるでしょうけど…ここは一つ、ユウゴ君の実力が衰えていないかチェックさせてもらおうじゃないの」

「お前はどの立場でモノを言ってるんだ」

自信満々に胸を張ってユウゴの実力を品定めようと建前を述べるミオに対してツインテールは『あの人が調べてくれるんじゃないんですか?』と苦笑いするアキに尋ねた。

「はあ…おい、そのエビ」

「えっ、エビって…私のことですか?」

エビと表現されたあだ名で呼ばれるツインテールにユウゴから手をこまねかれ渋々彼の元に近づくと…

1メートルほどの距離から瞬時にユウゴはツインテールが認識も出来ない速さで彼女の頭上に何かが通り過ぎて行った。

「?」

「お兄ちゃん、今ツインテールさんに何かした?」

「んっ、コイツの髪の毛」

「いつの間にな!? まったく気付きませんでしたけど…」

髪の毛一本を痛みも無く手早く抜かれていたことに驚愕したツインテールだが…肝心なのはその髪の毛を何に使用するかであった。

「そのグドンとやらはお前の髪も常食とする偏食持ちだったよな…と言うことはお前の髪の毛はグドンにとって執着的私物であるという事だ」

ユウゴはツインテールの髪の毛がグドンにとって執着するほどに私物化した物質で

あると予想を立てた。

「つまりだ：俺が今、あんたの髪の毛を持っている時点であんたの髪の毛は俺の私物に塗り替えられた 野生の動物にとってこれは侮辱的行動と見なす習性があるなら…」

ユウゴの見立てに呼応するように広場の中に茂る木の枝草が激しく揺れ始め、何かの勢いよく飛び出してきたが：ユウゴはすかさず謎の物体を剛腕で掴み取った。

「キシヤアアアアアアアアア!!」

「このように簡単におびき出せるわけだ…」

ユウゴの手には小さな鞭をブンブンと振り回しながら首を掴まれたグドンをしつかり抑えられていた。

「グドンちゃんツ!」

「こんなアツサリ…」

「ふふうん！さすが私が見込み育て上げただけはあるわね」

驚愕する2人、なぜか自慢げに自惚れするミオ、ただ唯一わかることはグドンを早くにも見つけたことにより調査は終了かに思われた。

「グドンちゃん！どこ行ってたのよおッ！心配したんだからあ！」

待ち望んでいたグドンとの対面にツインテールは強く抱擁するが：

「キシヤアアアアアアアアア!!」

「もおく…そんなに…強く…じめかえざればげげつもももつぐうえツ!!」
「ツインテールさん!? 顔が真っ青になってますよ!」

抱擁するツインテールに対してグドンは伸縮性の高い両手の鞭でツインテールの首を絞め掛かり彼女の顔を見たこともないくらいにうつ血させて泡を吹かせた。

そして、そのまま意識を失ったツインテールの隙を見計らって彼女の手から逃れ再び新宿の街中へと走り逃げて行つた。

「ああ…グドンが…」

青ざめ泡吹くツインテールを介抱するアキは逃げていくグドンを見逃すことしかできなかつたが…

「追うわよ、ユウゴ君!」

「なんで俺まで…」

すぐさまミオとユウゴは逃げだしたグドンを追って走り出して行つた。

それから数時間後の区内の公園ベンチでアキはツインテールを介抱する内にツインテールは目を見開いて起き上がった。

「グドンちゃんは!?!」

「ゴメン、逃げられちゃったけど…今お兄ちゃんたちが全力で探しに行つてるよ」

「そう…ですか…」

グドンに激しく拒否されて落ち込むツインテールを見たアキは彼女の背中をさすつた。

「大丈夫だよ…またグドンのことならすぐに見つければよ」

「うんうん…そうじゃないんです、また私の元に戻ってもグドンちゃんは私を拒絶する…ずっと一緒に居て来たのにあんなに拒絶されたのが初めてで…私ツ…わたしツ…こんな辛い気持ちを抱くなら…いつそ“消えたい”です」

アキの慰めに耳を貸さないツインテールは深く落ち込んだ末に彼女の気持ちの中で『この世から消えたい』と言う感情が芽生えていた。

それを聞いた瞬間、アキは周囲を警戒して周りを見渡したが…例の謎の怪物はいなかった。単にアキの時のように『居なくなりた』と言う感情とは違うのか、あるいは怪物たちの共通する条件に合わないのか、悲しむツインテールの前には現れなかった。

「ツインテールさん、そんなことないよ！グドンは確かにツインテールさんから激しく抵抗して離れたけど…ツインテールさんはグドンが自分から逃げ出した理由をちゃんと考えたの？」

「そつ…そんなの沢山考えましたよ…でも、何が原因なのかわかんないです」

「分からないのを分からないでいるなんて…グドンは逃げ出したけど、ツインテールさ

んもグドンから逃げているじゃないですか」

「ふえっ…どうということ…」

「グドンの事を分らないからつて原因から目を背けてもグドンを深く理解せず、何をあの子が求めているのかも考えないで…挙句に消えたいなんて思つてもますますツインテールさんがグドンから逃げているだけですよ」

アキはグドンに対して後ろ向きになりかけていたツインテールを激励した。

「今はグドンの方が確かにツインテールさんから離れているかもしれないけど…それにはきつと何か理由があるはずだよ…またお兄ちゃんたちが連れて来てくれた時にはしっかりとグドンと向き合おう」

「あっ…アギラさん」

「ボクも離れていたお兄ちゃんとうやく向き合えるように為れて来た…君も同じようにグドンと向き合えば、グドンもそれに応えてくれるよ…きつと」

アキは笑顔でツインテールの悩みに答えるとツインテールの落ち込みつつあつた表情はハッキリと明るい表情が現れるようになっていた。

「そうですね！アギラさんの言う通りです…グドンちゃんが離れたからつて私どうかしていました…ありがとうございます、なんだか勇気が出てきました」

ツインテールは立ち上がつてそれまで『消えたい』と思つていた気持ちが晴れやかに

なった様子にアキもまた笑顔になる…が…

「んっ?…キヤアアア!」

突然、ツインテールの身体が未知なるエネルギーに身体が包まれて座っていたベンチを離れ、空中に浮きあげられていた。

「ツインテールさん!?!…あっ!?!」

アキが周囲を見渡してツインテールの身に起きている原因を探るも…公園内の木に身を潜める人影が見えた。

「ビガラゴゾザ、ダゴン…フタゲンツ」

木の影から手を伸ばして何らかの念力攻撃でツインテールの身体を浮かせて捕えていたのは尖って長い耳を持つ鬼人の様な凶悪な表情を浮かべるまた新たな怪物だった。

「ツインテールさん!ソウル…ライ、うわあッ!!」

アキは自らのソウルライザーを掲げて変身しようと試みるも…アキの腕を蹴り上げて変身を妨害する別にもう1体の耳長の黒い怪物が現れた。

「ボンビギファダガツ、グビファザラグバ…ダゴン」

黒い怪物はアキの制服の襟をつかみ上げてまるでアキの姿を見定める様にして恐ろしい眼光がアキに向けられた。

「アギラさん!…どうしよう、助けを呼ばなきゃ…あっ!ソウルライザーがッ」

謎の念力場によって空中に捕らえられたツインテールはソウルライザーを取り出して助けを呼ぼうとするも手から滑り落ちてしまった。

しかし、そこへ…

「キシヤアアアアアアアアアア!!」

「グドンちゃん!?!」

落ちたソウルライザーに飛びつくようにグドンが大きな口でキャッチすると…小さな身体はそのまま地面に着地して見せた。

「とおおくりやあああ!!」

そこへアキを捕える耳長の黒い怪物に飛び掛かっていったミオも到着するも…耳長の黒い怪物は華麗に避けた。

「ありやあくあツ…なんちゃってえ、本命は…こつちよ!」

蹴りに失敗したかに思われたミオの行動だったが…怪物がミオを避けると想定した上で真の目的をカモフラージュしていた。

「ソウルライド!・ベムラー!!」

それは自らが変身するためにアキのソウルライザーを手を取ってすかさず画面に指をタツチして青い光と共に身体が眩い光に包まれたミオは頭から二本の角が伸び、硬質な鱗で覆われ、腰の裏から根の太くも先が細い尻尾を生やして怪獣娘『ベムラー』へと

変身を遂げた。

「はあくあッ!!」

ベムラーは自身の身体を青い球体エネルギーに覆わせて…一気に縦横無尽に加速して、耳長の黒い怪物にぶつかって捕らわれたアキを助けつつも球体の中へと彼女を入れ、念力で宙を浮かばされているツインテールも球体の中へと入れると…球体は地面に着地してエネルギーは消失すると中から2人を抱えたベムラーが現れた。

「怪我は無い?二人とも」

「みつ…ミオさん…」

「探偵さんが…あの最初の怪獣娘さん、ベムラーさんだったんですか!?!」

「うくん…まあGIRLSの中ではそうなっているんだろぅけど…そうよ、私が最初の怪獣娘にして怪獣娘の怪獣娘による怪獣娘のための怪獣探偵ベムラー、よろしくねッ」

事情を知らない驚愕するツインテールに自己紹介とばかりに片目をつぶってウインクするベムラーだが…彼女たちを助けてもまだ問題は解決していなかった。

「ダゴン」 ヒガバンゾオゾゾッ!」

「ダゴン」 ビガズンゾゾス!」

捕えていた獲物を横取りされたことに腹を立てたのか怪物たちはそれぞれ武器を魔

法陣から取り出して、色白い耳長の怪物は見た事の無い弓矢、黒い耳長の怪物は湾曲した片刃剣を二振りも取り出してブンブンと振り回す独特な剣術さばきを見せた。

「ありやりや…武器なんか出しちやつてまあッ…こつちは両手の華を抱えるのに精一杯なのにい…あとは任せたああ、怪獣王”ッ!!」

ベムラーが点高らかに呼びつけた声に応えるが如く、公園内から紫色の閃光が黒い耳長と白い耳長の怪物に衝突して吹き飛ばした。

「たくっ…結局俺が全部やるのかよ」

怪獣娘たちの窮地に高速で到着したのはミレニアム形態のゴジラであった。

しかし、怪物たちは直ぐに体勢を立て直して立ち上がり武器を持ち構えゴジラへと向ける。

ゴジラも怪物たちと睨み合うも…視線は少しズレてグドンへと向いた。

「おい、その矮小怪獣…いつまでそうしているつもりだ」

話しかけられたソウルライザーを銜えたままのグドンはドキッと身体を身震いさせて、またも颯爽と逃げようとしたが…

「逃げるなあッ！お前は自分の獲物を横取りされておめおめと逃げる程度のみみつちい怪獣かッ!!…その程度で怪獣と呼ばれていた存在だったなら一生逃げ隠れして動物のように惨めを晒し続ける!!」

ゴジラからは最早視線を怪物たちに戻したままグドンに見向きもしないままグドンへの怪獣としての否定を吐き捨てた。

「グルウシヤアアツ…」

ゴジラに叱責され俯くグドンは頭を横に振って赤い目をキラツと光らせるとツインテールのソウルライザーを真上に投げ飛ばして落ちて来た所を大きな口でガブツとソウルライザーを丸呑みにして取り込むとグドンの身体は見る見る内に宿る怪獣としての力が増幅して…身体はゴジラより頭一つ小さいが怪獣娘たちが見上げるほどに大きく変化して身のため一メートル超えの怪獣グドンへと変貌を遂げた。

「ギイシヤアアアアアアア!!」

「フンツ…及第点だ」

ゴジラとグドンは瞬く間に耳長の怪物二体の間近まで迫ってゴジラは黒い方に連続打撃、グドンは白い方に鞭で連打するも耳長の怪物たちは魔法陣を展開して炎や氷を発生させてゴジラとグドンの前にぶつけると一瞬にして水蒸気を発生させ目暗ましをした。

更にそんな目暗ましも束の間に黒い耳長の怪物は剣を白い耳長の怪物は近接用の短剣を2体の怪獣へ貫こうとした…が、黒い耳長の怪物の腹にはゴジラの燃える様な赤い拳、白い耳長の怪物にはグドンの鞭が首に巻き付いて…いずれの致命的なダメージが加

わって耳長の怪物を沈黙させ…彼らの持つ武器は手から落ちると同時にこの世から消えるようにして塵となり消失した。

そして、耳長の怪物たちもダメーヅが決定的になり同じく塵となって消えた。

「…エルフタイプだったか…いよいよ本当にこの世界が歪み始めて来たか」

ゴジラは塵となつて飛び去つた耳長の怪物たちだったものを見つめていたが…ゴドンはそんなゴジラを前に真つ赤な目を静かに閉じて…片足を地面につけてもう片足は屈伸し曲げて宛ら王様に跪く家来が如き仕草でグドンはゴジラに対して跪いた礼を尽くした。

「ふむっ…まあ怪獣としては及第点だが、その決意に免じて敬意を送つてやろう」

ゴジラはグドンの額に三画の自身の背ビレのようなマークをなぞつてグドンへの敬意と称賛を与えた。

「これを元にこれまで通りに怪獣として励め…お前を必要とする者の声に応え、忠を尽くせ」

グドンは怪獣の王からの言葉を深く噛みしめて頷き、赤い目を見開いて立ち上がつてグドンはゴジラの袂からツインテールたちの元へと歩いて帰つて行つた。

そして、その後ろにゴジラは再び高速の閃光と共に消えて行つた。

「グドンちゃん!!」

ツインテールが涙を流しながらグドンに抱き着いてきた。それは離れ離れになっていた者同士の涙の再会の様でもあった。

「よかったね、ツインテールさん」

「ハイッ、グドンちゃんがこんな大きく成長してくれて…私は…痛いくらいうれしいです」

喜びながらもツインテールは頭からグドンに齧られていた。

「ツインテールさん、それ大丈夫なんですか？」

「ああ大丈夫、大丈夫、コレ、甘噛みだから…」

甘噛みと本人は言うが…実際確かに流血は無いがとても甘えて齧っている様には見えない構図にアキの内心に再び心配の気持ちが過った。

「ガアツ…グエツグエツ…グボオアツ!!」

甘噛みに続いてグドンは喉の奥から変な声を出しながらツインテールの頭上に無色透明な体液と共にソウルライザーを吐き出した。

「うわあっ!?!グドンちゃん!?!」

その体液を頭からツインテールが受け止めてしまい…ツインテールの頭から身体はベタベタになった。

「ギャフンッ!」

そして、吐き出したグドンも元の小さなサイズへと戻ってツインテールの頭へと落ちて着いた。

「よっ…よかったですね…ツインテールさん…グドンも…戻ってきてくれて…」

少し引き気味のアキはツインテールと距離を取りつつも精一杯の喜びを伝えた。

「うっ…うん、おかげでグドンちゃんもこうしてまたそろって何よりですう…また姉妹のように仲良くしていきますう」

少々苦笑いながらも喜びを表すツインテールにベムラーが近づいてグドンを見つめた。

「…やっぱり…ツインテールさん、あなたの頭の上の子…どうやらオスみたいよ」

「ええっ!? オスッ!？」

「グドンって男の子だったの!？」

ベムラーはアキのソウルライザーを使ってグドンが吐き出した体液の染色体をスキャンして見た結果は確かに判定上オスであることが伺えた。

「ツインテールさん、あなたのお尻には怪獣娘として覚醒する前に人の様な形をした大きなシコリがあつたでしょ」

「ギョッ!? どっ、どうしてそれを…」

誰にも言っていないかつたツインテールの秘密を突然ベムラーが暴露したことでツイ

ンテールは赤面してお尻を隠した。

「探偵として依頼人の素性を調べるのも仕事の内です…それで、調べたんですがあなたが生まれた病院のカルテを御調べしたのですが…あなたには本来、双子の弟さんが生まれる予定だったそうです」

「わっ…私に、弟がッ!?!」

更にツインテール自身も知らない真実がベムラーの口から告げられた。

「けれど双生児には稀に片方へ栄養が行きすぎて、もう片方が片方に吸収される形で生まれるはずだった片方の名残りだけがハッキリと残ってしまう『畸形囊腫』と言う症例があるそうです…グドンがあなたのお尻を執拗に噛みつくのには、その子がもともとあなたの一部であり、あなたの片割れでもあった名残りだからです」

ベムラーから聞かされた真実にツインテールは頭に乗ったグドンを抱えてジツと見つめると決して離れる事の無い根深い繋がりがあることを知った事によりツインテールの目から涙が浮かび上がってきた。

「そうだったんだ…ずつと…ずつと…私の中で生き続けたって思っていたんだね、グドンちゃん…生まれてこさせれなくて…ごめんね」

ツインテールはグドンを強く抱きしめた。それに応えるようにグドンも抱きしめ返すが…今度は締めに来るような強さで無く、本当の抱擁を返してくれるようになった。

ツインテールに取って地底怪獣グドンは天敵だった…しかし、怪獣娘ツインテールと共に誕生したグドンは紛れもなく彼女にとつての掛替えのない家族であることに変わりなかった。

そして、ツインテールはグドンを抱えたままアキとミオに深々と礼をして夕焼けに染まる空の下を歩いて帰って行つた。

「ミオさん…ミオさんって本当に探偵さんだったんですね」

アキはミオが見せた持ち前の調査力に脱帽していたが…

「ちよつと、それどういう意味!? ずっと私の事なんだと思つていたワケツ!」

「うくん、ピザ屋でバイトする自堕落な自称探偵の…フリーターさん?」

「それかニートだな」

辛辣な評価をしていたアキにさらに被せてユウゴも帰ってきていた。

「二人して酷くないツ!」

「だったら少しはそれくらい働きぶりを出せよ…そんなだから経営がうまくいかない貧乏探偵のままになんだろうが」

「ああもう煩いな! 今回ばかりは私のおかげで真実に辿り付けたんだから実質私が大活躍でしょ! 巡り巡って私が偉いの! 総合的に偉いの! 少しは褒めてよ!」

ミオはプンプンツと頬を膨らませながら自分を美化しつつも子供染みた態度で自分

「うるせえな…：社交辞令だ、社交辞令」

真顔で誤魔化すユウゴの顔を覗き込むアキはクスクスと口元押さえて笑った。

「お兄ちゃんって恋愛感情とかあるの？」

「お前、俺をなんだと思ってるんだ…：少なからずあるとは思う」

「ホント？？じゃあミオさんの事はどう思っているのさあ」

「社会不適合者」

夕焼けから沈む太陽の輝きが消え始めた群青の空が広がる頃にミオの探偵事務所へと歩むのであった。

ベーコンパニック

—チュン…チュンチュンツツ…

「んっ…んう…んんっ…」

目が覚め、掛布団を捲り上げて起こした身体は長時間の睡眠より目覚めたアキはいつも以上に眠そうな目を擦って立ち上がった。

黄色い寝間着姿の彼女は未だ寝ボケたままに意識の中から日課の行動をなぞるようにして家の中の居間に位置する部屋へと入って行った。

髪は寝ぐせで逆立ち、大きなあくびを吐き出しても、空腹は抗う事の出来ない整理現象に見舞われながら…居間に入ってすぐに台所へとたどり着いた。

—ジユウウウツツ…

「おはよお〜」

台所内のコンロでは目玉焼きとベーコンを焼く音が響き、その横を通り過ぎてアキは冷蔵庫を開けて牛乳を取り出してコップに注ぎ満たしたら一気に飲み干す…再び居間にはテレビと向かい合うようにソファアの前に座り込んで朝食を待つ…

しばらくすると完成したベーコンエッグと焼けたトーストが来た。

「いただきます…」

未だに眠い目は開いているようで閉じている様にも見える眼だが食べ物の認識は匂いと触覚で判断して無意識の内に口へと運びモグモグと食べ進めた。

—シャカシャカシャカシャカ…

—ブウイイイイイン!

洗面所では朝食を終えたアキが後ろから髪を解かされながらも歯を入念に磨きあげて口を濯ぎ這い出すとだんだん眠気も冴えて来てアキの今日という一日が始まった。

「ボオオエエエエエエエエエエツ!!」

朝一で洗面台の横のトイレからデスボイスみたいなのこの世の終わりを一色淡にして吐き出すミオを成人女性の介抱とは名ばかりにユウゴが背中を足蹴りしていた。

「何してるの、お兄ちゃん…ミオさん…」

「このアホ、昨日の夜まで酒しこたま飲みまくって、このありさまだよ」

「うげっ…ぎもじわるいいい〜」

● ●
トイレの便器に頭を突っ込みながら吐き出しきったミオは真つ青な顔を晒しながら二日酔いに見舞われていた。

なぜミオがアキとユウゴと共に同じ家に居るワケは遡ること昨日であった。

「あのままでよかったの？ お兄ちゃん…」

「起き出したらめんどくさい事になるから路上に放置するよりかはマシだろう」

ミオの探偵業を手伝い終えた2人だが肝心のミオは電柱などに頭をぶつけ気を失った彼女を探偵事務所まで担ぎ込んで運び終えた後にユウゴのバーへ帰る途中だった。

やがてマンション裏地の扉に辿り着くとユウゴは鍵を差し込んで開けようとしたが

：

「んっ、鍵が…開いてる」

「えっ、ウソツ…ドロボー!？」

何者かに侵入されている形跡を察知したユウゴは扉に手を翳してゴジラの超感覚による知覚認識で店内の気配をソナーのように把握すると…中には誰かが1人だけいる。

ユウゴはアキへ壁に寄るようにハンドサインを向け…アキもそれに従うように壁を背にした。

そして、ユウゴは出入り口の外開きからすぐに開いて入れる位置に付くと…一気に開いて中へと入った。

「なっ…なんでテメエが居んだ!？」

ユウゴが先に中に入るとそこには意外な人物がいた。

「誰が居たの?……えっ!？」

「やつほくおかえりイ〜二人とも」

後に続いて入ると中に居たのは優雅にバーカウンターでグラス片手にお酒を嗜んでいたミオが居たことに二人が驚いた。

「あんた、事務所に置いてきたはずだろう…どうやってここまでッ!？」

「私が車でご案内したのです」

厨房の奥から手拭いで手をふき取りながら出てきたのはダグナだった。

「ダグナさん、どうしてですか?」

「ユウゴ君が信頼を置く天城ミオさんにご依頼申し上げたのです…今後アキさんの身の回り、分けても私生活に関してサポートをしていただくため御呼びしました」

「つまり、今後私もユウゴ君とアキちゃんのおうちに住むことになったワケよ」

日常的なGIRLSの活動中はダグナたちがアキを警護する傍らで私生活圏内ではどうしてもアキと共にいられない場合の為に同じ女性同士で気兼ねの無いミオが抜擢されたのであったが…

「…いくらッ…いや、何で引き受けたんだテメエ」

「衣食住三食御飯付き事務所滞納経費負担…何より…ただ酒ッ!」

グラスを掲げて宛ら呪文のように自身が引き受けた理由をスラスラと答えたミオは満面の笑みでアルコールによる火照った顔が笑顔を見せる。

「だから今後は私もアキちゃんの面倒を見てあげるからあくアキちゃんも私の事はお母さんでもお姉ちゃんとも思ってもらっていいよ、何なら呼んでほしいなあ」

ミオのワキワキといかがわしい手つきを向けてきたためアキは身の危険を感じ取ってユウゴの背中に隠れた。

そして、ユウゴも：

「東北に帰れッ」

額に血管を浮かばせて苛立つ気に向けた。

「やだあく〜!!もう田舎もやなのおお!!でも都会の日銭稼ぎもやなのおお!!今まで住まわせてあげたんだから私を養つてよおお!!私を食わせてよおお!!なんなら楽をさせてよおお!!私に楽をさせろおお!!」

ミオはバーカウンターに突っ伏して宛らバーの席で酒を片手に都会の荒波に飲まれ切った元田舎娘の嘆きが零れた。

「御辛い状況の中、ご依頼を引き受けていただき感謝していますよ、天城ミオさん：慣れない土地で悪戦苦闘する中でも努力していらつしやる御気持ち、お察しいたします」

嘆くミオに空いたグラスと酒に満たされたグラスと交換してミオの愚痴を親身に

なって受け入れたダグナにミオは顔を上げて涙目のままダグナの顔を覗いた。

「ダグナしゃあん…あなただけよ…あなただけが私のことわがってくれるのわあああ!!
わああああじあわぜになりだあい!!」

それまでクールな探偵の様な雰囲気のある大人の女性であったミオに酒の魔力が加わって普段見せない内面に秘めた悩みが露見するほどに心身が衰弱していたことが伺えた。

「ぐすんっ…結婚とかまだそこまで考えることは無いけどさあ…もう一人は辛いよ、20代であるうちなのにもう将来の不安とか、親戚の心配と後ろめたさとか、私を苦しめる壮絶な過去とかあ!…もういやあ!!せめて恋愛がじだいいいッ!!」

ダメな大人だ。とことんダメな大人の典型的なパターンだった。果たしてこんな女性にアキの世話どころか自分の生活もできるのかと疑念が浮上するが…



案の定ダメな様子だった。吐きに吐き出したミオは居間でアキと共にいるが…

「う〜んッ…きもじわるい…うぶっ、まだ気持ち悪い…」

「みっ…ミオさん…ちよっ…近いよ」

ミオの酸っぱい匂いとアキのフルーツ歯磨き粉の匂いが朝から入り混じった現状にアキ自身も食べた物が出てきそうな気分を口元押さえ堪えていた。

一方、ユウゴは台所に立ってみると壮絶な状況に目を疑った。

「なんだこの酒の量と……すもも漬けかコレ？」

無数に散乱する酒の空き缶や空き瓶に加え、彼女の好物である“すもも漬け”の残骸が散らばっていた。

とりわけ一際目立つのはシンク内の謎のタツパーの数々だった。

「んっ？……まさかっ!？」

ユウゴが慌てて冷蔵庫を開いて確認すると……冷蔵庫内に本来収納されていた物はすべてタツパーに収めて入れている……何なら作り置き料理もタツパーに入っているハズだったが……シンク内のタツパーがそれを物語っていた。

「ゲエ〜〜〜プツ……吐き出したらなんかお腹すいちゃった……ねえ、ユウゴ君ごはんまだあ〜っ!？」

犯人の目は付いた……ユウゴはそつとりビングと廊下に通じる扉を閉めた。

「ぎゃあああああああああああッ!!」

さんざん酒とタツパー内の食料を食い尽くした犯人にはユウゴに両脚の腿の裏側を絡まされ、両腕を掴まれ引つ張り、床に背を向けてそのまま相手を天井に吊り上げる。

えようとしていた。

結局、ダメージが絶大で息が荒げるほどにソファーに転がったミオは両手で脇腹を押さえ蹲っていた。

「ひいゝひいゝ…末恐ろしい兄妹だわ…ホント…」

「オメエは身の振り方を考えないバカだよ」

呆れ返ったユウゴとアキの元に居間から通路に通じるドアが開いてダグナが袋を抱えてやってきた。

「おやおや、朝から随分と賑やかな御様子ですね」

「お前、このアホに酒どんだけ与えたんだ」

「はははっ、御話し相手になる程度には…」

元凶はダグナだった。あれからミオの愚痴を散々店で聞いただけでなく、宅飲みに続いてもダグナはミオの愚痴に酒とつまみを交えて彼女が眠りに着くまで聞き続けた。

「ううっ、この家はダグナさん以外わたしに優しくないよお…甘やかせ！私に寂しい思いをさせないでよ！余計にお酒が進んじゃうじゃない！こう見えても私は飲み友達と朝まで飲み明かした後に路上でリンボーダンスしたり、ゴミ捨て場で朝を迎える様なことなどしよっちゅうだよ！」

「自慢げに語ることじゃねえだろう…反省しろ、ダメ人間ならぬダメ怪獣が」

ミオのダメさ加減に呆れ返ったユウゴは額にまた血管を浮かばせて彼女の酒癖の悪さに 責めた。

そうこうしているとミオやユウゴの分のベーコンエッグに余り物のベーコンとベーコン料理がテーブルに並べられた。

「……………どうでもいい事なのでしょうが…そちらの方はどなたですか？」

「「えっ？」」

ダグナに指摘された方向に3人は振り向くと…そこにはベーコン料理を運んだエプロンをつけた赤い目と黄色い発光球体を持つ全身深緑色のトゲトゲしい怪獣が何故か居た。

「ぎゃああああああああああああ!!」

「なっ、なんだね、ちみは!!どこから入ってきた!？」

「なんで俺の後ろに隠れんだよ」

ミオとアキはユウゴの背に隠れ、彼を盾にして謎の等身大怪獣に一体誰なのかを恐る恐る尋ねるが…謎の怪獣はテーブルの下からプラカードの様なものを取り出した。

「アイム ビーコン」

怪獣はプラカードを介して皆に意思疎通を図ってきた。

「びっ…ビーコン?」

「ビーコンって何ッ!? ユーアー怪獣ッ!」

【イエス】

謎の怪獣ビーコンは怪獣であることに同意するが…認識上の怪獣とは山のように大きな生物であるにも関わらず、目の前の見た目ままの怪獣ビーコンは怪獣と言う定義では小型に属するほどに小さいがユウゴより小さく、アキやミオよりも大きな見た目は最早「珍獣」の域であった。

「んで、その怪獣ビーコンとやら…お前はどこから入ってきた?」

ユウゴが変わってビーコンに尋ねると…ビーコンは再びプラカードを回転させた。

【イン フロム テレビ】

回転したプラカードの文字から察した通り、どういうワケかテレビがずっとつけっぱなしの状態である通り、侵入経路はテレビだった。画面はテレビのHDMI画面であるため暗転した状態のまま消えているものだと思っていたが、実際は確かに起動ランプの色が起動中の色に変わっていた。

「だれだ、つけたままにしたヤツは…」

「ボクじゃないよ…昨日ちゃんと消したもん」

「私はお酒の記憶で覚えてない!」

● そう豪語するミオだが…

—深夜4時頃—

「クカアアアア〜…むにやむにや…」

誰もが寝静まつている時間に酒で酔いつぶれたミオはソファアに寝つ転がっていたところ…

「ふんにやあ〜あ〜…」

寝返りを打つ拍子に手の甲がソファアに置かれていたテレビリモコンの起動ボタンが当たってテレビが付くと…テレビは深夜の番組が突然流れ出した。

『—では、ここでツインテールさんに問題です!—』

「ううん…うるざいなあ…」

ミオは寝ぼけたままテレビのリモコンに手を掛けて消そうとするも謝って入力切替ボタンを押して別画面のHDMI画面に切り替わりテレビは暗転した。

それを消したと勘違いしたミオは再び寝拭けるが…テレビは付いたままだった。

—ニユウオオオオオ—

そこへテレビの液晶画面から液体のように歪み現れたのが他でもないビーコンだったのである。

結果、ユウゴは何となくこの中で元凶となる者が誰なのか鋭い目でその者を睨んだ。
「なんでそんなに私を睨むのよお……お姉さんは覚えてないよ」

シラを切るミオだが、本人も薄々寝ほけていても記憶が妙に曖昧でも、おそらく自分である可能性があるため目がキョロキョロと泳ぎながら冷や汗が滴っていた。

「とりあえず、一旦GIRLSの方に確認を御取りいたしますか？」

ダグナの提案で謎の等身大怪獣ビーコンをGIRLSに連れ出すことが決まった。

—GIRLS・東京支部—

自宅に突如として現れた謎の怪獣ビーコンについて調べるためアキとダグナはビーコンをGIRLS東京支部に連れて来た今現在、トミミを交えて怪獣娘専用のトレーニングルームにてビーコンの詳細を調べていた。

「ありました！この方の正体は電波怪獣ビーコン、数十年前に電離層圏で生息が確認された怪獣だったようです！」

トミミがビーコンの容姿をスキャンした結果、怪獣娘やユウゴたちが生まれる以前に

出現した怪獣の同族であることが発覚した。

「当時、主食の電波を求めて東京に上陸したと記録されています…けど…」

電波怪獣ビーコンの食用は電波であると記載されている事とは裏腹に…目の前の等身大怪獣ビーコンが常食する物は意外にも加工肉の燻製、すなわち『ベーコン』であった。今もムシヤムシヤとどこから持ってきたのか分からないベーコンの塊を食していた。

「う〜んツ…特に危害を加える様な感じもありませんし…このサイズの怪獣さんは怪獣の該当には当たらないので怪獣として認定するには難しいです」

「はい…どういうワケか、ボクらと同じくらいの大きさですし…でもやっぱり怪獣じゃないんですよね？」

「そんなことはありませんよ…私のカイジューソウルの元であるピグモンの体長も1メートルしかないですが、れっきとした怪獣として分類されていますよ」

「じゃあ…これは……なんですか？」

やはり真相は分からず、なぜ今頃になつて怪獣の出現が無くなったこの時代にまんま怪獣の姿をした謎の生物がいるのか首が傾げるしかなかった。

「う〜んツ…とりあえず、ビーコンさん！あなたの目的は何ですか？」

「イーツ トウ ザ ベーコン」

「はい？ああ…どうも」

意思疎通を図ったトモミだが…どういうワケか、ベーコンの塊を手渡され、逆にどう反応していいのか分からず困ってしまった。

「うっ、うくん…とりあえず会話が出来ているようなので知的生命体の類に該当するかと…」

「いま、出来てませんでしたよね…完全に受け答えに困ってましたよね」

「きつとベーコンが大好きな怪獣むすツ…生物さんなのでしょう」

「怪獣娘とも認識できない生き物を『生物』で括らないでください…第一、なぜベーコン？」

ビーコンがトモミに渡したベーコンはビーコンに取って何かを伝えたい意志がそこにはあるようにも思えるが…何故ベーコンなのかアキは理解に苦しんでいた。

【イーツ トウ ザ ベーコン】

「もがっ!？」

今度はアキに手渡しではなく直接彼女の口の中にベーコンの塊を突っ込んできた。

「も(も)い(い)…しよつぱい」

ベーコンの塊は単体での塩分量がそれなりに高かった。

「まあ…ベーコンは確かにおいしいかも知れませんが…あまり押し付けるのはよろしく

ないですよ、ビーコンさん」

無理やり押し付けようとしてくるビーコンを優しく宥めようとしたトモミの言葉にビーコンは何やらガーンツ！とショックを受けた様子だが…

「とにかく、もしかしたら例の『特生怪獣』さんに関係する方なのかも知れませんが…エレエレたちが埼玉県警から戻ってきたら詳しく調査をしましょう…それまではGIRLSに保護する方向で…」

「そうですね…ってアレ？ビーコンは？」

振り返れば忽然とビーコンの姿が消えていた。

「おや、先ほど部屋を飛び出して行かれましたが？」

「なんでそれを言ってくれないんですか!？」

「とっ、とにかくビーコンさんを追いかけてみましょう!…あれ、ビーコンさんでしたっけ…

いや、ビーコンさんでした!ややこしいですう〜!!」

紛らわしく名前に困る謎の怪獣生物を追ってアキとトモミはGIRLS内に消えたビーコンの後を追った。

—GIRLS内・ファイトルーム—

「おりゃあああ!!」

「きゃああああ!!」

「おらおら、どうした!もつと攻めろ、シーボーズ!」

大怪獣ファイトの選手様に併設されたレスリング用のリングが特設されている部屋にはミクラスを始め、スパーリング相手には同じ年くらいであるが怪獣娘としては先輩に位置する骨の様な外殻で覆われた怪獣「シーボーズ」がレッドキングの指導の下で大怪獣ファイトの模擬戦に励んでいた。

「おつしやあ〜!とつておきの新必殺技おお……ありい?先輩、ソイツ誰つすか?」

「ああ?……つて、うわつ誰だツ!」

レッドキングが振り返ると真横には何故か右目に眼帯をつけて首にタオルを垂らし、手には竹刀とベーコンを持ったビーコンがいた。

「あつ……あたらしい怪獣……娘さん?でしょうか?……もがああ!」

恐る恐るビーコンに尋ねようとしたシーボーズだが……滴る汗が物語る通り彼女は今までに疲労困憊な状態であるため水分が必要だが……そんなことお構いなしにビーコンはシーボーズの口に塩分たっぷりなのベーコンを彼女の口に突っ込ませた。

「きゆうううっく……」

度重なる疲労と水分不足の身体に塩分の塊のベーコンが突っ込まれたことによりシーボーズの意識は塩分過多による急激な血圧上昇によってぶっ倒れた。

「ちよつと！なにしてんのさあ…もがっ!？」

「おい、やめ…もがごっ!？」

止めに入ろうとしたミクラスとレッドキングにビーコンは彼女たちの口の中に無理矢理ビーコンを捻じ込んだ。

「イーツ トウ ザ ベーコン！」

この謎の言葉が記載されたプラカードとまたしてもビーコンの塊を手に颯爽と何処かへ去って行った。

そんな被害現場に一足遅れてアキとトモミが到着した頃には既に手遅れな状況であった。

「はあつはあつ…うわっ！ミクちゃん、レッドキングさん、初対面の怪獣娘さん、しつかりしてください!!」

アキは顔見知りの2人と殆どあつたことも無いシーボーズに駆け寄って安否を確認するが…

「しっ…シーボーズ…です…べっ…ベーコンが…変な怪獣が…ベーコン…を…むっ…むっ…むっ…むちやくちやしよっぱい」ーガクツ…

辛うじて意識のあるシーボーズが最後の力を振り絞ってアキに何があつたのかを伝えたが…結局塩分過多による眩暈で意識を失った。

「大変ですよ、ピグモンさん…このままだとGIRLS内が…ベーコンに襲われッ、じゃなかった…ビーコンに襲われます!!」

「たっ、直ちに警戒を発令いたします!!」

トモミはGIRLSの怪獣娘たちが所持するソウルライザーに宛てて一斉送信メールより注意を呼び掛けた。

—GIRLS内・食堂—

「んあ?メール…ピグモンさんからだ」

「なんだろう、緊急警戒?なんか大ごとみたいだけど…」

食堂では音楽活動に専念するサチコとミサオの二人が練習終わりに昼食のランチに食堂前でトレーを持って並んでいたが、突如としてトモミから届いたメールに首を傾げた。

「大きな赤い目に黄色い鼻のような怪獣がベーコンを振りまいでいるので注意?…何それッ」

「わっつけわかんない…怪獣が暴れているならともかく、ベーコンを振りまいてるって…すみませ〜ん、B定食!」

サチコが注文したB定食には大きなベーコンを厚切りにして焼き色を付けた御飯味

噌汁付きの質素な定食だった。

「ナニコレツ?!」ごはんのおかずがベーコンだけってどういうこと!?!いつものB定食は!? これじゃあベーコン定食じゃん!!」

「あんたはまだ良い方じゃん…あたし、A定食頼んだのに…」

変なB定食にギャンギャンと文句をつけるサチコだが、その横でミサオの定食にはおらずにベーコン、ご飯も刻んだベーコン、汁者には燻製汁に浸ったベーコンスープだった。

「なあんなのよおおお!!こんなふざけた定食なんて誰が作ったのよオオ!!」

サチコは怒りに沸き上がった感情を食堂内の者に文句を放つが…中には三角巾にエプロンを付けたベーコンがベーコンをクレーバーナイフで刻む姿が見えた。

「ぎやああああ!!ベーコンを振りまいてる怪物だああ!!」

あまりにも見た事の無い光景に衝撃を受けた2人は大声で叫ぶが…

「カレエ、カレエ、ゴモたんはカレーが大好き♪」

そんな中で2人の叫びなど耳に届いていないミカツキがカレーライスをトレーに乗せて歩く所にすかさずベーコンは赤い目から怪光線を発射してミカツキのカレーを大きなベーコンの塊に変化させた。

「ふぎやああ!?!ゴモたんのカレーが変な肉の塊に!?!」

それだけに飽き足らず、ベーコンは様々な料理を食している怪獣娘たちの料理をことごとくベーコンに変えようと怪光線ならぬベーコン光線を発射して料理をすべてベーコンに変えた。

「ふあッ!? 私のソバがあ!?!」

緑の髪留めを付けたGIRLSの怪獣娘の料理もベーコンに変え…

「ふぎやあ!?! なんてかき氷がベーコンにいい!?!」

白髪の小さな体格の怪獣娘がデザートに食べていたかき氷はベーコンに変わり…

「いただきます…」

「えええ〜ユリカ、それ一人で食べるの?」

「うん、いつもこれくらい…」

漫画でしか見た事の無い骨付き巨大肉を食べようとすると巻き髪の怪獣娘に対して少し驚くメガネの怪獣娘はその様子を見守るが巻き髪の怪獣娘が食べようとして骨付き肉はビーコンの怪光線を受けて巨大なベーコンに変わった。

「うわっ、漫画肉がベーコンになっちゃったよ!?!」

「あら……まあ、でも肉であることに変わりないわね」

巻き髪の怪獣娘は意にも介さず骨付き肉から変化したベーコンを食べたが…突然バタンと倒れた。

「ユリカツ!」

突然の事に驚いたメガネの怪獣娘は立ち上がって巻き髪の怪獣娘の肩を揺すった。

「しつかりして、ユリカ、ユリカ!!」

「うっうう…しよっぱい…気持ち悪い」

ビーコンが放った怪光線で変化したベーコンはそのあまりにも多すぎる塩分量に一口食べただけで頭がフラフラして眩暈を起こすほどに塩分過剰摂取に至った。

そして、ビーコンはどこかへと去って行った。

— GIRLS内・医務室 —

怪獣娘の日々荒々しい生活であっても怪我は縁切れない存在であるため、普段は専門医などが医務室を担当するが…この日、非番から駆り出されていた精神科医にして彼女たちと同じく怪獣娘の百地メルは現状に驚愕した。

「……あのさあ、私はカウンセラーだけど確かに医師免許もあるし、医学にも精通しているわよ…でも、これは一体どういう状況ツ!」

「うう〜べつ、ベーコンが…ベーコンが…」

「ベーコンは嫌だ、口の中がしよっぱいよお!」

「ぐっぐるじいじい」

「みつ、水…真水をくれえええ!」

「頭いたああい」

メルが困惑するほどに質実剛健で健康優良な怪獣娘たちが一同に突然唸るほどの体調不良を訴えていた。

しかもまださらに続々と体調不良に倒れた怪獣娘が運び込まれた。

「先生エー！ユリカが、ユリカが!!」

「ううつ、ベーコンはヤダッ！ベーコンはイヤッ!…ハム…ハムが良い!」

覽される巻き髪の怪獣娘が担架で運び込まれて来てようやく医務室の病床が完全に埋まった。

「何がどうなったらこうなるのよ!?!」

状況が呑み込めないメルは頭を抱えた。

・
・
・

一方、ベーコンのベーコン攻撃を受けていないアキたちは辛うじて難を逃れた動ける怪獣娘たちを引き連れてGIRLS付近を搜索していた。

「アギさん、ミクさん大丈夫でしょうか?」

事態を聞きつけたレイカはウインダムに変身してベーコン搜索に駆り出されたが…

「うっ、うくん…何とも言えない」

事の発端を作ってしまったアキもアギラに変身して責任感に苛まれていた。

「あんのおギョロ赤目エ…見つけたらギツタギタのボコボコにしてやるんだからああ!!」

「どうやるんだよ！相手はモノホンの怪獣だぞ！」

昼食が碌に取れなくて怒り新党のサチコとミサオもザンドリアスとノイズラーに変身して何故か片手には虫取り網を持って探し回っていた。

「食べ物すべてベーコンに変えて、食べるものを持っていなくても口にベーコンを捻じ込んでくる…なんか恐ろしい怪獣っすね」

「はわわわっ、怖いけど…頑張ります」

応援として最近GIRLSに入ったばかりの怪獣娘マガバツサーとマガジャツパと言う珍しいタイプの怪獣娘も参加して、前者の二人同様何故か虫取り網を持って探していた。

「皆さん、いいですか…相手はどうあれ怪獣の能力を有する存在です、見た目に惑わされず気を付けてください！」

「!!!!!!ぎよお?!!!!!!!」

トモミもピグモンとして変身を遂げてビーコン搜索の指揮を取るにあたっての注意

をするが…6人の怪獣娘たちはピグモンの後ろにいるビーコンに驚愕した。

「特に何故か執拗なまでにベーコンを捻じ込んでくる攻撃には注意してください…ここまで数多くの怪獣娘さんたちが被害を受けているので見た目はノホホンとした感じでも攻撃そのものは驚異的ですので——」

どうにかピグモンの話を聞こうにも怪獣娘たちは彼女の後ろで彼女の動きを真似するビーコンにしか目が行っていなかった。

「皆さん、聞いていますか？」

「びっ、ピグモンさん、後ろっす！後ろ!!」

「後ろ？誰も居ませんけど？」

ノイズラーの指摘にピグモンは後ろを振り返ったが…誰もいなかった。そのはず、ピグモンが後ろを振り返ればビーコンも彼女の視線に合わせて回り込むため彼女自身見えていなかった。

「まったく、集中してください！いいですか——」

「おんりやあああ!!」

「わぶっ!!」

「あぎやつ!!ごめんなさい…」

待ちきれずザンドリアスが先手を打って仕掛けたが…ピグモンの頭に虫網が被さつ

ただけであった。

「そつち行つたぞ〜！追ええええ!!」

全員が虫網を振り回しながらビーコンを追いかけるが：ビーコンは空中にうつ伏せで浮遊しながらスイーツと飛び交うだけであった。

—GIRLS付近・公園—

ビーコンを追っている内にマガバツサーとマガジャツパは集団に逸れて公園へ訪れていた。

「ありや…みんなと逸れちゃった」

「どつ、どつどうしよう!?!」

皆と逸れたことに頭をかくマガバツサーとあわあわと慌てふためくマガジャツパだったが：そこにビーコンの魔の手が迫っていた。

「どつ、とにかく皆さんと合流を…あれツ？マガバツサーさん？」

一瞬、目を離れた隙に近くにいたにも関わらず音もなく消えたマガバツサーを探してあたりを見渡したマガジャツパだが段々と血の気が引いてきた。

「まつ、マガバツサーさあん…どつ、どこ行かれたんですかあ…うつ、なんだか燻製臭い…つて、キャアアア!!」

公園内の変な十字架のオブジェにマガバツサーは括りつけられているだけでなく、妙に燻製の様な匂いと共にグツタリとしていた。

「につ…逃げろ…くつ、燻製にされるううう…ガクツ」

辛うじて意識はあつたものの青ざめた表情で意識を失った。

「そつ、そんな…誰か助けえ…ヒヤツ!!」

ズルズルと後ずさりするマガジャツパは背後にぶつかる何かがいる事に気づいて彼女もまた顔の血気が引いた。

恐る恐る後ろを振り返ると…ベチャツと頬に何かに触れ、燻製の様な匂いが鼻を突いてきた。

—GIRLS付近・公園近く—

「マガマガさんたち、どちらへ行かれたんでしよう…」

「そう遠くに行つてないと思いますけど…」

消えた2人を探しつつもベーコンに警戒をする中…：突如のことだった。

「キヤアアアアアアアアアアア!!」

大きな叫び声に釣られて残された怪獣娘たちが一斉に公園の方に顔が向いた。

「今の声…マガジャツパさんだ!」

「ふぎやあ!?!あの二人もベーコンの餌食にツ!?!」

「行きますよ、ザンさん！」

全員は慌てて公園に向かうが…

「やつ、やめてください！ベーコンを…ベーコンを塗りたくらないでえええ!!お風呂に入ったばかりなのにいいいい!!もがつ?！」

今まさにビーコンに襲われている最中のマガジャツパの元に仲間の怪獣娘たちが駆けつけてきたことを察知したビーコンはそそくさと消えた。

「マガジャツパさあくん!!うわつ、なにこれ…」

アギラたちが駆けつけた頃には手遅れでマガバツサーはオブジェに括り付けられ、マガジャツパは口にデカデカと大きなベーコンを突っ込まれ…二人とも燻製臭が漂っていた。

「うげつ、なにこれ…ベーコンの燻された匂いに石鹼の匂いが混じった匂い…くさあくい」

「おまえ、失礼だろ」

言葉を選ばぬザンドリアスと共に鼻を押さえるノイズラー…二人は特にマガジャツパの放つ匂いが耐えられなかった。

「まずいですよ…このままだと皆さん、全滅…はああ!!私、今ぜつたいフラグ立てちゃいました!！」

自分が行った言葉に恐ろしくなったウインダムは口を両手で閉ざしたが…フラグ通りとばかりに上からビーコンが怪光線をウインダムに浴びせてきた。

「ぎゃあああああああああああああ!!」

「ウインちゃん!？」

「ああああ…あれ?なんともありません」

怪光線を受けたウインダムだったが…なぜかケロリとしているほどになんともなく無傷だった。

「だっ、大丈夫なの?ウインちゃん?」

「ええっ…特には…:…んっ?…ぎゃあああああああああああ!!」

なんともないと言い切ったウインダムだったが、どうしてか遅れて大きな声を上げて叫び出した。

「どっ、どうしたのウインちゃん!？」

「わっ…私の漫画が…私の漫画の登場人物があ…全部ベーコンになっていますう!!」

ウインダムが手に持っていた薄い本、所謂同人誌と呼ばれる二次創作漫画のキャラクターがすべてベーコンに置き換えられていた。特にその本は男性同士の絡み、所謂ボーイズ(B)ラブ(L)漫画の類の本は軒並み登場人物がベーコンに変換され、まさにベーコン(B)ラブ(L)漫画になっていた。

「わっ…わわわっ、諏訪さんがあ…木曾さんがあ…きゆううう!!」

あまりの衝撃にウインダムは意識を失ってその場で気を失った。

「ウインちゃん!!」

「コノヤロー!!よくも先輩をおお!!」

感情的になったノイズラーは自前のギターを抱えて攻撃を仕掛けようとするも…

ビーコンはすかさず怪光線を発射した。

「ふわああ!!あたしのギターとピックがデカイベーコンとカリカリのベーコンに落ちちゃった!」

「ええっ!?もう、何やってんのよ!!こうなったら私の声でええ…はああツモガツ!」

「ザンドリアスウウ!?モガツ!」

攻撃を加えようとしたザンドリアスとノイズラーもベーコンを口に突っ込まれ意識を失って倒れた。

残されたのは殆ど戦闘力の無いピグモンとアギラだけになって絶対絶命であった。

「はあわわわッ!皆さん、しっかりしてください!!」

「どっ、どうしよう…誰か助けてえ…ううっ」

ジリジリと二人の前にビーコンの両手に持ったベーコンの脅威が迫る中、突如火球が飛んできてビーコンはソレをベーコンで弾くとベーコンはプスプスとこんがり焼かれ

ていい感じにいい匂いが充満した。

「あなた達、何しているの?」

「ぜっ…ゼットンさん!!」

突如として助太刀に現れたのは最強の怪獣娘ゼットンだった。

「ゼットン! 助けてください!!」

「そう、この状況…あなたの仕業ね…:…なら、倒す」

同じく浮遊能力を有するビーコンも浮かび上がってゼットンと空中に並び立ち…双方が強い視線で睨み合った。

その瞬間、ゼットンが先に仕掛けてきた。ゼットンは刹那の早業に匹敵する拳を振るもビーコンはソレをベーコンでいなす、拳をいなす、拳をいなす、どれだけ連続して攻撃を加えても何故かベーコンでいなされた。

「あなた…何者?…:…只者、じゃない」

すぐに近接は分が悪いと判断したゼットンは瞬間移動で距離を取った。しかし、それが弱点だった。

瞬間移動とは相手から一瞬で消えていなくなるとさえ認識するほどに早く移動できるが、逆にゼットン側も移動と共に相手が一瞬だけ見えなくなることが欠点だった。

自分自身がその場から消えた瞬間にはもうビーコンはソレも居なかった。

「どっ！？」

辺りを見渡してもビーコンは居ない：普段は感情を表に出さないゼットンもさすがに冷や汗が止まらない戦慄が走った。

「ゼットンさん！後ろ!!」

アギラの声に振り返った先にゼットンが目にした光景に更なる戦慄が走った。

「ゲート オブ ベーコン」

それは空間より出でる無数のベーコン、一般的なミドル・ベーコンを始め、メープルシロップのグレージングでテカるピーミールベーコン、ドイツのシュペック、イギリスのラツシャー、そのほか様々なベーコンに類似する加工燻製肉が多数出現してくる光景にゼットンは今まで出してきた中でも硬質強度の高い全方位バリアを展開する…が、ビーコンはソレを見計らったかのように出現させたベーコンをどこかへと仕舞い消した…と、同時にゼットンのバリア内で空間の歪みが発生して続々とバリア内にベーコンが侵入してきてゼットンはベーコンに埋め尽くされ、もはや彼女が中にいる事を示すのは真上に残る彼女の黒い手だけが唯一の生存確認だった。

「ゼットンさああん!!」

やがて浮遊を維持できなくなったゼットンのバリアは上から急降下して落ちて来てアギラたちの前に大きな陥没穴を形成してバリアが消えると同時にベーコンも消えて

中から燻製臭に見舞われたゼットンが意識を失っていた。

「ゼットンさん！そんな…ゼットンさんまで」

「ぎゃあああああああ!!」

「この声…ピグモンさん!？」

案の上、ピグモンもビーコンのベーコン攻撃にあつて口の中をベーコンまみれにされていた。

残るはアギラただ一人だけであつた。

「そんな…やめて…来ないで…」

奇怪な鳴き声を上げながらジリジリと迫るビーコンの両手のベーコンの油分がキラリツと光っていた。

「いや…いやだ…助けてええお兄ちゃあああん!!」

アギラはどうとうこの状況を打開できるのはユウゴのゴジラとしての能力に頼るしかなく、悲痛な叫びをあげた…瞬間だった、ビーコンの顔面に目掛けて巨大な足のドロップキックが炸裂した。

「何やってんだテメェら」

「ふわあ…お兄ちゃん…」

今まで未知なる正体不明の怪物の時にだけ助けに来てくれたゴジラだが、アギラに迫

るビーコンのビーコンと言うワケが分からない窮地にも助けに現れた。

「いい加減にしろ…ビーコンが好きなのはわかったが、無理やり押し付けるな！あと食べ物も粗末に扱うな！」

「怒るトコ、ソコ？」

的を得ていることは言っているがアギラは『もう少し怒るべきポイントがあるのでは？』と心の内に思った。

しかし、そんな時も束の間…ビーコンから新たなプラカードが出てきた。

【ビーコン フィールド】

プルプルと震わせながら起き上がって足跡がクツキリ残るビーコンの顔面だが…今度は黄色い発光部から上空に向けて閃光と共に球状態の光にアギラとゴジラ、そしてビーコンも包まれていった。

—ビーコン—30分クッキング—

ビーコンから放たれた閃光は異空間を作り出して、宛らテレビ番組セットの様な空間が広がっていた。

周りにはAD風のビーコン、制作進行風のビーコン、ディレクター風のビーコン、演出家風のビーコン、そして上着の袖を首に掛けたプロデューサー風のビーコンと一つの

番組を作るには十分なメンツがすべてビーコンだった。

「みなさん、こんにちは」

「こんにちは」

そんな異空間内で何故かエプロン姿のアキラとゴジラが1カメに向かって深々とお辞儀をした。

「本日は新じゃがとブロックベーコンを使ったベーコンたっぷり『ジャーマンポテト』を作っていきます…料理していただくのは怪獣料理家のゴジラさんです」

「よろしくお願いします」

「まずは材料の御紹介です」

・ジャガイモ 4個

・ブロックベーコン 200グラム

・バター 1切

・粉コンソメ 大きじ2

・粉チーズ 適量

・乾燥パセリ 適量

「それでは早速作っていきますでしょう、まずはジャガイモ4個を皮付きのまま角切りにし、耐熱容器に入れましたらラップをして600W電子レンジにて5分加熱し、3分放置し

て蒸しましょう」

「この時、ジャガイモは水に浸さずにジャガイモ本来の水分だけでふやけますので水につけてしまいますと水っぽくなってしまいますので注意です」

「その間にブロッコベーコンを2センチ角に切つて、フライパンには事前にバターを熱して、解けたところに粉コンソメを加えましょう」

「フライパンが温まつたらベーコンを投入して焼き色を付けましたら、ふやかしたジャガイモと混ぜ合わせます…あとはしっかり混ぜ合わせ、皿に盛り付けたところに粉チーズとパセリを振りかければ完成です」

「んん〜いい香りですね〜…本日はブロッコベーコンと新じゃがで作る『ジャーマンポテト』でした。それではまたこのお時間にく〜」

—ビーコン—30分クッキング—終—

球状態のフィールドが消失するとゴジラは我に返つて辺りを見渡した。

「なんだ？俺は一体、いままで何をしてた？」

「あれ？ボク、何してたんだろう…えっ、なにこれ？」

アギラも我に返つて見るとその手には何故かホクホクに湯気立つ出来立てのジャーマンポテトがあった。

しかし、その場にビーコンは既になかった。

一方のビーコンはフワフワと東京上空を飛びながら更なるベーコンの布教を画策して電波を中継する電波塔たる東京タワーへと向かっていた。

「あなたはどうかやら御存じないようですが…東京タワーからの受信放送は2011年7月24日をもって終了されていますよ」

ビーコンが声を掛けられビクツと反応を見せるが…ビーコンが居る場所は上空数百メートルに位置する人間が居るはずの無い地点である…にもかかわらず、人間の声があることに驚いている。

「少々、おいたの度が過ぎましたね…私もこれ以上のあなたの行動を見過ぎすワケにはいきません」

ビーコンが目撃したのは…自分には浮遊能力があるのに、その者はまるで何も無い空中を何も用いずにまるで地面を踏みしめているが如く優雅に同じ地点を歩いていることだった。

そして、その者の顔を見れば誰であるのかすぐに分かった…あの時、左肩に髪を垂ら

した少女の側にいた男、朝から誰も自分を認識しなかったにも関わらず誰よりも先に自分を認識した男、一見は普通の人間のように擬態しているが明らかに人間ではない気配があつた。

曰く、人間でもなければ生物生命の気配も無いビーコン以上に謎の存在だつた。

〔フウー　アー　ユー？〕

「私が誰かですか？…そうですね、しいて申しますと…私は嘗て“神”だつた者とても申しましょうか」

その者は突如として純白のスーツから形状を変化させ瞬く間にこの世の者とは思えない別の存在へと変化した…その光景を目の当たりにしたビーコン自身、それが認識する世界の最後の光景だつた。

— GIRLS 付近・河川敷 —

消えたビーコンを探してアキ一人で探し回っていた。

丁度、その時…アキのソウルライザーから着信が入つた。

「はい、もしもし…どうしましたピグモンさん？」

『あつ、アギアギ…気を付けてください…なるべくお一人で行動するのは控えてください…見つけたら、すぐにご連絡を御願ひします、すぐに駆け付けますのでえ…』

「ピグモンさん…無理しないでください、ボクは大丈夫なのでしつかりみんなと休んでいてください…じゃあ、アギラ引き続き捜索に廻ります」

そういつてトモミを安心させるやソウルライザーの通話終了ボタンを押してソウルライザーはポケットにしまった。

「はあ…まさか、こんなことになるなんて…それにしてもどこに行つたんだろう…んっ？」

ビーコンを探し回るうちに辿り着いたいつもの河川敷で何やら香ばしい匂いにひかれて向かうと衝撃の光景が目に見え込んだ。

「おい、ダグナ…もつと薪とサクラチップ入れろ」

「はいはい」

ユウゴたちが何やら焚火の上から狩人が獲物の肉を焼く時の手法と同じ要領で大きな物体を棒に括りながらじつくりと回し焼きしていたが…肝心の回し焼く物体は何を隠そうもビーコンであった。

「ふあああああアッ!?何してるのさああ、二人ともおお!」

慌てて走り出して焚火の上から木の棒で括りつけられて回し焼かれるビーコンを助

けに向かった。

「おう、アキ…もうすぐ上手に焼けそうだから待つてろ」

「焼かないよ！焼かないでよ！かわいそうじゃないか!!」

「おや、よろしいのですか?…この生物、見た目に反してかなりえげつない能力を有していますか?…現にあなた方GIRLSはこの生物1匹にほぼ壊滅寸前ではありませんか」

「それでもダメなものはダメ！焼くとかなシ！」

アキはとにかくビーコンそのものをビーコンの様に燻し焼きにすることを拒否して助けた。

結局、解放されたビーコンはなぜか全身真っ白になるほどの強烈な何かを体験した後だった。身体が小刻みにブルブルと震えて赤い目からは大粒の涙が零れていた。

「二人とも酷いよ！確かにGIRLSへ迷惑をかけたかもしれないけど、やりすぎ！怖いよ！ボクの身近でこんなことしないでえッ!!」

アキは縄を解いて解放されたビーコンを解放しながらもブルブルと未だトラウマ抱くビーコンを慰めた。

「君も、もうこんなことしないで…本当は好きなビーコンのおいしさを広めたかっただけでしょ…でもしつこく押し付けちゃダメだよ、いい…でない次は本当に君がこの人

たちにベーコンにされる番だよ」

優しく慰めてくれるアキの後ろでユウゴは頭をゴジラに変化させて口から放射熱線を吐いて焚火もベーコンを吊るしていた支え木も跡形もなく焼き消してさらに大きな火柱が上がった。

「イエス オーケー ノット プッシュユ!!」

「わかればよろしい」

結果、ベーコン騒動はアキたちの奔走で収束する事になった。

・
・
・

結局その後、アキの自宅兼セーフティハウスでペットして買うことになった。

「ビーコン! お酒とベーコンのすもも漬け掛け」

【ヒューイアー ベーコンプラムソース】

酔っ払い探偵も付属して…

「ペットにしては大きくない?」

ますます謎が深まる謎の珍生物『ビーコン』、その生物が何者なのか本人のみぞ知る所であつた。

怪獣王の任務

—警視庁管轄某署—

アヴァロン・ユニット分駐所

「こっ…コレは一体どういう状況ですかッ!?」

対シャドウ戦力として警視庁に新設された特殊機動実験部隊『アヴァロン・ユニット』、そんな部隊組織をまとめ上げる女性隊長「御前トモ工警部補」は衝撃的光景を目にした。

警察組織内での『アヴァロン・ユニット』はその迅速な初動対応が求められるべくして設けられた部隊専用駐留所である「分駐所」…そんな部隊にとって英気を養う場所である分駐所内では見た事のない散らかり具合で荒らされていた。

「コリアア! スカルツ!! 一体、いつまでお風呂に入らないつもりですか!!」

「フシャアアアア!!」

どうやらユニットオペレーターの沖田がバスタオルを大きく広げて宛ら闘牛士のような構えで相対している相手が原因だった。

「はあッ…この分駐所はいつから託児所になったんですか、緒碓警視」

「おや、本庁からわざわざご苦勞様です」

散らかった分駐所内で優雅にコーヒーの一服を済ませている緒確に向かつて御前は彼の席にバンツ！と手を広げ叩きつけた。

「警視！また警察内部に圧力掛けましたね！！今度はどんな脅し文句を言ったんですか！？この分駐所に怪獣娘を匿っている事と関係が御有りの御様子でしたよッ！」

御前は緒確が警視庁に対して『アヴァロン・ユニット』が怪獣娘を分駐所内で匿うにあたって仕掛けた圧力的情報操作をしたことを問い詰めた。

「私たちは『実験部隊』なんですよ！！こんな部隊、息吹きかければ吹き飛ばすような紙つぺら部隊に見ず知らずの怪獣娘を置いているほど余裕はありません！！」

「しかしながら、彼女は木城巡查長に助けられたこと以外の記憶がない…それ以外は極普通の子供と変わる所ありません」

「大有りです！！特に怪獣娘と言う時点で私たちでは扱いきれません、私が本庁へ掛け合つてすぐにあの子をGIRLSに引き渡すことを提案しても『人道的配慮』だの『道徳的支援』だの…拳句の果てには『怪獣は地球よりも重い』ですつてえええ！！預かるこつちの身にもなれないんですか!?!」

御前は散々上層部のスカルゴモラに対しての超法規的措置に対する鬱憤が爆発寸前であった。

「上層部も浅はかですな…未だGIRLSにしか扱え切れない怪獣娘を自分たちでも保護管理できないかと言う愚直な方針決定でしたよ…いかにも警察組織がGIRLSに對して懐疑的な面を持つ方々の寄せ集まりでしたから、煽るのが簡単でした」

「いい加減にしてください！あなたは警察をなんだと思っっているんですか！？ここは託児所でもなければ、飼育園でもありません!!それから沖田巡查長、早くその子を捕まえてください!!」

「できる事ならやっていますツ…ああツ!!」

御前にどやされた沖田は振り返って返答した際にスカルゴモラは沖田の股下を潜り抜けて縦横無尽に飛び回った。

棚から棚へ、ユニット員たちのデスクからデスク、ホワイトボード、部屋にある何から何まで鋭利な爪で引き裂いてスカルゴモラは逃げ回った。

「I would like to have 300 dozen 12.7mm bullets in stock, please OK? Thank you

ロンランスの弾薬供給確保できました…って、うわあぶっ!!」

スマートフォンで海外商会を通じて武器弾薬の取引を取り付けた補給担当も兼ねたユニット員の坂本の顔面にスカルゴモラが飛び乗って彼を踏み台にした。

「坂本さんッ!?おのれ、よくも坂本さんをおお!!」

「もおお…肝心の木城巡查長はどこに行ったああ!!」

すべての現況を生み出した男を名指して御前は吠えたが…分駐所内に居ない者を吠えても本人には届いていなかった。

「彼なら今は署内の捜査資料室ですからしばらくは帰ってきませんね」―ズズズツ…
荒れ狂うユニット員たちの傍らで緒確は深いコーヒーを口に含んだ。

―分駐所在中警察署内・捜査資料室―

分駐所が所在する警察署の一部屋に設置された部屋一面の半分を占めるスーパーコンピュータ並みの大きさの警視庁のデータベースにアクセスできる端末が全部で5台を1台のノートパソコンに繋いでキーボードに対して一糸乱れぬ素早いタイピングで木城が目的とする調べが進められていた。

「……………」

驚異的な集中力で木城が調べる内容は『八之島事件』と言う警視庁が管理する指定重要未解決事件に該当する事件で一般には一部のみ公表され、捜査内容に関する事件解決のための証拠資料などは警視庁が厳重に管理していた。

(なぜ…自分は今更こんな事件について調べようとしているんだ?)

それは木城でも分からなかった。事件概要は大まかに今から3年ほど前にさかのぼ

る…

東京都から千葉を挟んで館山湾外よりフェリーで片道2時間ほどの距離に位置する1つの島の周囲に7つの離島で構成されたことに由来するため『八つの島』とも呼ばれていた。

ところが3年前の9月7日午前14時42分より小笠原警察署より入電、『八之島上空に巨大な積乱雲が発生している』と地元の漁師から通報がキツカケだった。

同日午前15時14分、小笠原警察署より捜査員が八之島の中心『蜂須町』に到着、島内は島唯一の町であったが…島民の半数近く消息が忽然と途絶えていた。世帯住宅にはつい先ほどまで生活していたかのような後が残っていたり、不可解な現場であったことが当時制作された調書のコピーに記されていた。

「…この事件、やつぱりおかしい…どこを読み直しても…『あのこと』が掛かれない」

この事件に木城が関わっていないワケではなかった。当時19歳の彼はまだ警察学校を出たばかりの新米警察だったが、当時親戚が住む八之島に帰省していた。

つまり、木條は…事件当時八之島にて発生した事件の渦中に居たのであった。

(この事件は自分が警察官として信じられないような経験をした。あの日…積乱雲なんか起きていない…もっと大きな…そう、台風のような嵐が島の上空に出現していた)

木條の記憶の中で蘇るのは…未だ初夏の熱さが消えない島の中で突如発生した強い突風が巻き上がるほどの大きな雲の中で海に囲まれた島の中の町全体を水浸しにして人々を呑み込んだ。否、それはまるで人が海水に変わってしまったかのように：■ ■ ■

—□□□□：◇◇◇◇：

「ぐっ…まただ…なんだ、どうして自分はこの記憶を思いだそうとしていつもこうなる…」

まるで誰かにこれ以上思いださせないように木城を抑制しているような電流に近い衝撃が身体を走って再度記憶が途切れた。『八之島事件』、その最後の備考欄には『島内施設及び居住地に浸水あり』と記載されていた。

都内 住宅街

「ひやあく色々買いきすぎたねえ…アキちゃん」

「うんツ、まさかパーティーのためにここまで買い揃える必要があるなんて…」

アキたちの自宅マンションから数キロ圏内のスーパーから様々な食材や使い捨ての紙食器やプラスチックフオークにスプーンなどをミオも付き添いで買い出しに訪れて

いた。

「GIRLSのみんなでパーティーねえ…そんな楽しそうなことをお姉さんに隠してたなんてえ〜言ってくれば前もって色々な所を回れたのに〜」

「だってミオさん、言うほど経済力無いですよね」

「痛いトコ突かないでよお…結構気にしてるんだからね」

会計を終えた荷物をエコバックに詰めるだけ詰めて手提げ紐を肩にかけるとアキは『よいしょ』と言って普段持ち慣れない物にフラつきながらもなんとか持てた。

「あとどれくらい必要なの？全部で何人分？」

「ええつと…GIRLSで来れる怪獣娘が大体20人くらいだから…」

「そんなにツ！一日中お店を行ったり来たりしないと間に合わないよ…」

今日一日中買い出しに歩き回ることに落胆したミオだったが…そこに思いがけない人物たちと鉢合わせることになった。

「あれ？アギちゃん！」

「ごっつ、ゴモたんに…みんな!？」

通りがかりに出くわしたのはミカツキを始めとした大怪獣ファイトの関係で集まっていたGIRLSの怪獣娘たちだった。

「あれツ？ゴモラじゃん」

「えっ……えええっ!!? ベムラー姉ちゃん!!? なんでアギちゃんと一緒にいるの!?!」

「ミオさんとゴモたん、知り合いなの?」

「そうやでえッ、ベムラー姉ちゃんはねえ……定職に持つかず昼間から新宿をプラプラしてるか、お酒を飲んでいるか、朝には自販機に頭を突っ込んでる人?」

「ちよっ!!? 私の印象悪すぎないゴモラッ!!? …でも後半は事実なのが辛いッ」

あまりにも顔見知りとは思えない印象を抱かれている事に驚愕したミオは弁明しようにも過去に自分が仕事の成功の度に飲んだくれた時の恥ずかしい飲み方をした時に起こりがちな不思議な事である以上、否定のしようがなかった。

「…ベムラーって確か始まりの怪獣娘ですよね……なんでそんな人がアギラと一緒に居るんっすか?」

ミカヅキのミオ印象で話が脱線したことを修正したベニオが代わりに尋ねた。

「ふふふっ、よくぞ聞いてくれたわね……実はこの度、私とアギちゃんは家族に為りましたあゝ」

とんでもない爆弾発言にアキは目を丸くしてミオの顔を二度見した。そしてその言葉の意味を履き違えた怪獣娘たちも目を丸くして驚愕した。

「どういふこと……どういふこと!!? ベムラー姉ちゃん、アギちゃんが家族ってどういふことなん!?!」

「まさか…アギラのお兄さんと…そういう…」

「うわあくアギちやくん！説明してエええ!!」

「こつちが叫びたいよおおお！またあらぬ誤解が生まれたああ!!」

驚愕するミカツキ、考え込むベニオ、取り乱すミク、そして一番の被害者であるアキも混乱させていた。

「フフフツ、やつぱGIRLSの子らつてオンモシロツ」

「笑つてないで弁明してくださいよ！」

まるで元凶は他人事のようにこの状況を楽しんでいる様子にアキの額に血管が浮き出た。

「はははつ、ゴメン…久しぶりにゴモラたちの顔を見たら楽しくなったけど…私とユウ

ゴ君はそういう関係じゃないよ、近しい間柄だけど弟くらいにしか思つてないから」

「ホンマに？」

「お姉さんは嘘を言わないよ…たぶん」

信憑性の薄いミオのそこはかとなない自信に半ば半信半疑だが…

「それよか、アギちゃんたちは何しとつたの？」

「ウンツ、ゴモたんが提案してくれたパーティーの件で買い出し…ボクとミオさんだけじゃ人手が全然足りなくて…」

それを聞いた瞬間にGIRLSの怪獣娘たちは目をキラリツと光らせてミカヅキが代表してアキの両肩を掴んだ。

「アギちゃん…なんでそんな大事な事、言ってくれないのさあ!! 誘ってよ! 誘いなよ! ていいうか誘ええええ!!」

ミカヅキの言葉に同意するように皆がうんうんと頷いた。

「えっ、でもゴモたんたちGIRLSの仕事は?」

「ウチらGIRLSのイベント終わりにアギちゃん家に遊び…んんっ! ゴモたん突撃となりのウチしようとおもてなあ〜」

「隠そうとした本性が隠せてないよ…本心バレバレだよ」

不自然にアキの家近くのスーパーにたまたま出くわした仲間たちの様子から見ても彼女たちの目的は明らかに『アキの家』であることは明白だった。

「まあまあ…結局家庭訪問未遂じゃねえか…みずくせえこと言わず、何なら買い出しも手伝ってやるよ」

「アギちゃん、何ならウインちゃんも呼ぼう! みんなでやればすぐに終わるよ! 寧ろみんなの力あつてのパーティーにしようよ!」

みんなの建前は「パーティーの準備」だが、本来の目的の意図に何らかの悪意を感じ得ないアキもまた半信半疑だった。

「はあ…もう分かったよ、ソウルライザーでリスト送るので買い揃えたらお兄さんの店に来てください」

全員同意するなりそそくさと各自分かれてアキがメツセージアプリで送った画像添付ファイルを参照にスーパー内へと散らばって行った。

「さつすがアキちゃん…みんなの扱いがうまいねえ」

「別にそんな人を顎で使うようなことじゃないですよ…それより、お店にゴモたんたちが来そうだからお兄ちゃんへ先に伝えましょうか」

「ソレもそうね、みんなお店の場所知っているんでしょ…私たちはお店に先に荷物を置きに行きましょうか」

アキとミオは先に買い物済ませた自分たちが抱える荷物を持ってユウゴの店へと向かった。

BAR 『1954』

「お兄ちゃん、ただいまあゝ…後でゴモたんたちも来るからさあゝ…つてアレ？」
「居ない…わねえ……さつきまで居たの？」

アキたちが買い出しに行く前はユウゴが変わらず店で呼ぶ気も無い店の手入れをしていたが…綺麗にふき取ったバーカウンターにテーブル席、そのどれもが埃一つないほ

どに綺麗に清掃されていたが：肝心の清掃した張本人が居なかった。

「出かけちゃったんですかね?」

「うくん：だといいいけどねえ」

ミオはアキが荷物を置きに厨房へと入っていく様子を見計らってから床に座り込んで床に付いた埃の足跡を確認した。

(身長170センチから180ほど：サイズは27から28センチの男性用革靴、少し大柄だけどユウゴ君ほどではない、ダグナさんでもない、ビーコンは論外、明らかに私
が知らない人間の痕跡があるわ)

ミオはその見慣れない足跡から推察して立っていた位置から移動場所、果ては最後に出て行った際の拍子に無意識にドアを開ける際に触れた壁についた指紋の大きさから手の大きさまで把握すると彼女の脳内で見知らぬ人物から見える人の形さえも形成してイメージが沸き上がった。

(ユウゴ君がわざわざ警戒も無しに人を招くはずがない：顔見知り?…一体誰ツ?)

しかし、人のシルエツトが分かってても顔や人物の特定まではいかなかつた。だが、明らかにその人物が要因でユウゴが店を開ける必要があるほどの用事が出来たとミオは見抜いた。



— 早朝・午前5時頃 —

早朝の朝早くに店を訪れたユウゴは店の前に立ってポケットから鍵を出して鍵穴に挿入すると…違和感に気付いた。

(鍵が…開いている)

昨日の時点で締めていたはずの鍵が開いている事に気が付いたユウゴは中に誰が居るのかをドアに手を触れて超感覚を研ぎ澄ませ確認すると内部に3人の気配を察知した。

(……3人…いずれも訓練された人間の気配…ここへわざわざ押し入って来る連中と来たら…)

ユウゴにはその気配が誰なのか瞬時に理解して畏ではない事を悟るなり警戒心なくいつもと変わらずドアを開けて店に入って行った。

中には先に店へ入ったユウゴのほかに3名の得体の知れない男性が居座っていた。

「…戸締りをして侵入されるような店にしたつもりは無いがあんたら不躰にもほどがあるんじゃないか？」

「お前に不躰と言われる日が来るとはな……久しいな、ユウゴ…3カ月ぶりか」

「…なんの用だ、大佐」

男たちの1人は40代ほどの中年男性だが、その表情から肉体的年齢との差は比較的に見ても若々しい印象のあるスーツ姿の似合う男がテーブル席に腰かけていた。

ほかはユウゴに『大佐』と呼ばれる者以外に若年の部下と思われる男と、全身から顔に至るまで黒いスーツと黒い目出し帽に目元を戦闘用ゴーグルで覆い隠す正体を晒さぬ者で構成された『軍人』関係者のようであった。

「今は『大佐』ではない…防衛省勤務の官僚と言う立ち位置だが、有事の際は本職に戻る場合もある」

「そんな事を言うために俺の店を泥棒紛いな事をしてまで訪ねて来たワケじゃねえだろ」

ユウゴは普段通り店の食器や品のチェックをしながら『大佐』に要件を聞き耳立てた。「話が早くて済む…早速本題だが、先日にサンフランシスコを出港した『マイケルシールズ号』について話そう」

そういうと『大佐』は若い部下にパソコンを開かせてユウゴに見せた。

「5000トン級、客船型巡洋艦…名目上は民間の客船として運用されるが非常時の際は『海のプライベートジェット』として機能するれっきとした軍艦だ」

「所属はアメリカ海軍と言った所か…唯の豪華客船と言うワケではないだろうか？」

「そうだ：通り名どおり、この船は『大統領』も乗船することも想定されて建造された船。しかし、今回は大統領を乗せて航行はしていない」

「じゃあ誰が乗っているの？」

「正確には『移送』していると言った方が正しい：お前も知っている『J-1973』を日本への配置計画の為に軍用艦でわざわざ『配送』の手配までした徹底ぶり：だった」

『大佐』の口ぶりは過去形に変わって『マイケルシールズ号』に起きた事の顛末の詳細を語り始めた。

「ここからが問題で：マイケルシールズ号は太平洋を横断するにあたって経由にハワイのアメリカ軍基地に入港、その後オーストラリアに入港、そしてそのまま日本の横須賀に入港予定となるはずだった：ソロモン海を抜け、日本の経済水域に入ったところで通信途絶、現在は小笠原諸島付近に停船した状態であることがアメリカ軍の衛星で確認された」

パソコンの画像から小笠原諸島の目鼻先に停船している証拠が出てきた。

「原因はなんだ？船舶トラブルでもないだろう」

「察しがいいな：問題はオーストラリアに入港したこと時点だった。本来乗船時には現地まで日本まで航行するための補給物資などの運搬時に『紛れ込んだ』と言うのがア

メリカ側の見解だそうだ」

「何が紛れ込んだって？」

「ネズミだよ：それもとびつきり大きな武装した密航ネズミたちだ。 オーストラリア連邦警察がマークしていた過激環境保護組織『サハラウルフ』、一昨年に『荒野の狼』と言う多国籍NGOの環境保護団体の中で軍事的に組織された下部組織が結成、表向きにはオーストラリアのPMC会社として別名義で登録されていたが：どうやら食料品などと共に人員入れ替え時に紛れ込んだと思われる」

それを裏付けるかの様にオーストラリア国内の湾港ドック内で記録された防犯カメラ映像には護衛として乗り込むには高い武装力を誇る連中がマイケルシルズ号に乗り込んでいた。

「そんな連中がなぜチェックもスルーして乗船できたんだ？」

「現段階では究明に至っていない：が、動機は判明した。 目的はこのマイケルシルズ号に乗船するもう一人の『移送者』だ」

次に画像が切り替わると清楚な御嬢様と言った印象の女性の写真が出てきた。

「誰だ、そいつは？」

「クララ・ソーン、またの名を宇宙ロボット『キングジョー』の怪獣能力者だ。 無論、国際怪獣救助指導組織所属だが：ソーン家は代々議会議員を輩出してきた名門の家系だ、

現ホワイトハウス内にもソーン家に関わる者も多いことから狙われるには最適な人物だろう」

アメリカ軍の艦船を拿捕した連中が狙っていたのは積み荷ではなく、GIRLSに所属する怪獣娘の身柄だった。

「なるほど、人間に手出しできない小娘なら…ということか？」

「もつと言えば国際怪獣救助指導組織への報復だ。一昨年の航空機爆破未遂事件で活動制限となった『荒野の狼』は今年になって代表が変わり方針変更が起きた。団体は変わった代表の持ち込んだ兵力で武装化により過激思想一直線主義に変わった…そして、そいつもまた前線に出てきたわけだ」

監視カメラ映像から画像分析によって出現した情報にはICPO（国際刑事警察機構）からの指名手配情報が映し出された。

「アーノルド・フラクサス、無論偽名だろうが団体組織立て直しに1年も満たない間に規模を拡大させたヤリ手だ」

「ほう…それで、俺がそのマイケルシールズ号に密入国したテロリストとどう関わってくるんだ？」

「もう分かるはずだ…この一件を引き受けてくれ、ユウゴ」

「断る…俺に関わりの無い事だ、メリットがない」

「事は一刻を争う…すでにアメリカ軍がハワイ基地より艦隊を差し向けだし太平洋を横断してやってくる」

「だったら好きにさせろ…俺の妹を『安全』のためにと言う勝手な建前で拉致監禁しようとした連中の国のゴタゴタなど興味はない…そんな国と友好条約を結んだ覚えもないし、ましてや貴様らなんぞと友好を深める義理合も無い」

「合衆国側もその件で勝手にCIAを差し向けた国防長官を解任した」

「誰かに責任を擦り付けて国自体が責任を負う気が無いのなら変わらん…助けなければあんたら『地球防衛軍』でも出動させればいいだろう」

「ユウゴ、EDFはもう存在しないことぐらいお前も分かっているはずだ…今は解体されて世界各地の博物館に展示されているだけの世界軍隊の支援もあてにできない…もはや世界中の軍隊が総出になっても敵わない『力』にしか頼れない現状を理解してくれ」

「…それでも断る…あなたのお近くの部下に銃をちらつかせられてもな」

ユウゴがバーカウンターを拭く後ろで『大佐』の部下が懐に手を突っ込んでいる状況もユウゴが見抜いていた。

「なら、何をしたら協力してもらえる…」

『大佐』はもはやユウゴの要求を受け入れてまでも事態収束に全力を向けていた。

「……なら『白い家』の主に伝えろ……人様の妹を心配するよりテメエの命と国の安全だけを考えてろ、それが出来なきや俺が先にお前らをすべて滅ぼす……とな」

「引き受けてくれるのか？」

「もう二度と俺たちに関わらないと確約する向こう側次第だ」

「いいだろう、脅し文句も善処しよう」

『大佐』が席から立ち上がってそれに付き従う部下たちも合わせて動き出した。

「……尾崎大佐……あんたまた一段と老けたな」

「ふっ……デスクワークが性に合う歳になってしまったよ……M機関出身のミュータントとは思えないほどに今は『人間』をしている……それじゃあユウゴ、あとは頼んだぞ」

「言われるまでもないが、片道切符を用意しておけ」

「『白い家』から出させておく……『怪獣王』が動くとなれば喜んであの国は核爆弾でも差し出すさ」

そういつてユウゴが『大佐』と呼ぶ尾崎と言う男は部下を引き連れてユウゴの店を後にしていった。

「……お話は済みましたか？」

ただ一人、ユウゴとは別にアキたちが住まう部屋に通じる従業員出口から出てきたダグナを除いては……

「ダグナ：アイツは」

「アキさんのことはミオさんにお任せしております…いつ頃にご出立ですか？」

「今日にもだ…あの様子だと今すぐにでも行けと言う感じだろう」

「…わかりました、ではMONARCHにも手配させましょう…事によつては、彼らも招集をかけて現場合流をさせておきます」

ダグナはバーカウンター裏のカクテルシエイカーが並べられた棚の横側を引いた引き出しからパソコンを取り出して開くとすぐさま起動してどこかに掛け合つた。



—16：45 小笠原諸島『南鳥島』—

「お見えになれますか？ユウゴ君」

「ああ、ココからでもバッチリ見える…ご丁寧に南鳥島から見える位置に停船している」

ユウゴとダグナが居る場所は日本の最東端に位置する南鳥島である、面積僅か1.5

1キロメートルしかない上空から見れば三角形の離島である。

「準備完了しました 逸保志ダグナさんは至急指揮所へご動向願います」

「了解しました…ではユウゴ君、手はず通りに…」

ダグナはユウゴのバーに現れた尾崎と行動を共にしていた部下の1人に案内され向かった。

その場にはユウゴ一人が留まって誰も居なくなつたところを見計らつてゴジラに変身して南東側に位置する砂浜から海へと飛び込み潜つて行き、『マイケルシールズ号』へと先行して行つた。

—南鳥島・作戦指揮所—

「お待たせしました…先ほど先発としてゴジラがマイケルシールズ号に向かいました」

ダグナが入つた作戦指揮所として機能する設営テント内は無数の電子機器に高品質デバイス、ソリトシレーダーシステムによる衛星回線を通して映し出されるマッピング情報を随時流すプロジェクターから投影したホワイトスクリーンに着目する4名のM O N A R C H 職員が在中していた。

「さすがジュニアね…仕事が速いわ」

ゴジラの事を「ジュニア」と呼ぶガスマスクをつけたポニーテールの女性が腕を組みながら席に座つていた。

「ミキさん、作戦中はガスマスクを外してください」

ガスマスクの女性「ミキ」に首から勾玉のネックレスを付けたショートカットの女

性が作戦中にマスクを外すべきと主張した。

「ゴジラ、間もなくマイケルシールズ号に接触」

ソリトンレーダーからゴジラの動きと連動するアイコンがマイケルシールズ号のアイコンと徐々に接近していることをオペレーションするイギリス人女性がパソコンを使つて到達予想時刻を算出した。

「よおしくし…それじゃ早速、*“ガンヘッドギア”*の出番だね」

更にオペレーションするもう一人は若年ながらも近視ゆえに眼鏡が必須な成人男性が張り切つて指を重ねて伸ばしながらストレッチを済ませるとパソコンに向かってキーボードから情報コードを入力した。

—マイケルシールズ号から75メートル地点—

—チャプンツ—

ゴジラは水面から顔を出して艦船の全体像を視認すると…見た目は確かに民間の客船相当に匹敵する大きさの船だが、客船は本来大人数を収容して長い船旅を航行するために規模が拡大する傾向にあるため5000トンクラスの客船は実際*“中型”*に属する。しかし、軍用として見るならば5000トンクラスは巡洋艦並みの質量を誇るため『マイケルシールズ号』とは大統領を乗せる事さえも設計されているならばそれ相応の

武装も確認できる。

(滞空防御用のフアランクス：対潜水艦用324ミリ魚雷：電子戦装備……なるほど、要人護衛用には十分なスペックだが中から入れちや元も子も無いか……)

ゴジラは瞬時に艦船の戦力を分析して確認した軍用客船の様子は警備が殆ど認識できないほどに不気味な物静けさだけが“無人”を表している。

『あーあー、聞こえるかいゴジラ』

ゴジラの耳元で電子音と共に頭の上を這うようにして起動した自立行動を可能とする小型のロボットがゴジラの顔をレンズに通して映し出した。

「……オタケン、よく聞こえるよ」

『最新のGマシンの調子は良好だね……新型の『ガンヘッドギア』、君の潜入をサポートするために君自身の頭部に合せる形で設計したから一苦労だったよ』

ロボットの二足歩行形状はゴジラの手の手でも収まるほどに小さな体格ながらも機敏な動きを見せているが本来はゴジラの頭に文字通りの“ヘッドギア”として機能する優れた能力を兼ね備えた支援デバイスとして機能していた。

『暗視ヴィジョン、赤外線スコープ、望遠レンズ、すべての機能を搭載して随時僕たちの指揮所にリアルタイムで受信するから本作戦を全面的に支援するよ』

「いつも悪いな……オタケン」

『うくん…相変わらずその呼び方どうにかならないのかい？僕にもちゃんと“山根ケンキチ”って名前があるからそっちで呼んでほしいよ』

「毎度変質染みた発明をしてくるヤツのことをいままさら名前で呼んでも無理がある…その分、信頼はしているから頼りにはしているぞ“オタク・研究者”」

『それで“オタケン”って呼ばれるこっちの身にもなつてほしいよ…とにかく一旦、乗船してくれないかい？』

小型ロボット『ガンヘッドギア』を通して会話する“オタケン”こと山根ケンキチの提案で一旦船の側面まで泳ぎ近づいたゴジラは船体に取りついて手の平を大きく伸ばしながら爬虫類の様に這い上がった。

「よし、船内に侵入したぞ」

『妙に静かだね…オーストラリアで人員入れ替わりから推察される人数は20人ほどと推算してたのに…誰も警備に当てられていない』

ゴジラとガンヘッドギアは船内の遮蔽物に隠れた。

「一応、確認だが…犯行声明は上がったのか？」

『まだ一度も…『荒野の狼』側からも一切声明がない』

「サハラウルフと言う部隊は下部組織じゃないのか？」

『というより、独立愚連隊だね…やっていることは環境活動とは名ばかりの企業脅迫と

破壊工作、それを実行する「戦術行為」を専門とする部隊みたいだ…一昨年 of 事件の様な素人の犯行からプロの犯行に切り替わったようだね」

そんな敵がうろついているはずの船内をゴジラとガンヘッドギアは音も立てずに船内へと進んだ。

「オタケン、人質の場所は？」

『ちよつと待つて…今、赤外線ですキャンしている…——いた、どうやら船内の広いフロア内で固められているみたいだ』

「敵の数は？」

『ざつと20名前後がフロア内を囲んでいる…武器も形状から察するにAKタイプの銃火器と判別の難しい大口径火器の重武装兵もいるみたいだ』

ゴジラはガンヘッドギアがスキャンした最奥のフロアへ侵入するために辺りを見渡すと通気口が目に入るなり、ゴジラは飛び上がって通気口を押し開けた。

『そこから入るのは良いけど…君、背ビレ大丈夫なの？』

大ききから見てもゴジラの背ビレがどうしても邪魔をして入れそうにもないが…

「変身を解けば問題ない」

ゴジラは本来のユウゴとしての姿に戻って通気口を腕だけゴジラに部位変化させ押し開けると船内の更に奥へ侵入した。

『ああ……すごいね』

ユウゴは僅かな隙間しかない狭い通気口をまるでトカゲの様にして身体を押し込んで進んだ。

― 船内・貨物室 ―

船内の更に奥に位置する貨物室へとたどり着いたユウゴは再びゴジラに変身してガンヘッドギアと共に格納されている装甲車両や重武装車両などを遮蔽にして隠れながら進むと、最奥のフロアに通じる通路では外からでは確認できなかった武装したテロリストがウロウロと警戒警備を行っていた。

「ようやくシージャックっぽくなってきたな……」

『ここから向こうのフロアに人質約30名以上がいるみたいだ』

赤外線スキャンで確認した正式な人数は船を操作するために必要な人員数と乗船者を合わせた把握できる人質の人数だが……

「おかしい……そんなに少数か？兵士はどうした？」

ふと人数の中にアメリカ側が用意した海兵など警護要員の整合性が合わない事に気が付いた。

「全員の心拍数……軽く見積もっても130前後……緊急時の人間の緊張性鼓動ばかりだ、

冷静な者が1人もいない」

ゴジラの超感覚で目を閉じ、耳を研ぎ澄ませると最奥のフロアに監禁されている人たちの心拍数を耳で聞いても違和感があつた。

『なんだって?…確かに訓練された人間であればこういった状況でも90前後、なのにここには兵士と思えるような人物の心拍数がないとしたら…全員民間人だ』

仮にもアメリカ海軍保有の『海のプライベートジェット』と称される艦船に護衛として在中する兵がないことに気が付いたゴジラだが…『ピシヤツ…』

「?…なんでここだけ水浸しなんだ…」

足元は密閉されている船内であるにも関わらず妙に濡れていた。

『あつちにも…』

ガンヘッドギアがレンズをズームさせて検知した水分…それはゴジラの足元だけでは無かつた。

「……妙だ…何かがおかしい」

船内で足元に水たまり、少なすぎる人質、そして…兵士たちの“ある特徴”にゴジラは既に気付いた。

— 船内中央ブロック・大広間 —

そこは本来要人などが船内での寛げるために設計された部屋だったが、今は武装して顔を隠したテロリストたちが銃を抱えて人質を監視していた。

「オーマイガー…ソウルライザーさえあれば、こんな連中すぐにデストロイデース」

人質の一人には淡いブラウンの長い髪と清楚な学生服のような出で立ちの少女が何もできない今の自分に置かれた状況に苛立ち始めていた。

「ちよつ、クララ！ 妙な気を起こさないで…犯人を刺激しちゃうと全員に危害が加わるわ」

「そうです、ココはまず出方を伺いましょう」

そんな力には力で対抗しようとするクララと言う少女に落ち着きを促す青髪と赤髪の少女2人もいたが…

―バツウン!!―

突然、人質たちとテロリストが密集する大広間の照明電源が消えて広間に闇が押し寄せた。

「きやあツ!」「なつなに!」「ワツツ!」

何が何だか分からない3人の少女たちと乗組員たちの中で突然に襲う暗闇に動揺が走った。

すると、部屋の天井から何かが落ちて来たような音が聞こえると…

「全員伏せろッ!!」

突然の声に全員が戸惑いながらも声に従って身を屈めた瞬間だった、淡く白い何らかの照明よりも明るく光る物体が…一気に発光したのちに無数の光線を放ってテロリストたちすべてに直撃させた。

テロリストたちはその何かに銃を向ける間もなくピクリとも動かなくなつて沈黙した。

再び大広間の電源が復旧すると照明が点灯して全貌が露わになった。

「あんたらが人質か？」

「あつ…あなたは？」

困惑する人質と少女たちは突然姿を現した潜入任務用に調整されたラバー素材のスーツに光学電子装備で身を固めたユウゴに驚いていた。

「俺はあんたらを救助するように遣わされた者だ…オタケン！」

ユウゴが声を上げて天井の通気口から降り落ちてユウゴの手の平の上で回るように着地した。

「ワアオ…ベリーキュートなロボットデスネ！」

『可愛く作つたつもりは無いけど…お褒めの言葉、恐縮です。クララ・ソーンさん』

「ワアツツ? スモールロボットから声がシマース」

『初めまして、と自己紹介している時間は無いのでここから先は僕が案内させていただきます…じやあユウゴ君、後は僕に任せて』

「ああ、任せる前に…クララ・ソーン…あなたに一言聞いておきたい」

「ワッツ？いきなりなんデスカ？」

「あなたがGIRLSの“最高幹部”か？」

「イエス！GIRLSの怪獣娘をまとめるのも一苦労デース」

「クララが最高幹部？」「最高幹部って何？」

クララは肩を透かして自分がユウゴの言う幹部の一人だと答えたが肝心の仲間である青髪と赤髪の少女は何のことだか理解できない表情だったが…「チャッキン！…」

「……ワッツ？」

——ドドドドドドドドドドドツ！！

突然、ユウゴは倒れたテロリストが所持していた床に転がっていたアサルトライフルでクララの腹部を集中砲火して弾丸が無くなるまで撃ち込んだ。

「くっ…クララ!？」

「なっ…何しているんですか!？」

「お前ら同じ組織の怪獣娘だろう…なんで気付かなかった。こいつはお前らの仲間じゃない」

弾丸を腹部に撃ち込まれたクララを偽装する何者かは撃たれたことによる痙攣的発作を起こしているが…突然、彼女ではない何者かの口は不気味なほどに引き攣って笑っていた。

「ふっ…フッフッフッフ…アハハハハハハッ!!」

「くっ…クララ…じゃないッ?」

「まさか、私たちよりも後にアレがココへ監禁された時に…クララとコイツが入れ替わっていたって事ッ!」

ユウゴは床に倒れているテロリストの顔隠しを引き剥がして見ると…その男の顔は『荒野の狼』の代表“アーノルド・フラクサス”だったが…

『確かにコレはアーノルド・フラクサスと“同じ顔”だけど』

ユウゴはアーノルド・フラクサスと思われる人物を足で転がしうつ伏せにさせると、指先をゴジラの指に変化させてしつかり振りかぶってアーノルド・フラクサスの背中から突き刺して背部より背骨と思われる骨格を掴み切って勢いよく背骨から頭蓋に至る部位を引き抜いた。

「きゃあああッ!」

そのあまりにもショッキングな行動に青い髪の少女が目を両手で隠したが…赤い髪の少女はハッキリとテロリストの正体を目にした。

「なっ…なんでですかそれ？ろっ…ロボットツ！」

ユウゴが抜き出したのは背骨から頭蓋に至るまですべてが金属とコードで構成されたロボットだった。

「どうやらテロリストも人手不足らしい…ここには“人間の”テロリストなど一人も居ねえ」

ユウゴは抜き取った敵の正体をクララに偽装する何者かに投げつけた。

すると、クララに偽装する何者かはまるで飛んでくるのが分かっていたかのように飛んできたロボットの残骸をず外部からキャッチした。

「フフフフフフツ…ハハハハハハツ！笑えるツ…笑える笑える笑える笑える笑えるウウウウウウウウ!!」

クララを偽装する何者かが不気味な動きで立ち上がって笑い込み上がる狂気の発狂と言っても差し支えない声を上げてきた。

「オタケン、全員を今すぐヘリポートに！早く行け!!」

『分かった!…さあ、早くこちらです!!』

「はっ、はい！」

「ちよつと待って、ソウルライザー、ソウルライザー！」

『急いで!!』

赤い髪の少女が偽装テロリストの残骸からソウルライザーを取り返して、オタケンことケンキチが操るガンヘッドギアが全員を外へ誘導して大広間から脱出させた。

そして、その場にはユウゴとクララを偽装する何者かが残るだけとなった。

「……よし、さて……なんでわざわざICPOの手配書から、既に逮捕されていた”ヤロー”の顔を使ってわざわざ侵入した変装ヤロウツ！」

ユウゴはクララを偽装する何者かに既に逮捕され現在オーストラリアで裁判中のテロリストの顔に偽装して、今はクララ・ゾーンに顔だけでなく体格から仕草までも完璧なほどに真似ていたが……彼女には該当しない情報をユウゴにブラフを掛けられボロが出た敵に問いただした。

「フフフツ……流石、怪獣王ゴジラ様の御眼鏡は伊達じゃないなあ……」

「フンツ、変装しておきながら俺に向けてくる殺気ぐらい気付かないほど馬鹿じゃねえよ……テメエ、ここにいる人質ごと俺に襲い掛からんとばかりに殺気を出しすぎだ……少しは変装したヤツの素性くらい把握しておけ」

「じゃあ……どんな御顔がお好みだあ……？」

クララを偽装する何者かは突然クララの顔から先ほどまでいた青い髪の少女や赤い髪の少女、果てはミカツキ、ベニオ、ゼットンとGIRLSで顔の知れている怪獣娘たちの顔に擬態し始めるが……最後に最もユウゴが顔を知っている顔に変わった。

「…お兄…ちゃん……ボクのが…嫌いなのか？」

淡い茶色髪を一束に纏め左肩から下げたサイドテールに眠そうな三白眼とあどけない幼さが残る童顔の少女の顔…敵はG I R L Sでも世間に顔のほとんどを知れていないアキに為り替わった瞬間だった。

敵の目の前までユウゴはゴジラの姿に変身して敵の顔面を棍棒の様な太い尻尾で頭部を叩きつけると敵は大広間の隣、隣、隣、更に隣の壁を突き抜けて吹っ飛ばされた。

「今、決めた…テメエとは初対面だが、生きていていいヤローじゃねえッ！」

ゴジラに変身したユウゴをここまで怒らせたのは様々な怪獣娘に顔を変化させ、かつG I R L Sの怪獣娘として顔もそこまで知られても居ないのにアキと自分の間柄までハッキリと知っている謎の敵に対して生かしておく理由がなくなつたからであった。

怪獣王の帰還

— 埼玉県警・警備課 —

「じゃあ、あとの事はお願いします」

荷物の整理を済ませた前原は警備課の同僚と別れの挨拶を済ませて警視庁への出向準備が整った。

「前原さん、せめて送別会ぐらいしましょうよ」

「そうですよ！前原さんとこんな形でお別れなんて寂しいじゃないですか」

それまで親しかつた者たちは前原との別れを惜しんでいた。しかし、当人の前原は：「すまない…：そういうことはかえって別れが辛くなるし、新しい部署での仕事に支障が出るから控えてるんだ。気持ちはいれしいが、俺も警察官だ。事件を速やかに解決するために全力で捜査に臨む…：それ以外の事は出来ない」

「前原さん…：やはり、あなたは警察官の中の警察官だ。前原さん、いや前原刑事！本庁での御活躍、私たち一同は心から期待しています！前原警部補に敬礼!!」

県警内の警備課の警察官全員が前原に対して宛ら今生の別れとばかりに敬礼を向けた。

「おいおい、大げさな……でもありがとうございます。長くもあり短くもある間でしたが、皆さんと職務に真つ当出来て何よりです。どうもありがとうございました！」

今度は前原が深々と頭を下げて最敬礼で警備課の面々と別れを告げた。

「ううっ……まえばらざあん……せめてこのまま、駅まで御一緒させてください！」

その中でも岡田は前原と共に警備課の一員として誰よりも思い入れの強さに感極まって涙面だった。

「おいおい、泣きすぎだろう……岡田くん」

「だつてえ……入庁して日の浅いオイを面倒さ見てくださったんは前原はんぜよ！本には別れとうないじゃけ！」

「あくほらほら、土佐なまり出てるよ……わかつたから、最後のパトロールくらい付き合おう、駅までだが」

「前原はあくん！」

前原は別れを惜しむ岡田と共に当番パトロールの次いでに駅まで警察車両での移動を決めた。

——さいたま市内・浦和駅付近——

午後7時を回り始めたさいたま市内浦和は街行く篝火のような輝きを放つ眠らぬ街

に早変わりして街行く人々も仕事帰りから仕事終わりの者で溢れかえっていた。

「いよいよこの光景とも見納めか……岡田君、いつまで泣いているんだい」

「ぐすんツ……だつて……」

「警察官がそんな姿を見せていられないぞ……町も眠らなければ警察官も眠れない日々が続くんだから」

「ううっ、はい！」

「でもまあ……俺が言うのもなんだが無理せず頑張れよ」

泣きつ面の岡田に励ましの言葉を贈る前原だったが……彼の内ポケットから急に着信音が鳴り響いた。

「……知らない番号だ……誰からだ？」

前原の携帯電話より登録されていない電話番号からの着信を通話ボタン押して耳元にあてた。

「はい、前原です」

『あつ、もしもし前原さん！湯原です！』

電話の相手は機龍こと桐生シュンイチを保護する事になった湯原サラからであった。

「ああ、湯原さん……ちよつ、落ち着いてください！かいつまんでお話を……えっ？桐生がいなくなった!？」

会話の内容は相手の深刻な状況に岡田も泣いている顔が一瞬にして収まった表情に変わった。

「はい……はい……えっ？そのあとに眼を放した隙に彼と一緒にいた怪獣娘も居なくなっ
た!？」

更に事態は深刻を増して桐生に続いてメカゴモラもホテルから姿を消したと言う事態だった……

—ピーーツ! 『県警本部より一般からの入電 仲町3丁目にて未登録の怪獣娘の目撃情報あり 付近の警邏は直ちに現場に急行してください』

湯原からの連絡に呼応する形で警察無線からG I R L S未登録の怪獣娘の目撃情報が入ってきた。

「はい……はい……わかりました。取り合えず今しがた県警から連絡が入ってきたのでホテルで合流しましょう!ホテルの前で待っていてください!では……岡田君!こんな時になんだが、さいたまニューデイズホテルまで頼む!」

「了解しました!!」

岡田は駅よりUターンして赤橙を光らせサイレンを鳴らして前原が指定したホテルへと向かった。

「——こちら県警07 通報のあった怪獣娘の関係者と合流するためさいたまニューデ

ズホテルに急行します」

「ピーイー…『県警本部より県警07、了解 対象の現場目撃情報を元に速やかに保護を優先してください』」

無線の女性通信士から警察庁公式怪獣娘対策マニュアルに従い、未知なる力を宿す怪獣娘の発見及び出現に際しGIRLSに登録されていない場合の怪獣娘は有り余る力の暴走の危険があるため一般からの通報からおよそ48時間以内に初動捜査することが現在の警察官たちには義務付けられていた。

やがて街中の多くの警察車両がサイレンを鳴らして事件と同じくらい速やかに現場へと急行していった。

一方、そんな様子を見ていた別の少女たちも事態に大きく関わり始めていた。

「ありやりやあく…なんか大事に為って来たわね、エレ」

「その様ね…先ほどGIRLSに埼玉県警から連絡が入ったわ どうやらGIRLSには未登録の怪獣娘が目撃されたらしいわ」

「あちゃあく…現場帰りだつていうのに仕事増えちゃったなあ…もうこれじゃあ仕事量減らすのも無理よ」

「グダグダ言っていないで行くわよ、ガッツ！おまピトのリアタイ視聴までには間に合わせるわよ！」

「もう、エレ…なんでわざわざ録画しているのにリアタイで見ようとするのよ」

丁度同じ頃、埼玉県警から『秩父鉦山凍結事件』の調査に訪れ市内を歩いていたらランことエレキングとミコことガッツも即座に町の裏手の路地からソウルライザーに指を弾かせて怪獣娘へと変身を遂げた。

—さいたま市内・仲町—

どこかの公園内の公衆トイレでシュンイチは洗面に向かって両手で水を汲み、溜まった水を顔に浴びる。

「はあ…はあ…はあ…」

何度も同じことを繰り返してもこれが現実であることは変わらなかった。

「……………」

恐る恐る洗面台の鏡を覗くシュンイチの目には鏡に映るべきは本来自分の鏡像…であるはずが、どういうワケか自分ではない。

鏡に映るのはセミロングの髪に小顔の輪郭、そして…赤い瞳を持つ女性が自分に対して睨むように見ているが…紛れもなくシュンイチの鏡に映る自分の鏡像がその女性

だった。

始めは水を汲んだ川流れる森の中、メカゴモラと一時をしのいだ洞窟内、そして今は自分と相対する鏡の中でようやく彼女と向き合うことができた。

気配と言うべき何かとして今まで自分の身近に感じて居た視線の正体は自分の中にいる正体不明の女性だった。

(…どうして、何も喋らないんだ……あなたは誰だ……僕ではないことくらい僕が一番知っているのに……僕はあなたを知らない、知らないのに……僕は貴方が他人とは思えない)

得体の知れない力、自分が持つには大きすぎる罪、そして……誰かも分からないの自分と対称にして鏡に写る鏡像の女性、そんな自分が恐ろしくもあり、危険であることが、サラからもメカゴモラからも逃げ出した。

(これでいいんだ……湯原サラさんは僕が誰なのかを知っているかもしれない、でも……ソレを知ったとしても僕がどんな存在なのか僕自身が分かる。僕はこの世に居てはいけない存在だ……彼女ならきつとメカゴモラを任せられる……メカゴモラも、サラさんも、僕なんかと一緒にいるべきじゃない)

濡れた顔に、濡れた前髪、湿って滴り落ちる水滴がポタポタと垂れていく中で深い溜め息を吐き出してこれから先のことなど考えていなくても、自分が取った行動が正しい

と信じるしかシュンイチに残されたものはなかった。

(あなたが鏡の中で何を訴えているか分からないが…もうあの二人の前に帰る気は無い)

鏡の中のもう一人のような彼女を無視する形でシュンイチは振り返ってトイレから出ようとした時だった。

「ウツウウ…キリュウウ…キリュウウウ…」

シュンイチは思わず隠れた。トイレの壁一枚挟んで向かいの外にはシュンイチの中の機龍の気配を探ってきたのか、メカゴモラが一人でシュンイチの事を探していた。

(なっ…どうして…僕を探しに一人で来たのか!?)

身の丈の大きなシュンイチはその有り余る身体も気配も感じ取られないように息を殺してメカゴモラからやり過した。

メカゴモラがここまでシュンイチを探しにきたのなら近くにサラもいるはずだ。会いたくない、会うわけにはいかない、そう心に誓ったばかりに彼女たちと面と向き合えないからである。

「キリュウウウ…キリュウウウ…」

何度も、何度も、か弱い声でシュンイチに呼び掛けるように声出る彼女の言葉には今にも飛び出したい気持ちを押しさえているのが精いっぱいだった。前原との約束も反故

にして、サラから逃げ出し、メカゴモラと背を向けている自分…情けなかった。恩人の期待を裏切つて、自分を救ってくれるかもしれない物を見捨て、自分が救い上げた小さな命さえも誰かに丸投げて来たシユンイチには自分が背負いきれない大きな力しか残つていなかった。

「エレー！見つけたわ！」

ふとやり過す中で見知らぬ女性の声が聞こえてきた。サラではない、何者か分からな
いが見た目はメカゴモラと同じ怪獣娘のようだった

「あなたが街を彷徨っていた怪獣娘ね」

「だっ…誰ゴモ？」

「私たちはGIRLSに所属する怪獣娘、あなたと同じ力を持つ者よ」

「なんかこの子、ゴモにそっくりね」

どうやら仲間のようにだ。メカゴモラと同じ仲間であるならサラでなくても、自分でなくても、彼女たちなら一安心と自分の心に言い聞かせた。

「さあ、一緒にGIRLSまで行きましょう…GIRLSにはあなたと同じ怪獣の魂を宿した仲間がいるわ」

「仲間…：…違う…：ゴモの仲間はキリユウだけゴモ！」

「キリユウ？…：他にも怪獣娘がいるの？」

「違うゴモ！キリユウはキリユウだゴモ！ゴモはキリユウを見つけるまで探すゴモ！」

メカゴモラを探しに来てようやく見つけることができたガッツとエレキングは困惑した。素直に自分たちの言うことを聞く耳を持たず我儘にも誰かを捜すと行って聞かないメカゴモラをどうするべきか困っていた。

「参ったわねえ…エレ、私たち指導課じゃないからこういつた時にどう答えていいのか…ピグつちやアギみたいに説得できないわよ」

「任せて、こういう時はGIRLSに入った時のメリットを説明すれば簡単よ…いい、あなた…よく聞いて、GIRLSに入れば衣食住はもちろん生活面も安定するし、漫画アニメゲームもやり放題だし、給料は良いし、怪獣娘としての活動をサポートもしてくれるし——（以下割愛）」

流れる様な早口のセールストークで訴えかけに来たエレキングに対してメカゴモラは困惑し、ガッツは呆れたような顔に手を当て隠した。

「うっとう…うるさいゴモ!!さつきから何を言っているか分からないゴモ!!お前、シツコイしキモチ悪いゴモ!!」

「きつ…キモチ悪いツ!?!」

エレキングはいままで初めて言われたことの無い『キモチ悪い』と言う言葉にショックを受けて固まった。

「あくあ、ゴメンゴメン…：今のは忘れて、今度は私の話を聞いてね　　んんっ、あなたが嫌でもあなたは私たちGIRLSに来てもらわなきゃいけないの」

「なんでゴモ？」

「そういう決まりなの…：都内と違って未登録の怪獣娘が街を1人でふらついていると発見され次第、特定不明人扱いされて警察に捕まっちゃうのよ…：世知辛い世の中だけど、怪獣娘はGIRLSに登録されていないと怪獣の姿で出歩けば即通報、暴走の危険ありと判断されているワケ」

ガッツは肩を浮かして辛い怪獣娘の現状を表した。

「でもだからこそ、あなたみたいに今後も道迷う怪獣娘が危険視されないためにも私たちはあなたを保護する義務があるの…：もちろん、キリユウっていうあなたの仲間も保護するわ…：で、そのキリユウって言うあなたの仲間はどこのなの？」

「分からないゴモ…：キリユウ、ゴモの前から去った…：ゴモはキリユウが好き…：でもキリユウはゴモの事をよく思っていない」

「ええつと…：ますますワケが分からないわ…：誰なの？キリユウって？」

「キリユウはキリユウゴモ！」

「だからキリユウって誰なの？…：ああもう、小さなゴモを相手にしているみたい…：んんっ？ゴモ？…：そういえばあなた名前は？」

「ゴモはメカゴモラだゴモ」

「メカ…ゴモラ?…ゴモの怪獣のゴモラの近縁種かしら? ああ、もうますますワケが分かんないい〜!」

ガッツはワケが分からなくなった自分の頭をかき回して埒の明かない状況を打開できることはとにかくGIRLSに彼女を連れて行くしかなかった。

「とにかく、私たちと来て!」

「イヤゴモ!」

「なんで!」

「キリユウ探す!」

「またそれ!? 誰なのよ、キリユウって!」

メカゴモラが頑なに探すことをやめないが、その正体を知らぬガッツは八方塞がりだった。

「もういい、ゴモはキリユウを探す!」

「あつ、待って!」

ガッツは行く手を阻むようにもう1体の自分を分身してメカゴモラの前行先を塞いだ。

「邪魔ゴモ!」

メカゴモラは前を塞ぐガッツに自身の手を飛ばしてぶつけた。

「キヤアツ!!」

分身のガッツは思いもよらぬ反撃にあつた…が、瞬時に消えた。

「ゴモツ!!」

「おとなしくして!!」

本体ガッツと分身ガッツはメカゴモラを肩から腕をつかみ押さえて地面に抑え込んだ。

「やつ、やめるゴモ! 放すゴモ! キリユウウ! キリユウウ!!」

「ちよつ、暴れないで!! エレ、落ち込んでいないで助けてよ!」

「キモチ悪い…キモチ悪い…」

メカゴモラを抑え込むガッツの傍らでエレキングは未だに言われ慣れない言葉に動揺して落ち込んでいた。

「キリユウ!! キリユウ!! キリユウ!!」

「もう、そのキリユウってのも一緒に探してあげるから…大人しくしてよお!!」

どれだけ説得しても言うことを聞かないメカゴモラに落ち込むエレキング、打つ手がなくもはや強引にも無理矢理 G I R L S に連れて行くしかなかつたが…

分身した2人のガッツでメカゴモラを起き上がらせ両脇から抱えて連れて行くこうと

赤な目であった。

— Auto Kill Access Control System
— P. Key Interface —

— AKATSUKI MODE —

シュンイチの身体は機龍へと変貌を遂げるとトイレに隔たれていた壁を手に触れて超振動を発生させて壁面の原子を崩壊させ破壊した。

「なっ、何ッ!？」

トイレの壁から突如現れた得体の知れない機械の怪獣に驚いたガッツは目の前で起きていることに目を疑った。

しかし、彼女に驚く時間すらも与えずにジェット噴射からの音速でガッツに飛び掛かってガッツ本体と分身の2体とも同時に機龍は大きな手で彼女の首を掴んだ。

「ぐああっ!？」 「がはっ!？」

強い力で喉に締め付けられる感覚がガッツの意識を遠のさせる…が…—ピシイン!!

「ガッツを放しなさい!!」

逆に今度は機龍の首にエレキングが自身の鞭の様な武器で機龍を捉えたが…両手の内の左手のガッツは分身が維持できなくなり消えたが右手には本体が残っていた。

そんな本体のガッツをエレキングに向かって投げてガッツとエレキングは互いに衝突した。

「キヤツ!」「くっ!!」

その衝撃に手元が緩んだエレキングは鞭を手放してしまい機龍の首から彼女の武器はスルツと足元に落ちた。

機龍は危害を加えられたことに報復反撃として口が開くと膨大な電流エネルギーがプラズマを放つて充填されると一気に放出してエレキングとガッツに襲いかかった。

「キヤアアア!!」「アアアアアツ!!」

攻撃は彼女たちに直撃して衝撃は彼女達の獣殻を著しく損傷させるほどの強いダメージとなって表れていた。

しかも、それだけにとどまらず…トドメとして胴体閉口盤が開いて胸部腹部の3門砲からエネルギーが充填されるとあの山さえも消し飛ばした極超低温攻撃を仕掛けようとしていた…が、しかし…

「キリュウウウウウ!!」

機龍の足元にしがみ付くメカゴモラに気が付くと…機龍の目は元の黄色い目へと戻って正気を取り戻した。

「あれ…僕は…何を…?」

気が付いた時にはダメージを受けて気絶する怪獣娘が2体、自分にしがみ付くメカゴモラ、状況が読み切れない機龍だったが…自分が胴体の閉口盤を開いて怪獣娘2人に向けてあの危険な攻撃を仕掛けようとしていたことに気が付いて急いで自力で閉口盤を閉じた。

「キリュウウウ…」

メカゴモラも機龍を必死で止めたい…ワケではなく、ただ再び出会えたことに喜んで飛びついただけであつたが、奇しくも怪獣娘2人の危機を救つたことなど彼女は気付きもしなかつた。

「メカゴモラ…ゴメン、ちょっと…外に出ていただけだから…心配させちゃつたかな？」

機龍の返答に対してメカゴモラは首をフルフルと横に振つて意思を返すと、機龍はメカゴモラの頭を撫で回した。

「…帰ろうか…サラさんも心配しているだろうし」
「…んんっ」

機龍はメカゴモラを脇から持ち上げ抱えると、バーニアを蒸かして倒れるガッツとエレキングの側から飛び立って去って行つた。

機龍が2人の元を去って行つた後に意識を取り戻したガッツが起き上がった。

「……うっうう……エレ……大丈夫？」

「なんとか……電気怪獣であることが幸いしたわ」

辛うじてダメージが回復した2人は自身の身に起きたことを整理すると……あの銀色の怪獣が頭に過った。

「エレ、今さっきのつて……」

「間違いないわ……警視庁が私たちに情報開示した『特異生体不明怪獣』……特生怪獣第4号だわ」

未だに上空に漂うバーニアの軌道を見上げる2人は改めて機龍の、
“特異生体不明怪獣”の脅威を改めて実感するのであった。

——マイケルシールズ号・甲板——

得体の知れない敵と交戦するゴジラが未だ船内で暴れ回っている中、人質たちは続々と甲板のヘリポート上に集まり始め、救援に駆け付けた移送用のヘリコプターが続々と人質約20名を一気に機内に収容したが……

「……めんなさい、やっぱり私たちは乗れません」

「皆さんは先に脱出してください」

青い髪の少女と赤い髪の少女はヘリへの搭乗を拒否した。

『君たちが最後だ！早く乗って！』

「いいえ、まだクララがいません」

「おジョーを置いて私たちが逃げるワケにはいかないんです！」

そういうと二人の少女は手に持つソウルライザーを掲げて指で弾いた。

「ソウルライド、コダラー！」

「ソウルライド、シラリー！」

青い髪の少女は光に包まれると背中に甲羅状の物質と大きな青い手が出現し、赤い髪の少女も同じく光に包まれると額に赤い角と背中を浮遊する銃火器の様な翼が現れる。

彼女たちもクララと同じくGIRLSに所属する怪獣娘のコダラーとシラリーだった。

「行こう、シラリー！」

「うん、コダラー！おジョーが待っているわ！」

そう互いに意思を確認し合うと2人は船内へ向かって行った。

ヘリもこれ以上は待てないとハッチを閉めて発艦した。

— 船内・通路 —

『御二人とも！無茶はなさらず、危なくなったらすぐに退避してください！』

船内を突き進む2人に小さな機体をピョンピョンと飛びながら2人についてくガンヘッドギアも同行していた。

「私たちは大丈夫です！…それよりロボットの人は私たちなんかについて来て大丈夫なんでしょうか？」

「私たちを助けに来てくれた人に付いていなくて大丈夫なの？」

『彼の事なら心配はしていません…それより、今しがたクララさんことキングジョーさんの生体シグナルをキャッチしました。今度は本人で間違いありません』

ガンヘッドギアの案内でクララの元へと向かう2人と1機のロボットは最奥の動力室へと向かった。

— 船内・動力室 —

最奥に位置する船内の心臓部こと動力制御を目的とした一室ではクララが鉄柵に縛り付けられていた。

「クララ!!」

「助けに来てよ!」

コダラーとシリリーはクララを見つけるなり大きな声で意識の無い彼女を呼び掛けた。

「うっ…うう…ノー!! 来ては駄目です!!」

「何言っているの、あなたを置いてはいけないわよ」

「今、ロープを解くわ!」

コダラーはすかさずクララの手首を縛る縄を切り破って外させたが…

「違うんデス! この部屋には…爆弾が仕掛けられています!」

「爆弾が何よ! すぐに脱出すれば…」

「そうじゃありません…この爆弾の種類を見て下さい!」

「えっ?」

クララが訴える動力室に仕掛けられた爆弾…その正体に一同が驚愕した。

『コンポジション4、軍用の固形プラスチック爆薬……製造は…USA, MARINE
!?!』

ガンヘッドギアがスコープレンズを通して拡大した表記名にはアメリカ海軍で製造されている通称C4爆薬と呼ばれる高性能爆弾が動力室にいくつも設置されていた。

「どうしてアメリカ海軍がこんなものを…」

「私たちや乗組員も乗っているってわかっているのに…」

「おそらく……ここにわざとらしく搬入した『彼』を船もテロリストもまとめて爆破するためです」

本来、貨物室ではない動力室に安置されたとある装置に繋がれた『荷物』が関わっていた。

『…J—1973…ジェットジャガー…』

それは跪いた状態で充電パネルの上で様々なケーブルに繋がれたロボットだった。

黄色と赤のカラフルな色合いに鋭利な顔つきの頭部を持つロボット『ジェットジャガー』がアメリカにとって存在することが都合の悪いからこそやむを得ない状況であったという言い訳の元でテロリストに破壊されたという名目でジェットジャガーを破壊処分するために今回の移送が計画された全貌であった。

「誰がこんなことを…」

「それよりも、私たちも早く脱出しなきゃ爆弾で…」

—ゾクツ！

3人の背筋から怪獣としての本能が嫌な気配を感じ取った。

—カシャン…カシャン…カシャン…キイイイイ!!

耳を傷める嫌な金属音と共にコダラーとシラーたちが入ってきた出入り口から恐ろしい人影が現れた。

「…俺の敵はどこだ…」

それは両手に鋭利な鎌のように鋭い刃物を装着された赤いバイザー状の複眼、青黒いカラーリングの体表…そして明かに機械仕掛けの身体がテロリストたちと同じロボットを思わせる姿をした怪獣が現れた。

「だっ、誰ッ!?!」

「あなたの敵?…知らないけど、少なからず私はあなたが敵に見えるけど…」

「2人とも、下がってください!…ここは私が…」

クララはソウルライザーを内ポケットから取り出して即座に画面をタップすると…全身が光に包まれて、頭にアンテナ、胴体はメカメカしい作り、手足には可憐な女の子の手から逞しい大きなロボットの手、クララは怪獣娘キングジョーへと変身を遂げた…が…

「ふんっ!…:…えっ? キヤアアアアアア!!」

キングジョーは突然、頭を抱えて倒れ込んだ。

「どうしたの、おジョー!?!」

「クララ! しっかりして!!」

『まずい、きつと奴の妨害思念波だ! 先ほどからこちらも検知していたけど…機械回路に支障をきたす特殊な周波数であの怪獣が殺気に近い気配を発してキングジョーはソ

レをまともを受けてキンググジョー本来の自己防衛システムがエラーを起こしたんだ!』
「でも、私たちは何とも…」

『この周波数…キンググジョーの様に高度な回路と精神がつながった状態の怪獣娘には効果が絶大すぎる、遠隔操作の単純回路の僕のロボットや生物怪獣である君たちには何ら影響は無いだけだ』

ケンキチはガンヘッドギアが検知した漆黒のロボット怪獣の周波数から特定してキンググジョーの電気回路がショートした原因を特定した…と同時に…

『しかも…この周波数値は…そんなはずはない、*彼*は死んだはずだ』
「ロボットのの中の人、あの怪獣を知っているの!?!」

「そんなことよりクララを…」

迫りくる凶悪なロボット怪獣から死神の鎌が怪獣娘3人にジリジリと近づいてくる中でガンヘッドギアが後ろへ飛びあがった。

『こうなったら少し早いけど…*ジェットジャガー*を起動する!』

ケンキチは急いでガンヘッドギアを通してジェットジャガーをつなげる動力ケーブルの制御モジュールにアクセスして再起動を掛け始めた。

—キイイイオオオオオンツ!!—

突然、両手に鎌を携えたロボット怪獣が金切り声の様な咆哮を挙げると目のも止まら

ぬ速さで動力室を縦横無尽に飛び交った。

「キヤアアアア!」「ヒイイイイ!」

コダラーとシラリーは意識を失ったキングジョーを抱えて身を小さく屈んだ。

しかし、どういうワケか壁を飛び交って壁にかまいたちの様に壁が斬りつけているような斬り跡しか残らずただ部屋そのものを傷つけているようであった。

だが、そんな奇怪な行動を起こす死神の鎌はコダラーとシラリーが庇うキングジョーに迫ろうとした。

「クララー!」「おジョー!」

必死に2人が盾になって身を挺してキングジョーの身体を守ろうとした時だった:

—ガキイン!!

—キユイイン!キユイイン!!—

高周波の機械音と共に硬質な金属の手が死神の鎌を捉えて、その凶刃の先端がコダラーとシラリーの間に通ってキングジョーにまで迫っていたが既の所で届かずに済んだ。

『間に合った!ジェットジャガー、再起動だ!』

彼女たちを死神の凶刃から守ったのは:彼女たちの背後の動力ケーブルに繋がれていた「J—1973ジェットジャガー」だった。

ジエツトジャガーは掴んだ鎌を振り払い、ロボット怪獣の胴体を蹴り上げて背後の彼女たちから距離を離させた。

「ぐうっ！…そうだ…この痛みだ…感じるぞ、俺の中で痛みが……生きる実感だ!!」

ロボット怪獣は再び鎌を構え直してジエツトジャガーに迫って行った。

斬りつける、斬りつける、躲す、躲す、凶悪な武装を持つ相手にジエツトジャガーはまるで事前に超高度な演算処理によって躲す位置まで瞬時に計算予想を叩き出して避けて躲していく驚異的速度で鎌のロボット怪獣の攻撃を紙一重で交わっていた。

「すっ…すっ…」

「なにアレ…」

怪獣娘には入る余地すらも与えない超スピードの攻防にコダラーとシラリーは目を奪われていた。

一方、船内ではそれ以上の戦いが大きな衝突音と共により激しくなっていた。

—マイケルシールズ号・甲板—

甲板へ赤い物体が転がり落ちてきた。船内の甲板付近に設置されたクレーンや武装などに激突しながらも赤い物体はゴロゴロと甲板に転がった。

そこへズシンツ！と音を立て、船体が大きく揺れるほどの衝撃と共にゴジラが赤い物

体の前に立ち尽くす。

「立てよ、変装ヤロー……このまま海に叩き落とすのも考えたが、お前は蛸殴りにして海へ返してやるよ」

ゴジラは手首の関節をコキコキと鳴らしながら近づいていきトドメを指そうとしたが……

「ぶはあく……いいねえ、流石ゴジラ……怪獣の中の怪獣、王者の中の王者……うれしいよ、こんな三下の僕なんかに構ってくれることが何よりもうれしい……決めた、今日から僕は『ボコボコにタコ殴りをゴジラから受ける怪獣』として『タコラ』と名乗ってやる！ゴジラ、僕の名は『タコラ』……これから先、お前が僕の最初の敵……僕こそがお前のこの戦いの最初の敵となる！御互い、楽しい殺し合いをしよう！お前の大切な者を傷つけても僕に振り向かせてやるよ！……ぐえっ!!」

ゴジラは自らをタコラと名乗る得体の知れないタコのような醜悪で歪んだ思考と思想を兼ね備えた存在感を放つ怪獣に対して強い足踏みと共にタコラの胴体を踏みつけた。「次など無い、お前は今……で……大海原の闇の底に沈んでいくだけだ……とつとと消えろ！」

ゴジラはタコラを踏みしめた身体から大きく振りかぶって一気にその足を振り下ろすとタコラの胴体を強い衝撃と共に蹴り上げた。

「げぼはあああああ!!」

タコラは宙を舞って甲板を飛び越え海へとそのまま落ちていく……はずだった。

「ぐうっ!? そんな、ヤメロ!! 今は……出てくるな!!……このままじゃ、お前がゴジラの最初の敵になっちまうじやないか!? 止める……ヤメロオオオオオ!!」

突然、蹴り上げられたはずのタコラの身体が宙で静止して止まった。しかも、タコラの身体は見る見る赤い体色を変化させて薄気味悪い青緑色に変化を始め、胴体が著しく長く大きく、タコラとは宛ら違う何かに変化しようとしていた。

「なんだ……何か……何かが変わだ」

その異変にゴジラも気づき始め、異様な不気味さがゴジラに危機感の警鐘を鳴らすようであった。

やがて、タコラ……だった者は沈黙すると……目の前にはそれまでとは違う、いわば名状しがたい何かに変化を完了した。

「……獣の子よ……久しいな」

その声、その威圧感、その存在感、あの記憶……ゴジラの中で平坦な小笠原諸島の経済水域状の上に漂う軍用客船の上ではなくなり、記憶の中の荒れ狂う嵐の中のどこかの島に土俵が脳内変換されていた。

「お前は……あの時の……」

「左様、お前たちの時間で約3年前…私は貴公の前に姿を晒した…そして再度、宣する…その力は人が待つては為らぬ力…獣の代表者よ、水へ帰する時だ」

タコラだった何者かは上空に向かつて何らかの光弾を放つと空一面を晴れ模様景色が有れる嵐の様な天気に変わり出した。

「同じだ…あの時と…あの島で起きた時と…」

「…あの時は予想せぬ邪魔が入ったが…今度こそ、この世界を修正する…この世界は、人が持つてはならぬ力を持ちすぎてしまった…溢れすぎてしまった…だが、このような世界であっても人が必要だ。穢れ無き者は残置し、穢れた者は慈悲として他世界に渡つてもらう」

それはこのタコラだった何者かが今までアキたち怪獣娘たちをどこかに連れ去ろうとしていた謎の怪物に繋がる存在であることを指示していた。

「お前が…アキたちに『モンス』を差し向けていた奴か!？」

「ほう、他世界の眷属たちを…お前たちはそう呼ぶか…確かに我にもその責は大いに関わる…が、あれは元を正せば他世界で繁栄した種の複製、この世界は人間種が？榮しているのであれば人間種が眷属として反映されるのもまた然り…だが、この世界は『特例』だ…本来であればそのようなことは決して無い」

「相変わらず何を言っているのか理解しかねるが…おおむね意味は理解できた…が、俺

は「人間を守る」など崇高な理念などコレツぽつちも無い！テメエの様に人様の世界を勝手に解釈して神を気取る阿呆だろうと「世界（ナワバリ）」を荒らす奴は等しく俺の敵だ！失せろ、蛸助！」

「神を気取るのではない…私こそが神だ…世界に水が存在し続けるように、私なくして水は存在しない、故に私は世界の水を司り、生命を管理する者、それが我…人は私を『クトウルフ』と呼ぶ」

得体の知れず禍々しい名状しがたい姿をしたタコのような怪物が自身を『神』であると呼ぶが、天変地異を自在に起こし、尚且つこれだけ不可解な言動や行動を起こしているにも関わらず謎の存在クトウルフに対して言いしれる何かを感じずにはいられなかった。

「獣の子…否、貴公は最早『ダゴンの戦士』としては十分な力を宿している…滅するに惜しい存在だ」

「ああ？何を言っている」

「今一度問う…そなた、この世界の新たななる『ダゴン』に為つてはくれぬか？」

クトウルフは自ら提案としてゴジラに『ダゴン』と呼ばれる何らかの役職的存在に尽くことを勧めてきた。

「さすればこの世界は現状のままに残置し、持つべきでない力は人の可能性へと昇華さ

れるであろう」

「ワケが分からん……お前の目的も、何もかもが分からん……だが、これだけはハッキリと言える……その問いがお前の部下か何かに向けられと言うなら……断る!!」

ゴジラはクトウルフからの提案を断固拒否した。

「ふむ、なれば最初の犠牲は貴公となつてしまふか……残念だ、ダゴンの戦士よ……水へ帰れ！」

クトウルフは何かとしてつもないエネルギーが手に集約されてゴジラに向けて放った。

しかし、そのエネルギーはゴジラに届かずに弾かれ海へと落ちた。

「戯れはそこまでです……主なるクトウルフよ」

今は南鳥島に居るはずのダグナが、なぜかゴジラとクトウルフの前に現れて……しかもクトウルフと同じく何らかの力で宙を浮いて得体の知れぬ力を宿していた。

「貴公は……ダゴン……否、ダゴンの半身か？」

「左様、私もかつてはこの世界に存在する人間と等しい存在だった……しかし、来る日にあなた達神々がこの世界に干渉してくることを見据えた生来のダゴンは私に力の一部を与えた……クトウルフよ！ 大いなるアザトースの意志に背き、この世界を無かつたことになどできはしない！」

「私は宇宙の大いなる意志に背いたことは無い……現に彼の者と同じような力を持つ者た

ちはいずれ持たざる者たちとは反する道へと歩むだろう」

「ならば私がそうさせない……そのために準備したこの100年以上の時間をもつて既に準備が整った。主なるクトウルフよ、他の神々における最高意思決定を司るあなたがこの場を引かれよ……決めるにはまだ早すぎる」

ダグナはクトウルフにこの場を引くように促した。

「……いいだろう……だが、忘れるな……特にダゴンの戦士よ……その力を持つ意味は世界と相反するということをお前が示すことになるであろう」

「知るか……俺は俺だ……誰の指図も受けん……例え神にだろうと俺は従う気は無い」

その意思をゴジラはクトウルフに伝えると……クトウルフはどこかへと姿を消失させるかのように消えて、その場から得体の知れない気配は微塵も無くなって完全に消えた。

それと同時にあの荒れた天気も雲一つない晴天に変わって星々が煌めく真夜中の空に変わった。

「……どうやら、嵐が過ぎたようですね」

「やり過ぎした気は無いがな……」

ダグナはゴジラの元へ降り立ち、ゴジラも変身を解くと元のユウゴに戻っていた。

『お……い！お待たせ……！』

そこへガンヘッドギアを操るケンキチの声が響き、こちらに向かってくる。

「おや、皆さんご無事でしたか？それでもJ—1973まで起動されてまで：何かありましたか？」

ガンヘッドギアに連れられてジェットジャガーは両手で意識を失っているキングジョーを抱えて、その後ろでは恐る恐るコダラーとシラリーがダグナを覗き見ていた。

「あつ、あの～：お兄さんはどつちですか？」

「私たちの敵？それとも味方？」

「そう申されましても：一応は味方と思ってもらって結構です～：それより、早くここから脱した方がよろしいですね：アメリカ海軍の艦隊が御到着の御様子です」

ダグナが振り返った先ではアメリカ海軍が補修する駆逐艦数隻が艦隊編成を為してマイケルシールズ号に近づいてきた。

「味方の援軍ですか？」

「いえ、どちらかと言えば証拠隠滅でしょう：駆逐艦からトマホークが射出されましたよ」
ダグナは冷静にアメリカ海軍艦隊の駆逐艦から巡航追尾ミサイルの『トマホーク』を全艦が発射したのを見届けた。

「そつ～：それって～」

「私たちの居るこの船にミサイルを飛ばしたってことですか!？」

「彼らが命令で発射したとしても私たちがいることなど気づいていませんね…いや、気づいても果たして撃つていたのかも…あつ、そろそろ着弾しますね。5、4、3、2、1」

あまりにも冷静に状況を秒読みカウントを指で折り曲げながらダグナと何もしようとしていないユウゴとジェットジャガー、その後ろで慌てふためいているコダラーとシリリーは頭を抱えて身を屈めた。

「うわああああ!!」

「死ぬウウウ!!」

「うっ…うう…あれ?」

「何も起きない?」

恐る恐る目を開けたコダラーとシリリーは気が付くと自分たちが何故かどこかのビーチに居ることに気が付いた。

「0」

そして、ダグナがカウントを終えた時に…海の方から巨大な爆発音と衝撃波が遅延してやってきた。

「キヤアアア!!」

思わず更に身を屈めたコダラーとシラリーは舞い上がる砂に目を閉じた。

そして、ビーチから見える経済水域上に漂っていたマイケルシールズ号は大破炎上、燃え盛る炎と共にマイケルシールズ号は甲板と船内のあらゆる状態が絶望的に崩壊して撃沈の後に海の底へと沈んでいった。

「どっ…どうして私たちがここにいるのか分かんないですけど…」

「あのまま、あそこに居たらどうなっていたの？」

「…少なくとも命はありませんでしたね、御陰で命拾いしました。私たちを救ってくれてありがとうございます。コダラー、シラリー」

ダグナは未だにマイケルシールズ号の燃え続けていた炎が海を焼き上げる火柱を背後に笑顔でコダラーとシラリーが自分たちを助けたということを演出して偽装した。

「わっ…私たちが無いですか!」

「貴方は…いえ、あなた達は一体何者なんですか!？」

突如にして起きすぎる原因不明、現状不明、何もかもがGIRLSの怪獣娘コダラーとシラリーには理解が及ばぬ得体の知れない力を持つダグナたちに恐怖心が芽生えつつあった。

『ダグナさん…先ほど動力室で…死亡したはずの“ガイガン”と接触しました。ジェットジャガーが交戦に持ち越しはしましたが…その後相手から後退して戦線離脱されま

した』

「ガイガン…あれはユウゴ君が倒した…いや、K I A（戦死）ではなくM I A（行方不明）でしたね」

ダグナはガンヘッドギアを通してケンキチの報告を聞いてガイガンと呼ばれる死神の様な鎌を振りかざしジェットジャガーたちを襲ったロボット怪獣の報告が伝わった。

「あれ？…あの人どこいったんだろう？」

「ホントだ、いつの間にかいないね」

コダラーとシラリーはいつの間にかいなくなっていたユウゴがどこに行つたのか辺りを見渡しても南鳥島内にはいなかった。

・
・
・

—都内・住宅街—

他の者が南鳥島に居る中でユウゴだけが先になぜか距離離れた本土に帰還していた。

「ダグナのヤロー…手際がいいこと」

さながら瞬間移動でしかできない芸当をユウゴ唯一人だけをアキやミオが居るセーフティーハウスのマンションへ降り立った。

それはある種のダグナからの『大切な者たちの元』へ帰っておけと言うメッセージの様にも思っていたが、ユウゴはマンション前に立って居ても仕方なく、アキたちの部屋へと帰って行つた。

—アキの部屋—

部屋に帰つてきたユウゴを待ち構えていたのはリビング内の一人掛けソファアで毛布に包まつて寝ているアキとその隣で彼女を見守りながらユウゴを待つミオがいた。

「御帰り…」

「何してんだ、あんた」

「うん?…まあ、君を待つていたらアキちゃんが先に寝ちやつたつて所かな」

「ふん、そうかい…」

ユウゴはその隣の3人掛けソファアの左側に座つて肘掛けの名前通りの使い方方で肘を置いて頬杖を付いた。

「…どうしたの?今日はやけに怒つてらつしやるじゃない」

「珍しくもねえだろ…俺は生まれた時からこういう感情でしか生きてねえよ」

見た目はだけは表情ほとんど変わらない無表情で有るのにミオにはユウゴがいつもより違う感情に動かされているように見えていた。

それ故かミオはユウゴと反対に右側のソファに腰かけた。

「ほら、お姉さんの膝に頭乗せなさい…少し疲れているなら横になった方がいいわよ」
「急に年上ぶるな…らしくねえ」

「年上だよ…年上の包容力なめるなかれ…ほらほら、お姉さんが癒してやろう」

ユウゴはそう言われ…仕方なくミオの膝に頭を向けて横になった。

「ふふふ…どう?」

「何も…」

言われるがままに横になったが…気持ちに変わる所は無く、ただユウゴに取って何ら変わらない睡魔も無ければどうもしない状況だった。

「よしよし…ユウゴくんは一人で良く頑張ってるよ…その気持ちはアキちゃんもお姉さんも一番分かっているからね」

「うるせえよ…」

「アキちゃんはねえ…明日は君の店でお友達とパーティーするからって張り切っていたけど、お兄ちゃんが帰ってくるまで起きているってずっと言ってたんだよ」

「その待っている相手が帰ってきてても寝ていたら世話ねえわ」

アキはユウゴの店で明日GIRLSの皆とパーティーをする準備を終えた疲れからユウゴを待ちきれずに寝ていた。

一方その頃の神奈川県内のホテル街、『さいたまニューデイズホテル』前では居なくなったシュンイチの居所に苦心するサラと前原がいた。

「お気持ちをしっかりと持つてください…」

「だって…私も自分の一方的な気持ちを押し付けていただけかもしれないじゃないですか…」

「桐生のことはともかくとしても、怪獣娘さんの方は署が全力で捜索しておりますので…」

気持ち沈んで落ち込むサラを勇気づけつつも警察官としてできる限りの助力をしているとサラに伝え続けた前原だが…

「あの…何かあったんですか？」

そこへあつさりとしてひよっこり帰ってきたシュンイチがメカゴモラを抱えて帰ってきた。

「桐生！お前、どこに行ってたんだ…」

「ああ…少し外に出ていただけですけど…——ッ!？」

気軽に外へ出ていたと伝えたシュンイチだったが、突如そんなシュンイチの頬をサラは引っぱっていた。

「こんな長い時間も外に軽く出ていくワケ無いじゃないですか!!心配したんですよ!!」
「ええつと…なんかすみません」

ずつと帰ってくる気配も無かったサラの前に『少し外に出ていた』と言うシュンイチの言動に不平不満や心配した気持ちなどをぶつけようとしたサラだったが…

「でも…よかつたです…無事だったなら、よかつたです」

「ごめんなさい、サラさん…御心配おかけしました」

「桐生…もう大丈夫なのか？」

「はい…前原さんも御心配おかけしました」

「そうか…じゃあ岡田くんは県警に連絡しておいてくれ」

「了解しました!」

前原も彼がサラの元を長い時間離れていた理由を深く聞くことなくシュンイチの肩に手を置いて今の気持ちの変化を少し尋ねるだけに留めた。

「前原さん…色々とご迷惑とご心配をおかけしました…私と桐生さんはこれから私の実家がある八王子に車で戻るつもりです」

「いろいろとお世話になりました」

「…ナリマシタ…」

サラとシユンイチは前原に深々と頭を下げ、礼を尽くすと、メカゴモラはソレを真似るかの様に同じく頭を下げた。

「ああ、二人ともご達者で…」

そういつて前原は2人がサラ所有の軽自動車に乗り込んで国道沿いの流れに入つていき前原の元を去つて行つた。

「人騒がせな連中でしたね、前原さん」

「いいや…桐生にも何らかの気持ちの変化があつたんだろう…我々は彼が何も無いと言え、何もなかったことを信じてやるのも、警察官としてよりも大人として信じてやることも大事さ」

そういつて前原はようやく肩の荷が下りて県警車両に乗り込むと再び駅まで向かつて行つたのであつた。

パーティー会議

—アメリカ合衆国・ワシントンD.C.—

合衆国東部に位置する連邦直轄の区域に指定されているワシントンとは正式な地名ではなく、正式名称は『コロンビア特別区』として合衆国連邦政府が所在する政治的 중심地、特に連邦議会、連邦最高裁判所、そして大統領官邸ことホワイトハウスが在する首都である。

そして現在、そのホワイトハウス内ではある閣議が開かれていた。

通称『オーバルオフィス』と呼ばれる西棟に位置する区画内の閣議室では各主要の議会議員を両脇に座させて中央に一人の初老の黒人男性は国家元首にして合衆国の代表的政治の統率者、すなわち「大統領」が座していた…のと同時に、向かい合って縦長の席に座するのは軍関係者でもなければ合衆国側に関わる人物でもないヴィンテージスーツに身を包んだ大統領と同世代くらいの日本人男性だった。

「ブルックス大統領…もう間もなく、彼女」が到着する頃かと…」

初老の日本人男性は合衆国国家元首ブルックス大統領に少しの待ち時間を要求すると…閣議室の外から駆け足で床に足音響かせる人物がいた。

「おっ…お待たせしました！はあっ…はあっ…遅れて申し訳ありません、国際怪獣救助指導組織代表の者です」

慌ただしい様子で合衆国内の上院議員などが連なる閣議席に入ってきたのは抱える資料荷物を持参して黒いレディースのスーツ調の格好に目の中は黄色に輝かしい瞳、そして頭部には吸盤状の器官が生えた人物だった。

「ミス・ゼットン…どうぞお席へ」

初老の日本人男性が自分と同じ側の席に座るよう勧めるとミス・ゼットンと呼ばれる“星人”女性は『失礼します』と言って男性の隣の席に座った。

「特務機関『MONARCH』、国際怪獣救助指導組織『GIRLS』…同組織の顔役たる二人が一同に会するとは珍しいこともあるようだね」

「お言葉ですがブルックス大統領…あなたも元はMONARCH研究者、いうなれば私の直属の先輩にあたる方…スカルアイランドへの渡航調査記録は何度も読ませてもらいました」

「70年代の私たちの冒険劇…今も思い出す度に胸が躍るよ」

ブルックス大統領は自身が目元にかける眼鏡のブリッジを押し上げると光で反射していた目の中の瞳がクッキリとして現れた。

「大統領、そろそろ始めてもよろしいでしょうか？」

大統領と初老男性の他愛のない会話が続きそうになる中で白人の上院議員が間に入って閣議の開始を伝えた。

「おや、すまないねフレッド…それでは今回の『J-1973』の移送中に起きた事件をすべて聞かせてもらおう…ミスターセリザワ」

ブルックス大統領は先日の移送艦船『マイケルシールズ号』に起きた顛末を初老男性『セリザワ』に尋ねた。

「その件につきましては…現場指揮を行った彼に説明をお願いします」

芹沢がミス・ゼットンとは逆の方に手で指し示すと…閣議室に後から入ったミス・ゼットンを始め、大統領と上院議員たちでさえも気付かなかった人物がそこにはいた…否、突然に現れたと表現するのが正しかった。

「ご紹介に預かりました…MONARCH分析官の逸保志ダグナと申します」

ホワイトハウス内の閣議室にダグナがその姿を見せるなり自己紹介を始めた。

「君が例の『サルベージャー・ジーク』の孫娘の後見人かね、国防長官の一件では大変申し訳ないことをしてしまっただけ…現在、”元”国防長官はカナダの実家で酪農をしているよ」

「ご心配には及びませんが、あの場には”怪獣王”と私もアキさんに同行していましたので”何も問題なく”、その日の元国防長官もたまたま退職日が早まられたと私は認識し

ております」

「話が早くて結構……だが、おかげで私は『ゴジラ』に酷く嫌われてしまったようだ……大統領の私に『滅ぼす』とまで脅される始末だよ、大国に堂々と脅迫できるのは彼くらいなものだ」

ブルックス大統領は深いため息を吐き出して自身の政府関係者が起こした不始末に呆れ返っていた。

「では早速……お手元の資料を参考に……説明いたします」

ダグナが進行を進める上で用意された全員分の資料には小笠原諸島洋上で起きた『マイケルシールズ号』での詳細が記載されていた。

「こちらは船内へ潜入したゴジラからの報告ではマイケルシールズ号にはアメリカ海兵隊による嚴重な警備を敷かれていたようでしたが……兵士の多くはMIAとなったのち、船内は『兵士一人分に匹敵する海水』が乗船リスト内の人数と一致、また人質の中には怪獣娘キングジョーのクララ・ソーンに擬態していた敵も潜伏しておりこれをゴジラが看破のちに撃破、本物のクララ・ソーンは『J-1973』と同じ動力室内にて監禁されてました」

ダグナからの証言された内容に議員たちに衝撃が走り、ざわつき始めた。

「なんと……あのキングジョーが……」
「相手は何者なんだ？」

「彼女は無事なのか？」「怪獣娘が勝てない敵だと……」

怪獣の能力を宿した怪獣娘の実力を広く認知している議員たちにとって怪獣娘に危害が加わることは自分たちの身にも危険が及ぶ可能性、または自国の国民にも脅威が迫ることにも繋がるため動揺が広がりがつあつた。

「ふむ……とうとう、*「彼ら」*の容認を検討せねばならない日が来てしまったか」

ブルックス大統領は思い口を開いて全議会内閣係者に通達することを決定した。

「大統領、彼らというのは……つまり怪獣戦士（タイタヌス）たちを公表されるおつもりですか？それはいささか早すぎると思われまます」

芹沢はゴジラを始めとした怪獣戦士（タイタヌス）の存在を世間に認知させる方針を大統領自らが決する意向に「早すぎる」と意を唱えた。

「ミスターセリザワ、報告書によればマイケルシールズ号の動力室内には明らかに「ジェットジャガー」を破壊する目的で仕掛けられた爆弾を設置していた形跡があつたとのことだ……しかも我が合衆国の海軍が使用する爆発物であると言うことは軍部内部でも怪獣娘たちに更なる助力を阻止しようとする派閥まで生まれつつある始末だ……ミス・ゼットン、あなたにも大変申し訳ないが怪獣娘をこれ以上の危害が加わる前に私たちは先手を打たなければならぬ」

重い口を開こうにも出てくる言葉を抑えるように両手で拝むようにして重ね握る手

で口元に充ててテーブルに両肘立てるブルックス大統領は表情を隠した。

「僭越ながら大統領、発言をいたします」

「なんだね、フレッド……」

議員の中では中堅に位置する年齢ながら特別な枠にいる上院議員の一人、若干40代の紳士な議員という印象の強いフレッド・グリーンリーヴが挙手の後に発言した。

「現在、我が国を始め各国内外でもようやく怪獣娘“だけ”でも信頼を勝ち取りつつある昨今の情勢の中で、“怪獣戦士（タイタヌス）”の案件はシビアな問題かと……」

「というところ？」

「まずは世論です……怪獣娘は我々と同じ人間の姿に近しいからこそ共感性が生まれはしました……が、怪獣戦士（タイタヌス）だけは違います……違い“すぎる”のです。特に先ほどから大統領方が申されている“ゴジラ”は先の口・サ戦役を始め、重大事案にもかかわる“G案件”です」

アメリカ合衆国大統領府内でもユウゴのゴジラを始めとした怪獣戦士（タイタヌス）の情報もごく一部ながら認知はされているが“G案件”として重大事項扱いだった。

しかし、そこにミス・ゼットンが挙手をした。

「グリーンリーヴ上院議員……しかしながらGIRLSは彼に所属の怪獣娘を救われたのも事実です。本来であれば公式の場を用いて彼に礼を言うべきは私であるはずですが

「そのようにトップシークレットとして扱われることも問題を先送りにしてしまいうけです」

「ミス・ゼットン：すまない、確かに君の言うとおりだがこと怪獣戦士（タイタヌス）の存在は極秘として扱われていた：世間一般では怪獣娘だけが認知されて数年、それ以前から日常に怪獣の姿を隠して生活する者たちがいる事実を突きつけるような行為は悪戯に世論を刺激しかねる」

合衆国政府も両手を組んで上向いたり下向いたりと悩む姿を見る限り扱いに困っているようすだった。無理もない、怪獣娘のように「発見された」と報じて早数年内で『実は男性にも怪獣の力を宿す者がいました』と言えば済む話ではなかった。

なにより彼らが一般社会で通常の人間と何ら変わらぬ生活をしながら存在していることが重大であった。

そこへ更にダグナが挙手をした。

「では大統領、こういうのはどうでしょうか：あくまで怪獣娘を始め、一般人にも悟られない範囲で彼らに行動してもらおうというのは…」

「それは正体を隠しながらいざという時のみ、行動してもらおうということかね：まるで彼らにコミックのヒーローのようなことをさせるつもりかね」

「させる…のではなく、してもらおう：現にゴジラを始め、タイタヌス・ガメラ、タイタヌ

ス・コングも極秘裏にGIRLSを危機から救っております」

「私も、その報告は東京支部の部下から通じて報告を受けておりますが…警視庁を始め、防衛省はその存在を既に危険監視事項に抵触して『特異生体不明怪獣』と勝手に呼称していると聞いております」

「怪獣戦士(タイタヌ)を敵に順当する存在だと日本政府は言っているのか?…馬鹿馬鹿しい、彼らを知りもしない連中が勝手なことを…大統領、私の故郷もあなた方合衆国も早い段階で彼らを公式に認知しなければ暴動が起きます!それも人間と怪獣の対立という前時代に逆戻りする最悪の結果になるかと…」

セリザワは前のめりになるほど身体を立ち上げらせ大統領に苦言した。しかし、当の大統領は慎重であった。

「わかつているともセリザワ…だが、国防総省を始め我が軍内部でも『怪獣』に関する見解に異を唱える者も多い…前時代から『怪獣とは敵』と認識する者は変わらず考えを変えようとしなない頑固者ばかり…怪獣娘を認知するようになっても怪獣は変わらず『悪者』であつてほしい連中は多いのだろう」

「大統領、もうしや『怪獣脅威論』を掲げる連中ですか?」

「ああ、そうだよフレッド…怪獣娘を『悪しき魔女』と認識するような連中が口を開くとしたら怪獣戦士(タイタヌ)は『悪魔』だと訴えるだろうね」

ブルックス大統領はさらに大きなため息を吐き出して合衆国内でも抱える『怪獣脅威論問題』への対応が彼らの中で最重大だった。

『怪獣脅威論』とは前時代から続く怪獣に対して敵対及び脅威をとるという内容の文字通りな論理である。

さらに『荒野の狼』というエコテロリスト内にもそう言った風潮があれど利用できる可能性のある力にさえ悪用に手を伸ばす連中もいるためアメリカを始め世界各国の国連加盟国も問題視していた。

一見は怪獣を脅威と認識しておいて、明らかに自分たちに都合の良い解釈で捻じ曲げ、利用できる力は何であれ利用する、『脅威』であるからこそ徹底的に分析して利用できないと分かれば危害を加える『矛盾性』が倫理の破綻した『怪獣脅威論』という論理が生まれた背景があった。

「ますます馬鹿馬鹿しい…そんな愚かな人間が考える思想よりも間近に迫る脅威を感じられない連中も我々が守らねばならないとは…ダグナ、あなたにはより一層の苦勞を掛けてしまいMONARCHとして申し訳がたたない」

セリザワはダグナに対して深々と頭を下げようとするも…ダグナは手のひらを見せ断った。

「かまいません…私はもとよりこの世界には誰よりも重いれが深いだけです。どんな

相手だろうと柱に括り付けてでも御守りいたしましょう」

「あつああ…それは心強いな…」

セリザワは目元にかけて老眼鏡をかけ直してダグナの発言に少し驚かされた。

「それでは…最後にお手元の資料末部へ移ります…我々、MONARCHを始め怪獣戦士（タイタヌス）は予てより戦う相手が今回その姿を見せたことでようやく相対する存在の認識が確立されたことをここに宣言いたします」

全員が最後のページにめくりあげると…そこに書かれた内容に驚愕した。

『『他生命干渉体：MONS（モンズ）』？…これはシャドウとはどういう存在なのかね？』
「シャドウはこの世界の脅威の副産物であるなら、モンズは他世界からの侵入者、すなわち『異世界』からの進行勢力と申しましょう…そして、それをこの世界に干渉させる存在こそ…『神』です」

ダグナの思い切った発言に議員たちにも動揺がさらに広がった…なぜならこのアメリカ合衆国にとって『神』という存在の認識は別にあるからであった。

「ふざけている！…このわけのわからん新たな敵を送り込んでいる存在が『神』だ?!? イエスが私たちに牙をむいたとでも?」

一神教の多い合衆国内では神は偏に一存在しかなく、誰もが連想する神様と呼ばれる存在こそ救いを与え、人々を苦しみから導いてくれると信じてやまなかった。

「そうお考えになるかと思われましたが…残念ながらあなた方が信仰される神とは別の存在です…私の知る『神』とは『点』なのです」

ダグナは議員たちが連想する神とは別にして自身が認知する『神』とは何かを語った。

「あなた方は水に意思は無いと思われるでしょうが…明確にはあるのです、現にあなた方の体組織の7割は水であるようにそれらを管理する存在が今回我々の前に現れた神『クトウルフ』は水と生命を管理するシステムのような存在です」

「システム…プログラムのようなものなのか？」

「厳密に言えば人工的なものではなく…ごく自然的に生まれた宇宙と同時に生まれたプログラムです。言うなれば宇宙自然のプログラムと言えばご理解いただけますか？」

ブルックス大統領たちは納得がいくようでない様子だったが…

「どちらにせよ…我々に敵対意思のある明確な敵と認識してかまわないかね？」

「それでもかまいません」

「怪獣の次は『神』か…私たちはこれから先どんな存在と相對することになるんだ？」

ブルックス大統領は両手を組んで椅子の背もたれにもたれかかった。

「大統領、今はとにかくこのモンスと呼ばれる新たな敵に対しての対策案を検討しましょう…報告書を読む限り、この生命体は怪獣娘を標的に既に5件の遭遇に合っ

す…幸い、ゴジラを始めとした怪獣戦士（タイタヌス）が迅速に対応して事なきを得ているようですが、GIRLSを始めとした怪獣娘個人にはなんら対策が昂じられていない現状を打開しなければ…」

「既に日本のシャドウ対策は警視庁を始め、警察組織が動いているためGIRLS東京支部はシャドウ対策に手を引く方針です」

ミス・ゼットンにはGIRLSの東京支部の方針も報告しつつモンス対策への許容部分を見出すことにした。

「シャドウに変わる新たな脅威『モンス』…得体のしれない『神』とやら…そんなわけが分からない敵と戦いながらも守る人間は守られる存在を脅威視する……怪獣の力を人間が持つてしまったが故の結末はどうなってしまうんだ？」

ブルックス大統領はもはやため息を吐き出すことが辛い現実を息吐くたびに忘れられる気がしていた。

「大統領、たとえばどんな結末になろうと我々MONARCHは怪獣と人間が共存することとが正しい道であると判断します」

「我々GIRLSも、未熟ながら精神が発達しきれていない少女に宿る怪獣の魂を尊重して彼女たちの献身や健全と育成を重視します…戦うだけが怪獣娘を救う道ではないと私は個人的に考えます」

セリザワとミス・ゼットンにはまっすぐな目で変わらぬ組織方針を固めてブルックス大統領に提言した。

「セリザワ…ミス・ゼットン…ありがとう、君たちのおかげで怪獣はこの世界であり続けることが出来ることを深く感謝しよう」

抱える問題は山積みでも1つ1つを解決しようと奔走する者たちがブルックス大統領1人ではないことを確信する彼の表情は安らかにも何度も吐き出すため息も自然に収まっていた。

そんな中、ダグナは胸ポケットから懐中時計を取り出して時間を確認していた。

「おや…どうやらそろそろお時間のようです…私はこれで失礼します」

「もう行くのか…」

「ええ、そろそろアトランタで予約していた七面鳥を受け取りにいかねばなりません…パーティーはまだ始まったばかりですので…では！」

そういうと光も、消える前兆もなく、ダグナは閣議内全員の前から姿を消した。その消え方は最早いつの間にか居なくなつたと認識するほどの速さだった。

「七面鳥？」

「パーティー？」

なんのことなのかさっぱりわからないセリザワとミス・ゼットンは首をかしげる。

—都内・BAR『1954』—

「それじゃあアギちゃん！開始の音頭をお願いちゃ〜ん！」

「ふええ〜なんでボクが…」

またしてもミカツキからの無茶ぶりに乗せられて片手にグラスを持たされて皆の前に押し出された。

「ええつと…今日はお日柄もよく〜つて言えばいいのかなあ…でもこうしてみんなと集まって楽しいことが出来てボクはうれしいです。今日は思う存分、楽しみましょう…ええつと、乾杯」

—かんぱ〜い!!—

アキの掛け声とともに全員がグラスを掲げて乾杯を告げるとBAR1954 GIRLS東京支部貸し切りのパーティーが開始した。

「かんぱ〜い…じゃねえだろうが！」

—ゴスンッ！

「ぐえっ!?!」

そんな楽しみ始めたアキの頭に料理の乗った皿を持つユウゴの手が彼女の頭部に直撃した。

「何するのさあ…」

「こつちが何してんだって言いてえわ…テメエら俺がない間にどんだけ食い物をこの店に搬入しやがった！厨房が馬鹿みたいに食材だらけだわ！」

ユウゴが居ない間にアキたちが事前に持ち込んだ食材は厨房を埋め尽くす大量の食材、業務用冷蔵庫にすべて埋め尽くされた食材、段ボールで何箱分も入った食材とすべて調理しないと数日のうちに腐る量が運び込まれていた。

「飲食店なんだからこれくらい買い込んでもいいじゃん」

「限度つてもんがあるわ！この場にメシ作れるヤツは誰だ!?俺だけだろうが!!」

「なんやかんや言つて、ユウちゃん結構作ってくれとるやん」

文句がすらすらと出てくるユウゴだが、パーティーの前菜としてそれなりの量の料理を既に作つて運んできたが…それでもまだ10分の1以下の食材しか使い切れていなかった。

「ボクたち怪獣娘は育ち盛りなんだよ！これくらいじゃ足りなくなると思つたもん…」

「だつたらオメエも手伝え！全部の食材使い切るまで、オメエのメシは無しだ！」

そう言つてユウゴはアキの頭を掴み引きずつて厨房へ引き戻した。

「うわあ〜！ボクもパーティー楽しみたいのにいい!!」

「アギちゃん、カムバック!」

「私たちもできる限りお手伝いしますからあ〜!」

強制的にアキを厨房まで引きずって手伝わせたパーティーに楽しむ側から雑用側へと戻されたアキを惜しんでミクとレイカは手を伸ばしたが彼女には届くはずもなかった。

「アギちゃんの尊い犠牲は無駄にせえへんで!」

「勝手に抹消するなよ」

遠い視線に敬礼するミカヅキと呆れ返ったベニオは深いため息を吐き出した。

それ以外はアキを差し置いてパーティーに没頭して楽しんでいた。

総勢約20名前後の怪獣娘たちが日頃の労をねぎらいながらも楽しく飲み食いしながら談笑が和気藹々に広まっていた。

そんな様子を厨房の入り口から覗くアキは恨めしい気持ちだった。

「ううっ…みんな楽しそうなのに…いいなあ〜」

「お前の捲いた種だろ…ほらよ、さっさと持ってけ!」

そう言いながらもユウゴは山のようにある食材をさばき続けて大皿で盛りつけた料理が完成してアキの目の前に出された。

「うう…おいしそうなのにボクは一口も食べれないのかあ…」

「お困りのようね、アキちゃん」

料理を運ぼうと大皿に触れていた時、耳元からミオの声が囁いた。

「みつ、ミオさん！」

「アキちゃん、みんなとパーティー楽しみたい気持ちは痛いほどわかるわ…料理運びは私も手伝ってあげるからみんなと宴を楽しみんしゃい」

「いいんですか!？」

「でも…その代わりに条件があるわよ…：ピーコン！」

【イエス マム】

ミオの合図でアキの背後からピーコンがアキを羽交い締めにしてアキをガツチリとホールドする。

「なっ、何するのさ」

「うふふっく、ちみにはすこしだけおめかししてもらおうじゃないか…ユウゴ君、こっち見ないでよ」

「馬鹿やってないで早く料理運べ」

厨房の隅へピーコンに引きずられていくアキはミオのいかがわしい手つきが瞬時に身包み剥ぎとって別の身包みがあきに無理やり着せ替えられた。

そんな厨房内でのことなどつゆ知らずな怪獣娘たちの元にアキが料理を運んできた。

「おっ…おまたせ…」

「おそろい！もうおなかペコペコだよ、一体なにを…して…」

育ち盛りのミクは料理が来ることに待ち遠しく思っていた気持ちがあきを見るなり一瞬で吹っ切れる姿を目の当たりにした。

「あつ…あんまり見ないでよ」

全員があきに視線が移り変わる…その姿は発色の良い橙色布地に丈の長い足元隠れるロングスカートの上から白衣のエプロン、その恰好はまさに西欧文化圏のメイド姿だった。

そして…全員が和気藹々と語らっていた場合は沈黙、無意識に全員が片手にソウルライザーを持ち出した。

「うわあああ！撮らないでえええ!!」

「ちよつ、アギちゃん！隠さないでよ！」

「とても似合っていますよ、アギさん！」

「なにその恰好!?!アギちゃんがいつもの三割増しでかわええやん！」

「メイド服、いいなあ…オレには…似合わねえよなあ」

「あつ、アギラさん！こつちにも一枚、一枚お願いします」

十人十色の様々な感想を言われるままにあきのメイド服写真会と化していた。

「なんでこんな服装をミオさんが持っているんですか!？」

「いえ〜い!どうよ、私チヨイスのアキちゃんメイドコスバージョン」

そんな写真会の渦中に諸悪の根源たるミオがアキの両肩を掴んで皆に見せびらかった。

「ベムラー姉ちゃん、ええ趣味しとるやん!ウチは気に入ったでえ!」

「ううつ、ボクに人権が無さすぎるよお?」

盛大に恥をかかされたアキは逃げられない現実に関員のソウルライザーのフラッシュユがまぶしく光る。

「もお〜!アギアギが可愛いのは認めますがちゆうもお〜!! 今日パーティーでもあります、一応緊急会議の場ですからね!」

「ふえ?そうだっけ?」

「忘れたんですかゴモゴモ!本来この場にいる予定だったエレエレとガッツはさいたま市内で『特生怪獣第4号』に襲われて市内の病院に入院中、アメリカから戻ってきたキンキンも病院で療養中!ふざけている場合でない状況なのですよお!!」

各々が開かれているパーティーの目的を忘れ、アキのメイド服写真撮影会と化したその場をトモミは収めた。

「そういえば…オーストラリア支部から派遣されていた人たちもアデリーナに連れて帰

らされていたわね」

事態を重く見たGIRLS上層部は東京支部に集中していた他支部の怪獣娘を本来の支部へと強制送還する方針でペギラことアデリーナ・海堂がコダラーとシリリーを引き連れてオーストラリア支部に帰って行ったのをおさげに編み込まれた髪型に眼鏡をかけた「ブリッツブロッツ」の怪獣娘の國枝アサミは思い返していた。

● —数時間前・成田空港—

「やだやだあ！せつかく日本へ入国したのにほぼ半日しか滞在してないじゃん！」

「やだあ〜！苦労してここまで来たのにい〜！アデリー、私たちも日本観光したあ〜！！」

「グダグダ言っていないで帰るのですよ」

みつともなく空港内で駄々を捏ねるコダラーとシリリーだったが：有無を言わずペギラに首根っこ掴まれて引きずられながら搭乗ゲートを潜って滑走路に待つGIRLS専用高速ジェット機が離陸体制で彼女たちを待ち構えていた。

● 「そんなこんなで、私たち東京支部も今後一層警戒を強化しつつも怪獣娘としての活動をすると言うのが、現在ワシントンの議会に参加中の支部長からの通達です！要警戒と

言えど活動内容は変わらず、行動も極力1人で行動しないように！」

GIRLSとしてできる範囲の注意喚起を促すトモミはアメリカにいる支部長の代理として彼女の言葉を代弁した。

「それよりピグモン、エレたちを埼玉で襲った特生怪獣第4号はその後どうなったんだ」「詳しいことはご本人に直接リモートで説明してもらいます」

トモミは自前のタブレットをバーカウンターに立てかけて全員がタブレットのインカメラに映るような画角に調整するとリモート会議アプリを起動してランの回線と通話すると……さいたま市内の病院で療養する病院服姿のランが映し出された。

「えっ、エレキングさん！お体の方は大丈夫なんですか!?!」

ランと誰よりも親しいレイカは心配そうな表情を画面の向こう側のランに向けるが……

『問題ないわ……ピグモンが大げさに騒ぐから検査入院になってしまっただけよ』

『わたしも無事よお〜』

ランが映る画面の後ろでミコと思しき手がヒラヒラと振っていた。

『……それで、なんで会議の場にアギラはメイド服を着ているの？ふざけているの？』

『えっ!?!なに、アギがメイド服!?!どういう状況なのそっち!?!』

ランの言葉に驚いたミコは無理矢理画面に顔を出して画面内のアキの様子を確認し

てきた。

「好きで着ているんじゃないよ！」

『なにその楽しいげな状況!!私ら抜きでみんなしていいなあ!!ズルいズルい!!』

画面越しでパーティーに参加できない病室内のミコは音声でもわかるほどに駄々を捏ねていた。

「おい、アキ!いつになったら料理運ぶんだ…早くしろ！」

そんな会議中の場にユウゴが作り終えた料理を両手に抱えて運んできたが…

『えっ、ちよつとその声、噂のアギのお兄さん!?!どこ!?!どこに居るの!?!ああああ!!』

ユウゴがタブレットの横を通り過ぎようとした時、ミコが大きな声を出したことでスピーカーの振動が災いしタブレットがパタンツと画面をバーカウンターに伏せ倒れた。

『ああ!!これじゃあ見えないうお!!もうやだああ、私もそっちにいくうう!!』

『ちよつ、印南さん!検査が終わるまで安静にしてください!!』

画面の向こう側にいるミコは今すぐにもユウゴのバーへ向かおうとして看護婦に引き止められているのが音声だけでもわかる状況だった。

「あとで手伝うよ…今、GIRLSの会議中だからお兄ちゃんが出てくると話しこじれるから待っていてよ」

「うるせえ、はよ料理運べ」

「アギアギ、ここは私たちだけでいいのでお手伝いに回ってあげてください」

仕方なく会議にアキの不参加を渋々ながらトモミは許可してアキは渋々ながらユウゴと共に厨房へ回った。

トモミも倒れたタブレットを立て掛け直してランの顔が映る画面が怪獣娘全員側に向いた。

「んんっ、それではエレエレ：続きをお願いします」

『ええ、 “特生怪獣第4号” の正体はキングジョーやウインダムのようなロボット型の怪獣だったわ』

「わっ、私やキングジョーさんと同じタイプの怪獣さんですか!？」

ランから告げられた特生怪獣第4号の詳細がランのカメラワイプを小さくして画面には彼女手書きのイラストを踏まえて説明が続けられた。

『ただキングジョーやウインダムのように有機体の上に無機質な機械状の獣殻（シエル）があるというわけじゃなく…全身そのものが機械のような姿が印象的だったわ』

『んんっ…それだけじゃなく、この怪獣の傍らに未登録の怪獣娘も同行していることもわかったわ』

病室に戻されたミコは渋々ながら会議に参加して自分もランと同じく見たことを伝えた。

「この4号つてやつに未登録の怪獣娘が付き添ってんのか?」

『ええ、どうやらそうみたい…怪獣名はメカゴモラ、GIRLSの記録には無いけどUGM反応が検知されたことから怪獣娘として断定できるわ』

画面には特生怪獣第4号「機龍」のイラストと共にメカゴモラのイラストも提示された。

「めっ、メカゴモラ!?またウチのパチモンみたいなのが出てきたやん!」

先日の怪獣娘型のシャドウに引き続いて機械型のゴモラと類似の怪獣娘に本家のゴモラことミカヅキが驚愕する。

『頻りにこのメカゴモラは『キリユウ』と呼ぶ存在を探していたようだったけど、十中八九この第4号がその『キリユウ』と言う怪獣である可能性が高いわ。現に彼女はそのキリユウと一緒に飛び去って逃げていった』

「未確認の怪獣娘さんが特生怪獣第4号と行動を共にしている…何らかの共生関係があるのでしょうか?」

トモミを始め、他の怪獣娘たちは首を傾げて悩む中…

「あの一つまり…その4号さんとメカゴモラ“さん”?…は、親子のような関係なんでしょう?」

レイカはランに具体例を提示して尋ねた。

「確かに…言われてみれば『機械型』同士で名前を呼び合うほどの親しい間…親子って
いう線はあながち間違いないやねえかもな」

そう言つてベニオもサチコの方をチラ見しながらレイカの質疑に納得する。

「ふえっ?なんであたしを見るんですか、ししよー!」

「いや、何となく…」

サチコは自身がザンドリアスであると同時に彼女自身が知らぬ彼女の母親もまたマ
ザーザンドリアスの怪獣娘である親子で怪獣娘であるケースも一応あった。

『現段階でこの4号『キリュウ』と『メカゴモラ』、双方の関係性は不明だけど…親兄
弟あるいはそれに近いしい間柄と見ているわ』

『エレの説が正しいなら特生怪獣は私たちと同じ怪獣の力を宿した人間の可能性がより
高まるし、怪獣娘の中にもこの特生怪獣との関係性がある怪獣娘がいる可能性も捨てき
れないわ』

ミコの意見が出てきたタブレットの横を通つて料理を運ぶアキはビクツと身体が反
応した。

『例えば親を始め、兄弟姉妹などの血縁関係にある可能性、友人知人、私たちの知らない
身近なところにも特生怪獣という存在は意外と身近にいる可能性があるわ』

ランの仮設がぞろぞろと出てくる中でアキは顔にダラダラと冷や汗が零れ続けた。

「そうですか…わかりました。次に、この特生怪獣さんにも『暴走』の傾向があることも御教え願えますかエレエレ」

トモミが次に質問した内容は特生怪獣に起きた『暴走』についてアキも聞き耳が立った。

『特生怪獣第4号は私たちに襲い掛かるほどの暴走状態の傾向が見られたわ…しかし、これはその前に私たちが未登録の怪獣娘『メカゴモラ』を少し強引にGIRLSへ連れて行こうとした時に通常の怪獣娘の暴走と同じく目を赤く染めた状態の第4号が現れた…そこから察するに特生怪獣にも私たちと同じ暴走状態に陥る危険性が見られるわ…でもその後、メカゴモラが4号に飛びついた瞬間に4号の暴走が止まって正気を戻した感じだったわ…私たちのように心に大きな傷を受けた時や負の感情が増大したことに原因とするような暴走ではなく、同族の危機的状況に対する防衛行動と私は考えるわ』

ランの推察は精神発達の未熟な怪獣娘の精神の暴走とする見解ではなく、メカゴモラに危害が加わったことに対する怒りや敵意に近い暴走だと考えついていた。

「とはいえ、やはり特生怪獣さんにも暴走する兆候があると言うことですね…少し恐ろしくもあり、シャドウや暴走した怪獣娘さんよりも厄介な相手となる場合も想定しないといけませんね…現在『J-1973』という国連から譲渡された警護無人機の調整も

まだかかるみたいですので各々が気を付ける事ばかりですね」

トモミは次々と降りかかる難題に頬に手を当てて考えた。

そんな特生怪獣こと怪獣戦士（タイタヌ）の正体に近づきつつあるGIRLS達の傍らで気づかれぬように恐る恐るアキは厨房へ戻っていく。

「ねえ、お兄ちゃん…どうするのさ、だんだんとみんなお兄ちゃんの正体に近づきつつあるよ」

「ああ？知るかよ…さっさと運べ」

必死になってユウゴの正体を隠すアキに対してユウゴは料理を作り続ける事しか集中していなかった。

「ここからが忙しくなるぞ、応援呼んだから」

「応援？」

ユウゴが誰かを読んだことに首を傾げていると他の客が来るはずのないこの店の扉がガチャツツと開いた。

「あれ？もう始まってた…？」

「むっ…狭い」

店に入ってきたのはガメラの怪獣戦士（タイタヌ）こと相沢トオルとその後ろに大きなツレが入ってきた。

「あつ、アイザワ先生!」

「…と、なんかデカい人が入ってきた!」

トオルの付き添いで入ってきたのは入口よりも頭一つ大きな大男が身体だけで出口も塞ぎ、天井にあと少しで頭が届きそうな背丈の欧米系の顔つきの男性だった。

「あつ、お待ちしておりました。マールウCEO」

「ピグモンさんの御知り合いですか!」

怪獣娘が見上げる大男が実はトモミの知り合いであることに驚いた。

「私も何も、GIRLSの皆さんにとって重要な方ですよ…こちらはGIRLSのシステムソフトウェアや皆さんが使用しているソウルライザーのデバイス製造提供を担う『ACI社』の代表取締役のジャック・マールウさんですよ」

その大男ジャックはGIRLSの怪獣娘が使用するスマートフォン型ソウルライザーのデバイスとしての本体製造部門を担うメーカー会社の社長であることに驚愕した。

「思い出した!一昨年に家族経営陣の不正事業で大打撃を受けた『エイペックス・サイバネティクス』の社長に就任して社名と事業内容まで変更して業績安定させた社長さんで超有名な人じゃないですか!」

ジャックの経営手腕を知っているアサミは手をポンツと叩いて彼の正体に思い出す

と全員がテレビで聞いたような内容にああ〜と頷いて納得した。

「マーロウCEOには「J-1973」のシステムハードとソフトウェアの調整に今回ご協力していただきありがとうございます」

トモミはジャックの協力を仰げたことに本人に直接頭を下げ、礼を伝える中：全員が一番気になるのはとてもパソコンなどの電子機器を操作するにはあまりにも不自由そうな大きな図体に見合う太い指先がどうやってキーボード作業など細かい作業ができるのか首が傾いて仕方なかった。

しかしそんな巨漢ジャックは手持ちの手提げかと思っていたが、それは通常のパソコンよりも頑丈で丈夫なスペックを誇る所謂タフネスノートパソコンだった。

カバンやアタッシュケースかと間違えてしまいそうなノートパソコンのズッシリとした質感がバーカウンターに置かれ開かれると電源が付いてキーボードをカタカタと太い指とは思えない速さのタイピングで入力が始まった。

「ミス・トモミ：「J-1973」のハードとソフトのアップデート調整は現在、我が社の東京支社が調整中ですが：GIRLSが使用するデバイスのアップデート機能には以下の通りでよろしいでしょうか？」

指先が太いジャックでも軽々と扱える代物でソウルライザーの拡張アップデートの内容をトモミのソウルライザーに送信した。

「はい、問題ないかと…あとはソウルライザーの可変機能は当方の開発部に一任いたしますので…」

「もはや何を言っているのかわからん」

GIRLSでも付き合いの長いベニオはトモミと大柄なジャックのビジネス会話の内容についていけなかった。

そんな思わぬ来客に固まってたじろぐが怪獣娘たちだが…

「おう、トオル…こっち来て手伝え」

「はいはい」

トオルは自前のジャンパーを脱いでいつものパーカー姿になると厨房にかけられている予備のエプロンを付けた。

「アイザワ先生が料理されるんですか!？」

憧れの相手を厨房から覗くレイカは恐る恐る尋ねた。

「うん、実家は港町の定食屋だったからね…中華なら作れるよ」

「馬鹿みたいに量の多いやつを頼む…ここの食材、ほとんど使い切っても構わん」

「うわあくすごい量だなこりゃあ」

トオルは連絡を受けて聞いていた量に驚きながらも腕を捲って料理を作り始めた。

方やユウゴと一緒に料理を作るトオルと方やトモミと一緒にGIRLSのデバイス

やシステム面の取引で会話するジャックと『BAR1954』は異様な光景になっていた。

「はい、お待たせ…油淋鶏と即席餃子餡の包み焼き」

トオルが作り終えたのはこれまた量の多く、みんなで食べるには最適な中華料理を中心としたメニューばかりであった。

「うわあ、アイザワ先生は漫画だけじゃなくお料理も完璧ですね…しかもおいしいです」

普段はトオルの漫画の絵を知るレイカは彼の知らない意外な一面に驚かされていたが…

『ちよつ、湖上さん！検査が終わるまで安静にしてくださいとお願いと申したでしよう!!』
「あつ、エレちゃんたちの病院と繋ぎっぱなしだったの忘れとつた…」

未だにトモミのタブレットでランたちの居る病院とつながっていて店の様子が見られていたためランがミコと同じく今すぐにも病室を抜け出してこつちに向かおうとして病院内の看護婦に止められていた。

『ネエ、アギー！やっぱ私たちもそつちに行くから場所教えてよ！私たちもパーティーしたいいい!!』

「ガッツ……安静にしています」

『あつ、ちよ、まつ…』ーピッ！

さすがに病院からこの楽しい気な雰囲気のある光景がミコやランには目の毒だと判断してアキはタブレットのリモートアプリを強制終了して閉じた。

「いや〜ガツちゃんたちには申し訳ないねえ〜」

「あとでガツたち用にお弁当くらいお兄ちゃんたちに作ってもらおう」

「それもそうやね…だってどれもおいしすぎるもん」

「ええ…おいしい」

「ゼツちゃんもそう思うでしょ…えつ、ゼツちゃん!？」

「ぜつ、ゼットンさん!？」

ミカヅキとアキが思わず二度見して振り返った横で今日はこの場に来られなかったはずのもう一人の怪獣娘ゼットンがいることに全員が驚いた。

「お前、今頃は米国GIRLSにいるはずだったろ…どうやってここまで?！」

ベニオは本来ゼットンがいるはずのアメリカから日本までどうやって帰ってきたのか考えても一瞬で帰って来れる距離ではないことに首を傾げる。

「…白い人に…連れてってもらった」

「ただいま戻りました」

そんなミステリアスなゼットンの後ろではこれもまたいつの間にか帰ってきていた

ダグナが手に紙袋いっぱい抱えていた。

「ダグナさんも!?…その荷物、どうしたんですか?」

「ちよつとワシントン経由からアトランタまで七面鳥を買いにきたついでに彼女とお会いしまして…ついて来られるワケがあるようだったので一緒に来てもらいました」

「何があつたん?」

「お姉ちゃんと…喧嘩…した」

ベニオがなぜゼットンがここに来たワケを聞いて東京支部古参勢が全員あゝと頷くほどの理由だったようだ。

「ゼットンさん、お姉さんがいらしてたんですか?」

「まあね、ゼツちゃんのお姉ちゃんは東京支部の支部長やからさ」

知られざるゼットンの家族構成にも同じ年上の血縁者がいることを知ったアキは共感が再び湧いた。

「ゼットンさんのお姉さん…どんな人なんですか?」

「…ダメ人間…」

「だつ…ダメ…人間?」

仮にもGIRLS東京支部の支部長と言う肩書きに位置する女性を『ダメ』呼ばわりする相手にますますアキは疑問符が浮かぶ。

「もおくゼツちゃんは相変わらずお姉ちゃんと反りが合わないよねえ」

「そうですね、支部長は結構しつかりとした人じゃないですか…お姉さんを悪くいうならピグモン的にはメツですよ」

「ゼットンさんのお姉さん…どんな人かわからないけど、きつと素敵な人だと思います、ボクの方なんかと比べたら…」

「ええ〜なになに〜今、ベムラーお姉さんのこと話してた？」

「居候は黙っててください」

せつかく共感の持てる話題が浮上してきたところに水を差すかの如く顔を真っ赤にして片手に缶ビールを持つミオがアキの肩に回して絡んできた。

そんなミオを振りほどきながらもアキは憧れのゼットンに近づこうと話を弾ませようとして試みた。

「とりあえずゼットンさん、何か頼みます?…あつ、これメニュー表です」

「なんでこの店にメニュー表なんてもんがあるんだよ」

料理を運びに来たユウゴが知らぬ間に勝手に自分の店のメニューを製作されていたことにツツコんだ。

「…アギラ…どうして、メイド服…着ているの?」

「へっ?…あつ、そうだった!…いやこれはその…」

ゼットンに言われて気が付いた自分の格好を憧れの人の前で見せていることを思い出したアキは赤面し、慌ててユウゴの後ろに隠れた。

「アキラ……とても似合っているわ」

「ううっ……ほっ、本当ですか？」

恐る恐るアキはユウゴの大きな体格の後ろでゼットンの顔を覗くがやはり憧れていているからこそ今の自分の姿とゼットンを比べてしまうと恥ずかしくなってきた。

「もおおお!!再度ちゆうもおお!!……皆さん、勝手に和気藹々と騒がしいのは別に悪くはありませんが……大事なことを忘れていませんか？」

「大事な……こと？」

トモミは全員に忘れていると言う何かを思い出させようと促した。

「既に特生怪獣第4号さんには『キリユウさん』と言う名前が判明しましたが……ここに来て最も重要なのは……第1号さんの名前を何にするかです!」

そう言つてトモミはどこからか持ってきたホワイトボードにトモミの可愛らしい絵の特生怪獣第1号推定図が描かれた面にバンツと手が触れた。

なお、その第1号たる怪獣戦士（タイタヌス）ゴジラである当のユウゴは目を大きくして驚愕した。

「4号さんに名前があることが判明したのに、1号さんから始まって他の怪獣さんに号

数で呼ぶのも味気ないのでこの際1号さんだけでもお名前を付けてあげましょう」

『既に名前があるわ』と言いたそうな顔をするユウゴの気持ちなどつゆ知らずな怪獣娘たちが次々に名前案が出てきた。

「はいはあ〜い！ゴモラザウルスなんてどうや!？」

「それはゴモゴモの怪獣さんの学名でしょう…まあ一応候補に入れておきます」

そう言つてホワイトボードに名前を書き始めたトモミの後姿を見たユウゴは『書くのかよ』と言いたげな顔をした。

「さすがにゴモラの近縁種には見えねえだろ…どっちかつーとオレのようにつえー怪獣な気がするから、モンスターキングなんてどうだ?」

『どんなネーミングだ!』と言いたげなユウゴの表情がベニオに向いた。

「はいは〜い！ミクラスペシャル!」

「いえいえ、スワキソニウスも捨てがたいです!」

「やだ〜ザンドリザウルスの方がいいですう〜!」

「お前自分ばかりかよ、ここはひとつロックロードで!」

「マガサウルスなんてどうっすか!？」

各々が勝手にゴジラの名前を自分好みで提案し合いもはや原型をとどめることのないふざけた名前がホワイトボードを埋め尽くしていた。

「ひやははははっ！みんないい名前を考えてるけど、お姉さんも思いついたよ！…ズバリ、トカゲ怪人トカゲ男！なあくんてどうよ、ユウゴ君！」

『お前は俺の正体を知つとるだろうが』と額に血管を浮かばせるユウゴはめちやくちやな名前を提案した酔っぱらったミオを睨んだ。

「プツククツツ…」 「フフツツ…」

その様子と同じ怪獣戦士（タイタヌス）仲間のトオルたちも後ろを向いて明らかに笑っていた。

「ううーん、皆さんそれぞれ考えつくから決めかねますね」

悩むトモミの姿を見て、果たしてこの話題のどこに決める要素があるのか理解できない当の第1号本人であるユウゴが納得いかなかった矢先に…

「ガマちゃん」

「えっ？」

突然、ゼットンが命名の提案を出してきたことにアキは驚いたが…

「ガマちゃんって確かゼツちゃんが好きなキャラクターの名前やん」

「安直すぎねえか？」

既に既存の名前で提案したが、明らかに却下する流れだったが…

「ボツ、ボクはいいと思います!!」

アキが率先してゼットンの命名案に賛同した。

「そのままの名前じゃなくても、できればゼットンさんの名前の案を由来にしてください!! いいですよね! いいよね! いいって言ってよ、お兄ちゃん!!」

「なんで俺に判断を仰ぐんだよ」

憧れのゼットンに恥をかかせまいとアキはいつも以上に三白眼が吊り上がって鋭い目つきでユウゴを睨んだ。

「そうですか、ゼットンとアギアギの推す名前を使い…案の中で一番多い名前を採用すると…では、特生怪獣第1号さんは『ガマチャンザウルス』でどうでしょうか?」

どこかおかしな方向に着地したユウゴことゴジラの名前にとんでもなくおかしな名が付与された。

「ボクは賛成です!」

「あひやひやひやひや! すつ…すつ…すつ…いい名前なんじゃない!」

もはや嫌がらせのごとくめちやくちやになつた名前をアキやミオを始め他の怪獣娘たちは異論無しとなつてその名前が決定となつた。

そしてその後、その名前をアメリカにいるGIRLS東京支部の支部長へ命名提案を報告書として送つたが…

『真面目に考えなさいよ』

返答はあっさり却下となつてゴジラのGIRLS内での呼称名『ガマチャンザウルス』は没になつたとか…

超電子の護衛者

—八王子市内・住宅街—

閑静な住宅地が密集して一つの町として形成された市内の一軒家の前に3人の男女がやってきた。

そのうちの一人の女性が一軒家のインターホンを押してピンポンというテンプレートの音声 flowed.

『はい?』

「ああ…ただいま、お父さん」

『…サラか?…』

インターホンから男性の音がすると突然通話が切れて一軒家の中からドタドタと慌ただしい音が聞こえてきた。

そして、玄関先からガチャッとドアが開いた。

「連絡も無しにいきなり帰ってくるヤツがあるか!…一体いままでどこに居たんだ!? 防衛省の連中がお前を…お前…えお…」

「ああ…ただいま…2回目」

一軒家から飛び出しして来た中年の男性がインターホンを押したサラはそっぽを向き、人間時の姿のメカゴモラを抱えるシュンイチが男性に頭を下げて挨拶した。

「……むっ…娘が男を引つ掛けてきた上に子供までこさえて帰ってきたああああ!!」

「いきなり何言ってるのよおおおお!!」

「げぼはああああ!!」

「サラさん!」「ゴモツ!」

錯乱したサラの父親と思しき男性の言葉に驚いたが…もつと驚かされたのはそんな大の成人男性に水平ドロップキックで吹っ飛ばしたサラにシュンイチとメカゴモラは目を大きくして驚愕した。

一軒家はサラの実家であり、現在は彼女の父親が住んでいたが…

「う~~~~んっ…」

その父親は両手を組んで目を瞑りながら唸るように悩ましい表情を浮かべていた。

「……………」

「ゴモツ?」

原因などサラには明白だった。サラの膝に乗る人間態メカゴモラと…

「おっ…お待たせしました…えっと…コーヒーです。台所、お借りしました」

「あつ、ありがとう…シユンイチさん」

本来であれば客人として扱われるシユンイチがなぜか台所からコーヒーを入れて持ってきた。

「んんっ…桐生シユンイチ君…と言ったかね」

「えっ、あつ、はいっ…」

突然呼ばれたことにビックツとなったシユンイチはお盆を持ったまま固まった。

「君は…その…ウチのサラとはどういった関係なのかね」

「えっと…僕にとつてサラさんは…恩人であり、大切な人です」

「ほっ…ほう…まあ、その点については私も父として娘の意思を尊重しよう…が、そこではない。君は娘とどこまでの関係にある者なのだ？」

「どこまで…と、言われましても…ぐえっ!？」

煮え切らない態度に苛立ちを高ぶらせたサラの父親はシユンイチの胸倉を掴みかかった。

「貴様ああ!!人の娘に手を出しといて…ハッキリと答えないかああ!!—ぐえっ!？」

サラはシユンイチをひたすらに責め立て続け荒ぶる父親の横腹を蹴り上げた。

「いい加減にしなさい!さつきからこのやり取り何回同じことを言ってるのよ!!」

実は既に小1時間も費やして何度も同じことを父親はシユンイチに対して同じやり

取りを続けていたことにより逆にサラの方が苛立ちを募らせていた。

「すつ、すまない…お前が異性を連れてくる日に備えていたつもりだったが…思いのほか動揺しすぎて同じ事しか言えなかった。改めて桐生シュンイチくん、湯原サラの父の湯原トクミツだ、よろしく」

サラの父トクミツはシュンイチに先ほどまでの繰り返しの責め苦を詫びて握手を求め、手を差し出してきた。

「あつ、ああどうも…えつと、サラさんから伺っていましたが、僕はどうやら機龍と呼ばれる存在らしいです」

「機龍?…そうか、君が…『今』の機龍なんだね」

「今の?…そういうえばサラさんも僕のことを『今の機龍』と呼ばれましたけど…サラさんのお父さんは……」

「君にお義父さんと呼ばれる筋合いはなあい!!」

トクミツは突然憤慨してシュンイチを怒鳴った。

「ええー…」

「話が進まないからやめなさい!!」

「おつと、すまない…一度こういうの言ってみたかったんだ」

怒鳴ったのはただのノリだった。

「ええつと…では、せめてどう御呼びにしているのでしょうか」

「シュンイチさん、父はこう見えても大学で理工学部の教授をしています」

「私は人工生物学を専攻とする生体義肢などにも精通する研究をしていますよ」

「へえ、大学の先生でいらしたんですね…じゃあ僕も先生って呼んでもいいでしょうか？」

「少し小恥ずかしいが…お義父さんよりはマシだね、私もシュンイチくんと呼ばせてもらおう」

何やら満足そうな表情を浮かべたトクミツに会話の糸口を見つけたシュンイチは早速切り出した。

「改めて先生、僕の中に宿る力…『機龍』となんなのでしょうか？」

「その話か…サラ、お前の口から伝えなかったのか？」

「私はあくまで断片しか知らないもの…お父さんこそ話すべきでしょ、私も『機龍計画』について聞かせてほしいわ」

「機龍…計画？」

シュンイチは初めて自分に関わる「機龍」に関わる何らかの計画があったことについてサラたちの口から出てきた。

「そうだね…シュンイチくん、君の中に宿る力はもともと私を始めとした日本の頭脳と

言うべき有識者たちが開発した代物なんだ」

トクミツの口から語られたのは自身が機龍を開発するに至った経緯と機龍と言う存在そのものにメスを入れたような内容だった。

「6年ほど前のことだ。機龍計画：正確には『対怪獣能力者戦術装備計画』と言う防衛省内で発足した計画に私も参加していた」

「先生が…」

「ああ、当時の私の研究は『怪獣遺産を利用した人工生体技術の発展』がテーマだったのを防衛省の『特殊戦略作戦室』と言う所謂“排獣派”と呼ばれる組織が特自解体以後も怪獣と言う存在そのものと敵対意識を持つメンバーで構成された連中が目を付けてわざわざ八王子にまで呼びつけられたのは今でもハッキリ覚えている」

「6年前って言えば確か…『御徴川決壊事件』で最初の怪獣娘が発見された時期よね」

サラがトクミツの口から“6年前”と言う単語に最初の怪獣娘ベムラーの印象が脳内に浮上した。

「うむ…あの事件をキツカケに怪獣の能力を有する女性が次々と現れたことで防衛省内では『第二の怪獣』と言う認識が強まった、特に“怪獣”と言うワードがまずかったのだろう…怪獣の力を宿したが為に生まれてしまった子供たちを隔離して監視管理しようという案が6年前より国会にまで審議されたほどだったからね」

トクミツは防衛省の考え方に腕を組みながら苦い表情を浮かべた。

その内容はかつて未だ怪獣の能力を宿した者を非難、危険視、敵対感情さえも渦巻く混沌とした怪獣娘の黎明期たる時代の様相が文章からでも感じ取れた。

「でも、そうはならなかったわけね」

「ああ、国連が早くに立ち上げてくれた怪獣娘のための『GIRLS』と呼ばれる組織がアメリカ合衆国の上院議員と城南大学の元准教授が主導のもとに国連で決議されて日本政府もそれに賛同した形で問題は解消、防衛省は思惑通りとはいかなくなつたわけだが……ただ、もう一つの計画だけが進められていたこと以外は……」

「もう一つの……計画？」

シュンイチはトクミツが語る裏で着実に進められていた何らかの計画に薄々ながらも『機龍』に関わるであろうことが固唾を飲ませた。

「……『人工の怪獣娘』の計画だよ」

「人工の……怪獣娘……」

語られた真実とは残酷な姿として現れた。

「要するに……将来的に人類の敵になりうる怪獣の力を宿した者たちに対抗するための抑止力の創造、言葉だけを聞けばもはや倫理も尊厳も破綻させたような内容だろう……なぜなら人間そのものを『怪獣に等しい力』に変えてしまう研究であると後になって私もち

かったからだ」

「待つてください！……人工の怪獣娘……怪獣の力を宿した女性ならまだしも……僕は男ですよ！……あっ！」

ワケがわからないシュンイチだったが、気づいてみればGIRLSの怪獣娘たちからメカゴモラを救う前に鏡の前で自分の鏡像として現れた謎の女性が脳裏に過った。

「もしかして……あの女性……」

「あの女性？……もしかしてシュンイチさん、*“アカネさん”*に会っているんですか!？」

シュンイチが思い出した鏡の中の女性をサラは『アカネ』と呼ぶに彼女を知っている口ぶりだった。

「あなた達は知っているんですか？……僕の中にいる……*“アカネ”*という人を……誰なんですか?」

「そうか……やはりアカネくんが……君が見た女性はねえ、*“本来の機龍”*の変身者……*“八重城アカネ”* くんだ」

「八重城……アカネ……—ぐあああああああッ!!」

シュンイチはその名前を聞いた瞬間に頭から強い電流が走るような感覚に襲われた。触覚も知覚も感じない身体が内側より押し寄せる痛みに悶えるようにリビングの床に倒れた。

「シュン—イチ…さんツ!!…しっ…かり—して—!!」

「シュン—イチくん…:…シュン…イチ—!!」

「キリユウ—キ…リユウ—ツ!!」

周囲の者たちの声がまるで遅れて喋るかのように間延びした声がシュンイチの耳元に響くが…シュンイチの意識はやがて薄れる中で遠のいていく…

○

消えた意識の中で見えた景色は…何らかの雑誌に映る女性自衛官、何らかの計器が並ぶ狭い操縦席、立ち込める炎に炎上する軍用のヘリコプター…:…そして、その機体触れて不快な金属音を指先で削って鳴らす鋭利な指先から赤く染まった手…:…目の前には炎上する火の海の中で自分を見つめる機械仕掛けの体を持つ女性が見下ろしていた。

『…あなたはまだ…死ぬべきではない…』

● ● ●

—GIRLS東京支部・図書室—

「…うう…」

アキは今日も魔される様に悩んでいた。

「ねえ……ウインちゃん……見られている……よね……」

「見られて……いますね……」

GIRLS所属の怪獣娘たちが一同に集まって勉強をする場である図書室に集まっているアキたちが緊張するほどに困惑していた。

それもその筈、彼女たちの傍らでは見慣れないやけにカラフルなロボットが仁王立ちでずつと立って彼女たちを見ている……否、監視しているかのようであったから緊張と集中が途切れそうになる。

「あつ、あの……」

満を持してアキが率先して手を挙げるとロボットは首をグインツと回してアキの方に視線が向くとアキはその顔にビクツと反応してしまった。

『はい、どうされましたか？ガールズコード196832宮下アキさん』

「いや……ソウルライザーのコードまで呼ばなくても……」

そのロボットはここへ来てから様々な怪獣娘たちに割り振られていたGIRLS支給のソウルライザーに登録されたコードから名前まであらゆるデータがインプットされている様子だが……それがかえって不気味さが増していた。

「ねえ、何なの？あれ……またアギちゃんの新しいボディガード!？」

「そんなわけないでしょ…ピグモンさんも前に話していたGIRLS内の不審者対策の為にアメリカから派遣したっていうロボットさんだよ」

「私も…ロボット怪獣ではありますが…ああも本物のロボットのさんを間近で見ると…なんか…不気味ですよ」

3人は分厚い怪獣大百科を見開いて顔を隠しながらヒソヒソ話で会話をする中心的内容に関わるのは彼女たちの背後にたたく謎めいたロボットだった。

「ええつと…僕はこれからキングジョーさんの復帰イベントの手伝いがあるからこの辺で…」

「ああ！何それズルい」

「私たち監視されたままなんて嫌ですよ〜！」

仕事があると言ってその場を逃げ出そうとしたアキだったが…

『196832 アギラの活動予定を確認 現在の行動を解除してアギラへの同行を開始いたします』

「えっ！ついてくるんですか!?!」

アキは鋭い目から逃れようとしたツケが回って最重要にアキへの動向を優先したロボットのアキに付き添ってついていこうとした。

「アギちゃん…グッドラック」

「がっ、頑張ってください〜い」

鋭い視線から解放されるとわかるやミクとレイカはアキに対して2人ともサムズアップを返した。

「うう…二人とも酷いよ」

結局、アキだけがロボットからの視線が逃れられずに図書室を後にしてもロボットがアキと共に行動を共にする形となった。

「ええつと…ジェットジャガー…さん、でしたっけ？」

『はい、JET-1973TYPE3 “ジェットジャガー”です』

気さくに話しかけたつもりだったが…会話が異様に硬い。硬質な装甲に釣り合うほどの硬さだった。どこかぎこちなく、どう質問しても機械的に用意されたと思えなような返答以外まるでなかった。

「はあ…GIRLSにもいよいよ人工知能の波が押し寄せてきたかあ、ジェットジャガーさんはAIって言うあれなのかなあ？」

『宮下アキさん、私はロボットです…人工知能とロボットを混同されていらつしやるようです、人工知能『Artificial Intelligence』の略である

“AI”とはロボットなどの無人稼働製品に搭載されたシステム面の総称に過ぎません…AIとは確かに他の製品におけるプログラムとは機能が違います、自主的に思考

し判断する点が唯一違うだけでシステムとしての違いはありません』

「ふえっ？何がなんだかよくわかんないよ…」

突然ジェットジャガーにA Iとロボットの違いについて指摘されたが何を言っているのかチンプンカンプンなアキは頭から湯気が出そうなほどに困惑した。

「ええつと…なんかごめんなさい」

『なぜ、謝られるのですか？』

「いや、なんか…うん、何となく…」

これまでユウゴを始めとした怪獣戦士（タイタヌス）とは明らかに違うベクトルのロボットと言うジャンルの相手に対してアキはどう接するべきか頭を悩ませた。

「はあ…ボク以外にもG I R L S全体の警備強化のためとは言っても…どうしてこうボクが実験台にされるんだろう」

実はジェットジャガーがアキを中心的に警護するようにプログラムされている背景には今後アキ以外の怪獣娘に迫る未知の脅威へG I R L S全体を警備する名目で配備された無人ロボットであるジェットジャガーの性能テストも兼ねてアキの警護を主軸としてアキを通してG I R L S内の施設スキャンニングを介してG I R L S東京支部にジェットジャガーが人間でいうところの「慣れ」てもらうことが昨日のパーティー兼会議で決まっていた。

しかしながら、今現在に至るまで思い返すと…

『お待ちください、飲み物のスキャンを開始します』

マグカップに入れたお茶に毒物が無いかをチャックされたり…

『ただいま、危険物の確認をしております』

指導課から寄せられた封筒などの郵送物からX線検査機能で透視からの確認や…

『お待ちください、ただいま金属探知 作動中…』

「ひやあ!?!なあんなのよお!?!」

『不審なデバイスを確認、排除します!』

「いやこれ唯の私用のケータイだから!!」

ただ用事があつて話そうとしたサチコに金属探知機能でソウルライザー以外に見慣れないサチコの二つ折り携帯電話を電磁波で破壊しようとしたりなど…

GIRLSに配備するには明らかに過剰な行動が既に目立っていた。

トモミ曰く『まだGIRLSに馴染み切れていないからアギアギにも彼のGIRLSでの立ち振る舞い方を教えてあげてください』などと言われていたが相手は生身の怪獣娘ならいざ知らず…よりにもよって行動の至ることすべてが機械的なジエツトジャガーに何を教えると言うのか誰かに聞きたいのはアキの方だった。

「はあ…ジエツトジャガーさんは何でGIRLSに回ってきたんですか?」

『私が配備された経緯は前任務の『第89次サラジア派遣任務』の終了と共に私のサラジアでの活動が完了となり新たな配備地としてGIRLS東京支部に決まったとデータに記録されております』

『第89次サラジア派遣』?…サラジアって確か中東の国だよ、前にお兄ちゃんから聞いたような…』

『おっしゃる通りです。サラジアはバイオ再生技術に特化した砂漠の緑地化に唯一成功した国です…しかし、政府の汚職や内乱、さらには国際装備規定違反の疑いが掛り隣国のロシリカを介して国連の治安維持部隊の派遣が決定された時に私も同行しました』
ユウゴも関わったサラジアと言う国から始まった長期の戦争にジェットジャガーが従軍していたことにアキは驚いた。

「こくさいそうびきてい?…うくん、なんだかよくわからないけどサラジアって国が何か良くないことをしたから戦争が起きたの?」

『掻い摘んで申し上げますとその様にも解釈できます。目下サラジアに掛った嫌疑は『メーサー技術の軍事転用』でした。ロシリカは特にメーサー技術の特許保有国であり、これに反発したサラジアは嫌疑を否定、事実上のロシリカとサラジアの全面戦争が発生したことで双方の国の治安は悪化したことから別名『ロ・サ戦役』とされています…私はその中でも10年以上も続いた戦争が僅か1年足らずで終結を迎える事となつ

た『ロ・サ電撃戦』と呼ばれる最終戦に参加していました』

兄ユウゴが関わっていたロシリカとサラジアの戦争の全容を知ったアキは言葉が出なかった。

さすがに報道ニュースなどで内容自体は知っていたが直接ユウゴ本人や体験者のジェットジャガーに深く聞くのも野暮な気がしていた。

「そうか…ジェットジャガーさんも大変だったんですね」

『いえ、任務ですの…』

言葉を選んで気を使ったアキだが、『戦争』に関わっていたことさえも“任務”と割り切っていたジェットジャガーは彼の鉄仮面通り一切の表情が読み取れないがために『ロ・サ戦役』をどう思っているのか分からず、ただ彼の言葉通りに信じるしかなかった。（そういえばボク、お兄ちゃんから殆どそういった話を聞いた事なかったから知らなかったなあ…いや、聞くのが怖いのかもなあ…）

思い返せばユウゴと再開してから彼の口からアキの知らないユウゴ自身の空白3年間についていまだ聞きそびれている状況を思い出していた。

そうこう考えていると…アキはGIRLS東京支部から少し離れたイベント会場の控室に足が止まった。そこは本来GIRLS東京支部が主催する一般来場者向けの施設内の為に設けられた関係者用の設営テントだった。

『入口を御開け致します』

「うん」

ジエツトジャガーが設営のテントを捲り上げると…

◇

そこは国連より派遣された多国籍軍や民兵、様々な人種で構成された部隊の一人一人に防弾ジャケットや防護ヘルメット、さらには最新式のアサルトライフルにスナイパーライフルと対戦車携帯無反動砲など大小様々な装備で固めた兵士たちで溢れかえっていた。

「前線はJの先行と共に南のポイントまで進み、重要要塞拠点『アジャフダン』を制圧後に速やかに第二中隊と合流、その後には追撃の有無が決まる」

テント内は作戦ブリーフィングに伴い今後の戦局を決める需要事項が話し合われながらも方針が固まりつつあった。話の内容から察するにサラジア国内での暴発的抵抗勢力の縮図が変わる大きな側面と帰路に枝分かれした重要な戦いが今から始まろうとしていることが自身の電子回路で独自の判断と合理性が最適化されつつあったが…そんな自らの鋼鉄のボディに兵士たちが一人一人触れたりしてきた。

「頼りにしてるぞ、J」「あんたの背中なら任せられるぜ」「後方は任せな」「前は任せただぞ J」

皆、それぞれ自分に対して期待を寄せるような言葉を投げかけてくる中で……足元に溜まった水溜りの水面に映る自身の本体ボディが鏡像として見えた。

その鋼鉄のボディの上から兵士たちと少し形状の違うジャケットに最新の電子装備で構成されたアサルトライフルや様々な携帯武装を携行したジェットジャガー自身だった。

テント内に残ったのは自分と……もう一人年若い青年だった。日系……否、顔立ちこそ日本人とはかけ離れてはいるが民兵登録時に支給される国籍表記ワッペンには日の丸の刺繍が施されてはいるが、他の兵士に比べ装備は極端に少なく、自分や兵士たちと比べ銃火器の類一切を所持していない青年民兵が立ち上がって自分の真横を通り過ぎて行った。

◇

ジェットジャガーの横をアキは通り過ぎてテント内のある怪獣娘と顔を合わせた。

「お久しぶりです。キングジョーさん」

「オッ……オウツイエース……お久しぶりデース、アキラチャン」

一瞬、声をかけられて動揺したのか少し顔色の濁った表情を浮かべるキングジョーの怪獣娘ことクララ・ソーンは来日後初となるイベントを控えて緊張しているのか余裕がない様子が伺えた。

「キングジョーさん…大丈夫ですか？」

「オフコース！問題アーリマセンよ」

今日この場に居るよりも前にクララは病院の病室で療養を余儀なくされていたのだが、ガッツこと印南ミコよりも軽傷であったため早期復旧が叶って自身の写真集イベントの出演がギリギリであれど何とかなつたのが現在に至る経緯だった。

「キングジョーさん…無理してない？」

「ダイジョーブデース…この通りピンピンのピンピンですよ…心配してくれてありがとうデス」

クララは普段こそ怪獣娘キングジョーの姿でファンイベントに出演するが…今日は制服姿のまま自身の様子に何ら問題ないとアピールするかののように腕を上下に揺さぶるいつものキングジョーの動きのジェスチャーでアピールした。

「そうですか…でも、困ったときはボクも全力でサポートしますので…イベント、頑張ってください」

「アギラチャン……そうですね、こんな事じゃガッツと変わるところありませんね…無理していないというのもウソになりマス…本当は少し緊張しているんデスヨ」

「キングジョーさん…やっぱり？」

「医者には問題ないと言われてもヤツパリ精神的な面はどうすることもできないんデス

…自分の身体は自分がよく知っていると言う事デス」

心配を寄せるアキにウソが付けないクララは正直に告白して自身の精神面における内情を語った。

「でも…それでも、今日のイベントを楽しみにして来てくれているファンの人達が私に会いに来てくれているからこそファンの期待にも、アギラちゃんの気持ちにも応えてあげたいデス」

「キングジョーさん…」

「私は…無敵のキングジョーデース！」

「それ、ガッツの真似？」

「えへへっわかりました？」

何やら照れくさい表情をGIRLS内の友人の一人であるミコことガッツの真似をして見せたクララは次第に笑顔がハッキリと顔に現れていた。

「クララさん、間もなく開演です！」

そうこうしているとイベントの開始時間となってイベントスタッフに呼びつけられクララは『はい』と言ってイベント会場に向かうのだった。

「キングジョーさん…何も問題ないといいんだけど…」

『いえ…あの方には少々問題が発生しているようにお見受けします』

少し心配な面持ちのアキの傍らでクララの様子を見ていたジエツトジャガーは彼女に起きている問題を見抜いていた。

「えっ？…どういうことですか、ジエツトジャガーさん」

『おそらくこのままですと…ソウルライザーと言うデバイスでの変身は不可能かと結論付けます』

その問題がクララがキングジョーになつていないことを裏付ける重大な問題があることをジエツトジャガーは示唆していた。

—なお、本イベントは日本A C I株式会社の提供でお送りいたします。——それでは怪獣娘キングジョーのクララ・ソーンさんの登場です！—

イベントの司会進行がクララの紹介と共にスピーカーの音声でクララのファンたちの声援にかき消されたと同時に特設ステージにクララの登場で大いに盛り上がりを見せた。

ゼットンに次ぐ人気ぶりは健在で男性はもちろんのこと、女性ファンも多く、クララはそんなファンの1人1人に分け隔てのない交流を交えて進行が進んでいた。

「う〜ん…とりあえずトラブルも何もないといいんだけど」

ジエツトジャガーの言葉を聞いてか不安になったアキはアキラへと変身を遂げて舞台裏から様子を伺った。

「ほほおう、あれがキングジョーさんかあ〜」

「GIRLSの怪獣娘としてでなく、モデルまでこなす有名な方らしいですよね」

「ミクちゃん、ウインちゃん!？」

心配を寄せるアギラの後ろで同じくミクラスとウインダムも変身して様子を見に来ていた。

「えへへつ、一度キングジョーさんのイベント見て見たかったんだあ〜」

「私たちもついていきますので心配しないでください、アギさん」

「ミクちゃん、ウインちゃん、ありがとう」

一人では心細かったアギラはいつもの3人で一緒にイベント警護につける喜びが不思議と表情に現れて笑顔になった。

そうこうしているうちにイベントも佳境に入ってクララの握手会兼サイン本お渡し会が始まりつつあった。

「ほへえ〜…あれがファン交流ってやつかあ〜」

「わかります！私もアイザワ先生のアイザワト絵、通称『アザト絵』のためなら長蛇の列であっても並んじやいます…ファンにとってこの上ない志向ですよ」

初めて間近で見るクララのイベントを前にして新鮮なミクラスと共感のウインダムと違う視点でイベントの様子を感じ取っていた。

「まあ…トラブルも何もないならいいんだけど…あつ、あの人…」

アギラが目にも留まったのは全身を黒いスーツの下に赤いワイシャツ姿の格好でクララに近づく男性ファンが足を運んできたのが見えた。

「今日もキラツキラですね、おジョーさん！」

「いつもありがとうございます」

一見は怪しさが滲み出る不思議な雰囲気ファンであつてもクララは他のファン同様にそつなく挨拶を交わした。

「アギちゃん、あの人がかしたの？」

「あの人、前のキングジョーさんのイベントでシャドウミストに操られて大暴れした人なんだ」

「ふむふむ、SNSハンドルネームは『JJ』さんですか…どうやらあの方、普段は俳優や声優業を務める傍ら配信などでキングジョーさんの大ファンを公言していらつしやるようですな」

ウインダムは自身のソウルライザーで調べていくと男の名前がSNS内のハンドルネーム『JJ』と言う人物であることが特定された。

「ああつー」

「「どうしたのウインちゃん!？」」

「あの方、おまピトで『蛇蔵ジャグラー』の“青哉”役で出演されているみたいですよ！意外です…」

ミクラスとアギラは盛大にズッコケた。

「いや、普段の怪獣娘の御姿も素敵ですが…GIRLSの制服姿…いつにも増して新鮮でより一層素敵でいらっしやる」

「ありがとうございます」

「いえ…私もこうしておジョーさんのイベントでおジョーさんの御姿を見るだけでうれしい限りです…だって最近ハマリ役のせいでテレビ業界での私の印象が奇怪な方向に進んで番組のスポンサーやプロデューサーの意向にはいいはいい従う毎日の中でおジョーさんと言う一筋の光の中で得た希望に縋る毎日なので…本当…ホント…ホント…ト…おジョーさんと…おジョーさんと…」

「ええつと…私と…何でしょうか？」

「おジョーさんとお…夜明けのコーヒーうおおおおおおおおおおおおおおおとおおとおお！！」

突然、男は奇怪な叫び声を上げて全身を紫のオーラが滲み出て暴れだし始めた。

「きやあつ!!」

思わず驚いたクララはバランスを崩して尻もちをついた。

「なんか様子がおかしいよ!？」

「あれって…シヤドウ…ミスト!？」

「そんな、前回もあの人シヤドウに侵されて暴れていたところをガッツが収めたのに…」
男の豹変に気づいたアギラたちはすぐさま男を取り押さえようと向かったが…

『ふんッ!』

「わっ!？」「きゃあっ!？」「ぐえっ!？」

突然3人の背後からジェットジャガーが3人の足を振り蹴ってバランスを崩させえて背中から3人を倒させた。

「ヴウアアアア…『蛇心剣・新月斬波』!!」

すると、男の手元から禍々しいエネルギーで形成された刀状の得物で衝撃波を発生させ斬り付けるような動きと連動して設営のテント控室がもの見事に上下ズレて切断されていた。

「ひえええええ!?!何今の!？」

「今の喰らっていたら…ボクたちどうなっていたの!？」

間一髪で背中から倒れていたアギラたちは衝撃波の斬撃を奇跡的に回避していた。

「アギラちゃん!?!…わっ、私も…ソウル…ライド…しなきや…あっ、あれ?ソウルライ

ド!ソウルライド!!」

クララは慌ててソウルライザーを指先で画面を何度も弾いてもキングジョーへの変身ができなかった。

「キングジョーさん…やっぱり…」

「アギさん！あれツ!!」

ウインダムが指さした先にはシャドウミストに覆われていた男の全身にシャドウが集まり始め、全身をシャドウが包み込んでその姿を禍々しい怪人のような姿へと肉付けされて変貌を遂げた。その姿はまさに「魔人」と形容できる姿であった。

「うひゃあ〜！シャドウが人を取り込んでしまった…」

「まるで蛇蔵式ピット術で青哉が見せた魔人領域みたいな姿になっちゃいましたよ!」

「ウインちゃんのこととはよくわかんないけど…とにかくボクたちの手には負えない相手ってのはわかる気がする!!」

突如、クララのファンの男を取り込んで「魔人」と化したシャドウはジリジリとクララに近づいて片手に持つ鋭利な得物で何かをしようとしているのは明白であった。

「ヴウウウアアアアアアア…おジョー…さくらん…」

「魔人」は思いつきり身体を捻って獲物を振りかぶってクララに斬り付けようとした…その時だった…

「ガキイイーン!!」

間一髪のところで警護用の電磁警棒で「魔人」シャドウが振りかざす得物からクララの身を守って見せたのはジェットジャガーであった。

『はっ！たあっ！でやあああ!!』

ジェットジャガーは「魔人」シャドウに電磁警棒で絶え間なく打撃を浴びせて最後は客が避難して誰もいなくなった観覧席まで蹴り飛ばした。

『お早めにお逃げください』

「えっ?…あつ、はいッ!」

この場をジェットジャガーに任せるままにクララはアギラたちの元へと下がっていった。

「キングジョーさん…大丈夫ですか!?!お怪我は!?!」

「いつ、いえ…私は何とも…」

クララはアギラたちに心配をよそに未だ「魔人」と戦うジェットジャガーの方に視線が移った。

「ヴァアアアアアアア!蛇心剣・新月ぎん…バアア!」

またもあの闇のエネルギーで三日月状の衝撃波飛ばそうと再び動きを見せたが…その直後に「魔人」の顔面には先ほどジェットジャガーがクララを守るために使用していた電磁警棒が豪速で真つ直ぐに飛んできてものの見事に直撃した。

それと同時に振りかぶって空間に斬り付け放った衝撃波は明後日の方向に飛んでいくが…その下をジェットジャガーはスライディングで躲して勢いのままに走り出し、
「魔人」へ鋼鉄の拳を腹部に叩きつけた。

腹部の次は得物を持つ手をはたき、衝撃で得物を手放してしまった「魔人」にすかさず打撃、打撃、打撃、打撃の応酬で叩きつけ、宛ら武術の達人は剣術の魔人に剣を手放させる。

剣の使い手を極端に弱体化させた上で戦闘を優位に運ばせた。

そして、とどめの一撃に両足飛び蹴りをゼロ距離で「魔人」にぶつけ吹っ飛ばした。

「ガギャアアアアアアアアアア!!」

吹っ飛んだ「魔人」シャドウは宙を舞って観覧席から更に後ろに飛んでいくが…そのまま頭部を何か大きな手に捕まえられた。

「私の会社が主催する催しに暴漢が現れたと聞いて駆けつけて見れば…なんだ貴様…」

「魔人」シャドウを捉えたのは「魔人」シャドウ以上に身の丈の巨大な2メートル越えの大男「ジャック・マーロウ」であった。

「ハナセエエエエエエエ!!」

「そうはいかん…貴様は我が社に損害を与えた…その勘定をキッチリと支払ってもらおうぞー!」

大巨漢ジャックは見る見る肉体がさらに巨大化し始め、2メートル以上は2メートル40センチ以上へと更に肥大化し始め、宛ら巨大な類人猿、怪獣戦士（タイタヌス）・コングへと変貌を遂げた。

「ぬうううおおおおおおお!!」

コングは左手で大きく振りかぶり、ギリシャ彫刻の円盤投げ選手のような独特のフォームで構えるとそのまま勢いを乗せて「魔人」シヤドウの顔面に巨拳が叩き込まれ、「魔人」シヤドウはその衝撃と共に全身が弾丸のように吹っ飛んでいき特設ステージに激突してステージが見る見る崩壊して倒れた。

「いったいなんの音?」

「うわあああ!?!ステージがあああ!!」

「早く助けに行こう!!」

クララを救出し終えたアキラたちは自分たちを殺そうときえしてきたクララのファンの男を取り込んだシヤドウに悲惨な末路に至った所を目の当たりにしたが、肝心のクララのファンの男の安否が気になった。

「あつー……ああ……ええつと……」

「とりあえず……大丈夫そう……なのかな?」

「いや、とてもそんな風には見えないんですけど……とにかく救急に連絡します!」

ウインダムがソウルライザーで救急に連絡している横ではクララのファンの男が顔面半分を真つ赤に腫れあがらせてピクピクツと虫の息で痙攣していたが命に別状は無い模様だった。

“魔人” シャドウにテントを切り付けられて天井の無いテント内でアギラたちはクララの様子を伺った。

「キングジョーさん…身体の方は大丈夫ですか？」

「イエス…怪我は特に無いんですが…：…日本で “最後” に立てるイベントステージがめちやくちやになつちやって残念デース」

実は今日のイベントを最後にGIRLS運営方針の変更に伴い、各部署への怪獣娘の移動派遣の打ち切りが決まっていたため東京支部に思入れの深い怪獣娘が居ると言えど他支部への行き来を全面的に自粛する事が決定しているためクララことキングジョーの日本国内イベントは今日のイベントを最後に完全に終了となる予定であった。

クララも同様に当面の間は本営の米国GIRLSに帰国が決定していた。

「最後のステージがこんな形でエンドしてしまう…：残念ですがこれもシャドウと相対する怪獣娘のフェイトとして受け入れるしかありません」

落ち込むクララだが、受け入れて気持ち切り替えるのは意外にも早かったが…

問題はもつと別にあるとアギラは気づいていた。

「キングジョーさん…やつぱり変身できなくなっていたんですね」

「イエス…今日いち早く気づいたのは朝でした…どういうわけかこの間の輸送船で遭遇した妙な怪獣に浴びせられた怪電波の影響で…と言うより怖くなったと言う方がジャストアンサーなようデス」

「輸送船で出くわした怪獣？何なのそれ？」

「私も『アレ』が何かわかりませんが…同じロボット型怪獣のこと以外何も…あの時、応戦の為にキングジョーへチェンジした瞬間に、何か、頭の中に膨大な感情のようなものが波のように押し寄せて来たことだけは覚えています」

「膨大な…感情…うくんツ、ボクたちにはちよつと難しい気がする」

『つかぬ事を申し上げますが…その処理しきれない感情データ、私でしたら最適化して処理できるやもしれませんが…』

破壊されたイベント会場の清掃を終えてジェットジャガーが率先してクララが抱える問題を解決できると名乗りを上げた。

「本当ですか!? ジェットジャガーさん！」

「ぜひお願いシマース！」

舞い込んだ朗報に藁も縋る思いでクララはジェットジャガーに頼むと…ジェット

ジャガーはクララの額に手を当てて同じ電磁周波数を合わせてクララの中に蝕む感情のデータを読み取り出した。

『……これは…確かに人間が表現される “感情” に近いデータです…』

「どんな感情何ですか？」

『獲得データを感情基準に合わせて発信いたします…仲間、武器、光の星、新天地、旅、青い星、危険、恐怖、恐怖、恐怖……』

ジェットジャガーがクララから読み取った感情として分析した内容は単発的で断片のように単語で表された。

「なに…これ…」

「感情と言うより、何らかのメッセージみたいですね」

『まだ続きがあります…破壊、殺戮、戦争、破壊、破壊、破壊…どなたかソウルライザーを御貸しいただけませんか？』

「私のソウルライザーで良ければ…」

ジェットジャガーが読み取るクララの中にあつた感情のデータにクララの額に手を当てるとは反対の手にウインダムソウルライザーを持って見せた。

『この先の感情のデータに所々で映像のような何かが差し込んできます…破壊、破壊、破壊…』

続けざまにジェットジャガーが読み取る感情のデータに交じって映し出される映像をソウルライザーに介して映し出された。

「何だろうこれ…何か…動いてる」

ソウルライザーにはスノーノイズで覆われているがその中で何かがあるのがハッキリと見て取れた。映像内ではハッキリと輪郭が動き回っているようだが…それ以上先はアギラたちの目では認識できない。

『映像をできる限りクリアにしてみます…：破壊、破壊、破壊、破壊、破壊、ロシリカ、サラジア、戦争、殺戮、破滅、暴力、兵士、破壊、破壊、破壊…：『ゴジラ』…』

鮮明になった映像内では少しばかりのノイズが残りつつもその輪郭と形状はハッキリと捉えられた。それはアギラたちにとっても衝撃的な正体であった。

「こっ…これって…」

「特異生体不明怪獣…第1号さん…ですよね」

（お兄ちゃんだ…間違いなく、お兄ちゃんだ!?!）

その映像内ではゴジラが何者かの視点で相對する様子が映し出されて主観的にゴジラと相對する者がゴジラに胸部を貫かれて映像はそこで途切れた。

—八王子市・湯原家宅—

「うつ…うつうん…」

シュンイチは目を覚ますとなぜか見知らぬ子ども部屋のような部屋の中のベッドの上に身体を横になつて自分自身がずっとその上で寝むつていたことが伺えた。

「すううう…すううう…」

そして、掛け布団を捲るとなぜか自分の胴体の上で人間体の姿のメカゴモラが眠つていた。

更に部屋のドアがガチャツと空いて湯原サラの父トクミツが水桶を抱えて入つてきた。

「おや、目が覚めたかね」

「あつ、ああ、はいッ…」迷惑をお掛けしました」

「なあくに、心配することはないさ…私も自分より大きな男を抱えてここまで運ぶのは苦労したけど、なんでも君は記憶が無いらしいじゃないか…君が寝ている間にサラからすべて聞かせてもらった。しばらくこの部屋を自由に使うといい、もともとサラの子供部屋だったけど…妻が亡くなつてからサラは妻の部屋を自分の部屋にしたからこの掃除はしているがしばらく使っていなかつたんだ」

「そんな…見ず知らずの僕に…どうしてそこまで…」

「言つただろう…『機龍』は私が開発に関わつた、つまりは君もサラと同様、私が生み出した子供も同然だ」

トクミツはシュンイチの中に宿る『機龍』を生み出した張本人であると主張してシュンイチもまた一人の我が子のように暖かく迎えてくれた。

「子供…：そうだ、サラさんは!？」

「サラなら今しがた防衛省に呼び出しを喰らつたが…拒否したら迎えの連中に強制的に連行されていったよ」

「なっ!?連れていかれたんですか!?先生、どうしてサラさんが…」

「大丈夫、心配せずともそれがサラの『出勤』なんだよ」

「出勤…ですか?」

「むにやむにや…ゴモオ…キリユウウウ…」

なにやらサラは仕事の出勤を拒否したが故に無理やり出勤させられて防衛省まで呼び出されていった事が一体何を意味するのか…今のシュンイチには知る由もなかった。

そして、メカゴモラはまだ眠っていた。

王女の来日

この日、集まった一同は全員がとある国の政府関係者たちだった。仕立ての良いスーツに身を包み、左腕には最高級の装飾で彩られた腕時計を付けて、本革の革を縫い合わせた一足数十万円はくだらないであろう革靴……そのすべてを合わせても辿り歩く長い通路に彩られた金色の外壁には遠く及ばなかった。

「よろしいですか、ミス・ゼットン……ここでは一切の気の緩みさえも許されない『聖域』です……本来、かの方々は外界との接触すらも拒む厳格な決まりの上で成り立ってきた民族……少しでも不敬と見なされたら『外交』の失敗です」

「わっ、わかりました」

そんな政府筋の役人たちが重々しい足取りを進める中、一段の中で唯一の女性であり、ゼットン星人の怪獣娘であるGIRLS東京支部の支部長ことミス・ゼットンが不安な面持ちで精一杯役人たちの話に合わせてようと努力していた。

やがて独特な太陽壁画のようなシンボルマークが刻まれた大扉の前に辿り着くと左右から近衛兵と思しき恰好の男性兵士が互いの手に持つ大槍を交差させ大扉を塞いだ。

「これより先は神聖な領域である……今しばらく待たれよ」

一団の行く手を阻む兵士たちの格好は現代の兵士の装いとは明らかに違う身なりだった。強いて言い表すならどこか原始的であり中世文明を匂わせる文化レベルだが……決してそれだけではない神秘的何らかの力が彼ら兵士だけでなくこの土地、この瞬間、この状況こそにただならぬ雰囲気があった。

「……たつた今、陛下より貴公らの入場が許可された……一人ずつ足を踏み入れよ！」

兵士たちの交差する大槍が開かれたと同時に重たい大扉がゆつくりと開かれて扉の先より黄金の大広間がその姿を現した。

一団の中で唯一場に慣れていないミス・ゼットンには驚きのあまり部屋中を見渡し眺めてしまうほどに見とれてしまいそうになった。

「平服せよ……インファントの女王、サラナ・メイ・フツア殿下の御前である!!」

一団に対して薄向こうのカーテンに輪郭だけ見られる謎多き国の国家元首たる女王が居ることを暗示してか傍らの女性宰相が全員に跪けと大手を振ると一団はその声に合わせてるように全員床に伏せて地に額を付ける独特な挨拶で一礼を尽くした。

「くるしゆうない……表を上げなされ」

薄カーテンを挟んで輪郭の中の女王陛下と呼ばれるサラナ女王が一団に伏せた頭を上げるよう許可が下りると全員が安堵したように息を整えて表を上げた。

「ほう……見慣れぬ御方がおりますね……その方、娘君殿……なんと申すか？」

サラナ女王陛下に呼び上げられたミス・ゼットンには自らの素性を明かそうと立ち上がった。

「はっ、はい！手前勝手ながらわたくしはゼットン星人が怪獣の魂を宿し者、名を『ゼットン』、予てより女王陛下へのお目通りを願ひまして怪獣の魂を宿し者たちで結成された『GIRLS』の代表として馳せ参じさせていただきました」

ミス・ゼットンは腰から胴体を倒して90度の角度まで身体を曲げての最敬礼で挨拶を交わした。

「ほう、貴公がくだんの怪獣の魂を宿し娘君たちを束ねる長が一人ですか：話は我が方の大臣を通じて伺っております」

「はっ、はい！女王陛下の御威光の元、お願い申し上げるためこの場に馳せ参じまいった次第であります」

「ほう、それはいかなる用ですか？」

「合衆国より管理される禁忌の録の閲覧、この録を我がGIRLSになにとぞ拝見の許可をいただきたい！」

ミス・ゼットンはアメリカ合衆国が管理して、サラナ女王陛下がその許可の有無を決定する重大な案件の許可を得ようとした途端に広間を囲む兵士たちが一団に武器を構えてきた。

「貴様！女王陛下に恐れ多きことを!!」

「おやめなさい、レオーナ近衛団長…その剣を客人たちに向けるとあればインフアントの恥と知りなさい」

「はっ、申し訳ございません 女王陛下」

兵士たちの中で最も位の高い女性兵士をサラナ女王が宥めて場を収めた。

「娘君の長の方よ…よいでしょう、禁じ録の書の閲覧を許可いたします…が、それを許す前にこちらとしても条件を開示いたします」

サラナ女王はミス・ゼットンが求める内容に条件付きで許可を出してきたが…

「それはいかように…」

「我がインフアントの王位継承を担う次期女王候補にして我が娘の日出る国への旅路までの案内を貴殿らに頼み致したい…引き受けてはくれぬか？」

それはサラナ女王が女王として退位した際に次なる女王となる娘、すなわちこの国の女王が日本への来日を確認するという条件であった。

「めっ、滅相もございませぬ！喜んでお引き受けいたします！」

ミス・ゼットンは深々と女王陛下に頭を下げて条件付きであれど目的は達成されたのであったが…彼女には一抹の不安が腹を直撃してくる多大なストレスが加圧するかの要であった。

それは：諸外国さえ慎重に扱う外交的事案に対してよりよってGIRLSの中でもとりわけ際立つ支部が鎮座する国への入国であるという事実：GIRLS東京支部の支部長である彼女には重責であつた。

時少し進んだ頃：GIRLS東京支部にてこんな話が広まっていた。

「インフアント島？」

聞き慣れない島の名前を聞かされたアキは首を傾げた。

「そうです、現在：『インフアント』の名を関する離島は世界各地に存在します インドネシア領、ロシリカ領、ミクロネシア領、などなど様々な国と地域で管理された島が点在しますが：いずれも島民が住んでいるわけではありません」

トモミはホワイトボード型のモニターを介して『インフアント島』に関する情報をGIRLS東京支部の怪獣娘全員に開示して共有した。

「しかしながら『本来のインフアント島』はその所在を始め、外部から一切の存在を秘匿された離島国家『インフアント王国』なのです」

「離島なのに王国ってどういうこと？」

トモミの言っていることに理解が追い付いていないミクが更に首を傾げた。

「インファント王国は合衆国政府を始め、指定保護国家に定められており所在も現状も情報の一切が遮断されている。『幻の王国』なのです。GIRLSの記録でも極端に少なく、最新の記録は1960年代頃の調査記録しか殆ど無いですが…古代インファント文明において鱗翅目の昆虫を信仰対象とする昆虫信仰が盛んだったようです」

「へえ…それがなぜ今わたしたちGIRLS東京支部に？」

レイカはトモミの口から語られるインファント島に関する情報に関心を寄せながらもなぜ今になってそのような話が出てくるのか更に首が傾げた。

「それは…もう間もなく、そのインファント島の王国より日本への来日される王族の方が東京の各所を視察に来られるからです…つまり、このGIRLS東京支部にもその王族の方々が視察にいらっしゃるので…GIRLS東京支部は——大急ぎで大掃除なのですううう!!」

あと数時間後に迫ったインファント島のインファント王国の王族がGIRLS東京支部を視察に向かいつつある中でGIRLS東京支部の怪獣娘たちは総出で掃除道具などを用いての大掃除に取り掛かっていた。

「なんでそんな重大なことが今になって伝わって来たんだよ！」

「支部長曰く急遽決まったらしいですが時差のことをすっかり忘れていたらしく、気づ

いたころには王族視察団が現地の空港に到着した頃だったらしいですうう!!」

「ピグちゃん、これはどこ!?」

「それは備品管理室ですうう! ミクミク、それはシミュレーションルームをお願いしますす! ゼンゼン、そこが終わったら視聴覚室をお願いしますすうう!!」

大慌てでトモミを通して的確な指示の下で全部屋の掃除が進められているが、刻一刻と迫ろうとしていたGIRLS東京支部への王族視察団が近づきつつあった。

「ピグモンさん! 視察団の空港到着予定時刻は!?!」

「あと3時間後ですうう!」

慌てふためく大忙しのGIRLS東京支部に更なる災いがトモミのソウルライザーからピリリリッ!と着信音が鳴り響いた。

「はい、GIRLS東京支部代表代理ピグモンです! …えっ、そんな…本当ですか!?! …はい、はい…はい…わかりました…直ちに全員にお伝えします」

連絡を受けたトモミは恐る恐るソウルライザーの通話を切って青ざめた表情を錆びついたブリキ人形がごとくガクガクと首が全員の方に向いた。

「王族視察団は外交車両で移動中…しかも、本来予定していた視察ルートを変更して真っ直ぐこちらに向かってきています」

「とっ…東京支部に到着するのは…?」

「外交車両での移動ですので……多く見積もっても、後……1時間後……」

全員が青ざめる中、全員が最速で支部内の清掃を進める事になった。

「急げえええ!!もう間もなく着ちまうぞ!!」

慌てるベニオも同様にとにかく、早く、素早く、手早く、支部内の全フロアの清掃が進む中……

——キキイイイイ……

外交ナンバーのリムジン車を中心に護送の警邏車両らがGIRLS東京支部の玄関前に到着して中から黒スーツ姿のシークレットサービスのようないで立ちの人種が一人一人違い、目元にサングラス、耳には無線のイヤホンを付けた男たちが中央に停まるリムジン車を囲み、ドアを開けて先に出てきたのは目つきの鋭い同じく黒スーツの男が降り立った。

「姫様、足元に御気を付けてください」

先に降りた黒スーツの男がリムジン車の車体より低く屈んで手を差し伸べると車内の奥に座する豪華な衣装で身を包んで顔を薄金箔生地のベールで隠された少女が黒スーツの男の手に触れてゆつくりとリムジン車から降り立った。

「バトラカ……ここがGIRLSですか?」

「はい、本来の御予定を前倒させていただきましたが……この組織が姫様に御無礼を働くようでしたら即刻国連に追及を表明いたします」

目つきの悪い男は更に目つきが鋭くなつてGIRLSが「姫」と呼ぶ少女にもしもの事態を引き起こさせたら潰すと言わんばかりの決意に満ち溢れた憤怒の感情が烈火の如く煮えたぎっていた。

「バトラカ、その考えこそ御相手に失礼です……フツアの戦士たるあなたこそインファントの名に恥を塗りますよ」

「はっ、申し訳ございません……慎み致します」

露骨に感情をあらわにする付き添いの男「バトラカ」を言葉で鎮めたインファントからの姫君は可憐な足取りを一步前進させると全方位からシークレットサービスの屈強な男たちが周囲を警戒しながら彼女に付き添いGIRLS東京支部まで向かつて行った。

GIRLS東京支部のエントランスの自動ドアが開かれるとロビー内から既にGIRLS東京支部に所属する怪獣娘を始め、怪獣娘ではない女性職員までも来訪者を総員で出迎えた。

「よっ、ようこそ！国際怪獣救助指導組織、通称GIRLS東京支部にようこそお越しくださいましてありがとうございます！代表代理ピグモンこと岡田トモミと申しますう

！」

先陣きつてトモミはGIRLSの代表者として誰よりも先に前へ出て来賓の姫君へ挨拶を交わした。

姫君は無言で頭を下げ、挨拶を返すと自ら手を差し伸べてトモミに握手を交わそうとしてきた。

「あつ、ありがとうございますう…痛つ！」

トモミも握手で返し交わそうとした瞬間、彼女の手は強い衝撃と共に弾かれた。

「下賤な小娘よ、姫様の御手に触れるな！」

弾いたのは付き添いの目つきの鋭いバトラカだった。バトラカは姫君の目に立ってトモミとの間を遮るとシークレットサービスの屈強な男たちが姫君の全方位を囲み隠した。

「ヒイイイツ！もつ、申し訳ありません!!」

無礼なことをしたと勘違いしたトモミはいち早く謝罪をしたが…

「バトラカ！無礼はあなたです わたくしから御挨拶を示したのにその方の御手を弾くなど赦されませんよ」

「はっ、申し訳ございません…が、ここはインフロントとは違います 気安く他者との接触はなりません故お許しください姫様」

「バトラカ！わたくしの言う事が聞けませんか？…人と触れ合えぬ道理など必要ありません…先ほどはわたくしからお差し伸べたにもかかわらず、御付きの者が失礼いたしました」

姫君は深々と先ほどの御辞儀よりも深く頭を下げてトモミに謝罪してきた。

「いつ、いえ…こちらこそ御気に触れてしまわれたようですので…それでは早速。当施設をご案内させていただきます」

「いえ、その前に…皆さんへの御挨拶をさせていただきます」

そういうと姫君はトモミの後ろで立ち並ぶ怪獣娘たちへ近づいていき、一人一人に挨拶を交わした。

「どつ、どうもつす！レッドキングの歌川ベニオつす！」

「ゴモたんことゴモラの黒田ミカヅキやでえろよろしゅう！」

「ミクラスの牛丸ミクつす！よろしくつす！」

「うっ、ウインダムの白銀レイカです…初めまして」

怪獣娘たち一人一人に挨拶が回っていくと最後にアキへと近づいてきた。

「あつ、アギラの宮下アキです」

「…あなたが…アキさん…」

「ふえっ？」

ボソツと姫君がアキに向かって何かつぶやいたような小さな声のアキだけに聞こえた。

「すみませんが…御トイレの場所に案内してくださりませんか？」

「えっ、あつ…はい…こちらです」

姫君にトイレがどこにあるか尋ねられたアキは仕方なく案内しようとする…付き添いのバトラカとシークレットサービスの屈強な男たちもアキと姫君を囲い込んで一緒に行動を共にしてきた。

やがてエントランス内の女性用トイレに迫ろうとしたが…

「じゃあ、ボクは外で待っていますので…」

「あつ、あの…日本の御トイレは難しいと聞いております！恥を忍んで少し御指南をお願いできませんか？」

「えっ？…難しいも何も、うちのトイレは全部洋式…」

「いいえ、わたくしの知るトイレとは違うかもしれませんので御付添い願えますか？」

アキは姫君にトイレまで同行してほしいと懇願されたが…周囲の屈強な男たちに睨まれている状況下では断り切れなかった。

「姫様の御要望だ！お応えできないと申すか!!」

「ひいっ！わっ、わかりました…」

その中でも特にアキを強く睨みつける凶器のような視線を浴びせるバトラカを前にアキは怯んでしまい、思わず承諾してしまった。

「ありがとうございます では参りましょう」

「えっ? わわっ!」

要望を受けてくれたアキを姫君自ら手を引いて一緒にトイレへと駆け込んで行ったのを見計らった屈強な男たちはバトラカを中心に女子トイレに背を向けて出入り口に巨体の壁が形成された。

「アギアギ、大丈夫でしょうか…」

「何か異様な光景やねえ」

普段女性ばかりのGIRLS東京支部のエントランストイレの前を屈強な男たちが囲み塞ぐ光景に全員が動揺と困惑が広がっていた。

一方、トイレ内では…

「ええっと、とりあえず特に普通の洋式なので…もがっ!」

トイレの案内をしようとしたアキに突然姫君は彼女の口元を清楚な白い手袋で覆われた手で塞ぎ、トイレの一番奥の壁まで詰めた。

「バトラカゝ覗かないでくださいよ…:…よしッ、聞こえていませんね」

姫君は小声が付き添いのバトラカに聞こえないことを確認するとアキの抑えていた

口元を放した。

「一体何を…もごっつ!」

解放された口で喋ろうとしたアキだったが、姫君は指先で再びアキの口を嚙ませ、自身も口元に指先を差しして「静かに」とジエスチャーをした。

「乱暴な真似をして申し訳ございません…わたくしはインファント島インファント王国第一王女のエリアス・メイ・フツアと申します…あなたにお会いすることを心から待ち遠しく思っております!」

「えっ?ボクと…?」

突然インファントの王女ことエリアスが自分に会いに来たと語られたことにどういうことなのか困惑するが…顔を覆い隠す金箔生地のパールが捲られるとエリアスの本来の素顔が露になった。

「おっ…王女様…ええつと…どこかで会いましたっけ?」

エリアスの顔をハッキリと見たアキは少し見覚えのある顔立ちに見知らぬ感じがしない不思議な気持ちになったが…

「何を申されているんですか…鏡を見てください、ホラッ!」

アキはエリアスに鏡を見る様に諭され、見てみるとそこに映った髪型は違うが、それ以外の顔立ち、目鼻立ち、輪郭に至るまで殆ど瓜二つと言っていいほどに同じ顔だった。

「ぼつ、ボクと似ている…どういふことですか!？」

「うふふつ、以前から御顔を拝見させていたりましたが…髪色だけは少し違いますがそれ以外は相違ないと見て間違いありませんわね」

確かに髪色だけは若干エリアスの方が明るい発色でどちらかと言えばアキがアギラに変身した時の方に似ている印象があつたが、顔のパーツや背丈に至るまでが殆ど見分けがつかないほど類似していた。

「折り返してご相談なのですが…一時だけあなたとわたくしで御姿を入れ替えていただけませんか？」

「えっ? なつ、なんで…ですか!？」

思わぬ要望に驚愕したアキは更なる動揺が走る…それはつまりGIRLSの怪獣娘宮下アキがインファントの女王エリアスとして振る舞い、エリアスもまた宮下アキとしてGIRLSの怪獣娘宮下アキとして振る舞う、双方が入れ替わると言ったことをエリアスは求めているのであった。

「実は付き添いのバトラカたちには内緒にしていたんですが…わたくしの母君にして現女王陛下であるサラナ女王の命にして予言で『怪獣の魂宿し者たちが集う場にて極秘に交わりをかわせ』と言いつけられておりまして…すなわち私はあなた方の組みする集いに関わるようにとの御命令なのです」

それはつまりエリアスがアキに扮してGIRLSの怪獣娘として秘密裏に振る舞うというのであった。

「どうしてそんなことを…あなたのお母さんが？」

「母君は女王が代々受け継ぐ予知能力で未来を見通す力があるのです…そして、その力は次の世代である私に継承されるのですが、その力を受け継ぐためには前代より課せられる試練を受けなければなりません…その試練を乗り越えた者が次期女王候補となるのです」

「その試練ってというのが…ボクと王女様が入れ替わるってことですか？」

「はい、それも誰にもバレることなく極秘裏に進めなければなりません！　どうか、お力を御貸してください！」

エリアスは深々と頭を下げてくださいするが…アキは判断に困った。

「でも…入れ替わりを貫き通せるかなあ…」

「大丈夫です！ここまで殆ど口数を減らしていますし、顔もこの金色の顔隠しさえつけていれば顔を晒すことは殆どありませんよ」

「でっ…でも…」

「んんっ…ここだけの話、この後で日本政府が催す晩餐会がございますので…そちらでは豪華なお食事が振る舞われますよ」

「うっ……っ……豪華な……食事？」

エリアスの甘い囁きに惹かれたアキは思わず心が揺らいだ。

「あくまで明日までのほぼ丸1日……丸1日だけの御辛抱をお願いします……帰国前に再度こちらに向かうようバトラカに命じればスグにここへ戻って来られます」

「ほっ……本当ですか？丸1日だけ？」

「はい、その間はうちのバトラカをアゴで使つても構いません……適当にコンビニなる店でアイスなる物を買に行かせても構いませんので……」

「やたら具体的な扱い例だが……聞くだけには魅力的で断る理由がないほどにアキにはメリツトしかないようなことばかりであった。

「ううっ……本当に1日だけなら……少しくらい……」

「本当ですか、ありがとうございます！ 早速こつちに来てください！」
「わわっ!!」

アキはエリアスに背中を押し込まれて個室トイレに2人は隠れるとお互いの衣服を交換し合うことになった。

「あら、思ったより少し大きいですわね……うっ！むっ……胸が意外とお持ちでらっしやるんですね」

「ボクなんかギリギリきついですよ……王女様も華奢なお身体なんですわね」

アキとエリアスは互いに異なる部分を再確認し合いながらも衣服だけを取り換える
とアキに扮するエリアスとエリアスに扮するアキ、一見では見分けがつかないほど互
いが入れ替わっても全く違和ない姿になって見せた。

「ほら、どうですか？どこを見てもあなたソツクリですよね」

「ううっ…ボクはちよつと自信ないです…バレませんか、コレ？」

「平気ですよ、バトラカって意外と鈍感ですからバレませんって」

やけに自信満々なエリアスの言葉を洩々信じるしかないアキは乗り切れないままに
入れ替わる覚悟を決めるしかなかった。

トイレを出ると本来のエリアスの付き添いのバトラカがエリアスに扮するアキの前
に立ちはだかった。

「姫様、用は御済みましたか？」

「ひゃっ…はっ、はい…」

「…どうかされましたか？」

「いっ…いえ…」

入れ替わって早々にバレてはいないがアキ自身がボ口を出しそうになるもバトラカ
が見ているエリアスがエリアスでないことに一切気づかれていなかった。

「んんっ、バトラカさん この後のご予定は大丈夫ですか？」

「むっ、ここの組の者にしては話が分かるようだな…姫様、このあとは永田町で首相官邸にて総理との面会ですのでお急ぎください」

「えっ!?総理!?えっ、ちよ…まつ!」

一切何も聞かされていなく、困惑するアキだが屈強な男たちに囲まれてバトラカに背を押されながらGIRLS東京支部を強制的に退場するされていった。

「えっ…ええつと、GIRLS東京支部にお越しいただきありがとうございます!」

嵐のように過ぎ去っていった王女一行を見送ったトモミは深々と頭を下げると集められていたGIRLS東京支部の面々も頭を下げた。当然、その中にはアキに扮してGIRLSの制服を着るエリアスも手を振って微笑むように見送った。

(フッフツ…宮下アキ、あなたには申し訳ありませんが御姿を少しの間だけ拝借させていただきますね…母君の本当の命は“彼”に接触する事なのですよ)

エリアスはアキに伝えた内容とは別に本来の真意を心に秘めたままアキとして振る舞うのであった。

「いや〜すごい人たちだったね…」

「本当ですね…なんだか仰々しい感じがいかにもVIPって感じでしたし、ああいうのが国賓っていう方なんでしょうね…アキさんは一緒に居て見てどんな感じでした?」

「ええ、とても素敵な方々でしたわよ」

「でしたわよ?…なにそれ、あの王女様の真似?」

「ウフフツ…かもしれないね」

言葉遣いは怪しまれても姿がアキそのものであるためエリアスであることに一切気づかれていないままGIRLS東京支部の面々はいつもと変わらぬ日常に戻っていた。

ただ一人、アキに扮するエリアスを除いては…

— 永田町・首相官邸 —

「はわわわっ…」

一方のエリアスに扮するアキは大変なことになっていた。良い様に言いくるめられてエリアスとして振る舞う事になったが…想像を超えて恐るべき状況になっていた。

「初めましてエリアス王女殿下…遠路はるばるようこそ日本国へ　改めまして内閣総理大臣の長谷川です」

アキの目の前に握手を求めてきたスーツの襟元には菊花の金細工を赤紫色のモールに取り付けた衆議院議員記章が目立つ若干40代前後の男だった。

その男が自らを『内閣総理大臣』と名乗るのは実際にその役職に務め、その役職に見合う表舞台で活躍し、その役職に求められるあらゆる政治的活動の数々をこなす。『現職の総理大臣』であるこの事実が揺るぎようのないことだからである。

そんな相手がインファントの王女でも何でもない自分が握手をするなど緊張感と罪悪感に押しつぶされそうになりながらも手を握らざるを得なかった。

(ううっ、ごめんなさい……本当はエリアス王女じゃないんです……ただのしがない怪獣娘なんです……)

アキはベールに隠れた顔に涙目を浮かばせながらも王女としての振る舞いを身振り手振りでこなすしかなかった。

場所が変わってアキが次に席に座された場合は官邸内に設置された関係閣僚の議員たちが会議をする長机の場に総理大臣の長谷川を始め、テレビのニュースなどで見たことのある多くの議員たちが向かい合って座り、対面でアキとその周囲をバトラカを始めとした例の屈強な黒スーツ姿の男たちまでもが並んでいた。

「——それでは、日本政府はサラジアの復興支援に日本の建設企業の復興派遣と復興支援金の追加支援を表明するものとして……」

先ほどから続く会議の議題の中でもニュース内でしか聞いた事のない内容やGIR

LS内でも滅多に聞いた事のないような目が飛び出るような金額の動きにアキは最早目が回りそうであった。

「以上ですべてとなりませんが…王女殿下、何かご質問は？」

（質問!?!何を聞けばいいの!?!さつきから何か何までわからないし、何をどう言えばいいのかわかんないよお!!）

突然、意見を求められたアキはあたふたとする中で真横のバトラカに目が移った。

「姫様、どうかなさいましたか？」

「あつ…いや…その…ばつ、バトラカ…さん?…何と言えばよろしいんですか？」

「…なるほど、わかりました。日本政府にはそのようにお伝えいたします」

何かを理解したのかバトラカは代表して立ち上がり、手を後ろに回しながら胸を張って語った。

「日本政府側の御意思、しかと私どもの心に刺さり感銘を受けました…と姫様は申しておられます」

さすがにそこまで伝えたつもりはないアキだったが、バトラカの深読みより良い感じにまとめられてアキもといエリアス王女の代弁者として事なきを得た。

（ふう…何とか誤魔化せた…けど、コレがお姫様の仕事なのかあ…知らない土地どころか知らない国でこんなことをするはずだったなんて王女様も大変だなあ…）

改めてエリアス王女の凄さが身に染みて感服させたれたアキだったが…

一方のエリアス本人は…

「よつし！今後GIRLSも更に良さを見せられるように特訓だ!!」

ベニオの指導の下、インファントからの使者が去った後になって更なる組織としての磨きをかけるために集められた所属の怪獣娘たち全員参加のトレーニングに回された。

「うう〜つらい〜!」

「ミクさんが音を上げるレベルなら私なんて死んじやいますよお〜!」

新設された怪獣娘たちでも自由にかつ鍛錬にも励める運動能力向上を目的に改築したトレーニングルームには様々なアスレチック型のトレーニングポイントで怪獣娘たちの強化が施されつつあった。

「とおう!…はっ!…いよつと!」

そんな中、エリアスはアキのトレーニングウェアに着替えてGIRLS東京支部が誇る怪獣娘強化アスレチックを難なくこなしていた。

「す〜い!アギちゃん!…どうしちゃったの!?!」

「なんだか普段のアギさんとは一線を画して軽い身のこなしですね」

ミクたち大怪獣フアイトを主戦場とする怪獣娘を始め、運動の得意な怪獣娘も、そうでない怪獣娘も驚愕するほどに施設内に設置されたアスレチック型のトレーニングは並みの怪獣娘でも音を上げるほどにハードな設定で作られている。飛んだり跳ねたり運動を想定したこともさることながら、指先の力も必要とするボルダリング用のセメント場に体力スポーツ番組のようなマニアックなアスレチックさえも軽々と乗り越えていた。

「ふむ、まあまあですね…少し物足りないかと…」

「ほっ…本当にアギちゃんなの!?…今日は本当にどうしちゃったのさあ!?そんな強者オーラが滲んでたっけ!」

明らかにいつものアキでは無いような気配に驚きを隠せないミクたちは目を丸くしていた。

「うひやあくアギちゃんすごいやくん!ウチが見込んだとおりやでえ!アギちゃんはやればできる子やくん、ウリウリ〜!」

「あ〜っ」

アキだと思い込んでいるミカツキはアキに扮するエリアスに抱き着いて体をいつものようにまさぐるかのような手つきでまじまじと触れ回ったが…

「ウリウリく……あれ?……なんかいつもと触り心地が違うようなあ……なんかいつもムニムニ感がないというか、硬いというか……あるはずのものがない感じがするうく?」
普段から触り慣れているアキのフォルムをすっかりと脳内に焼き付けているミカツキには違和感が過つていた。

それに恐れていた事態に直面したエリアスはドキッ!と心臓が大きく鼓動すると同時に身体がビクツツと反応を示す通り、もうすでにバレそうになっていることに驚いた。「なつ、なんのことでしょうか?……うふふツ、そんなところを触られても擦っただけですよ……ほら、こしよこしよこしよこしよこ」

「フアアツ!? なつ……なんやこの感じ……こんな……アギちゃんに……アギちゃんに……こんなえげつない手練手管なテクがあつたなんてえくええ……ゴロロロツ」

エリアスはミカツキを猫でもあやすかのように顎下を撫でて無力化させて見せた。

「ゴモたんさんが落ちましたよ!」

「今日のアギちゃんは無敵だあ!」

普段から一緒に居る事の多いミクとレイカでもわかる明らかな異変、アキが普段のアキとは一味違う感じに度肝を抜かされていた。

「アギアギくどこですか?」

そんな中、アキを探しにトレーニングルームへ入ってきたトモミがヒョコツと顔を見

せた。

「……………」

「アギちゃん、ピグモンさんが呼んでるけど…」

「えっ?…ああ、わたくしですわね…はいはい」

「??:…本当にアギちゃんなのかなあ?」

呼ばれても反応もなく、一人称も『わたくし』になっているアキ…さすがのミクでも親指と人差し指の間に顎を乗せて首が傾いた。

「どうされました、赤き御方」

「赤き御方?…いえ、アギアギに御迎えの方が参られましたのでお伝えしに…うぶっ!」

「それはつまり『お兄様』ですか!」

アキに扮するエリアスは突然トモミの両頬を手で押さえつけると顔面を固定すると同時に彼女とは鼻と鼻がつきそうな至近距離まで詰め寄せられた。

「ええっほ…おひいさまといえはおひいさまですける…あひあひ、かおがいひやいれすう〜」

頬を掴み抑えられたトモミは呂律が回らないほど強い力で押さえつけられた口で精いっぱい喋るが…

そんなトモミを解放するや一目散でトモミを始めトレーニングルーム内に居るすべ

ての怪獣娘たちの前から刹那の移動がその場より瞬間移動でもしたかのように残像さえ残さず走り去っていった。

「ううう…ほつぺた痛いですうう」

「今日のアギラ…なんかいつもと変だったなあ？」

頬を真つ赤に腫れあがらせるトモミの頭を撫でながらも普段のアキを知るベニオも顎に手を充てながら首を傾けた。

そんな疑惑の渦中のアキに扮するエリアスは超特急でGIRLS内の職員や怪獣娘たちを疾風の如き速さで避けながらエントランスまで向かっていった。

「兄さま…兄さま兄さま兄さま兄さま兄さま!!」

エリアスが興奮しながら期待する自分を迎えに来た相手が誰なのか彼女には見当が付いていた。

「兄さま…ま！御迎えいただきありがとうございますとございまうすう！」

エリアスが満面の笑みでエントランスに合流する人物は…

「…いえ、礼には及びませんよ…アキさん」

ダグナだった。

「チイツー！」

「ちいつ?」

「いつ、いえ…なんでもありませんわ(そうでしたわ…今のアキさんにはコイツが後見人として付き添われていると密偵から報告を受けていましたわね…)」

期待に外れた人物が自分を迎えに来たことについて舌打ちをしてみましたエリアスは態勢を立て直して顔を作り直していつもの王女の外交的スマイルを見せて誤魔化した。

「わっ、わたくしの御迎えに上がられたのでしよう…さあ、エスコートなさいませ　ダグナ」

「おや、今日は随分と…なるほど、そういう日なのですね」

「どういう日なのか存じませんが…レデイにいつまでお手を煩わせるのですか?」

「これは失礼しました、お嬢様…では、お手を失礼いたします」

エリアスは精いっぱいのアキのフリをしているが…明らかにアキではない仕草と挙動に言動、しかしダグナはそれでも彼女に話を合わせるかのように彼女の手を引いて宛ら令嬢と執事のような立ち振る舞いで車へと向かった。

アキの部屋へと帰宅するなりエリアスに更なる先例が待ち構えていた。

「うっ……えっ? えっ? えっ!？」

【ウエルカム バック】

玄関内で赤い大きな目が2つに黄色い発光器官を顔に持つビーコンがおかえりプログラムを所持して持ち構えていた。

「なっ、なんですの!?! この生き物は!？」

「どうされましたか、アキさん……その方はあなたが飼っているペットではありませんか」

「ペット!?! これが!?! ……はっ!？」

思わず驚いてアキとしてのフリなどすっかり忘れてツッコんでしまった。

「いっ……いけない、いけない、そうでしたわね……うん、ペット……ペットですわね」

何とか誤魔化しているつもりだが……先ほどからアキに扮するエリアスの顔をジーツとビーコンの赤い大きな目が彼女の顔を覗き込んで来ていた。

「おけえりく、アキちゃん!？」

「帰ったら手を洗えく」

リビングの奥からミオの独特なおかえりコールと共にユウゴの声が響いた。

「今の声! 兄さくまアツ!!」

【ブエツ!?!】

エリアスは立ちふさがるビーコンの腹を弾いて押しつけ、通路を駆け足で飛びついた先にはユウゴの身体が待っていた。

「あつぶね！いきなり何してんだオマエッ！」

「あつづう!!?カレーがちよつとかかつたけど!？」

鍋に入ったカレーを天高く避けたユウゴとその反動で少し零れ落ちたカレーの飛沫を頭から被ったミオがソファアで悶える中、突然のアキに扮するエリアスの行動に驚かされた。

「兄さま……ユウゴ兄さま……ずつと会いとうございました」

「はあ?何言ってるんだオマエ……しよっちゆう会ってるだろうが……」

アキが普段言わないような言動と普段取らないような行動に困惑するユウゴだが……

「あらら、どうしちやつたのアキちゃん……今日はやけにお兄ちゃんラブじゃない? ブラコンに目覚めちやつた?」

「むっ! (この害獣女……密偵からの報告ではつい最近兄さまたちの家に住み着いたダニと聞きますね、手っ取り早く追い出しておかねば……) ……あらあら、どうされましたこと? 家に見知らぬ泥棒ネコがいらつしやるみたいですよ、兄さま」

「えっ? 本当にどうしちやつたのアキちゃん?」

「泥棒であることは間違いねえが……それがなんだ?」

「ユウゴ君までどうしちやったの!?!二人とも今日はお姉さんに冷たくない!?!」

「毎回飯時に上がり込んでくるヤツは泥棒以外の何者でもねえよ」

「ヒドイツ!?!」

思わぬ誤爆を受けたミオはシクシクと涙を浮かべてソファアに突っ伏した。

「えへへっ、初めて兄さまと意見が合いましたわね…兄さま!」

「マジでなんだ、この状況?お前は頭でも打ったのか?」

ひとまずテーブルにカレーを置いて一人掛け用のソファアに座っても胴体にしがみついてユウゴの胸に顔を左右に擦り付けるエリアスはアキの姿のままにめちやくちな好意を寄せるがユウゴからしてみればアキが奇行に走り出したとしか思えていなかった。

そんな自宅で起きていることなど露知らずのアキに背筋からひた走る悪寒に身震いした。

「うっ…なに、今の感じ?」

「どうされましたか? 姫様」

さんざん日本政府内の有名議員らと面会をして既にぐったりとしていたアキの身体がビシッと伸びてしまうほどの気配に背もたれから背中が離れた。

「あつ…あの…次はどこに向かっているんですか？」

「お次は園崎防衛大臣と面会の後に霞ヶ関より自衛隊の最新シャドウ対策装備説明会でございませう」

エリアスに扮するアキが乗るリムジン車は次なる目的地へと彼女たちを移送していた。

「えっ?!そのあとは?!」

「警視庁特異生物対策本部より警備部特殊機甲部隊『アヴァロン・ユニット』の視察です」
「まつ、待つてください!!? 晩餐会は!? 晩餐会は何時からなんですか!?!」

何よりもアキがここまでエリアスとして振る舞っている最大の理由で承諾したはずの『晩餐会』を尋ねると…

「政府高官たちとの晩餐会は午後9時頃です」

アキには絶望が降りかかった。エリアスに騙された事と本来現時刻の7時頃で夕食とする彼女のおなかは急激なストレスにより完全なる飢餓状態で限界を迎えていた。

それだけに留まらず…

「あの、せめてお腹がすいたので…コンビニで何か買ってきてもらえませんか?」

「姫様、この国のコンビニニエンスストアなる低俗な店舗のお食事などあなたの御口にはふさわしくありません…晚餐会は日本の最高級の食材を使用した日本料理が振る舞われますのでそちらをお召し上がりください」

先ほどからバトラカを顎で使いコンビニへ行かせることはおろか、まともな軽食すらも与えないことに更なるフラストレーションがアキの中で溜まりつつあった。

「あの…止めてください…お腹が…」

「どうされました、姫様?!?運転手、車を止めろ!!」

突然、お腹を押さえながら悶絶するような仕草をするアキにバトラカたちは急いで車を道路沿いの脇に停車させると…

「姫様、お見せください!どこか御身体に異変が…」

「ふんツ!!」

「ぐはあっ!?!」

アキはバトラカに頭突きをかますと同時にリムジン車のドアを取り破って破壊し脱した。

「ひっ、姫様!!」

ドアを無理矢理破壊し開けるとアキは車内を飛び出し、歩道も超えて、停車していた場所は川の上の橋であり柵から身を乗り上げた。

「姫様、何をされているんですか!? おやめください!!」

バトラカは打たれた顔を抑えながらアキに近づくが…アキに迷いはなく柵から身を投げて川へと落ちた。

「ソウルライド! アギラ!!」

川へと落ちていきながら非常用に所持していたソウルライザーでアギラに変身を遂げて川の中へとドボンツ! と水柱と水飛沫を上げた後が川の中に残るのであった。

「探せ! 探すんだ!! 姫様が川に落ちたぞ!! 早く探さねば!!」

バトラカも川へ落ちたアキの後を追うようにして彼も体を変化させながら川の中へと飛び込んだ。

一方のアギラは先に川岸の柵に手を掴んで先に陸へと上がっていた。

「ボクには最高級料理なんかより…家でお兄ちゃんが作ってくれる料理の方が大事だ!」

アギラは一目散でその場を後にして走り去っていったが…川の中からアギラの後について凶悪な指先が鉄柵をバキバキツ! と音を立て握りつぶした。

—キボオオオン…—

その奇怪な鳴き声と共に川の中から赤く鋭い眼光が走り去っていくアギラを捉えていた。

さらにそんな事態も知らぬエリアスは：

「えへへっ、兄さ〜ま…」

「お前、マジで離れろや…さつきから全然飯が喰えん」

食事中ずつとユウゴの左腕にしがみついて放そうとも離れようともする気配はなくユウゴとアキに扮するエリアスだけが食事の遅延が起きていた。

「あらあら〜…すっかり仲良しさんじゃないの〜、よかつたわね ユウゴ君」

そんな二人の姿を傍らでモグモグとカレーを頬張るミオは面白がっていた。

「この立場になって見ろ…鬱陶しい上にシンプルに気持ち悪い、妹のガチ奇行ほど見るに堪えれんわ」

ユウゴは額に血管を浮かばせてミオを睨むがミオはそっけなく『はいはい』と言いなから空いた皿を台所で洗い物をするダグナの所まで持つて向かった。

「ふんっ…さて、一体どういう風の吹き回しだ エリアス」

「まあッ、やっとなつたくしの名前を呼んでくださいましたわね！……あっ!？」

思わず自身の名前を呼ばれたことについて喜んだエリアスはボ口を出してしまった彼

女の顔はダラダラと冷や汗が滝のように流れていた。

「なっ、なんのことでしようか……私はあなたの知る清廉潔白にして眉目秀麗なエリアス王女なわけないじゃないですかあゝ冗談はよしてくださいませ 兄さゝま♡ 私はあなたの大事な大事な、実の妹君のアキさんですよ♡」

精いつぱい可愛い子ぶつて見せるエリアスにもはやアキを演じる気はなく、ダラダラと顔に汗が流れ落ちていくばかりであった。

「あくまでも認めないのならこちらにも考えがある……おい、ごくつぶし！アキがお前と風呂に入りたいたとよ！」

「えっ!?なになに、ホントー!?とうとうお姉さんにもシスターラブに目覚めてくれたあ!?ええ、ええ、入りましょう入りましょう！今すぐ入りましょう!!」

「わわわっ!?兄さま、助けてください!!いやだ、やです、やです!どうせなら兄さまと入りたいたです!!この人となんていやですうゝ!!」

必死に風呂場まで連行されかけているエリアスは必死になってユウゴの服の袖にしがみつくが……ユウゴは無情にもその手を払いのけて彼女をミオに明け渡すとミオはエリアスを抱えて風呂場に直行して扉の前をピーコンが「キープ アウト」のプラカードを持ったまま立ち塞いだ。

—数分後—

「ユウゴ君！ユウゴ君！ユウゴくん！！誰なのこの子！？アキちゃんじゃないわよ!」

タオル一枚だけ胴体に巻いて風呂場から飛び出して着たミオは小動物でも抱えているかのようにエリアスの両脇を抱えてユウゴに突きつけるが：：：ビーコンが間に入ってエリアスの身体を「ドウ ノット ルック!!」とプラカードで隠した。

「せめて服を着てからにしるや」

「んんんっく説明してよ！誰よ！誰なのよ、この子!!なんかアキちゃんと比べて顔は同じなのに触れ合ってみて初めて違うって実感したけど誰なの!?!飼ってた猫が見た目同じ猫に変わってたぐらい衝撃なんだけど!?!」

「あの…：：：とりあえず下してもらえますか?」

取り乱すミオは我に返ってひとまずエリアスを下すとビーコンからバスタオルを手渡され、それを胸元まで巻き付けた。

「騙すような真似をして申し訳ございませんでした。わたくしはインフアント領インフアント王国第一王女のエリアス・メイ・フツアと申します：：：宮下アキさんは現在わたくしの代わりに王女代理として我が側近のバトラカと行動を共にしておりますのでご安心ください」

エリアスはミオとユウゴ達に深々と頭を下げて自分とアキが入れ替わっていることについて深く詫びた。

「ウツソオ…外国の王女様だったの!?!どおりでなんかいい匂いもするし、肉付きもアキちゃんよりたくましいし、抱き心地が違うから気づけたけど…でもこれはこれで良かったわ!」

「お前の判断基準どうなってんだよ」

明らかに他国の王女に対して不敬な認識でアキでないと見抜いたミオだが決してぶれていなかった。

そんな時だった…ガチャツ…

「はあっ…はあっ…たっ、ただいま」

息を切らしてアギラがユウゴ達の元へと自力で帰ってきた。

「アキちゃん!?!どうしたの、変身までして…」

「ちよつと…いろいろあつて」

走り回って疲れたのか、アギラは倒れそうになったところをミオに支えられた…が…
「んっ…おい、何か来るぞ」

ユウゴは何かがちらに向かっている気配に気づいてミオたちに警戒を促すが…
「バキーン!!」

「ひゃっ!?!」

ミオの目の前でステンレス製の玄関ドアに大きな穴を開けて鋭利な氷柱状の針が彼

女の顔に紙一重でユウゴがゴジラの腕へと変化させその針を止めた。

「ぬうん!」

ユウゴはそのまま足もゴジラに変化させステンレス製のドアを蹴り破って扉一枚挟んで向こう側に居る相手をドアごと吹き飛ばしたが…シャキンツ!と切れ味抜群の切断にてステンレス製のドアが真つ二つになるとドアの裏側から凶悪な顔つきに額に伸びる黄色く発光した身の丈入り口以上に巨体の怪物がアギラたちの前に現れた。

—キボオオオオン! キュキョオオオオン!!—

「ギヤアアアアアア!! 誰ッ!? 誰なのッ!」

「下がってろ!!」

ユウゴは手と足以外の胴体や頭、臀部にかけてゴジラとして変貌を遂げて正体不明の怪物に突進して玄関前のコンクリート柵ごと破壊してマンションから落ちていった。

「おっ…お兄ちゃん…」

「アキちゃん、しっかりして! 怪我はない!」

疲労のせいか意識を失いかけているアギラにミオは揺さぶるが…そこへエリアスが近寄る。

「失礼します…宮下アキ、騙すような真似をして申し訳ありません…これはささやかな礼です」

エリアスはアギラに触れると金色に輝く粉のようなものがアギラの身体へ付いていた。

「うっ……うん？……あれ？疲れが……」

アギラの身体の内側から失っていた気力がじわじわと蘇ってくるようだった。

「立てますか？」

「うん……ここまで全速力で走ってきたのがウソみたいに身体軽くなっているよ」

「それは良かったです……うちの『バトラ』が失礼いたしました」

「バトラ？」

「はい、さっきの怪獣は私の付き人のバトラカが変身した姿です……名をバトラと申します」

エリアスが新たな怪獣戦士（タイタヌス）としてバトラを紹介するが……ゴジラと共に落ちていった下ではマンションの駐輪場に置かれた自電車などが宙に舞い上がるほどの激闘がしたで起きていた。

「そして私も……あなた方が『怪獣娘』と呼ばれる、自ら怪獣に身を宿す力を有する『モスラ』の継承者なのです」

自らもアギラと同じ怪獣娘であることを打ち明けるとアギラが変身しても衣服は消えるのに首にかけた赤い鉱石が中央に埋め込まれている太陽のような紋章が描かれた

ペンダントをアギラの首から外させると手に取り…上に向けて掲げた。

「ドウンガン カサクヤン インドウムウ…モスラ!!」

エリアスは独特な呪文のような言葉を発するとソウルライザーで変身する怪獣娘たちと同様に眩い発光と共に金色の羽、昆虫のような複眼の付いたフード状の獣殻、全身をモコモコとした線毛で覆われた身体、見た目こそユウゴのゴジラとは違うどちらかと言えばアギラと同じ怪獣娘のような半獣型の怪獣娘に変身を遂げた。

「王女さまも…怪獣娘だったの?」

「はい、名を『モスラ』と申します…それよりも兄さまたちをお止めしに参りましょう」
「うっ、うん…行こう!…って、わっわっわああああ!!」

エリアスはモスラと言う怪獣娘に変身を遂げるなりすぐにアギラの手を引いてゴジラたちが破壊して開けたコンクリート柵の跡から飛び降りていった。

一方、マンシヨン内の駐車場で睨み合う2m越えの怪物たちが互いに出方を伺うように構えあっていた。

「ゴジラ…貴様どういうつもりだ!我ら、インフロントとの盟をたがえるか!!姫様をどこにやった!!」

「知るか!…こっちは自分の妹がお前の所のお転婆姫と入れ替わっていたことに迷惑して

るんだよ!!」

「貴様ああ!! 姫を誑かすに飽き足らず、シラを切るか!!」

バトラは近場にあつた大型バイクを片手で掴み、ゴジラに向けて投げたが：ゴジラはそれをまともに受け止め、反動のままに回転しながらバトラへ返すかのようにバイクを叩きつけた。

しかし、そのバイクなど額から伸びた金色の角を発光させるとバイクに頭突きする拍子にバイクは真つ二つに裂けた：が、切れ目の間からゴジラの太い尻尾が現れてバトラの顔面に直撃すると駐車する軽乗用車のフロントガラスから突っ込んでいった。

だが、バトラも今度は車内よりボンネットを突き破つて飛び出すと月夜の光と共に姿が変化して角は縮み、体格もマツシブな印象からスマートな細身に変わって背中から羽が生えた。

「貴様とは心底こうなつてしまふ事を残念に思う：だが、我らも所詮は怪獣、戦うのであれば戦うのみぞ!!」

バトラは蜂のように高音の羽音を鳴らしながら超高速でゴジラと激突するかに思われたが…

「そこまで！二人とも、戦いをおやめなさい!!」

「ひっ、姫様!?!」

二人の怪獣の戦いを割って入り止めたのはエリアスが変身するモスラであった。

「バトラカ、ここは日本ですよ…その姿は御慎みなさい」

「しかし姫様！一体今までどちらに…!？」

「ずっとこちらの宮下アキと入れ替わり。この方とわたくしの立場を入れ替わっていません」

モスラは側近のバトラに彼女が浮遊しながら右手で掴み支えるアギラと入れ替わっていたことを打ち明けた。

「なぜ、そのような事を！悪戯に混乱を招くようなことを…」

「母上からの命による『ユウゴ兄さまと接触せよ』等と言う話をあなたが信じますか？録にわたくしの意見に耳を貸そうとしない頭の固いあなたに…」

「言つてくださらなければ分かりかねます！」

「では兄さまと話をさせますか？」

「死んでも阻止いたします！」

「そういうトコロです!!」

バトラとモスラは互いに意見交わしても平行線で続くことにモスラは呆れかえった。

「はあ…申し訳ありません、兄さま…あなたにこうしなければ直接お会いできないと踏んでの決意であることをご理解してください」

「ボクからもお願いするよ…エリアスも目的があつてボクと入れ替わつてほしいって提案したんだ」

モスラとアギラの言葉にゴジラは深いため息を吐き出して腰に手を当てながらモスラに近づいた。

「んで、俺に用つてなんだ？」

「はい！母様の伝言は『悪しき災い迫り時、今一度インフアントへ訪れ願いたい』とのことですよ」

それはインフアントのサラナ女王がゴジラことユウゴに彼女が収める国への入国を願うものだった。

「姫様！いくらそれが女王陛下のお言葉であつても…この者をインフアントの地に招くなど…」

「バトラカ！女王たる母様の命を軽んじますか!!…兄さま、母様は予言にてツアアの神からの神託に見た未来をあなたと一緒に考えてほしいと以前申しましたよね」

「それがなんだ…」

「人はいずれ怪獣の力を宿す者たちを囲う…今後より私たちの立場を危うくする出来事があるあなたの方に降り掛ります…怪獣の力を宿す人たちをインフアントへ…と、今回この国で大々的に組する者たちを見ってきました。かの組ではまだ力不足です！どうか

インフアアントへの足入りを願いたいのです、兄さま！」

「待つてお姫様！それってGIRLSのこと？」

「はい：宮下アキ、あなたの手前で大変申し上げにくいのですが：母様はあなた方GIRLSと呼ばれる組に懸念感を抱いております。今回わたくしが派遣された方にはGIRLSと言う存在そのものを見定めるために遣わした次第だったので」

モスラことエリアスが打ち明けた今回の視察の経緯はユウゴことゴジラをインフアアントへ誘い、今まであり続けたGIRLSと言う組織の解体と共に怪獣の力を宿す者たちをインフアアントへ集めることが目的だった。

「そうだな：インフアアントは島であり、国であり、組織、性質は違えどアキたちのGIRLSって所と役割を同じとする目的を持つ連中だったな」

「ボクたちと、同じ？」

「ああ、インフアアントって国は世界そのものの調和維持を目的とする国だ：国連に加盟するどの国よりも重宝され、大国の陰に隠れる存在……だが、何度も言うが断らせてもらおう」

「なぜですか！インフアアントの何が御気に召さないのでですか兄さま！“前”もそう言うてインフアアントを拒むのはなぜですか!？」

モスラは浮遊をやめてゴジラに詰め寄るが…

「なんでも言うがエリアス：俺の縄張りはこちらなんだよ、ここに俺の守るべき場所があるんだ」

「兄さま…」

「王女様…確かに今のボクたちでは力不足かもしれませんが…それは誰よりもボクが実感しています。あなた達から見れば拙い組織かもしれないけど、それでもボクたちにはここに生活があるんです。ボクも今日一日だけあなたの役割を受けて見て初めて実感した大変さ…住む世界が違うんだなあって実感しました…あなた達にどのような考えがあるのか分からないけど、G I R L Sはこれから生まれてくる新たな怪獣娘さんたちのための居場所づくりの為に奔走しています…だからどうかG I R L S全体を信じてとは言わないけど、せめてボクだけでも信じてほしい」

そう言つてアギラはモスラに手を差し伸べるとモスラはため息交じりながらも心のどこかで結果をわかつていたと微笑む表情と共にアギラの手を握り返した。

「わかりました、このままではわたくしの我がままになりますね…母君にはあなた方のご意見も尊重してお伝えしに帰路につかせていただきます…お騒がせして申し訳ございませんでした」

モスラはアギラたちに今回の騒動の釈明をして深々と頭を下げて謝罪した。

「本当は兄さまがそうお答えになることなど見えていました…なによりわたくしは日本

を通し見て、GIRLSに少しの間だけ関わるうちにわたくしも考えが変わりました。母様にはその旨をお伝えいたしましょう…ではカサクヤーム！」

モスラは諦めて変身を解く呪文を発して本来のエリアスに戻るが…

「おつ、王女様…：そういえばバスタオル一枚でしたよね」

「あらあ？」

しかも、変身が解けたことでバスタオルの締めが緩んでいたのか結び目が解けて彼女の足元に落ちた。

「うわあああああ!!お兄ちゃんは見ちやダメええ!!」

「貴様らあああ!!姫様になんたる不敬をおお!!」

アギラはゴジラの目を隠そうとピョンピョン跳ねるが届かず、自身の国の姫の身体を晒す羽目になったことに憤慨したバトラは更にゴジラたちへの敵意を募らせる事となった。

不正の誘惑

—羽田空港搭乗ゲート前—

1日平均約7万人以上の日本の玄関口の一つとも言われる羽田国際空港、正式名称は『東京国際空港』であり国際線を始め多くの航空旅客機を利用して国内はもちろんのことあらゆる国から入国してくる外国人旅行者などが絶え間なく入国してくれば、出国しようとする者もいた。

「姫様、もう間もなく…搭乗時間となります」

「ええ、わかっていきますわ…それにしても、盛大にフラれてしまいましたわね」

国際線アメリカ合衆国行きの際の搭乗時間を待ち続けていたエリアスはバトラカと共に搭乗ゲート前のベンチに座っていた。

「姫様が御望みとあれば…早急にあの愚物を抹殺させていただきます」

「おやめなさい、兄さまたちへの危害を加えると申すならあなたは戦士の顔に泥を自ら塗りますわよ…まったく、あなたのゴジラ嫌いは治りませんか？」

「姫様、こればかりはあなたでありまして御従いする事の出来ませぬ…世界から怪獣の王と呼ばれるあの怪獣には我がインファントの女王の御言葉に従わぬ手前、わたくし

は敵と認識いたします」

「それがあの方の性質であると母君も理解していると言うのに……あなたときたら……」

エリアスは額に手を当ててバトラカのゴジラことユウゴに対する殺意とも認識できるほどの敵対感情に頭を悩ませていた。

「しかし、姫様も……そのような格好をされるのはいささか遺憾に思われますが……」

バトラカが危惧するエリアスの今現在の格好はワイシャツの上にブレザーとスカート、宛ら私立高校の学生服を思わせるがれつきとしたGIRLSの制服姿だった。

「宮下アキのGIRLS制服……この御姿であれば私がかのインファントの姫だとは誰にも思われませんかでしょう？」

エリアスは自分の容姿と似ているアキと自身の身分の入れ替わりにて大いにバトラカたちを困らせた一件から巻き込んだアキへ自身の姫君衣装とアキのGIRLS制服を互いに交換して得たその制服を着こんで有頂天にも何度も身体を1周回して見せるが一番喜んでいたのはエリアス本人だった。

「この服、気に入りましたわ GIRLS……存外悪くないですわね」

「ご勘弁願います……またあのゴジラの妹と入れ替わられるとわたくしの立場がありません」

今度はバトラカが額に手を当ててうなだれる様に俯いた。

ーピンポーン!…ただいまよりペガサス航空542便の登場を開始いたしますー

アナウンスを通してアメリカ合衆国行き便の搭乗開始が告げられて続々と搭乗ゲートを潜る一団がやって来た。

「バトラカ…来ましたわね」

「はい…姫様、我々は本来であれば国連の専用機でインファントに戻る予定でしたが、それをキャンセルしてまで待ちました」

エリアスとバトラカは搭乗ゲートに向かう一団の最後に向かうある少女を待っていた。

「お待ちしていましたわ…クララ・ソーン、怪獣娘キングジョー」

「ワツ、ワツ!?アギラチャン!?!」

スーツケースを引いて搭乗便に向かおうとしていたキングジョーことクララが足を止めてアキに容姿が似通ったエリアスを見るなりアキと間違えるほどに彼女の目は丸くなっていった。

「残念ながらわたくしは宮下アキではありませんわ…はじめまして、インファント王国第一王女のエリアス・メイ・フツアです…こっちは側近のバトラカですわ」

「あつ、あなたガ!?!」

自らの身分を明かしたエリアスの素性を聞いたクララは更に驚いたような表情を浮

かべて困惑した。

彼女からしてみれば本来このような場に居るはずのない人物がいることに困惑するしかなかった。

「本營の庭元にお戻りになるところ申し訳ございませんが…貴方は本国へ御戻りになる必要は無くなりましてよ」

「ワッツ？それはどういう…」

「わたくしからあなた方の組織に対してこれから起こるこの国での危機に対抗するため、抗える者たちを分散させるようなことをしている場合では無いと訴えたまでですわたくしも母君から無理言つてこの国に留まることを願いましたわ」

本来帰国する手筈だったエリアスは母にしてインファントの女王から伝えられた「予言」に従つて行動していたのであった。

そして、それは合衆国に向かおうとするキングジョーを引き止め、GIRLSの上層部を納得させた上で彼女が根回す目的の為にバトラカと共に日本で行動を起こしていた。

一方、税関検査場にて日本に入国する一列の中である男が検査に引っかかっていた。「失礼ですが、もう一度お願いいたします」

その検査は日本に入国するにあたって防疫の観点からサーモグラフィカメラを通して確認されていた体温変化に異常が検知されて検査官たちも困惑するほどの異常が映像に映っていた。

「なんだ、俺の身体に何か異常でも？」

「いえ……ただ……やけに体温が『低すぎる』ので少々お待ちください」

手荷物やパスポートになんら問題のなかったその男に起きている唯一の異常は：サーモグラフィが男の全身が青く色が変化していることに今までにない異常事態に検査官たちは困惑していた。

通常、体温が高めで何らかの病原菌を宿主者は入国を拒否されて近くの国際病院で隔離されることが通例の防疫だったが……その男には体温と呼べるものが何一つ働いていないほどに体温が低かった。

「悪いが、コレは生まれつきの冷え性なんだよ」

「まさかそんな……ここまで体温低い冷え性など……失礼ですが再度パスポートを拝見させてください」

「ああ？ほらよ……」

男は一度確認されたパスポートを検査官たちに手渡すと……

「失礼ですが、どちらから来られました？」

「…ロシア連邦ウラジオストク…」

男のパスポートには確かにロシア入管の入国と出国のスタンプが押されていた。日本に帰国前はロシアに居たことをこのパスポートにハッキリと記されている。

「度々失礼ですが…帰国理由は？」

男は目元にかけていたサングラスを外して鋭い眼光を検査官たちに向けた。

「……スポーツ観戦に……」

男のパスポートの次のページを捲ると『庵堂アラシ』の顔写真付きの身分証明書が記載されていた。

調布市内 国道線沿い

「ふざけんなああああ!!」

その怒号は行きかう人たちの足を止めて振り返らせるほどに多きな声だった。

「こつちのセリフだ! あんたの車が飛び出して来たのからだろうが!!」

男は腕を抑えながら怪我をしていることは伺えるが怪我をしながらも痛みなどそつちのけで事故を起こした相手に文句を吐いている…しかも、相手は怪獣娘だ。

男の口論相手は一見背の低い少女の様だが：額にゴーグルのような器官と赤い角、赤い斑点のような服装だが服ではない獣殻（シェル）、その体には『GIRLS SPOR TS』のロゴが入ったシャツ着ている：

「そもそもなんで子供が運転なんかしてんだ!？」

「子供じゃないわよ！れっきとした成人！成人女性だ!!」

「ナックルトレーナー：落ち着いてください」

その後ろで口論相手の怪獣娘が着ているシャツと同じくロゴのジャージを着たスラツとした黒髪の女性が怪獣娘を宥めていた。

「こんなに怪我を負わせておいて謝罪もないのか：こっちは怪我もしてんのに：感謝料高く付くぞー!」

「だ・か・ら！飛び出して来たのはそっちでしょ!!自分から飛び出てきておいて怪我したとか、感謝料なんて払わないわよ!!」

「ふむふむ：確かにこれは酷いね」

道路脇で口論する怪獣娘と怪我した男の渦中にベコツと窪んだボンネットをジロジロ見る背広姿の男性がいた。

「おい、なんだアンタ！部外者がなんの様だよ!!」

「いや～これは確かに事故だけど：『故意』に起こした事故だね」

小柄な怪獣娘と怪我した男の間で起きた不慮の事故が故意に起こされた事故だと男性は語った。

「なんの根拠があんだよ！」

「根拠も何も…衝突事故にあっっているながら立っていられないでしょ」

「それもそうでござるな！ほれッ！」

「ぐわっ！なにすんだ!!」

怪我した男の背後から別の背広姿の男性が怪我していると思われる手をとって腕を無理矢理伸ばさせた。

「前原氏、コヤツ怪我した手…握れているでござる」

「だろうな…おまえ、当たり前だな…それもかなりの常習犯だ」

「あっ、当たり前!?」

背広姿の男性2人の見解を耳にした怪獣娘は驚愕した。自分の運転で起きた過失ではなく、怪我している態を装う男の故意だった。

「ふざけんな！なんの証拠があるんだよ!!」

「証拠ねえ…まず、あんたのスニーカー…綺麗だな」

「普通、人体が車に接触する時は最初に当たるは足でござろう…でもおぬしの靴底は擦れていない」

道路にも急ブレーキを掛けたタイヤ痕は残っているが当たり屋の男の靴が引きずられた跡は一切ない、そこから推察されるのは男が車と接触する瞬間に飛び上がって身体はボンネットに身を乗り出し：あとは衝突時のエネルギーに身を任せんばかりに車の上を転がってあたかも衝突事故に見せかけた完全なる当たり屋行為だった。

「もつと言えば転がる瞬間に車のボンネットから屋根にかけてあんたが極力ダメージを軽減させるために手のひらを広げて転がっている：フロントガラスに指紋がベツタリ付いているぞ」

背広姿の男性の一人はフロントガラスについた男の手形から察したのは柔道などでも使用される「受け身」と言う技術だった。受け身で衝突エネルギーが身体に受けるのを防ぐため威力を分散させていたのであった。

「だとしても：あんたらになんの関係があんだよ！引つ込んでろよ、部外者が!!」

「悪いが俺たちはこの見過ごすことのできない「事件」を預からせてもらおうよ：警視庁の前原だ」

「同じく後藤、でござるよ」

背広姿の前原たちは自身の警察手帳を出し見せて自分たちが警察官であることを明かした。

「けっ、警察!?!」

「お巡りさんだったの!？」

2人の素性に男も怪獣娘たちも驚愕した。

「詐欺行為及び恐喝容疑で署まで同行願おうか？」

「はっ、放せ!!」

「はいはい、暴れない 所轄に引き渡してくるでございますよー!」

当たり屋の男は後藤に腕を回されて、後から応援に駆けつけてきた警察官たちに身柄を引き渡され警察車両で最寄りの警察署へと連行されていった。

「大変な目にあつたようだね、君たち…」

「あつ、いえ…助けていただきありがとうございます」

小柄な怪獣娘は深々と前原に頭を下げると後ろで長身女性も彼女に続いて頭を下げた。

「申し訳ないんですけど、その車は今回の事件の証拠品なるし明らかに走行するには無理があるからレッカーを手配しよう」

「あつ、ありがとうございます…けどこちらも申し訳ないんですけど、私これからこの子の目的地まで送り届けなければならぬんですが…」

小柄の怪獣娘は自身が引き連れる長身女性をどこかの目的地まで向かう予定であつた。

「…君たちは…GIRLSの方かな？」

「えっ、あつ…はい…そうですね」

当たり屋の男を所轄に引き渡した後藤の耳がピクツと動いた。

「なんと！GIRLSの方々でござったか!？」

彼女たちがGIRLSの関係者であると知るや後藤は慌てた様子で停めていた自分たちの警察車両を開けた。

「あゝあ…まあ、ここではなんだから君たちの目的地まで向かえるけど…乗っていくかい?」

聞くまでもなく前原の誘いに頷く怪獣娘たちはやたらと上機嫌になった後藤に警戒しながらも恐る恐る警察車両の後部座席に入った。

「いやゝGIRLSの怪獣娘を乗せれる日が来るとは…吉兆でございますな、前原氏!」

「後藤君…一応、彼女たちは事件の被害者だからね…すまない、驚かせて申し訳ないが先ほども言った通り私たちは警視庁の刑事部の者だ」

「オッス!某、後藤ガイ巡查部長でござる!」

端的に自己紹介をする前原と妙に張り切って敬礼する後藤と言う変わったコンビの刑事に2人の怪獣娘は困惑した。

「あつ、申し遅れました…自分はGIRLSのスポーツトレーナー課に所属する怪獣娘

のナツクルです」

「私はブラックキングの怪獣娘で黒柳ナミといいます…スポーツ選手課に所属しています」

後に続いてナツクルとナミも自身の素性を明かした。

「ナツクル殿とブラックキング殿…いや、カツコイイな名前でござるな」

「それで？どちらまで…」

「あつ、はい…味元スタジアムGIRLSフィールドまで…」

ナツクルたちの目的地を尋ね聞いた前原と後藤は二人してその目的地の名前を聞くと顔を見合わせて何か深い意味のある表情が見えた。

「ええつと…何か？」

「あつ、いえ…」

「それじゃあ！出発するでござるよ！」

レッカー車がナツクルの車をクレーンで釣り上げ、現場検証を続ける所轄の警察官たちが残る事故現場から車を走らせてナツクルたちを目的地まで連れていくため警察車両が発進した。

―味元スタジアム付近・GIRLSフィールド―

都内の大規模スポーツスタジアム施設の付近にはGIRLSが運営する怪獣娘たちが伸び伸びと運動ができる運動場が併設されていた。

「御願い！アギラ、一回だけあたしと一緒に走ってみてよ!？」

「ふえっ、なんで?」

そんな運動場に今日はGIRLSのスポーツ課が大会イベントの為に練習の手伝いとしてGIRLSのジャージ姿でアキを始めとした東京支部の一部の怪獣娘たちが駆り出されていたが、早くもスポーツ課の怪獣娘に詰められていた。

「以前から気になっていたんだけど…アギラ、陸上に向いているよ!ほかにもかなりの身体能力が高い様子があるので十種競技とかどう!？」

「いや、だからボクは指導課だから…あくまでお手伝いに来ているだけだよ」

アキの目の前で眼を輝かせ尻尾を円描いて振り回す澆瀨とした怪獣娘ガーディーだ。

噂程度も聞きしに勝る「ライバル増やし」と呼ばれるガーディーは身体能力の高い怪獣娘に挙って声をかけ陸上に誘おうとする。いわば切磋琢磨し競い合える相手が欲しい兼遊び相手が欲しいという『狛犬怪獣』の名に恥じぬ好奇心旺盛な性格は最早「執念」に近いものを感じてしまう。

「アギラは自分の身体能力の高さに気づいていないよ！実際、アギラがGIRLSに加入した時の能力測定では腕立てや幅跳びは点でダメだけど、垂直飛びに握力、何より：他の怪獣娘にも引けを取らない足の速さ!!」

「せやろせやろ！アギちゃんはカワイイだけやなく、すばしっこいところもまたカワイエよお〜！」

「それ、褒めてるの？貶してるの？」

ガーディーの押し事に便乗してゴモラがアキに飛びついていつものように身体を弄って来た。

「そもそもゴモたん発信?…酷いヨ…」

あまり思い出さたくない結果だったと自分で自負していたGIRLSの試験記録をガーディーに細かいところまで教えていたゴモラにアキはガツカリするしかなかった。

「でっ、でも…ボクは別にそこまで足に自身があるわけじゃ…第一ボクなんかよりも速い怪獣さんだっているし…」

「大丈夫！アギラにはアギラが気づいていない未知なる可能性が秘められているんだよ！あたしにはそれがわかる！だから一回だけ、一度だけ、先っちょだけ!!」

グイグイと迫りアキの腕を掴んで走ってみることを懇願するガーディーはいよいよアキを陸上と言う沼に引きずり込む佳境へとアキを押し込むかのようにであった。

しかし……ゴスツ……

「あだっ!?」

「いい加減にしなさい!」

ガーディーの背後から渦巻き状のキャンディーで彼女の頭部を直撃させアキへの勧誘は静止された。

「あつ、ありがとうございます……ギランボさん」

「ごめんね、うちの駄犬が」

アキをガーディーから助けたのは季節外れのハロウィン仮装と見間違えようないで立ちの魔女……ではなく、れっきとした怪獣娘のギランボだった。

「この子、一度こういう状態になったら歯止めが利かないのよ……ほら、サボってないで練習、練習!」

「ちえく……また一緒に汗水流し合えるライバルができると思ったのに……」

「ははっ……期待に沿えなくてゴメン」

「いや、今日は一緒に走る予定だった子が遅れてくるから代わりに一緒に走ってほしかったただけだから……あだし、説明下手だからさあ……拒否されると思って……」

「なんだ……最初からそう言ってくれたら考えたのに……」

「じゃあ一緒に走ってくれたら、陸上! やってみよう!」

「それとこれとは話が別だよ！」

懲りずにまだ勧誘を続けるガーディーにアキはため息交じりに呆れ返った。

「そういえば…もうすぐお昼を回る頃なのに…ナツクルたち遅いわね」

ギランボが施設内の時計を確認すると予定時刻を過ぎても現れない仲間の心配が過った。

「何かあつたんですか？」

「それが連絡もないし、運転中だからソウルライザーもマナーモードで繋がらないから状況を聞けないのよ」

不安がるギランボ達…その中でもガーディーは特に心配事が一つあった。

「そんな〜！もうすぐジュンちゃんを選抜が始まるのに〜！」

現在GIRLSが使用している施設の隣『味元スタジアム』では都の陸上選抜が行われていた。

「ジュンちゃんって？」

「この子が怪獣娘に目覚める前に陸上で競い合っていた子のことよ…怪獣娘として活動してからも交流があつて今回その試合をこれから来る予定の子たちと見る予定だったのよ」

頬に触れて困った様子を浮かべるギランボにアキも一緒になって考えるが…特に考

えようとしめないタイプのゴモラと大会イベントのテーマソングをギターで奏でるノイズラーでプチライブが開かれていた。

「ちよつと、ゴモたん、ノイズラー！二人とも今日は手伝いに来たんだから遊ばないでよ」

「わくつてるって、アギちゃんは固いなあ〜」

「そうだそうだ〜！もつとロックに行こうよ！」

「つて〜、それも硬いやんけえ〜」ービシッ！

なぜか珍しい組み合わせの二人による即興漫才が始まっているが……グウウウツ！

「ああ〜ツ……待ってたらさっきの練習の影響でお腹すいてきちやったよお……」

「ええ〜……もう？」

お腹を抱えて空腹を訴えるガーディーの様子にアキは陸上選手としての彼女の代謝に驚いた。

決してお昼と言うにはまだ早い時間帯のはずなのに現時点で空腹に至れる運動量ではないメニューしかこなしていなかった。

「もおう、いくら何でも少し運動したからってお腹すかせると試合に影響出るわよ」

「大丈夫です、コーチ！あたし、いくら食べても太らない体質なのでえ〜」

「うちも！」「あたしもだあぜ〜♪」

怪獣娘に変身しているゴモラ、ノイズラー、ガーディーの3名が豪語するだけあって確かにシユツとした体形だ。それが何よりもアキに未だG I R L S指定のジャージ姿でいる理由なのは明白だった。

羨ましい…と言う感情だ。

「いいなあ〜」

そんな気持ちさがボソツと外に零れた。

「まあ、運動不足のお前じゃ無理ねえがな」

そんな悩めるアキの気持ちを代弁するかのような死神の鎌のような『運動不足』という単語がアキの背中から胸にかけて貫いてきた。

「お兄ちゃん…」

声の主はなぜか重箱を両手に抱えてやって来たユウゴが日の光の下に大きな人影を作ってアキたちの前に現れたのであった。

「わあく〜い！ユウちゃんの特製弁当やあく〜！」

「アギラさんのお兄さん、すっげえ〜デカイ弁当すね！」

「どっかの馬鹿がまた人の店の厨房を勝手に食材持ち込んだばかりか、自分で作ると言い出してみたら…悲惨なありさまだったから仕方なく全部作った」

ほぼ運動会一回分並の食事を重箱すべてに収めて作って来たユウゴに対してアキ

は恥ずかしさのあまりモジモジと原因が自分であるという自負心に指先ツンツン併せ合いながら全員とは真逆の方向にそっぽを向けて赤面した顔を見せまいと抵抗していた。

「んん〜もお〜そういうところもカワエエなあ〜！」

「わあっ！仕方なかつたんだよお…お兄ちゃんにどれだけお願いしても聞いてくれないから自分でやるしかなかつたんだもん！」

「最終的にカボチャに包丁が刺さつたままの厨房に何が仕方ないってんだ？…呆れて作らない気持ちさえ失せさせやがったから後始末がてら結局全部作ってやったわ」

呆れ返つたユウゴに赤面したまま頭を何度も下げるアキ、そのアキにずっと張り付きながら頭をワシワシと撫でまわすゴモラに黙々とユウゴが作つた弁当を平らげるガーディーと弁当に対してインスピレーションが沸いたのか突然歌い出すノイズラーと場はカオスになりつつあつた。

「あつ…あの〜」

「？」

そんな中、ギランボがユウゴに近づいてそつと名刺大の紙を渡そうと近づいてきた。

「ああ〜！コーチがアギラのお兄さんに電話番号渡そうとしてるうう〜！」

「職権乱用や!!」

「ガルルルッ！あつ、ナミさん」

「キシヤアラツ！あれ？ブラックキング、あなた一人だけって…ナツクルはどうしたの？」

なぜか弁当とはしを両手に持つて威嚇するガーディーと渦巻きキャンディーを両手に構えて臨戦態勢をとっていたギランボの普段見慣れない同じ課の怪獣娘たちの一面に困惑しながらも咳き込みながらもブラックキングは気持ちを整えた。

「ナツクルトレーナーは後で合流するので先に私が皆さんの元に来た次第なんです…」

ブラックキングが施設内の時計を見ると全員が彼女の視線に合わせて時計の時刻を確認すると…

「わああ！もうすぐ始まつちやう!!」

慌ててガーディーは弁当を書き込み始め、ものの数秒で重箱ほどあつた弁当を平らげた。

「アギラのお兄さん、ごちそうさまでした!!早く行こう!!」

ガーディーは全員の手を引っ張って味元スタジアムまで向かって行った。

―味元スタジアム・観覧席―

スタジアム内はスポーツ観戦用に設計された万人規模を収容できるだけの席が設けられており、周囲を都内数校の陸上競合の高校から陸上部の部員や親御さん、関係者で溢れかえっていた。

「うひゃあ〜すごい熱量やあ〜」

「インターハイの選抜もかかった大事な試合だからね、いや〜中学時代を思い出すなあ〜」

高校陸上の都が開催する選抜陸上は上位3校のみが出場できる大一番の舞台でもあった。

短距離走を始め、長距離や団体リレーなど様々な陸上競技で高校生たちが競い合っている姿は怪獣娘となつて間もないアキたちの視点から見ても感慨深い気持ちにさせられる心の内の火を灯してくれるような熱気をヒシヒシと感じていた。

「陸上か…怪獣娘にならなかつたら、ボクって何してたんだろなあ〜」

そんな他校の陸上部員の女子高校生たちを観覧席で眺めるアキは頬杖をついて自分が怪獣娘でなかつた場合の自分を想像していたが…

「お前、スポーツ競技者ってガラでもなかつたらう…インドアな運動音痴のお前など何

やっただって変わらんだろう」

「むう…余計な一言を…わからないじゃん、やってみなきゃ」

ユウゴの辛辣な一言にムキになったアキは言い返しにもならない事を言ってみても所詮想像の域を出ない机上の空論であった。

「アキラさんのお兄さんって、何かスポーツとかやってたんですか？」

アキの隣に座るノイズラーから変身を解いてアキと同じGIRLS指定の運動着を着るミサオがユウゴに声をかけてきた。

「ああん？…いや、特には…遺伝的理由でこんな身体つきになった」

「いつ…遺伝的理由？」

「ノイズラー…気にしないでいいよ。この人は特殊枠だから…突然変異の類だからね」

「とっ…突然変異い？」

ますますユウゴの謎めいた事情にミサオは首が傾くが言わんとしていることにどこか納得の行くような説明が付いている気もしていた。

「じゃあさあ、じゃあさあ、普段何食べたらくくんなに大きくなれるん？ねえねえ、おしえてえな！」

「どーでもいいが…なんでオマエは俺の膝の上にシレッと乗ってんだ」

「ぶっ、ゴモたん！」

いつの間にかミサオとナミの間に座っていたはずのミカヅキはユウゴの膝上に陣取ってユウゴの顔近い距離まで詰め寄っていた。

「ええやん、ココ超眺めええし！ 後ろにはちようどええ枕もある！ ゴモたん専用特等席い〜！」

ミカヅキはユウゴの膝上に腰掛けるだけに飽き足らず彼の厚い胸板を枕代わりにして大男を自分専用のリクライニングシートのように扱っていた。

「ゴモたん、恥ずかしいからやめてよお」

「エエやん、エエやん、減るもんやないし：なんかこういう映画のワンシーンみたいなの憧れとったもん！ あんたトロロっていうのねえ！」

「誰がトロロだ」

有名なアニメ映画の真似をするミカヅキだが、彼女もアキたちとそこまで歳変わらぬはずだが、同世代たちより子供体形である故に大男のユウゴと小柄なミカヅキでは一見だと大人と子供のようにしか見えない。ましてやモノマネの通り、巨大な怪物に対する幼気な少女の邂逅のようでもあった。

「あつ、そろそろジュンちゃんの番だ！」

ガーディーから変身を解いて他の怪獣娘たち同様にGIRLSのジャージ姿で人間体としての名は“柴崎ラン”、そんな彼女の視線の先には競技トラック内で軽い準備運

動をしながら配置につく気合十分な競技選手たちの内の1人が応援する日吉ジュンだ。

私立の女子高校の特色で彩られた陸上部のユニフォームを着て学校の代表として今大会に臨む日吉ジュンは友人にしてかつてのライバルとして切磋琢磨してきたランの目線から見てもコンディションは万全の様子であった。

種目は短距離の百メートル走、時間にして僅か数秒で決着をつけ、世界記録となれば10秒台さえも切ることもある最速の陸上競技だ。

「あつ、始まるーがんばれ…ジュンちゃん!!」

神にすべてを委ねんばかりにランは手を重ねて祈るように天を仰ぐ…—パンツ!!—

スタートの合図のスターターピストルから爆音と共に走り出した選手たちが一斉にゴールへ向かって突き進む…

「いけッ!ジュンちゃん!!」

好調なスピードで日吉ジュンは中間より上位に食い込んでいるがトップとの差はかなり開いていた。

日吉ジュンだけではない、他の選手たちもトップと明らかに差が離れきっている…
トップ選手の圧勝だ。

そしてそのまま…トップ選手の1位を筆頭に日吉ジュンは2位…他続々とゴールに

到着した。

「おしいいゝ!!あとちよつとだったのにいゝ!!」

「にしても、あのトップの子…えらい速かったやん!？」

「ええ、速いです…とても速かったです…：が…：なんだか少し速すぎるような…」

全員が感心する中でナミだけが唯一トップ選手の異変に気付いていた。

「その黒髪の言うとおりで…不自然に速すぎる」

ユウゴもトップ選手の異変に気付いていた。

「どうということなの？お兄ちゃん…」

「あのトップの走り…あれは競技選手の走り方じゃねえ」

2人が気づいた異変とは物理的に不可能なフォームでの完走にあった。

「百メートル走のタイムには10秒の壁と言う言葉が存在します…通常、百メートル走競技者は10秒の壁を超えるためにフォームを変えて、より流線の姿勢で空気抵抗をなるべく軽減したりして、ゴールまで最後のスパートをかけるにあたっては飛び込むような形でゴールして初めて10秒台越えに至る…日吉ジュンさんを始め他の選手もそうしてゴールしているようですが…あのトップの選手だけゴールまでずっとフォーム変わっていませんでした」

「それって…すごい事なんじゃ無いんですか、ナミさん？」

「私も疑いたくは無いですが…少し、あの選手の動きは他の選手と比べても異質……まるで高校陸上に世界陸上の選手が混じっているような異質な感じがします」

ユウゴとナミが懐疑的な視点で見ると、トップ選手を始め上位3名の選手たちは最速にて終了した試合を後にそれぞれの控室に戻っていった。

—選手・控え通路—

「今日からあなたが私のライバルよ!!」

「はあ?」

突然ライバル宣言をされたトップ走破の選手を困惑させる日吉ジュンの行動に首が傾く…

「あなた、去年まで名前も知らなかったけど…ここへ来て一気に頭角を現したわね!それだけの實力ならインターハイでも一番のライバルになるわ!インターハイの舞台で頑張らしましょう!」

そう言ってトップの選手をライバル視した日吉ジュンは彼女に握手を求めようと手を差し伸べたが…

「悪いけど…疲れているから…構わないで…」

段々と走りの影響で呼吸が乱れて来たのか胸を押さえながら壁伝いに身体を引き釣りながら日吉ジュンの元を去っていった。

「どうしたんだろう…なんか…苦しそうだったわねえ」

選手の不穏な態度に困惑しながらも彼女を心配する日吉ジュンはそれ以上の事を会話をすることなくその場を去ろうとした。

—ドンツ！

「あたたっ！」

「わっ！ごっ、ごめんよ…失礼…」

日吉ジュンが振り返って去ろうとした矢先にどこかの高校のコーチらしき男とぶつかった。

「すっ、すみません…周り見てなくて…あっ、何か落としましたよ」

日吉ジュンは男とぶつかった拍子に落とした物を拾い上げて男に返そうとした。

「あれ？その学校って…」

男の胸元の校章に見覚えがあった日吉ジュンは先ほどの競技のトップ選手と同じ学校の者であることに気が付いた。

「あっ、ああ、ありがとう…じゃあ、失礼…」

男は慌てた様子で日吉ジュンから落とした物を受け取って足早に立ち去ろうとする
と…

「城南大付属女子校の陸上部コーチだな！」

男が去ろうとした出口の先では2名のスーツを着た男性たちが行き先を塞いでいた。

「観念するでござる、警視庁の者なり！」

2人のスーツ姿の警察官は警察手帳を突きつけて正体を明かしたのは前原と後藤
だった。

「えっ？警察!?…どっ、どういうこと!？」

「ちいっ！」

困惑する日吉ジュンの背後先ほどまで表情和やかだった男は突然人が変わったかの
ように険しい表情に変わった。

・
・
・

一方、その頃…館内の女子更衣室では…

「はあっ、はあっ、はあっ…」

先ほど100メートル走で見事な記録を残した1位の選手が息を荒げていた。

その疲労は走り切ったことによる疲労ではなく、日吉ジュンに突然声を掛けられたことに対する「後ろめたさ」から来ていた。

「ふっ…拭き取らなきゃ…」

女子選手はロッカーにしまっていたエナメルバッグからタオルを取り出して汗滲む身体を拭き取ろうとした…が、突然に全身を突き刺すような鋭い視線が走った。

後ろから見られていた。自分しかない更衣室内で誰かがいる。誰なのか恐る恐る後ろを振り返る。

—ガチャン…—

更衣室のカギが閉められて扉には白い人影のシルエットが見えていた。

「初めまして、先ほどは…見事な走りだったね」

光届かぬ日影の中から額の赤い結晶の光と共に現れたナツクルが女子選手の前に現れた。

「ひっ、だっ…誰ッ!？」

「見ての通り…GIRLSの怪獣娘よ」

女子選手は困惑した。なぜ、自分なんかGIRLSの怪獣娘が訪ねて来たのか？怪獣娘でもない自分の前にどうして現れたのか？何もわからなかった。

「もう一度言うわ…先ほどは「見事な」走り…だったわね」

ナツクルが二度も言ったその言葉に意味を理解したのか女子選手は無意識に開いているエナメルバッグの口を握っていた。

「あの走り…あれがあなたの実力なら競技指導者としては称賛すべきことだけ…：ア
レ、あなたの実力じゃないわよね」

「なっ…何を根拠にそんなことを…」

女子選手はナツクルに指摘されたことに反論しようにも…反論できない部分もあるため強く言い出せなかった。

「……そのエナメルバッグね…」

ナツクルは女子選手が隠そうとする「秘密」を暴こうと近づいたが…女子選手はエナメルバッグをナツクルに見せるどころか彼女の手に渡らないよう抵抗して自分の後ろに隠した。

「…自分から真実を明かしていたら、あなたは踏みとどまれた…でも、あなたはそれを拒否したのよ…：こんなことはしたくなかったけど、ギランボ」

「はいよっ…この渦巻きにちゅうもくく！」

女子選手の目の前に渦を巻いたキャンディーが現れると渦巻きが更に渦を巻くように動く錯覚が女子選手の意識を遠のかせ、やがて倒れそうになったところをナツクルは女子選手を押しえた。

「おっとー……ギランボ、そのバッグの中にあるはずよ」

「はいはい……あつたわ、これね」

女子選手がナツクルに集中している隙に彼女の背後から催眠能力で眠らせたギランボが女子選手のエナメルバッグを調べると……一見は何の変哲もないクリームの容器が出てきた。

「う〜んッ、持った感じ軽い……中は、ほぼ空っぽになるほど使い切っている……おそらく全身に満遍なく塗りたくっているわね」

「おそらくその容器を調べればわかるでしょうけど……間違いなく、この子は『ドーピング』を使用してしまったのね」

ナツクルが抱える女子選手は高校陸上界では無名の選手だった。昨年度まで最下位をのりくりと記録が伸び切らない高校であり、しかも今年になって結果を残せなかったら廃部も決まっていた。努力もした、研究もした、何もかもした、なのに結果に伸び悩んでいた矢先に手を出したのが『塗るドーピング』だった。

「あなたから事情を聞かされなかったら俄かに信じがたかったけど……今度は塗り薬でもドーピング行為が横行するとはネエ」

「ここに来る前、当たり屋にあつたけど……その当たり屋もソレの常用者だった。その塗り薬には神経の無痛作用、疲労遅延、筋力増強と言った効果が得られる反面に多幸感

が心を支配する常用性が起きるのよ」

「塗るドーピング」の恐ろしさは一般では出せないちよつとした能力を増強させる効果が薬の度重なる依存性が昨年より指摘され『指定禁止外用薬』に定められ全面禁止となつて間もない代物だつた。

「その子、どうするの?」

「かわいそうだけど…知り合つた刑事さんのツテで最寄りの警察署の少年課に引き渡すわ…そのあとに都の教育委員会に報告書を提出するわ」

ナツクルは眠る女子選手を抱えて更衣室をギランボと共に「塗るドーピング」と言う動かぬ証拠を持つて待ち合わせる警察たちの元へと向かつた。

その後、すべての試合が終わつた後にランたちは駐車場に停められていたGIRLSの送迎バス前でギランボ達を待つていた。

「遅くい!!ギランボちゃんたち、遅いよ!!」

「確かに…さつきも試合を一緒に見ずどっかに行つちやつたよね」

スタジアム内の試合をギランボ抜きで見ることとなつたことに疑念を抱くアキは消え

たギランボ、現れなかったナツクルとトレーナー勢の怪獣娘2人が戻ってこないことに困惑していた。

その時だった…

「待てえエエ!!」

怒鳴るような大きな声でバスより向かいの方向から響いたことにより待ち合わせていた怪獣娘たちが何事かと様子を見に行くと状況一変する出来事が起きていた。

「近寄るなああ!!このガキがどうなってもいいのか!!」

荒々しい声で剣幕を張る男が少女を人質にピストルを突きつけていた。

「じゅっ…:ジュンちゃん!」

人質の少女はよりにもよって日吉ジュンだった。友達が人質にされている状況に居ても立っても居られず駆けつけると犯人と日吉ジュンの周囲を警察官達が円を描くように囲っていた。

「君たち、来ちゃダメだ!!」

「友達なんです!放して!!」

警察官に行く手を阻まれたランは取り乱すが他の怪獣娘たちからも抑えられて下からされた。

「にしても、あの犯人…:アレってオモチャの拳銃?」

ミカヅキが気になる犯人が日吉ジュンに突きつける拳銃は一見はプラスチック製のオモチャの拳銃のような代物だったが：

「あれは3Dプリントガンだ：熱可塑性樹脂で製造された簡易手製拳銃の一種だ：無論、撃てる上に殺傷能力もある380ACP弾1発装填の単発式だ」

瞬時に犯人の持つ拳銃の危険性を見抜いたユウゴがプラスチックの拳銃が本物であると断言した。

「あつ、アレ…拳銃、何ですか!？」

「ロ・サ戦役時にはサラジア国内で大量製造されて女から子供まで護身用として携帯するほど蔓延していた代物だ：作りが簡易的な上に安価、現地では『兵士殺し（アーミーキラー）』として危険視されていたほどだ」

傭兵経験のあるユウゴから語られる危険性にアキたち怪獣娘たちを始め、警察官もなかなか手が出せない張り詰めた緊迫した状況に犯人から日吉ジュンを助け出す方法がなかった。

「下がれ!!ガキを撃つぞ!!下がりがれ!!」

「ひいっ!あの落とし物…まさかコレの部品だったなんて…」

日吉ジュンが男とぶつかった際に足元に落ちた白い携帯ほどの大きさのプラスチックが自分の蟬谷に突きつけられている。ソレがまさか拳銃だとは思ってもよらなかった。

「たっ…助けてえええ!!誰かああ!!ラアアアン!!」

「黙れ!!ガキ、しゃべるな!!」

取り乱した日吉ジュンは周りの警察や顔見知ったランに助けを求めるが…

「ジュンちゃん!!こうなったら私たちで助けよう!!」

ランの言葉通り、日吉ジュンを助けるためにミカツキ、ミサオ、ナミは領いて皆がソウルライザーを掲げた。

ソウルライザーに向けて『ソウルライド!』の掛け声と共に怪獣娘へと変身を遂げた。

「きつ、君たち、怪獣娘なのか!」

「そうです、後は私たちが何とかしますから…」

「猶更ダメだ!君たちは下がりなさい!!」

日吉ジュンを助けに行こうとする怪獣娘たちの前にスーツを着る警察官達の総指揮者である前原が立ちふさがった。

「何ですか!!私たちなら拳銃くらいヘツチャラですよ!!」

「君たちが平気でも、人質の子の身の危険を更に高めるようなことはさせられない!特異な能力があつても無理に関わるうとするな!下がれ!下がりなさい!!」

緊迫する現場に割り込もうとする怪獣娘たちを前原の指示の下で警察官達に追い払われたガーディーたちは日吉ジュンを助けに行くことが出来なかった。

「このままじゃ、ジュンちゃんを助けに行けないよ！どうしよう！」
「……う……アギちゃん、何しとんの？」

皆が一斉に変身をして姿を怪獣娘へと変身している中で一人だけアキは未だに変身しておらず、ずっと自分の身体に触れ回ってポケット、内ポケット、すべてのポケットを確認してもある物が無かった。

「あれっ？ない、無い、無んだよ……ソウルライザーが!!」

どこを探してもソウルライザーが見当たらずアワアワと慌てふためいていた。

「あれ？アギラさんのお兄さんも居ない？」

それと同時にユウゴもその場から居なくなっていた。

そんな時だった……ズウドオオオオン!!

犯人と日吉ジュンの背後に停められていた車に大きな落下音が響いて車の防犯アラート音が鳴り響いた。

「おっ、俺の車があああ!!」

ジリジリと背後の車で逃走を図ろうとしていた犯人だったが、逃走経路を見事なまでに叩き潰されて困惑と動揺に見舞われた。

そして、立ち込める粉塵の中から四足歩行から二足歩行へと立ち上がり犯人の頭上高く見下ろす怪獣が鋭い目を光らせていた。

「なっ、なっとなっなあっ!?なんだコイツウウ!?」

その怪獣は背面に逆立つて生え揃える硬質な棘が均等に並んでいた。その周囲からは冷気を感じる異様な寒さ、破壊された車のボンネットには白い結露が張っていた。

「まっ、前原氏!!怪獣でござる!『特生怪獣』でござるよ!!」

「特生怪獣!?!:符号順だと第5号か!」

犯人を刺激しないように拳銃を抜かないようにしていた警察官達は突然現れた新たな特生怪獣もとい怪獣戦士(タイタヌス)を前にして即座に拳銃を棘の怪獣に向けた。

そして、犯人も…

「ちっ、近寄るな!!うっ、撃つぞ!!」

犯人は日吉ジュンに向けるよりも自分の身を守ろうと拳銃を棘の怪獣に向けるが…棘の怪獣は恐れるでもなく、寧ろ向けて来た拳銃を握り返して銃口を親指で抑えた。

「…撃てるもんなら、撃ってみろ…こうなったら暴発して拳銃自体が壊れるだけだ」

「ばっ、バケモノが喋りやがったああ!!うわああああああああ!!」

取り乱した犯人は拳銃の引き金を引こうとした…が、引き金が動かない。

「うっ…撃てない!!」

「当然だ…プラスチック樹脂を凍らせて引き金を引けなくさせたんだよ、阿呆が」

棘の怪獣は握って凍らせた拳銃のプラスチック部分を握りつぶして粉碎すると部品

や弾丸やらが飛び散った。

「動くな!!ガキがどうなってもいいのか!!」

拳銃と言う強い優位性を失っても懐に隠し持っていたバタフライナイフを日吉ジュンに向けたが…

—ブシヤアアアアアアアア!!

突如、棘の怪獣の地面から水蒸気が発生して犯人の目を眩ませた。

その隙に日吉ジュンは犯人の手を振り払って逃げ出した。

「ジュンちゃん!!」

ガーディーは日吉ジュンの元へと駆け寄っていくと突然、棘の怪獣の背後で潰れた車
が吹っ飛び上がったと同時に紫の閃光が残光を描いて日吉ジュンとガーディーの2人
を捕らえ、2人の元に駆け寄ってくる警察官達の合間を抜き去っていき…怪獣娘たちの
前に紫のミレニアム形態へと姿を変化させたゴジラが日吉ジュンとガーディーを抱え
ていた。

「ガーちゃんとその友達ちゃん!」

「ええつと…あつ、ありがとうございます…」

2人を高速で救出したゴジラ、その顛末は棘の怪獣が現れる前に犯人の車まで誰にも
気づかれずに回り込んでいた。後の棘の怪獣と犯人のやり取りの合間に潰された車の

下を潜って棘の怪獣の足元の氷結した地面に手からバーニングの熱エネルギーを与えて急激に蒸発した水蒸気で犯人の目くらましに成功したのであった。

「確保おおお!!」

犯人の男を警察が取り押さえる中から既にあの棘の怪獣の姿は居なくなっていた。
—ピリリリリッ!

更に、どこからか携帯電話の着信音が鳴り響いた。

「あれ? 誰の着信?」

「ウチやないでえ?」

鳴り響く着信は突然切れて、ゴジラが耳元まで着信源の端末を持っていた。

「ああ〜! それボクのソウルライザー!!」

しかも、ゴジラが持つデバイス端末はアキのソウルライザーだった。

取り返そうとピョンピョン跳ねても2メートル越えの体格の上からでは届かぬどころか、頭を押さえつけられてもいた。

『ユウゴ! あの男は“使用者”だ! まだ近くに“ブローカー”が居るはずだ: 今にも逃げ出そうとしている野郎がソイツだ』

ソウルライザーからの通信相手の言葉通り、駐車場からエンジン音を響かせてバイクで逃走したフルフェイスヘルメットが見えた。

「了解……ほらよ、もう落とすなよドジ」

「あたっ！わあ、わわわっ！……ふう〜！」

通話を切つてアキに投げ返すとアキの額に当たつて今にも地面に落ちそうだったソウルライザーを何とかキャッチして落下を防いだ。

そして、その場から一気に加速するゴジラの音速を超えた超スピードが爆音のソニックブームを発生させるほどの速さで逃げて行つたバイクを追いかけて行つた。

味元スタジアムの駐車場から逃走したバイクは時速80キロの出していた……が、それよりも速いスピードで近づく者がいた。

「よお、どこに行くんだ？」

フルフェイスヘルメットの男はどこからか声がする周囲を見渡せど誰もいなかった。

フルフェイスの男は再び前を向いた時だった……突然、バイクが消えて硬い地面の上に転がった。

「いつてええ！あつ……あれ？バイクは?」

「うわっ!?!何者でござるか!?!」

フルフェイスの男が立ち上がると自分の周囲には先ほどの駐車場に居た警察官達に

囲まれていた……と言うよりフルフェイスの男そのものが元居た味元スタジオムの駐車場になぜか戻っていたのであった。

「後藤君！そいつもグルだ」

「なんと！神妙にお縄につかれよ!!午後15時13分、現行犯逮捕でござる!!」

刑事の後藤はフルフェイスの男を数人がかりの警察官達と共に取り押さえてパトカーまで連行されて行った。

「一体どういう状況なの？」

一通りの事件が終わる頃、アキたちの下にギランボとナツクルが合流して状況を探ねた。

「ええつと……その……なんか色々あります……」

「都の大会出場選手を彼女たちの活躍で助かりました」

状況を説明しようにも説明しきれないアキの後ろから季節外れのロングコートを羽織る大柄な男が代わりに説明した。

「だつ、誰ですかッ!?!」

「あつ、アンちゃん!?!」

「よう、ミカ坊……見ない間に……縮んだか?」

ロングコートの下には高級仕立てのスーツ、分厚い手先、見る者は思う個の強さを印

象付ける逞しい肉体、そんな強靱な図体を誇る大男をミカヅキは知っていた。

「ゴモたんの…知り合い？」

「せやで！『ナニワの暴竜』こと庵堂アラシ！ウチの…まあ師匠みたいな人や」

「ああ〜！あたし、知ってます！！元総合空手日本代表で4年前のオリンピックの金メダリスト、『神竜会館』の庵堂アラシ選手じゃなっすか!？」

ミカヅキに続いてミサオも大男の素性を熟知していた。

空手経験者の中ではかなりの有名人であった。

「今は文部科学省の外局のスポーツ庁に所属する参事官だ…あつ、これ名刺です」

「あつ、これはどうもご丁寧に…：G I R L Sスポーツ課のナツクルです」

「同じくスポーツ課のギランボです」

突如現れたミカヅキの知り合いにしてスポーツ庁の参事官を務めるアラシはナツクルとギランボの大人同士の名刺交換を交わした。

「それで…例のモノは？」

「あつ、コレのことですか？」

ナツクルは例のモノと聞かれビニール袋に入れられたクリームの空容器をアラシに手渡した。

「あ〜それなんですか？」

「これは新種の軟膏型ドーピング剤…文科省を通じて各省庁でも警戒要件として扱われている代物だ…中には使用禁止条項に指定されている薬効成分が含まれているため昨年の法改正前の代物が高値で出回っている」

今回の事件の発端がこのなんの変哲もないクリーム剤が原因であることにアキたちははじめ怪獣娘たちは驚かされた。

「そんなモノを…なんでギラちゃんたちが？」

「…それを使用した選手がいたのよ…しかも、100メートル走で1位になった選手の子が…」

更に驚愕させられた。もつとも驚愕して膝から崩れ落ちたのは同じく100メートル走を走った1人の選手である日吉ジユンだった。

「そんな…あの人か…」

「ジユンちゃん…」

次第に涙が零れ、人質から解放された事にも相まって気持ちの整理がつかず泣き出した。

「辛いかもしれないが…使用者の選手と並びに出場校の出場停止処分が文科省より指示が下る…今回、このような事件に巻き込んでしまったことを国の代表者として深く詫びさせてもらう」

アラシは日吉ジュンを始め怪獣娘たちに頭を深々と下げた。

「お話のところ申し訳ありません、警視庁の前原です」

「同じく後藤でございます」

アラシの元に事件を担当した刑事の2人がやって来た。

「スポーツ庁参事官の庵堂です……こちらを……」

「了解しました。証拠品としてお預かりいたします」

「事情聴取のため最寄りの署までご同行を願います」

「わかりました……では皆さん、私はこれで……じゃあまたな、ミカ坊……」

「うん、アンちゃんも気い付けてな」

そう言つて刑事たちと警察署まで同行していったアラシだったが……

「あつ、すみませんが……局に連絡を入れないといけないのでよろしいでしょうか？」

「ええ、構いませんが……」

アラシは軽い会釈をするとスマートフォンから通話履歴を辿つてある電話番号に連絡を入れた。

——ピリリリッ……

「?……誰からだろう」

ソウルライザーから知らない電話番号が掛つて来たアキはその電話に出た。

「はい、国際怪獣救助指導組織 通称GIRLS アギラです」

アキはソウルライザーから掛けられた連絡である以上、事務的な通話マニュアルに従うようにいつも通りの電話の取り方で対応した。

『やあ、先ほどはどうも…君がユウゴの妹さんだね』

「ええつと…どちら様で？」

『はははつ、さつき会ったばかりだよ…改めて、庵堂アラシこと怪獣戦士(タイタヌス)のアンギラスだ。以後よろしく』

電話の主が先ほどのアラシであり、あの犯人から日吉ジュンを助けた怪獣戦士(タイタヌス)の正体であった。

アキは通話内容を聞かれないように口元を手で隠した。

「あつ、アラシさんだったんですね…さつきの怪獣さんは…」

『ああ、ユウゴのヤツ…このご時世に未だ携帯も持たないアイツがいきなりかけてきたと思ったら君の携帯だったんだね』

「ウチの兄が…」迷惑をおかけしました」

『はははつ、しょつちゆうこんな感じだからもう慣れたよ…君も色々大変らしいね、何かあったらこの電話番号を使ってくれ…何かの役に立つだろう、私も君が困っていることがあったら、相談なり、緊急なり、いつでも相手になろう…ミカ坊のことも含め、今後

ともよろしく』

「いえ、こちらこそ…では…」

アキは相手側の通話終了を確認すると即座に電話番号を『アンギラスさん』と登録した。

兄以外の初めての怪獣戦士（タイタヌス）との繋がれる唯一の相手として庵堂アラシことアンギラスと知り合えたことに喜びが笑みとして浮かんだ。

「なに、笑ってんだ…お前」

「わっ、急に現れないでよ」

アキの横から顔を出したユウゴにビックリしたアキは思わず声が漏れた。

「っていうか、ボクのソウルライザー勝手に使わないでよ！」

「そのおかげで事なきを得たろうが…」

「自分の携帯をしないさい！」

「持ってねえよ」

アラシの言う通り、今時通信機器の1つも持たないこの男にアキは頭を抱えて呆れ返るのであった。

公の守護者

—サラジア共和国・サラシア市—

サラダ広場・フードガーデン

中東側に位置し、欧州と向かい合つて位置する国『サラジア共和国』：その中でもサラシア市は首都近くの都市でありながら都市部の発展に力が注がれた外観は一種の砂漠の中のオアシス”と称されるほどに財政力を有している都市部だった。

「よお、アンタが連絡を受けてくれた仲介人かい？」

そんな都市部内の露店市場内で食事する男に目つきの鋭い赤いジャケットを羽織る怪しげな男が近づいた。

「……あんた、日本人か？」

「ああ、そういうアンタも……」

「僕も日本人だよ……この国で同じ日本人と会えるなんて数奇な事だから気になつただけさ」

中東圏に位置する国の中でその国の生まれではない日本人同士が秘密裏に出会う……そんな場面であっても周囲からは目立たないのにも理由があった。

「サラダ広場」正式名はサラシア市民広場だが安価なサラダを市場で売り始めたところが切っ掛けでサラダ以外の飲食店が軒並み増えたことから正式名よりも名称化されてしまった経緯があるこの広場はサラシア市の中でも随一を誇る観光地であるため外国人が居ても目立たないほどに観光客で賑わっていた。

「それで…何を御望みで？…最近はこの国を経由して様々な品を他国に仲介するルートが出来てから事業規模を拡大できるようになつて随分と儲かつてるよ」

「ほおう…それはすごいな、どんな物があるんだ？」

「『戦後経済』ってヤツさ…つい最近までこの国と隣国のロシリカはバチバチだつたらう 戦争は武器に弾薬、薬品やらが戦後になると使いどころを無くすから余るわけよ」

「なるほど、アンタの商品は『戦残品』ってわけか？」

サラシアは数か月前までロシリカと戦争を10年間も続けていたことから『ロ・サ戦役』と呼ばれる長期戦争が勃発、しかし最後の1年と言われる『ロ・サ電撃戦』を皮切りに長期に及ぶ戦乱が終結を迎え、双方ともに和平条約が締結され事実上の停戦となつた…が、戦乱が終われば戦後混乱は付き物である。

「でも、それって犯罪じゃねえのか？」

「僕に接触しておいて、今更なに言つてんだよアンタ…戦争はさあ、したいヤツがしたがるから起こるのさ 軍組織、武器会社、製薬会社、色々な思惑が重なるから『戦争』な

のさ」

相手の若輩の日本人男性は悠々と「戦争」について語り始めた。

「…歴史的背景を見たって過去に起きた大戦争は経済学的に見ても無意味なことばかり
…あの『太平洋戦争』だって実際は、”する必要のなかった戦争”と言われてるんだよ」
「戦争なんぞ…どれもしなければいい話だろう」

「それでも戦争は起きる、したくなくてもする、しなくたって起きる、野心と願望と無能
な軍人が数人エライ地位に居れば簡単に起こせるものさ」

若輩の日本人男性は米を使った軽食を食べながらそう語る様は宛らそういつた混迷
する世界そのものをまるで手の内の中の食事ごとを片すが如く国内のあらゆる不正さ
えも飲みこんでやると言う意気込みにも聞こえた。

「大層な気前だな…早速本題だが、これらを探している」

赤いジャケットの日本人男性は相手の若輩の日本人男性に2枚の写真を見せた。

「ほう、『塗るドーピング』と『アーミーキラー』か…まだ在庫があると思うから配送は
……日本だね?」

「話が早くて助かる…だが、送るのはこれらの商品じゃない……お前だよ」

「!?!」

若輩の日本人男性は食事途中の軽食を口に運んでいたスプーンが手から滑り落ちた。

「『塗るドーピング』…名前が無い薬ほど名付けられないワケがあるとは思わないか？未認可でしかも危険性も孕んでいる…日本ではこういうのを危険薬物に指定されるケースが多い…こんなのを認めると『法の崩壊』になるからだ」

「あつ、あんた一体何者だ…」

若輩の日本人男性は身の危険を感じたのか腰に手を回すが…

「おっと、まだ話の続きだ…動くなよ、暴れた瞬間に俺には正当防衛が適用されて発砲許可が下りちまう」

赤いジャケットの日本人男性は左手だけテーブルの上にあるが…もう片方の右手はテーブルの下にあるが上からでは見えない武器が隠れていた。

「今、俺が握っている拳銃は何だと思う？…『FP-45』通称『リベレーター』…この名の付く拳銃は二種類ある…1つは1942年に設計された由緒ある俺が握る拳銃、もう1つはどこぞの銃器マニアが世界中に設計図をばら撒いたことで蔓延した3Dプリント銃…お前が扱う商品の1つ『アーミーキラー』はその後者の設計データを元に生産されたものだろう？」

「…あつ、あんた警察か…」

「警察は警察だが…一般的なお巡りさんじゃなく、世界中を巡り巡る捜査権を持つ『公安部外事5課』だ」

赤いジャケットの男の素性を知った若輩の日本人男性は血相を変え、青ざめた表情を浮かべて息を飲んだ。

しかし、続けざまに赤いジャケットの男は更に語った。

「今、この広場を中心には俺だけじゃない……サラジヤ秘密警察の捜査官もお前の周囲を固めている、逃げ場なぞどこにもありはしない」

男の言う通り、周囲を見わたせば観光客を装った者からアラブ人風の格好で睨みを聞かせる者、屋台の店員にも似つかわしくない無線通信用のインカムを付けた者もいた。

「こつ、こんな事をして……うちのパパが黙っているわけないぞ！　僕を誰だと思ってる、僕のパパは……」

「困った時の親頼みか？……おまえ、自分の名前で喧嘩をしたことないだろう……第一、よくドラマとかで国外逃亡して罪から逃れる金持ちのバカガキとかいるよなあ、そういうの現実では成功しないんだよ。寧ろ、その頼りの親が子を海外に飛ばして家族縁を切り捨てるケースの方が多々あるぞ……おまえ、見捨てられてんだよ」

男に告げられた真実を悟った若輩の日本人男性は食べていた料理も弾き捨て、腰に隠し持っていた拳銃を抜き出そうとしたが……持ち出した拳銃の手を掴まれ、後ろから赤いジャケットの男と同じく日本人男性が腕の関節を絡め回して無力化させた。

「いつまで無駄話しているんだ、千鳥……既に逮捕状も出ているんだぞ」

「齋藤……俺は世間も碌に知らん馬鹿なガキに説法してやってたんだよ……水差すな、一度付けた『火』が消えちまうじゃねえか」

「そう言つてオマエ……銃も持たずにコイツを半殺しにしようとしていただろう」

「フンツ……バレバレか」

男が持つているという拳銃は……なかった。ハツタリであつた。拳銃などの銃火器を一切所持せずに相手の男と接触していたのである。

「おい、お前……お前の旅券は昨日の時点で既に失効されている、この国では不法入国者であり犯罪者でもあるわけだ……引き渡し条約など結ばれていないこの国であつても犯罪者を匿つていると思われたくないから秘密警察まで出張つて来てんだよ。よかつたなあく、連中に抹殺されずに済んで……」

「サラジアでの不法入国者は逮捕後すぐに死刑確定、それが嫌なら自分たちの国から捜査員を寄越して勝手に逮捕しろと言うのが暗黙の了解つてヤツだ……おとなしく我々と一緒に来てもらおうか？」

「ふっ、ふざけんな！放せ!!僕の父親は衆議院の……ブベラアア!!」

完全に身柄を抑えられたにも拘らず、まだ親の脛に縋つて状況を打開しようとする男の顔面に『千鳥』と呼ばれる男の足が若い男の頬から食い込んで……勢い余つて男は『齋藤』の目の前で一回転して座つていた席のテーブルの上に背中から落下した。

「お前、何やってんだ……」

「悪いな……どうにも今回のマル被（被疑者）は我慢ならなくてなあ……親の力しか取り柄の無い馬鹿を見ているとイライラしてくんだよ」

「だからって毎度日本へ送還する前に病院送りにするほどの怪我を負わせてどうすんだ……まあ、この方が無理矢理連れて行くより手間は省けるが……班長には捜査中にマル被が現地でトラブルを起こして負傷と言う事になるだろう　もつとも、お前が捜査に当たったヤツすべてに顔面に蹴られたような怪我を負っていることについては『公安部の謎』って所で落ち着くだろうな」

2人の日本人男性は若い男を担いで白い商用車に乗せて走り出し、広場で注視していたサラジアの秘密警察たちも人ごみに紛れて姿を眩ませ照り付ける太陽の多いこの国に覆いかぶさる建物などの日陰は人の姿も隠すようであった。

—日本・GIRLS東京支部—

『——また、指定禁止薬用物に指定されたばかり物の中で外用の軟膏剤での指定は国内では初の事例であり警察では使用ルートを現在捜査中とのこと………続いては速報

です、サラジアなどを拠点としている密売グループが今朝ごろ国際空港に到着しました。グループの幹部はサラジア当局から強制送還された日本人5名、うち1名は現地でトラブルで搬送先の病院から身柄が拘束されたとの情報もあり——」

GIRLSの施設内に設置された大型モニターからニュース番組が聞こえる休憩室ではアキがまたいつも以上にテーブルに顔を突っ伏して項垂れていた。

「うう〜うう〜…」

「あつ、アギちゃんがゾンビになっちゃった…」

「アギさん、大丈夫ですか？」

心配になったミクとレイカが声をかけるとアキの頭はゴロツと横に転がって右向きからその表情が見て取ると青ざめたような表情だった。

「ゴモたんさんからお聞きしましたけど…大変だったようですね、スポーツ課の御手伝い」

「大変…なんてもんじやないよ…大事件に発展するところだったよ」

昨日に発生した高校陸上のドーピング事件から発展した人質事件の後、アキは警察の事情聴取を受けたり、GIRLS本営の更なる事情聴取も受け、ピグモンに泣かれながら質問攻めを受け…

(その後からお兄ちゃんのゴジラの事を…まさかガーディーにあそこまで追及されると

は……)

『アギラ、アギラ!!あの超速い怪獣は何い!?誰ツ、誰なの!?誰でもいいからあの速いスピードの出し方が知りたくなつちやつたよ!!教えて、教えて、教えろおお!!』

●
と言った具合にガーディーからの質問攻めを今朝の段階からソウルライザーが熱くなるほど何度もずつと連絡が続いた。

当然、ユウゴの事を教えられないため『知らない』を貫き通してようやくスポーツ課の練習時間となり事態は収まった後の祭りが今現状なのである。

「ひゃあゝ指導課も大変だね」

「私はそんなに忙しくない部署に回されて、良かったです」

「ふっ……ふふふっ……ふふふふふっ……ミクちゃん、ウインちゃん……今からでも体験転属して見る?」

「遠慮します」

普段から仲の良い筈の2人から全力で拒否された初めての経験だった。

「はあく、今日はこの後からピグモンさんに任されて面談の予定なのに……こんなじゃ会わせられないよね」

アキは何とか表情を元に戻そうと頬を捏ねまわして左右から叩き上げた。

「いろいろと大変みたいだけど…頑張つてね、アギちゃん！」

「私たちも、陰ながら応援させていただきます」

「ありがとう、ミクちゃん、ウインちゃん」

改めて仲の良い2人からの励ましエールを受けたアキだった…が、そんな彼女の元に不穏を絵にかいたような存在が徐々に近づいていたことには彼女もまだ知らなかった。

「ひゃあっ！」「ひいっ！」

「うっ！」「ねえ、あれって」

そんな頃、通路を行きかう職員たち、所属の怪獣娘たち、あらゆる者たちが通路の真ん中を歩く者に対して顔が強張り、共にいる者はヒソヒソ声で話し合う。

「それでさあ、ママがさあ」

「何ソレ〜！」

更にはすれ違いそうになったサチコとミサオの前にもその者が近づくと…

「んっ？ギャアアッ!!」

「どうしたんだよ…って、ウワアッ!!」

2人はその者を見た瞬間に戦慄が走るようだった。宛ら野生の小動物が獰猛な猛獣に出会い、固まって何も動けずただ通り過ぎるのを待つしかなかった。

やがてその者が2人の事など気にせず通り過ぎていくと2人はそそくさと足早に逃げだしていくが…その者がアキたちの居る休憩室に立ち止まってスペース内に居る3人の中からアキの顔を見つけるなり彼女の元へと近づいて行った。

「アンタが指導課のアギラ?」

「えっ、はい…そうですが…って、ガッツ!?!」

アキに声をかけてきたのは未だ入院中のガッツだった…が、その様子はいつもと雰囲気が違う…もとい、髪色が違う黒髪のカッツがそこにはいた。

「しゃっ、シャドウガッツ!?!」

「どういうことですか?! またガッツさんから!?!」

ミクとレイカには黒髪のカッツを前にして『シャドウガッツ』と認識するが…

「はあ? 初対面に随分と失礼になったわね…『東京本部』も…いや、今は『支部』だったわね」

「がっ…ガッツではあるけど…ボクの知っているガッツじゃない…ですよね」

「ええ、そうよ…私も確かにガッツ星人の怪獣娘、印南マコよ…ミコ、あなたの知っている方のガッツは私の双子の姉よ」

「ガッツの…妹さん…?」

思わず見間違うほどにアキたちGIRLSの怪獣娘たちを苦戦させた以前のガッツ

こと印南ミコから分裂して生まれたシャドウミストに侵された分身体『シャドウガッツ』と容姿が全く一緒のガッツ星人（マコ）はミコのガッツ変身体とは違って唯一髪色が黒いこと以外は獣殻（シエル）も同一だった。

「はあ…任務終わりだったから姿を解くのも面倒くさかったからそのまま来たけど…バカミコのおかげでこの姿がどれだけあなた達に嫌われているかがよく分かったわ」

「そつ、そんなことないよ！ボクは別に…」

「私はちよつとびっくりしました…かなあ〜」

「あたしなんて思いつきり言っちゃったもん、『シャドウガッツ』つて…」

3人はそれぞれガッツ（マコ）に対する印象を『シャドウガッツ』と間違った事を隠し切れない表情にガッツ（マコ）は鋭く強い目つきで3人を睨んだ。

「ひいつ、じゃあアギちゃん…あたしはこれで…」

「わつ、私も…記録課の方に用事があるので…」

「あつ、ミクちゃん、ウインちゃん！」

足早に2人は立ち去ってアキー人をその場に残してそそくさとそれぞれの居場所へと去る…もとい逃げて行った。

「この姿じゃ話にもならないから…一旦、解くわね」

そう言つてガッツ（マコ）はソウルライザーの画面にタッチして怪獣娘としての姿か

ら元の人間としての姿に戻った。

「あつ、ええつと…改めまして、ボクは指導課のアギラです」

「調査部捜査課のガッツ…バカミコの方がガッツとして親しまれてるみたいだからマコでいいわ」

近場にあつた椅子に腰かけて腕を組むマコは細目でアキと対面する形で面談が始まるが…マコの普段着に着目するとミコとは違ってボーイツシユなりクルートスーツに身を包んだ姿をしていた。

「ええつと、マコ…さんは…何か最近、悩みとかありますか？」

「悩み事なら…悩み事だらけと言えるほど多いわよ その一つが『シャドウガッツ』かしら」

早速本題はくだんの『シャドウガッツ』の事件後、姿が似ているだけでマコはGIRLS内でも一目その姿を見た者から常に警戒されることに悩んでいる様子だった。

「つまり、周囲と浮いていることに悩んでいるの？」

「別に…嫌われることくらい、慣れてるわよ」

「きつ、嫌われることに…慣れるの？」

普段のアキからは感じ得ない『嫌われる』と言う事の意味をマコに尋ねた。

「怪獣娘だからよ…今現状はGIRLSのおかげで怪獣娘の社会的地位は確立されつつ

あるけど、今も弊害はあるわよ。例えば「就職難」とかね」

GIRLS発足以前から怪獣娘が発見された『御徴川決壊事件』後、各地の女性たちから怪獣娘の存在が認知された頃から『怪獣娘への偏見』が未だに続いていた。

その最大の問題点こそ正に「就職難」だ。カイジューソウル発覚後から戸籍謄本には『怪獣能力有り』と言う項目がつけられることで一般人と怪獣娘を分ける行政処置が施された。これは傍から見ればステータスのように思えるかもしれないが、実際はこの記録を見た企業側からすれば『ウチよりGIRLSに行った方がいいんじゃないか?』と言う遠回しの拒否を受ける結果となる。

つまり、今現在の怪獣娘が就職できる唯一の就職先は…『GIRLS』一択と言うのが現状であった。

「怪獣の力があるだけで好きな職業にも就職できず…唯一の駆け込み寺は『GIRLS』…正直言ってみんなこの現状を問題視するべきなのに、誰もしないことに苛立つわ」

「そつ…そつかなあ…ボクはGIRLS…好きだけど」

そう言った次の瞬間、テーブルをマコは強い握り拳で叩きつけた。

「そういう事が問題なのよ…みんな現状に満足しているけど…こんな組織、ハッキリ言って怪獣娘の集積所と何も変わらないじゃない」

「…それ、どういう意味…」

アキはマコが発言した言い方にちよつと納得がいなくなり、彼女を睨み返した。

「何よ、その目……私は発言を変えないわよ……あなた達GIRLS大好き連中とは違つて私はねえ……GIRLSが吐きそうなほど嫌いよ」

それはGIRLSに救われたアキには考えられない考えを持つマコの真意だった。

「それと今一番悩んでいる事と言えば……私、GIRLSを辞めようと思つているんだけど……その旨をトモミに話したらうるさいこと言われた上に無理やり面談を取り付けられたけど……これ、トモミに受理してもらつておいて」

そういうとマコはスーツの懐から封筒を出してアキに渡してきたが……その封筒には手書きで『退所届』、すなわち辞表を受け取ろうとしないトモミに代わつてアキに託してきたのであつた。

「まっ、待つてください！……こんなの急に……」

「それじゃあ、もうあなたと話すことは無いから……これからもずっと……」

マコはアキの方を振り返ることすらなくアキの元から休憩室を出てGIRLSを後にして行つたのであつた。

—翌日・国立東京都中央病院—

「あははっ……ごめんね、アギ……ウチの妹が迷惑かけたみたいで……うん、うん、わかってるよ、私もちゃんと話し合ってみるからマコのこと引き続きお願いね」

東京都が運営する国立の大病院の屋上ではガッツこと印南ミコが自身のソウルライザーを片手にアキとの通話を終えて画面の通話終了ボタンを押すと……深く息を吸い込んで溜息を吐き出した。

「……今のあんたにため息がつけるほどの余裕があるの？ 怪我で入院しただけでなく医者から更に悪い部分を見つげられて継続入院でここに回されたアンタが……」

「マコ……」

病院の屋上にはミコの他にも一人、マコも居た……否、正確には今しがたミコの目の前に現れたと言う方が正しかった。

「そうやって疲労を溜め込んで……体調の管理すらも疎かになったから『シャドウガッツ』なんて怪物を生み出したんじゃないの？ アンタのおかげで私はGIRLS内で常にシャドウなんかと間違われる日々……元々、嫌いだった連中に輪をかけてもつと嫌いにさせられる感覚、アンタにはわからないでしょうね……事件の当事者なんだから」

「……ごめんね……マコ」

「ごめんね？ ごめんね、ですって!?!どの口が言ってるのよ!!アンタは自分がシャドウミ

ストに侵されている時に無意識で分身を切り離して生まれたシャドウガッツ：アレが自分の分身である以上、私の性格が繁栄されることぐらいアンタは知っているでしょうが！私たちは双子！分身は片割れの性質が反映される！シャドウガッツと戦う時、私と戦っているようで気でも引けたの！？そんなんだからアンタは自分の分身にさえ負けるのよ！アンタの心が弱かったせいで！！」

マコは怒りに身を任せ、ズンズンと重い足取りをミコまで近づいて彼女の病院服の胸倉を掴んだ。

そして……バチインツ！！

強い平手打ちがミコの左頬を打ち付け、勢いのままにミコは屋上内の床に倒れ転がった。

「そもそもシャドウミストに汚染させられたのも、シャドウガッツなんてものを生み出したのも、私たちが怪獣娘だと知った時も、全部アンタのせいで……私の生活に影響を及ぼし過ぎてんのよ！！」

マコが吐き出す事にはミコに一切の落ち度はない……が、そのすべてをミコのせいにしてぶつけているとわかっていても収めきれぬ怒りが一切収まっていない。収め足りていなかった。

「私は！！GIRLSなんて入る気はなかった！！怪獣娘だとわかってても一般生活を送れた

!!アンタが黙っていれば怪獣娘だとバレずに今頃普通の生活が送れた!!アンタが余計なことしなければ双子の片割れである私にまで影響はなかったのに……何もかもアンタのせいで私にはもう居場所なんて無いじゃないの!!」

マコは倒れるミコの胸倉を掴んで無理矢理起き上がらせた。

「マコ……ごめんね……悪いのは……私……全部私のせい……私のせいにしていいから……GIRLSを責めないで……」

「それを認めたからって何!?アンタが悪いから許されるって?そうじゃない……そうじゃないでしょ!!アンタがこんな状態になったのも、私に居場所がなくなったのも、未だに私たちの問題になんの解決にもなっていない事にも……アンタはそれでもGIRLSを庇うワケ!?アンタにはGIRLSが大切でも、私にはGIRLSなんか愛着も未練もないわよ!……でも一番、気に入らないのは……そんなアンタが双子の片割れである私なんかよりGIRLSを信じてやまないことが一番イラつくのよ!!」

平手打ちだけに飽き足らず、今度は怪我では済まない感情のすべてが籠った握り拳をミコに振り被ろうとした時だった。

—ビシン!!

伸縮性の高いまだらの鞭がマコの手首に巻き付いた。

「そこまでよ……それ以上は私とて見過ごせないわ」

止めたのはエレキングだった。

「…えっ…エレ…」

「チツ…アンタ、先に退院したんじゃないの?」

「話し合いの様子を見守るようにピグモンに言われて見てただけよ…まったく、生産性の無い感情の一方的な押し付けを止めるなんて私の仕事じゃないわ」

「だったら邪魔しないで…これは私とコイツ、家族同士の問題よ!」

「それこそ猶更拒否するわ…もはやこれは家族間の話し合いなんかじゃない。GIRLSとして黙って見続ける義理もないわ」

「GIRLS、GIRLSって…アンタたちは二言目にはソレね…もういいわ、殴る気も失せた…ミコ、私は辞めることに一切の抵抗は無いから…この先、GIRLSなしでも私は生きていけるわ…それじゃあ」

マコは立ち上がって床に倒れるミコを振る帰ることなく出口まで向かって出て行った。

「…ガッツ、怪我を見せてもらおうわよ」

「マコ…ごめんね…不甲斐ない…お姉ちゃんです…」

ミコはエレキングに身体を起こされながらも謔言の様にマコへ対する涙を流しながら謝罪を言い続けていた。

—東京都中央病院・駐車場—

入院患者の家族や病院関係者の自家用車が並ぶ駐車場にマコは訪れ、その中から駐車している1台の軽乗用車の運転席側のドアを開けて入った。

「お帰り、どうだった…お姉ちゃんの様子は？」

「その話、しないでもらえる…ゴドラ」

車内にはもう一人の助手席の窓に頬杖の肘を乗せてニヤリと不敵な笑みを浮かべる怪獣娘がいた。

「そももいかないわよ…これでも私はあなたの同僚なんだから、同僚の悩み事には聞いてあげる義理つてもものがあるのよ」

「勝手に義務化しないでくれる…家族間の一番デリケートな問題なんだから…」

「そうは言ってもネエ…後ろであなた達の会話を一部始終聞いている人たちが黙っていないわよ」

「後ろ？」

同僚の怪獣娘の言葉に誘導されてマコは首が後ろを振り向くと…布状の透明なシ―

トで誰もない後部席の背景は光学迷彩による投影だった。

そんなハイテクアイテムで隠れていたのは怒った顔をしたアキと光学迷彩シートを手首の収納部分に集積するジェットジャガーだった。

「なっ、あんたがなんでウチの課の車に?！」

「そんなことどうでもいいよ!!よくもガッツにあんなひどい事を!!」

怒って瞳孔開いたアキが通話履歴に『ガッツ』が残るソウルライザーをブンブンと振り回してマコを責めた。

「全部聞かせてもらったよ!ガッツと事前に打ち合わせしてソウルライザーの通話を繋ぎっぱなしにして聞かせてもらったけど…エレキングさんが止めなかつたらガッツをどうしていたのさあ!!」

「あなたには関係ないでしょうが!なに人の家族の会話を盗み聞きしてくれてるのよ!!」

「話を逸らさないで!!答えて!ガッツを…どうするつもりだったのさあ、黒ガッツ!!」
「変なあだ名をつけるな!!」

言い合いがヒートアップし始め、助手席の同僚の怪獣娘がまあまあと宥める。アキ側も彼女の感情が前のめりになるうとするのを抑えようとジェットジャガーがアキの身体の前に腕で遮った。

「んもおくそんなに言い合いたいなら後ろに行きなさい!…と言うことでジェットジャガー、お願い」

『了解しました』

助手席の怪獣娘の指示に従ってジェットジャガーは後部席から降りて運転席側に回るとドアを開けてマコの身体に手を回してそのまま横抱きのまま抱えた。

「ちよっ! なっ、何すんのよ!! 放せ!! 放しなさい!! この鉄面ロボット!!」

ジェットジャガーはマコを抱えたまま後部席の扉を開けてそのまま彼女を自分が座っていた席に無理やり乗せた。

そして、なぜか腕を組みながら吊り上がった鋭い目つきのアキが怒りのオーラを纏いながら待ち構えていた。

「じっくり話し合おうじゃないか…黒ガッツ」

「ああもう、ウザい!! 何なの、このウザい状況!!」

「まあ、いいじゃないの…捜査の傍らで話くらいしてもらいなさい…あっ、自己紹介まだだったわね。私、ゴドラ星人の怪獣娘、ワケあって本名は明かせないからゴドラでいいわよ」

『JET-1973TYPE3 “ジェットジャガー” です…代わって私が運転をさせていただきます』

運転するはずだったマコが後部席に回されたことで代わりにジェットジャガーがハンドルを握り、キーを入れエンジンをふかせると車が発進して病院の駐車場を後にした。

都内 国道線

病院を經つて数分後、信号待ちの間にマコはアキからの質問もとい尋問が行われていた。

「なんでガッツに冷たくするのさあ！」

「あんたには関係ないでしょう……」

「どうしてGIRLSが嫌いなさあ！」

「アンタには関係ないでしょう……」

「むう……さつきから関係ない、関係ないって……それしか言えないの!」

アキには昨日の面談の続きのつもりで聞いているが……一向にマコが協力的になつてはくれず、会話が停滞していた。

「やれやれ、まるで会話になつていないみたいね……マコ、せめて一旦は仕事の打ち合わせ

ならできるっ。」

「部外者も居るけど？」

「喋る狸の置物とでも思っておけばいいでしょ」

「そうする」

「ボクは狸じゃないよ!!」

『有名なロボットのセリフのようですね』

助手席のゴドラはダツシユボードを開いて中に入っていたファイルを取り出し、ファイル内からプリントを後ろのマコに渡した。

「今回の捜査対象……SNS名は『怪獣撲滅し隊』……正確にはグループアカウントね、団体が1つのアカウントを共有して怪獣娘の活動の排斥を目論む“排獣活動”を目的とした新興の非営利団体って所かしら」

捜査課の仕事は名の通りの捜査だった。怪獣娘に危害を加えかねない危険な団体や集団、果ては個人に至るまで一抹の不安要素を無くすために捜査及び調査をする部署だった。

「ただし、運営事態はシンプルな実態だったわ……なんと、1人で団体を運営しているようだったわ」

「たった1人で?……一体何者なの？」

「捲つて2ページ目」

ゴドラに言われた通り、ページを捲ると年若い女性が出てきた。

「個人登録情報によるとこの女性は所謂、『怪獣被害児』のようだったわ」

「怪獣…被害児？」

「90年代以降、怪獣災害の完全な鎮静化によつて復興から数年間に発生した『復興貧困』で経済的に育てられなくなった親たちが児童養護施設に預けられた子供たち…それが『怪獣被害児』、通称…被害影響世代ね。2010年代以降は減少してテレビにも報じられることは無くなったけど2000年からの10年間の間で日本の人口は30人に1人がその世代に当たると言われているわ」

学校の1クラスに1人の割合で存在すると考えさせられる社会問題を聞かされたアキは固唾を飲んだ。華やかなGIRLSの表向きしか知らないアキにとって薄暗く日の当たらない怪獣に対する敵意さえ抱きかねない感情が匂う事と向き合う調査部の捜査課の仕事に啞然とさせられた。

「さて、ここからが本題だけど…この『怪獣撲滅し隊』と言うアカウント…最近になってあるGIRLSの怪獣娘の音楽活動グループのアカウントに対して誹謗中傷行為が現れだしたみたい」

ゴドラはさらにダッシュボードからタブレットを取り出して利用者数の多いSNS

『ツブッター』から問題のアカウントと被害アカウントのやり取りをスクリーンショットで押さえた画像を見せた。

「これって…ザンドリアスたち!?!」

その画像を見たアキは東京支部でも顔を合わせる事の多い怪獣娘の1人ザンドリアスとその仲間たちの集合写真とちよつとしたコメントを添えた投稿だった。

しかし、その下のチャットコメント欄には例の『怪獣撲滅し隊』アカウントからのコメントが最初に出ていた。

「何これ…酷いコメント…」

その内容は口にするにも抵抗のある言葉を羅列したような酷い内容のコメントだった。そのせいでザンドリアスたちのアカウントの出だしコメントは序盤から大荒れとなっていた。

「このアカウント…公式マーク付いているのに随分と横暴な事を書けるのね」

「公式マークが付くとどうなるの?」

『ツブッター』の規約上、特典利用として先着的にリプライコメントを最初に投稿できる機能があるようです…多くは公式マークのアカウントの応援コメントや宣伝コメントなどでの使用例があるようです』

「しかも、そのアカウントは元々購入アカウント…ソコソコにフォローが付いていた

アカウントに公式マークを『怪獣撲滅し隊』に変えて運営していたらしいわ：無論、既にアカウントはバン済み、書かれたコメントも自動的に消滅：事態は沈静化して特に問題はならず済むはずだけど：そのアカウントが最後に投稿した内容が少々調べる必要があるとあがつたワケよ」

次のページを捲ると『怪獣撲滅し隊』がアカウント強制消去される前に最後の投稿コメントが記載されていた。

『獣は火にくべられて 渡り鳥に浄化される』：唐突に詩的ことを投稿してきたわね」
「そう、あれだけ怪獣娘に対する誹謗中傷の嵐から突然の気持ち切り替わったかのような投稿：こういったコメントを残す人は大抵何かを実行しようとしている：いや既に準備ができている可能性も高いわ」

最後の投稿の日付からもそこまで経っていない中で意味深な投稿が意味する事に通じる何らかの行動を警戒して捜査課の2人の怪獣娘がこのアカウントの投稿主の女性の素性を捜査しているのであった。

やがて、車は都内の雑多な街中で車が停車した。

「それじゃあ私はあの人たちに聞き込みをしてくるわ」

「えっ!?!あの人たちに聞きに行くんですか!?!」

アキはてつきり一般人に聞き込みをしにくくものかと思っていた矢先、フロントガラス越しの向こう側に居る2人組の強面の男性たち…普段であれば決して関わり合おう事のない顔つきをした所謂「カタギ」ではないタイプの者たちだった。

「大丈夫！ああ見えて実は警察官なのよ」

「あつ、あの人たちが…警察官!?!」

「組織犯罪対策部って言って組織で活動する反社会的勢力の捜査を行う警察官よ…顔見知っているけど、あの人たちは私の顔を知らないわ」

そういうとゴドラは突然顔から身体のすべてを変化させてどこにでも居る小柄な中年の男性に変身した。

「この姿だから近づけるわ…あなたも手伝ってくれるわよね、ロボット…でもその姿はちよつと目立つわね」

『問題ありません』

するとジェットジャガーもあのメカニカルな姿から一変して窓の外に張られていた広告の俳優に似せた顔つきと服装まで姿を変えて見せた。

「あら、便利ね…それじゃあ行きましようか」

「ちよつと待ってゴドラ！私は!?!」

「あなたはアギラちゃんとお留守場…なんなら悩み相談の続きでもしていなさい」

ゴドラはマコにアキとの話し合いの場を設けるために組織対策の刑事たちの元へ擬態したジェットジャガーと共に向かって行った。

「……………」

「……………（気まずい）」

いざ、話し合いの場となつて見れば先ほどから何度も質問攻めにして言いたいことを言い切つたのに一切の回答を得られない答え方をされて、同じように言つてもまた同じように回答の得られない答え方をされると思うと声が出なかつた…が、それでも――

「ねえ、黒ガッツ」

「何よ……」

もはや『黒ガッツ』と言うあだ名にすら言い返すことを諦めたような顔で窓の外を見るマコに聞いた。

「どうして、GIRLSを辞めたがつているの？何かやりたいことでもあるの？」

「……………」

一応はマコのGIRLSを辞めようとする理由を尋ねて見たがミコの事を聞いた時とは違つてそつけない態度ではなく、何かを考えている様子だった。

「…逆にアンタに聞くけど、アンタもGIRLSを辞めた時はどうするつもりよ」

「ボクは辞めるつもりないよ！辞めたがつているのは黒ガッツでしょう」

「違う、そうじゃなくて……じゃあ質問代えて、GIRLSがもし無くなった時はどうするつもり？」

「GIRLSが……無くなる？……そんなことないでしょ」

突拍子もない例え話を交えた質問にアキは少し考えても『GIRLSが無くなる』などありえないとは思えなかった。

「いつまでもあり続けるモノがあるとは限らない、始まりあれば終わりはいつかやってくるものよ……来年か、再来年か、10年後かもしれないけどそれでもいつか無くなる……そんな時、あなたはどうするの？GIRLSが中心だったあなたがGIRLSと言う存在を失った先の穴を埋められるの？」

「そんなの……その時になって見なきゃしかわかんないよー」

考えもつかない事を聞かされたアキだが……直後、マコが首を回してアキの方を見た。

「私はねえ……埋められなかったのよ……お母さんを失った時」

マコの固い口が語ったのは自分が失った心の穴の内だった。

「私は小さい頃に両親が離婚してね……親権は双子それぞれに、父はミコを……母は私を……双子って分けると便利なのよ、互いに一つずつ、分け合えば争いごともないままにお互いに離れていったはずだったわ」

「お母さん……どうなったの？」

「……わからない……どこに行ったのか……この世にいるのか、あの世にいるのか、そのどれもわからない……私と母が住んでいた町はねえ……ある日を境に住民の半数が消えてしまう事件に見舞われたのよ」

「住民が……消える事件？」

『『八之島事件』……世間ではそう呼ばれる集団失踪事件、私の母がその出身で離婚後に私と移住して中学まで住んでいた……でもある日、母を始めとした島民の半数が消滅……消えた痕跡も、何もなく、ある日突然消えたのよ』

マコが語る彼女の心の穴の過去の過去……それはGIRLSが無くなった時にどうするかと言葉の意味のあらわれであった。

ある日突然、あるはずのものやことが……なんの前触れもなく消えてしまう……当然、すぐに埋まることはなく、マコのようにずっと塞がれない穴が開いたままの状態が変わらずに生活など到底できるわけもなかった。

「それは……ボクだってお母さんは居ないよ、お父さんも居なかったよ……お母さんは……確かに居たけど病気で亡くなった。そのあとはおじいちゃんやんと暮らしたけど、それも長くは続かなかった……でも支えてくれる人たちは居た！それはGIRLSでも居たけど、GIRLS以外でもいるよ！ボクには支えてくれる人達がいるもん！」

「それは形のある居なくなり方をしたからでしょ！私のお母さんは法的に今も〃行方不

明“なのよ…生きているのか、死んでいるのかもわからない…希望も絶望も抱けない複雑な気持ちはねえ…私の心をずつとえぐり続けているのよ”

マコの心の穴はとても大きかった。修復のできないほどに大きな穴がミコやGIRLSや周囲の誰にも彼女の心の内を治せるはずがなかった。

しかし…

「でも、だからこそ…あきらめたくない…私はねえ、GIRLSを辞めた後…警察官になるつもりなの」

「黒ガッツが…警察官に？」

驚くことにマコはフロントガラスの向こう側で警察官に扮したゴドラたちや組織対策部の刑事たちと同じ警察官を指していると答えた。

「ええ、警察なら『八之島事件』の記録を調べられる部署があるはず…たとえ配属叶わなくても、内部からせめて調べて見たいの…GIRLSで調査部の捜査課に配属したのはそのためよ」

「そう…だったんだ…」

思いがけないマコの目標に対する意欲は不変的な物であることを悟ったアキはそれ以上のことは言わなかった。

「幸い、同僚にも恵まれて…元警察官のゴドラにも色々教えてもらいがらだけど、着実に

目的へ近づいてきている。だから、私にとってGIRLSは通過点に過ぎないの…辞めることに抵抗は無いけど、しばらくは学業に専念して高校を卒業したら採用試験を受けるつもり」

「……そうなんだね…わかったよ、そういう事ならガッツも納得だよね」

アキはポケッツから隠していた通話中のソウルライザーを出した。その通話先は『ガッツ』であった。

「なっ、あんた…どういうつもりよ!」

「ボクなんか打ち明けるより…ちゃんと家族と話すべきだよ。今さっきの自分の気持ち…素直にちゃんとガッツに伝えて!」

アキはそういってマコにミコへ通じているソウルライザーを突き出した。

「……うっぎ…出ればいいんでしょ、出れば…」

そう言ってソウルライザーを手にとってマコは耳に当てた。

『マコ…そうだったのね…ずっと、お母さんの事を…』

「勘違いしないでもらえるかしら…私は…真実が知りたいだけ、そのためならGIRLSなんか踏み台とか思っていないわ」

『ええ、そう…構わないわ…前々からあなたは怪獣の力を十分に制御できているもの…私なんかと比べて…』

「意志薄弱なアンタと一緒にしないでもらえるかしら……もう、気持ちは変わらない……さっきの話の通り、私は高卒後に警察官採用試験を受けるわ……例え何年かかろうと真実を見つけて出す」

『うん……わかった……ピグつちからは私の方で伝えておく……正直、もつたいないなあ……GIRLSって楽しいのに』

「アンタたちみたいにGIRLSなんかにおんぶにだっこされ続けるつもりは最初からないわよ……私は……GIRLSを信用していない、本部を支部に降格させただけでなく、本部長を外国本部に幽閉するような組織なんか……」

『マコ……博士のオーストラリア支部行き……まだ気にしていたのね』

「それだけじゃないわ……東京支部って言うっておきながら肝心の支部長を海外勤務にさせておいて代理をピグモンに任せっきり……アンタだけじゃなく、あの子も危険な状態よ」

ミコとの通話内容は段々とGIRLSと言う組織体制の問題点を挙げた不穏な会話が続いた。

「じゃあ、もう切るわよ……そろそろゴドラたちが戻って来たわ」

そう言ってミコとの通話を切ったマコはソウルライザーをアキに返した。

「黒ガッツ……今のって……」

「おまたせ……！わかったわよ……『怪獣撲滅し隊』の正体!!」

ゴドラは車内に入るなり、変身を解いて謎が解けた清々しい表情であった。
「何かわかったの？」

「ええ、この運営女性：組対の網の中では有名人：正体は『荒野の狼』の残党、昨年のお茶ノ水支部への警察のガサ入りで不起訴になった団員の1人だったわ：元々、地位はそれほど高くなかったけど現住所を何度も移転している形跡も確認できた」

「もしかしたら調達係かもしれないわね：その組織ならその人をあえて高い地位にはおらず、動きやすい中で物資調達など活動をしやすい人物だったはずよ」

「住所の転々も納得がいくわ：何度も場所移動できるだけの経済力、きつと幹部並みの厚遇だったはずね」

「すつ…すつ…いすね…（どつかの誰かさんとは大違いだ）」

まるで刑事ドラマのワンシーンを見ているような類まれな捜査力にアキは脱帽した。
家で居候しているだけのなんちゃって探偵とは大違いだった。

「へつきゆしゆん!!」

【キヤツチ ア コールド?】

風の噂に充てられてミオは大きなくしゃみが出た。

「誰かに噂されてるのかなあ？」

世田谷区 祖師谷

「ここが最後の住所みたいね…」

住宅が立ち並ぶ街の中でも一際古めかしい外観のアパートにアキたちは訪れていた。

「ああ、連絡してくださった刑事さんですか？」

アパートの中から小太りで角刈りの中年男性が出てきた。

「どうも、城南署の吾戸螺です」

『同じく伊吹です』

ゴドラとジェットジャガーは変身能力と擬態能力で姿を変えて男性の目を欺いた。

「ココのアパートの大家です…正直、困っていたところなんです。突然になって部屋のカギと退去届を送られて…家具家電もそのままなんですよ、まあもともと家賃払いの良人なんですけどねえ」

「特に滞納とかはなかったんですか？」

「ありませんよ、寧ろブラックさんも見習ってほしいくらいで…ああいえ、こちらの話です…はい…家賃は2年契約一括、うちは古いアパートなんで2年以内に出て行っても特に違約金を出さない契約なんです…ちよつとねえ」

「何か問題でも？」

「いや〜…家具家電は新品同然なんです…寧ろ家具付き物件として売り出せるレベルです…そこは問題なんですがねえ、いかんせん壁が…」

そう言いながら大家が出てきた部屋に案内されると…確かに家具家電は新品同然…寧ろ、使った形跡もない。

「冷蔵庫は…見せかけね、電気が通ってない」

「電気ガス契約をしていないみたいなんです、水道は一応契約しているみたいですが…」

「問題の壁は……なに、コレ!？」

ゴドラが扮する吾戸螺が畳張りの部屋に入るとそこに待ち構えていたのは衝撃的なものだった。

「…GIRLSの…東京支部のみんなだ」

そこにはGIRLS東京支部に所属する怪獣娘たちの写真を中心に蜘蛛の巣状の赤いポリエチレンテープでつなぎ合わせた調査網があった。

「…一体…何を企んでいるの?」

『わずかに農薬の匂いが検出されます…アンモニア、石灰、いずれも一般で手に入る物が…』

伊吹と言う男に扮したジェットジャガーが検出機能で部屋の中の微量な物質を調べると年若い女性が所持するにしては異様なものが次々と検出していた。

「…ゴドラ！コレツ!?」

マコが調査網の中から見つけ出した一際穴だらけの写真が床に落ちていたのを拾った。

「誰なの？これ…」

「穴が開きすぎて判別できないわ…でも、なんだか髪の毛の左右を結んでいる?」

『皆さん、これを…』

更にジェットジャガーが拾ったのは…GIRLSの封筒だった。

「こんな事をするヤツが…なんでGIRLSの封筒を?」

「あつ!これって…GIRLSの抽選イベントとかで配られる際に同封するための封筒ですよ」

封筒の用途を知るアキはキングジョーなどイベントを開くほどに著名な怪獣娘の交流イベントで配布される封筒であることを見抜いた。

「黒ガッツ!今日のGIRLSのイベントは?」

「あんたまで…まあいいわ、ちよつと待つて…:…1件だけ、午後4時からの中学生バンドグループのライブがあるわ」

「それって…ザンドリアスたちだ!?!」

よりによってまだ年端もいかない中学生であるザンドリアスたちのライブに部屋主

だった女が何かGIRLSに対して行おうとしている。それもSNSでの誹謗中傷では比にならないレベルのことをしようとしていることに気づかされた。

「急ぐわよ!!時間が無いわ…時刻は…まもなく4時ごろよ!」

全員、アパートを飛び出して車に乗り込んだ。

「ゴドラさん!ザンドリアスたちから聞いたんですが、演奏後にはファンとの交流で握手会をするそうです!」

「おそらくそこで何かをしでかすつもりね…会場はGIRLS東京支部近くのイベント会場…終了時刻は約6時ごろ…演奏を1時間と仮定しても握手会もそれくらい…」

『ここから車で1時間弱と推定されます』

「何とか間に合わせて!!」

『了解しました』

ジェットジャガーはギアを入れ替え、アクセルを法定速度最大を出しつつ、GIRLS東京支部へと急行した。

・
・
・

—GIRLS東京支部・イベント会場—

会場内では演奏を終えたザンドリアスたちがファンとの交流で握手と手渡しでCDを配っていた。

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

「あたしらのファーストシングル、よろしくね」

ザンドリアス以外にもノイズラー、メカガラス、ホー、モゲドンの怪獣娘たちが各々ファンと交流を深めていた。

しかし、このライブはある一人の怪獣娘の卒業ライブでもあった。

● 遡ることライブ開園前日…

「ええ〜！モゲドン、ドラム引退しちゃうの？」

「うん、私もともとドラムは趣味の範疇だったし…元鞆の救助課で活動するよ」

「ごめんなく、ギリギリまでオマエには伏せてたんだ」

「なんでえ!？」

「うるさいから…」

「ひどくなあいい!？」

「まあまあ…ベースはマドカさんに代わってメカガラスさんが担当されるので…私も…

キーボード…頑張りますから…うつ、うつうつわあああああああ!!」

「なんでアンタが泣き出すのよ、ホー！私だって…私だって…うわあああああああ
あ!!」

「だあくもうこうなるから嫌だったんだよお！」

「ううつ、二人ともありがとう…でもこれで名実共に中学生バンドとして活動できるね
！ 私だけみんなより年早く高校生になっちゃったから…でも、みんなとバンドやれて
楽しかったよ！」

「ううつ、わかった…よおし、じゃあ明日はモゲドンの卒業ライブ！みんなで盛り上げ
ていこ〜う!!」

こうしてザンドリアスたちは一致団結して『おお〜っ!!』と勢いづけてライブへと歩
を進める事となった。

● そんなこんなでライブは無事に成功、モゲドンも辛い気持ちなくスッキリとした気分
の表情でファンとの交流を進める中…いよいよ最後が見えてくるほどに長蛇の列の終
わりが近づいてきた。

そんな時だった…強い視線が徐々に近づくザンドリアスまで迫っていた。

「ありがとうねえ〜…次のひとお〜」

いよいよザンドリアスに近づき……握手を交わした。

「thank you Live is so Cool!!」

「うおっ！外国の人まで…せつ、センキューソーマツチ？」

自分のファンの中に遠い海の間から遙々ライブを見に来てくれた外国人女性に思わず動揺したが、うれしい気持ちで握手を交わし隣のノイズラーへと流れて行った。

「ええつと、センキュー〜…ええつと、次は…あれ？…これで最後だっけ？」

ザンドリアスが次のファンと握手を交わそうとしたが…外国人女性の後ろにももう一人女性が居た気がしたがそこには誰も居なかった。

「ねえ、ノイズラー…あと一人、いなかった？」

「ええ〜？あの外国人さんで最後じゃないのか？」

「おつかしいなあ〜…居た気がしたんだけどなあ」

なんだか腑に落ちない気分だがすべてのファンと握手をしたと言う事になりライブはすべて終了となった。

ただ一人、ファンを装ってザンドリアスたちに危害を加えようとしていた者を除いて

…

「んんっ〜！んんっ〜!!」

「はいはい！おとなしくしてねえ〜」

誰も居なく、誰にも見られぬ人気の少ない場所で：ジェットジャガーの光学迷彩シートからアキたちは捕らえた女性の口を塞ぎつつ、電子手錠を手首に嵌めて拘束していた。

「この人…どうなるんですか？」

「さっきの部屋の様子を警察に通報したから、ココに居ることも伝えている…すべては警察にお任せするって所かしら…捜査課って言っても逮捕権は無いからさあ」

GIRLSの捜査課としての仕事の一部始終を目の当たりにしたアキは普段は見れない怪獣娘たちの日々を壊そうとする者たちから未然に対処する捜査課の活動に敬服する事ばかりであった。

「ご苦労様です…警視庁の者です」

そんなこんなで警視庁の者と名乗るスーツ姿の警察官達が近づいてきた。

「どうも、GIRLS捜査課のゴドラです」

「同じく印南マコです」

「どうも…そちらの女性は我々がお預かりいたしますので…もうこれ以上、身分を偽って勝手に捜査されるのは…そちらさんも困ることになりますよ」

警察官の内の1人の年上の眼鏡をかけた警察官がゴドラたちの行動を咎めた。

その急な変わりように全員が2名の警察官を警戒した。

「失礼ですが…あなた方、どこの警察署の方々ですか？」

「先ほども申した通り…警視庁…です」

「もつと言えは…”おおやけ筋”…の者ですが…」

「…公安ね…よりもよつてなんであなた達が出張ってくるわけ？」

2人の警察官がただの警察官ではなく、国家の公（おおやけ）の安全を守る側の警察官であることに全員に動揺が走った。

「悪いけど…私たちが通報したのは普通の警察官よ…ハム（公安）の出る幕では無い筈よ
！」

「そうは行かない…本件は外事案件につき、彼女の身柄は我々が預かる事となっている
…どいてくれ、元巡査」

もう一人の若い公安刑事がゴドラの額に冷や汗をしたらせた。ゴドラがGIRLS
所属以前の警察官時代の階級まで調べ上げられている。

「今ここで、君が警察官を退職した理由を述べることになっても構わないのかね？」

「…チイツ…無駄に男前のくせに…やることがプライバシーの侵害とはね…黒ガツ
ツ、アギラちゃん…私たちは下がるわよ」

「ちよつ、ゴドラ…何言っているの!？」

「お願い!!言う事を聞いて…」

何やら公安の刑事たちにゴドラには言われたくない秘密まで握られているのか…仕方なく女性までの道を譲った。

「賢明な判断だ、元巡査……んっ？おい、お前！何をしている！」

若い公安刑事が近づいていくと…拘束された女性は手に隠し持っていたスマートフォンがちらついて見えた。

慌てて刑事がスマートフォンを調べると…何かを起動した後…しかもマップ上には無数の点がG I R L S東京支部に向かって徐々に近づいていた。

「むっふふふ、ふっふふふっ!!」

声を出させないために布で隠していた口が布の中で盛大に笑う声がかえって余計に不気味さを醸し出していた。

「まさか!!ソウルライド、ガッツ星人!!」

慌ててマコはガッツ星人へと変身してレポート能力を使ってG I R L S東京支部の屋上へ移動した。

「なんてこと…ゴドラ！その女は自爆ドローンを東京支部に向かわせているわ!!ものすごい数を!!」

『なんですって!!?すぐに応援を要請するわ!!』

「間に合わない!!このまま私が少しでも迎撃する!!まだ下にはイベント帰りの人たちで

溢れかえっている……向かってくるドローンは河川敷まで近づいたら撃ち落とす!!」

ガッツ（マコ）は両手にエネルギーを蓄えて光線攻撃を仕掛ける構えを取った。

自爆ドローンの接近までおよそ500メートルに迫っていた。

一方、その頃……

『千鳥……緊急事態が発生した……直ちに対処せよ』

「了解……竹之内班長……」

GIRLS東京支部の向かいビルから向かってくるドローンの様子と……ガッツ（マコ）が迎撃する様子を見守る男が太陽沈む夕日の中で身体を変化させ大きな翼を広げた。

河川敷まで浮遊能力を駆使して次々とドローンを撃ち落とすガッツ（マコ）だがいくら怪獣娘の能力を駆使しても数の多さに辟易するほどに対処が精一杯だった。

「ああ……もうウザい!!多すぎる!!」

ガッツ（マコ）一人では限界であった。浮遊能力を駆使しながら光線を発する能力の二重使用、走りながらボールを投げ続けるようなものだった……連続して使い続けるにも体力の限界が近づいていた。

誰かが言った、『血を吐きながら走り続ける…マラソンだ』と…本来、撃ち落としていくドローンも兵器として運用が前提…守るために広く、多く、強力な武器で人間は武装して自分達の身の安全を守ろうとする。

(ホント…血を吐きながら走り続ける…マラソンじゃない)

それがまさに皮肉な事だった。守るために開発された武器が…今まさに怪獣娘たちの居場所を攻撃しようとしてくる。

(だから人間なんて信じられないんだ!!なんで私がアイツなんかの為に…怪獣娘の為に…GIRLSなんかの為に…辛い、ツライ、辛い、ツライ…逃げ出したい、見捨てたい、諦めたい!!もう嫌だ!!正直、警察官になることだつて嫌だ!!あくまでお母さんの真相を知りたいだけ、警察なんてどうでもいい、採用試験が何い!?!なんでそんなの受けようとしたんだっけ?…わかんない、わかんない、わかんない!!)

次第に心が嘗て無いほどに強い思念があふれかえつて来た…これが所謂怪獣娘の暴走だとしたらガッツ星人こと印南マコにとつて初めて怪獣娘の力としての実感を与えた。

荒ぶる暴力の根源…それこそがまさに…「怪獣」だった。

「ヴァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

目の前が真っ赤に染まって…手から放つ光線が赤くなり…大量のドローンも、河川

も、GIRLS東京支部も含めたすべてを破壊しかねない力が溢れて来た。

(もう…ないのかも…吹きとべえエエ!!)

破壊衝動が完全に心を満たそうとした時だった…ガッツ(マコ)の横を赤い閃光が通り過ぎて…その閃光がすべてのドローンを正確に、精密に破壊しつくした。

「なっ…なに…一体…」

ほとんどのドローンを完全に無力した…かに思われたが、1機だけガッツ(マコ)に近づいて行き…彼女の目の前でセンサーが反応して自爆した。

「きやあっ!?!」

酷使し続けた体力も限界が到達してガッツ(マコ)の中で意識の意図をプツンと切れるような感覚が全身の力を緩めさせ…そのまま浮遊能力は消えて河川へと落下して川の中に彼女は消えた。

—ブクブクブクブクツ。○○—

川の中、水の中…薄れゆく意識の中で自らの口の中から大事な酸素が泡となって水面に上がっていく…

(ああ…死ぬんだ…これが…死ぬ…感覚…もう、どうでもいいや…そもそもなんで警察官になろうとしてんだっけ?…真実を調べたきや記者とかでもいいじゃん…国家権力なら、自衛隊だって…いや、自衛隊はあのクソ親父がいるからダメじゃん…

ああ〜でもなんか…割り切れないなあ〜…警察官に…なれないからかなあ…)

青く澄んだ意識から徐々に黒くて暗い世界が上下より近づく中…ドボンツ！と赤い炎がガツツ（マコ）まで近づいて大きな翼を広げているようだった。

● ○ ◎

—ミイ〜ン！ミイ〜ン！ミンツミンツミイ〜ン！

それはどこか熱い夏の日差しを照り付けさせる9月を迎えてもまだ夏模様の空だった。

その島は季節が東京都よりズレている…セミは今頃木から落ちて七日目の死を迎えている頃なのにまだ生きている個体があちこちでうるさく泣いていた。とてもウザかった。黙ってほしい、悲しませてほしい…自分が今、母と生き別れて泣き崩れたかった。

「ううっ…お母さん…お姉ちゃん…みんな…どこ…」

姉はおそらく父と本土に居る頃だろう…だが、母はわからない…突然、居なくなった。

どうしていいのか分からない、何をしていいのか分からない…ただただ恐怖が続いていた。

そんな時だった……タツタタタツ!

「千鳥より本部へ! 島民、1名: 年齢13から15、蜂野巢畑バス停前で発見しました」
『本部了解、引き続き島民を公民館まで保護せよ』

胸元の無線を通じて指示を受ける青い服に、紺色のジャケット、紺色の帽子、背格好はスラリとしているが? せ細っているわけではない、鍛えている体形だった。

「君、大丈夫かい? お父さんとお母さんは?」

わからない……声が出ない……何かを伝えるためにはジエスチャーが必要だったため、首を横に振った。

「……そうか……とりあえず公民館まで行こうか……歩けるかい?」

またも首を振った。この数時間に数本しか来ないバス停で往生しているのは転んで足を捻っているからである。

とても痛い、歩けない……しかし、手を握られた……嫌ではない……寧ろ暖かい、夏日なのに……

「ここにずっといて……辛かっただろう……今日は嵐の後みたい日に日差しが熱いから……コレ、被つていようか」

頭に被った帽子を自分に被された。ヒノキの香りのする……更に抱きかかえられて、自分の鼻が首筋まで近い……ソコもヒノキの香りがする……手も暖かく、香りも暖かい……不思議

議だ…不思議な事だ…誰だ？…誰なんだろう？…自分を抱えるのは誰なんだ？…中学
生なのに子ども扱いされている…でも自分より背も高く、身体の大きな何者かに抱えら
れて、どこかに向かっている…ずっと…こうして…いた…

○

◎

●

「脈拍…110の89…よし…問題ない…」

濡れるガッツ（マコ）の腕の脈を確認する人影…どこかのビルで横たわる彼女は取り
戻していく自分の意識の中でソレが誰なのか確認したい。その一心でガッツ（ミコ）は
手を掴み返した。

「…あつたかい…この暖かさ…あなたは…」

「…君は何も見ていない…誰にも会っていない……」

「そんな…違う…いるよ…ここに確かに居てくれる…あなたが…ここに…」
「…君は錯乱している…力を酷使し過ぎた…普段使わなかった力を無理に使おうと
したからエンストしただけさ」

人影は男の声だった。どこかで聞いた事のある声にガッツ（マコ）はもう手放したく
ないと最後の力を振り絞って男の手を握った。

「いやだ……行かないで……私は……真実が……知りたい……」

「……真実……真実はたった一つだけだ……君が今ここで生きていること……ただそれだけだ」

懸命に握るガッツ（ミコ）の手を逆に力強く握り返して手の中から熱く燃えるような熱が伝わってガッツ（マコ）の全身を炎が包んだ。

身体を燃やす炎ではない……全身にピッシヨリと濡れた水分だけを蒸発させる火だった……水分が消えれば火も消える。水分を燃料にしているかのようだった。

やがてその熱が不思議とガッツ（マコ）の黒かった自らの髪さえも桜色に変化して全身の青い部分も暖かな桜色に変化するかのようだった。

しかし、心の安定が保たれたのか……ガッツ星人としての姿は解除され、元の黒髪のマコへと戻った。

そして、男も……手を放してどこかへと去っていく。

「な……まえ……は……」

薄れゆく意識の中で男の名を尋ねたが……

「……ラドン……」

それは名ではなく、何かを意味する別の名前かもしれない。なかつた。

—翌日 都内公立高校—

「うん、そう…復学したよ…ずっと休学中だったし、結局私もあんたと同じでワーカホリックになつてたみたい…」

『なにそれ、結局人のこと言えないじゃん!』

「正直辞めたことは正しい判断だった…私には女の子同士で和氣藹々つてのは性に合わないみたい」

『ピグっち、超号泣してたよ…アンタが辞めるつて言い出した時以上に…』

「まったくピグモンは大げさなんだから…誰にだって始めあれば終わりはやってくるものよつて伝えといて」

『自分で伝えろ、バカマコ!…あんたさんざん私のこと裏で馬鹿呼ばわりしてたつてアギから聞いているんだからね!』

「ゲツ…バレた?」

『はあくあ…アンタが居なくなつたおかげで東京支部はいつも変わらずにぎやかですよ』

「フンツ、言つてな…こつちはGIRLS無しでも日常生活を送れるんだから…アンタ

「たちも本部復帰を目指して頑張りなさい」

『……なんか、マコ…明るくなつた?』

「ええっ、おかげさまで…新しい目標も出来たし…私、警察官になるよ…それで、会いたい人に会いたい」

『はいはい、お母さんに…でしよ』

「うんうん、ざくんねん…お母さんもそうだけど…もう一人…私を救ってくれた人」

『ええっ?!誰ッ、だれだれ!?女ッ?男ッ!?まさか男の人だつたりする!』

「な〜いしよ!」

『教えてよお〜!!私だつてアギのお兄さんにすら会えてないのに〜!!』

「アレッ?私、昨日の送別会の時に会つたわよ」

『ウツソ!?なんでアンタが会えるのよ!!ねえっ、どうだつた!?どうだつたの!?どうだつたのよ!!』

「どうつて…ああ〜…料理は美味しかったかなあ〜」

『何よそれ!!そんなの感想になるかあ!!もつと具体的に!!イケメンだつた!?顔立ちはどうなの!?ねえ、マコ!!』

「…おとなしく安静にしてなさい、バカミコ!」

そう言つてマコはミコとの通話を一方的に切つた。そのスマートフォンには青い鋲

石『アーカライト』がストラップで括り付けられたキーホルダーに収められていた。

キーホルダーの裏には今まで忌まわしく思っていたGIRLSのロゴ入りだが、なぜか今は誇らしくも心強い大切な御守りであった。

そのキーホルダー付きのスマートフォンを天に掲げると中のアーカライトが日光の反射で青く輝いていた。

―ブウワアアア!!

すると、マコの黒髪を乱すほどに強い突風が後ろから吹いてきた。

その横を一枚の桜花弁が足元に落ちてきた。

マコの通う高校は遅咲きの桜の木が一本咲いている。

5月になってまだまだ桜咲く花ピラ…季節ひと月ズレ…まるであの時の八之島の季節のようであった。

「マコ…次、移動教室だよ」

「うん、今行く」

友達が呼ぶ声がしてマコは教科書を抱えて自分が今まで居た教室を後にした。

ふと、学校内の階段に設置された鏡を見ると自分が本来映る虚像は自分の姿…否、もう一人の自分の姿が重なる。

それは桜色の体色を持つガッツ星人が目の前にいた。

—都内 食事処『豊』—

そこは一般的にはどこにでもある普通の定食屋と変わらない外観をしていた。

「…注文せよ」

「…大将、そば、かき揚げ、海老天3、かしわ握り2、ゆず七味」

「あいよー」

この店にはメニューはある…が、通常の注文の仕方ではない…特殊な注文、正し店主への注文ではない…上司への「報告」であった。

そして、会話も独自の暗号を使いながら伝え合う。

「それで…おとめ座（被疑者の女）から何か出ました？」

「ラッキーアイテムはパソコンだ…調べたら面白いものが出てきた…宮下アキの手配書だ」

「いつ頃にそんなものを？」

「黒い海（ダークウェブ）からの誘いらしい…本人も写真が誰なのか知らずに製作したと…」

「フンツ…よくワニ（ゴジラ）に殺されずに済みましたな…：アレが知ったらそこから辿って組織ごと破壊しかねない」

「だろうな…ワニの入国は既に公安内部でも把握されている」

「それで…次の清算（任務）は何ですか、竹之内さん」

すると一枚の広告ポケットティッシュが出てきた…市販薬の塗り薬を宣伝するものだった。

「次はこれだ…最近、スペルゲンを含んだものが出回っている…文科省からの依頼だ」

「…了解しました、ではお会計（任務開始）します」

「頼んだぞ…千鳥ヒエン…炎の悪魔（ラドン）が出る前に」

男は不敵な笑みを浮かべて注文したかき揚げエビ天そばが出された。

「ここはただの定食屋…しかし、なぜかここには警察の関係者が集まってくる。

「ねえ、聞いた？アヴァロン・ユニットの増員の話…」

「えっ？もう増員ですか？沖田さん」

「はあく…これですよやく、おりよう」さんとの時間が取れますよ」

「新婚さんは大変ですね…坂本さんも」

「正直、自分はまだ結婚はいいですね」

「私も」

部署、立場。階級問わず多くの警察官達が流れ着く…

「ここでござるよ！ココこそ都内随一のお店でござる」

「後藤君、前から思ってたけど…その口調はキャラ付けなの？」

「何を申されるか、前原氏！某、幼子の頃から時代劇に憧れてこうなったでござるよ」
「キャラ付けなんだ…」

そして今日もまた一人、『公の守護者』は店を後にする。

「ごちそうさま」

「ありがとうございます」

次なる任務に向かつて…

姉妹と教師

「私に『お兄さんをあなたにあげます』と言ってくれないかね！」

「……………はいいッ!?」

それはあまりにも唐突な進言にアキは戸惑いと困惑と言う最も対応に困る感情が混ざった気持ちに陥らせた。

「…はっ…そうじゃなかった、ごめんなさい…ついカイジューソウルの影響で変なことを口走っちゃった！」

突然のことに困惑しているのは言い出した本人も同じ様子だった。

「あららく、お姉ちゃん…今日はやけに積極的じゃない」

「おうおう、うちの弟分に手を付けようとはエエ度胸ですなあ、エミリはん」

突拍子もないことを口走ったレディースのスーツ姿の女性を左右からミオと共に大胆にも露出度の高い服装の女性が絡んでいた。

「うっ、うるさい！勧誘には慣れていないのよ！…大変申し訳ない…別にやましい意味はないのよ！」

「うっ、うん…大丈夫です、そこは理解していますから」

必死に弁明しようとするスーツの女性と彼女の意図を理解するアキだったが…先ほ
どからトンデモ発言後からのミオと肩を組んで姉妹らしき人物がニヤニヤしながら煽
り散らしていた。

「改めまして…N I S H I N Aの代表を務めます、仁科エミリと申します…メフィラス
星人の怪獣娘です」

「私は仁科カレン、お姉ちゃんと同じくメフィラス星人…なんだけど正確には二代目、異
星人タイプには珍しい同じ名前だけど別個体扱いの怪獣娘よ」

今日、アキとミオが訪れていたのは原宿のメインストーリーに店を構える『プティ・マ
ガザン原宿店』…の店舗が見える雑居ビルの中にあるN I S H I N Aの事務所だ。

今年から都内に店を構え始めた北海道の人気ブランド『N I S H I N A』が都心に進
出したことでニュースでも取りざたされるだけあって店舗側は長蛇の列を為すほどの
大盛況ぶりだった。

「ええつと…それで、なんでボクのお兄ちゃんが必要なんですか？」

「それはですね…N I S H I N Aは今度の新規事業に男性用スーツを製作いたしまし
て、広告塔のモデルとしてお兄さんをお借りしたいだけなのです」

エミリはアキとミオに製作した男性用スーツの見本図と素材標本を見せ、改めてユウ
ゴをN I S H I N Aブランドのスーツモデルに起用できないか検討してほしいと提案

してきた。

「へえく…スーツかあ…お兄ちゃんって、見た目に拘らない人だからなあ」

「確かに…あのゴツイ体格にスーツ姿が足されたら、いよいよお父さんに似ちやうわね」
ミオの認識の中でユウゴにスーツを着せた姿と記憶の中に存在するユウゴとアキの父親の印象が重なった。

「そういえばミオさんってボクのお父さんのことご存じだったんですよね…ボクはあんまり覚えていないけど、よくスーツを着ていた人なんですか？」

「うん、そうだよ。スーツの上にロングコートと眼鏡をかけていたかなあ…知的な感じの人って印象だったからお義父さんと同じ大学関係の人だと思うわ」

「あれ…ミオっちのお父さんって…」

「んんっ…カレンツ」

エミリはカレンの不用意な発言が出そうになったのを咳払いで誤魔化した。

しかし、アキは一切気づかずにNISHINAブランドの男性用スーツの見本図をミオと一緒に眺めていた。

「うくんツ…普段から黒一色の人だから黒かなあ？」

「なんか喪服みたいじゃない？…黒だけでも何色もあるからあの子に会う色って何かしらねえ」

ミオは手に顎を乗せ、アキは頭に人差し指を立てながらユウゴの全体像に会う黒色を連想して見るもパツと思い浮かぶ黒色が出てこなかった。素人連想故か黒を黒以外に浮かぶようなカラー名などありもせずかなり難航していた。

「あのくよろしければ『紳士服製造技能士』さんにお伺いして見てみましょうか?」

「紳士服製造技能士?」

『紳士服製造技能士』とは国が定める技能検定制度の国家資格の一種で紳士服を始めとしたスーツの製造に関する学科と実技試験に合格した専門技能士のことである。

「デザイン自体はN I S H I N Aが設計製作を担当しましたが、製造は原宿から少し歩いた所にある紳士服専門店のオーナーさんにご協力いただいたのでアドバイザーを頂けるかもしれません」

「なるほど…それなら聞いてみる価値ありそうですね」

「よっしゃ〜!そうと決まったら早速行ってみましょうか、アキちゃん」

エミリの提案通りアキとミオは仁科姉妹の案内の元、原宿から少し歩いた先にある紳士服専門店へと向かうことが決まった。

―渋谷区内・紳士服専門店―

原宿のメインストリーより離れにある紳士服専門店では先客が紳士服製造技能士のオーナーにスーツを仕立ててもらっていた。

「いかがでしょうか？お客様」

「…うん、体形にちょうどピッタリ…いつも完璧な仕上がりだよ」

「お褒めに預かり…光栄にございます」

オーナーは初老の男性で西洋様式の伝統的な仕立て職人の格好をしたオーナーは客に丁寧に頭を下げて礼を尽くした。

「これで心機一転、授業に専念できるよ…生徒に向き合う教師としては恰好こそ第一印象をすべて決めると言っても過言ではないからね…いつもありがとう」

先客は男であり、仕立て上がったスーツのジャケットのボタンを閉め終えてからスタンドミラーで全身を確認した。

「いえ、おじい様から代から長年お仕立てさせていただいております…服職人冥利に尽きると言うものです」

客の男はお会計を既に済ませてあるため、スーツを着たままそのまま店を後にしようとした。

「では、またスーツの新調の時に…お願いします」

「毎度、ありがとうございます」

オーナーは深々とお辞儀をして客の男を見送るが…外へ出ようとした時に外からアキたちが訪れ、客の男と鉢合わせる形となった。

「…失礼…どうぞ」

「あつ、ありがとうございます」

客の男は親切にアキたちが入りやすい様に扉を開けたままにするためドアを手で押さえながら保持して彼女たち4人全員が入ったのを見計らってから扉を閉め、店を後にしていった。

「……おや、今の子たち……」

その客の男はアキたちとすれ違いに感じた気配…特に店のガラス越しに見えるアキに客は着目していた。

「……なるほど、彼女が宮下アキくんか……」

客の男はアキを認識するなり、微笑みを浮かべつつ片手にブリーフケースを持ちながら人ごみの中へと消えていった。

一方、紳士服専門店へと足を運んだアキたちは…

「おや、これは仁科様…本日はどのような「用件で？」」

「すみません…実は今度の紳士服のモデル候補の御家族さんがモデル候補の方の「色」

「に悩まれていますのでご助言ご助力をお願いしたく…」

「ほへえ…スーツがいつばい…」

周りは普段GIRLSの制服か私服としても着ることの多い学校制服ぐらいしか着て来なかったアキの視点からはスーツだらけの専門店が別世界のように感じさせられた。

「なるほど…さようにございましたら、実際にご試着されてみてはいかがでしょうか？」

当店は婦人用スーツも取り揃えて御仕立ていたします」

「ふえっ？ボクが…着るんですか？」

「そちらの御婦人様もよろしければ…」

「ありがたい、私まで…？」

急遽アキとミオが着る用のスーツを仕立てる羽目になった。

そこから流れるような計測が始まった。腕1本で長さ、周り、指先に手の大きさ、すべて細かく計測された。全身を測定するのに1人大体15分ほど、アキとミオの2人を全身測り終えるまで約30分ほどだった。

「お二方のサイズに御合わせできるのは…こちらになります」

用意されたのは黒いスーツ…ではなく、以外にも青空色のスーツだった。

「えっ!?!黒じゃないんですか…」

「いえ、これは撮影用のスーツにございます」

「撮影用？」

ミオとアキは渡されたスーツを試着室で着替えると黒のスーツを着るものだと思いついてためか不思議な気分首が傾げてしまう。

「はあ、二人ともなんかポーズとって」

「ふえっ？……こっつ、こうですか？」

「ふふん！どうよ……」

カレンのスマートフォンで2人の写真はシャッター音と共にデータとして保存された。

「ふふふ……ここから……ほほほいのほいっ！」

カレンがスマートフォン内のアプリを利用してアキとミオの青いスーツがクロマキー合成の機能を利用してカラーリングを変えられる試着した姿に合わせて写真内で色を変えることが出来るのであった。

「ほへへ……いろんな色を選べるんだあ」

「便利ね、コレ」

「グリーンバックやブルーバックの原理を応用した最新のカラーコーディネートよ……ここから色を選べばその色に合わせて自由に変えながら選べるのよ」

早速、アプリ内のカラーを黒に変換して…黒の中から同系色を充てながら模索し始めた。

「うくん…どれがいいかなあ〜」

「私は普段の自分の色寄りがいいかなあ〜」

思い思いに吟味しながら自分にあつた色を探しているが…肝心なことを忘れていた二人であつた。

「んんっ、御二人とも真面目に選ばれているみたいですけど…モデルの方の色は？」

「あつ…忘れてた」

エミリに言われて気が付いたが…すっかりユウゴの色がどれに合うのかを決める事を忘れて自分たちのスーツの色合わせをしていることに赤面した。

「…と言うか、まだお兄ちゃんに撮影の意思を聞いてもいないから何とも言えなかつたよね」

「うんツ…浮かれていてすっかり忘れてた」

「じゃあ今度、私が聞きに行つてあげようか？」

「カレン…あんたは北海道に帰るんでしょ！大学もあるんだから遊んでないで単位とつて真面目に卒業しなさい」

大学生であるカレンはあくまで姉の店の手伝い兼東京に遊びの名目で来ているだけ

であつた。

聞きに行くなど傍から名目であるだけで実際はユウゴに会おうと言う下心などエミリにはバレバレであつた。

「いいじゃん！ミオっちの情報ではかなりのイケメンと聞くんでもおくん！会つてみた
いじゃあくん！」

「本音は？」

「彼氏候補！」

「何よソレ!?ここの露出乳袋、ウチの弟分に姉妹揃つて手を出そうだなんて……このベム
ラーの目が黒いうちは許さないわよ！」

ミオはカレンの本性を知つた途端、両手を天高く掲げ片足を上げた威嚇のポーズでカ
レンに牽制を張つた。

「フンツ！卑怯もラツキヨウもあるもんか!!怪獣娘の異性付き合ひの無さはミオっち
だつて知つてるでしょうが！」

カレンも負けじとカマキリのような構えで応戦する。

両者一步も引かぬ威嚇の構えはエミリとアキを呆れさせるほどだつた。

―後日・GIRLS東京支部―

学校帰りの昼過ぎ、この時間こそが平日のアキがGIRLSの怪獣娘として活動できる唯一の時間でもあった。

「お〜い、アギちゃん!」

「お聞きしましたよ!今度、ユウゴさんがNISHINAの紳士服モデルに起用されるそうですね」

噂好きのGIRLSの怪獣娘たちの耳には早く伝わって、普段の学校制服姿でGIRLS東京支部前まで訪れていたミクとレイカにその噂が事実かどうかを聞いただけだった。

「うん、そうだよ…お兄ちゃんに『スーツ着て、写真撮ってもらいなよ』って言ったら『あ』だって…」

「返答がまさかのひらがなで最も初めの『あ』二文字だけツ!」

「そんな返答を『肯定』と捉えてもよろしいんですかツ!」

「お兄ちゃんにとつてそれが『イエス』に等しい返答だから仕方ないよ…」

たつたの『あ』二文字を返答として示すユウゴに驚かされるが…一番の驚きはその意味を理解するアキの読解力もミクとレイカは驚かされた。

「いや〜さすがアギちゃん…なんだかりアルな兄妹感を実感させられるなあ〜」

「そうかなあ…兄妹の会話なんて大体こんな感じじゃないの？」

「いやいや、兄妹でそこまでコミュニケーションを取らずとも意思が伝わるわけじゃないからね！あたしだって姉弟が多くてもテレパシーレベルの会話なんて出来っこないもん！」

「そんなに…」

意外にも兄弟姉妹の身内がいる仲間のミクからも全力で否定されるアキとユウゴの兄妹感が異常とさえ見られていることに違いの差を思い知らされた。

「兄弟姉妹のいらっしやる御家庭ってちよつと憧れますよ…一人っ子の私には縁遠い話に思えて仕方ありません」

「ウインちゃん…兄弟姉妹の居る家庭が常に楽しいとは限らないよ」

「そうだよ、現にボクの家の場合だって…悲惨だよ」

レイカは兄弟姉妹の居ないことを良いことに2人に『憧れる』など禁句の鍵で2人の開けてはいけないパンドラの箱を開けてしまった気がした。

「何をするにも『お姉ちゃんだから』『お姉ちゃんだから』『我慢なさい』…」

「兄妹間の中で聳え立つ『年長者』の壁、絶対権力者の象徴、物理暴力の化身…」

「みつ、ミクさん…アギさん…？」

「それでも本当に……うらやましいって思う？」

「ヒイイイツ!？」

二人の淀んだ雰囲気がいよいよ絶叫させた。

「なくんちやつて……まあ、よく言われるだけなんけどね。実際は『仕方ないか』って割り切つているところもあるからさあ」

「ボクもなんやかんやで今はお兄ちゃんに食事面の面倒は見てもらつている点は感謝しているよ」

「へっ……へえ……そう……なんですかあ……」

そういうことにおくことにしたレイカだが……先ほどのアレがどこまで真実なのか、あの迫力を出せるだけの苦勞は兄弟姉妹のいる者にしかわからないのだろうと心に言い聞かせた。

そんな会話をしている内に3人は東京支部内のエントランスの自動ドアが開いて中へと入つた……矢先だった。

「アギちゃん、アギちゃん!! いったいぜんたいどういう事やねん!!」

突然、いつも絡んでくるミカツキが既にゴモラに変身してアキにとびかかって来た。

「わあっ!?! なに、なに、何なのさあ、急に……」

「急にも、急須にもあらへんねん! とにかく来てえな!」

ゴモラはまだ東京支部にやって来たばかりで制服にも着替えていないアキの手を引つ張つてエントランス奥にあるエレベーターに無理やり乗せた。

—東京支部内・待合室—

普段は来客などが来られた場合のみ担当の者が来るまでの待合場として使用されるガラス張りの向こう側に気品あふれるスーツ姿の男がいた。

「あつ……あの人……」

「やっぱアギちゃんの知り合いかあ！ユウちゃんに、白い後見人さん、一体どんだけの異性と付き合いがあるねん！GIRLSでもそうそうにおらんで、そこまで付き合いのある異性関係ツ!？」

「ゴモたんさん……さすがにそこまでは……オーストラリア支部に向かわれてしまった博士さんもいらっしやるのに」

「マコちゃん先生は別やん！あれは異性にノーカン!!」

普段、同性以外の出入りが少ないGIRLSは文字通り『女の子の花園』としての面が強かったが……そんな中での突然の見知らぬ男の来訪は新たな嵐の予見と立たぬ噂などなかった。

「だからボクの知り合いじゃない……けど。あの人は昨日メフィラス姉妹さんに紹介され

た紳士服専門店を訪れていた人だよ！たまたま擦れ違っただけで何も関係ないよ…」

「本当にそうかいなあ…アギちゃん、意外なところで顔が利くからなあ」

「そうですよ！私に黙ってアイザワ先生と仲がよろしかつたじゃないですか！ファンを差し置いてズルいですよ!!」

普段は味方として居てくれるはずのレイカが今日に限ってゴモラ側に寝返った。

「だから二人とも落ち着いて…違うからあ！」

「そうは言ってもさあアギちゃん…あの人、こつちに気づいて何か近づいてきたよ」

ミクが指差す先に男がアキたちの騒ぎに気付いて待合室のドアを開けて近づいてきた。

「君は…この間の紳士服屋さんですれ違った子だね」

「あつ、やつぱり覚えていてくださってたんですね…改めまして国際怪獣救助指導組織、通称GIRLSへようこそ…怪獣娘のアギラこと宮下アキです」

「なるほど…そうでしたか、いや失礼…僕は土田コウタ…君たちのような高校生を指導する高校教師をしている者です」

「がっ…学校の先生でいらしたんですね」

男の素性は教師のコウタと言う者だった。背丈は今まで日本人男性にしてはあまりにもかけ離れて大きすぎる人間しか見ていなかったが…コウタはその例に漏れて普通

過ぎるほどに背格好はそこまで高くないがアキたちの頭半分以上は大きいせいせい
70センチ代の中肉中背と言った所だった。

「そないな学校の先生が…なんでGIRLSにおるん？」

「実は今日、ここの怪獣娘さんにお呼ばれて助力してほしいと頼まれたんだ」

コウタがGIRLSを訪れたのはGIRLS東京支部に所属する怪獣娘からの要望
で呼ばれていた。

「お待たせしました…土田先生」

そこへ訪れたのは意外な人物であった。

「えっ！ベム!？」

「ごっ…ゴモ!?!みなさんまで…」

そこに現れたのはなんとGIRLS内で誰とでも仲良くできるゴモラと一番の仲良
しで所属時期も同時期のベムスターであった。

「なんでベムが学校の先生なんか呼んどるん？」

「ええつと…正確には私の担任の先生じゃないの…元々、*“ある人”*の担任の先生だつ
た方で…そして、今とっても深刻な事態に陥っているから助力をお願いするために御呼
びした次第で…」

かなり深刻そうな相談事の為にわざわざコウタを呼んだ張本人が一部始終を語った。

「『籠城うう!』」

全員が声をそろえてベムスターが抱える深刻な問題の答えは実にシンプルな『籠城』と言った単語で締めくくられていた。

「はい…実は私には姉がおりまして…その姉と昨日些細な喧嘩をしてしまいました…私はそのままGIRLSに出向いている間に家の鍵を掛けられてしまって…」

「つてことはベム…昨日から家に帰れてないん!」

「うん…ワケを話して何とか昨日はピグモンさんに支部内で寝泊まりをさせてもらったんだけど…自宅に連絡を入れても音信不通…と言うより連絡拒否、自宅内の出入り口から窓に至るまで完全に閉じこもっちゃいます…」

「なんか引きこもりレベル100の抵抗…みたいだね」

「ミクの言う通り…これはもはや家と言う殻に籠った『引きこもり』としか表現できない。」

「ええつと…とりあえずお姉さんにはどんなことを仰ってしまったんですか?」

「先ずアキは指導課の流れで対面形式の相談を持ち掛けた。」

「実際の音声があるので…恥ずかしながらソレを聞いていただければ…」

そう言つてベムスターが取り出したソウルライザーのデータ内から音声ファイルを開いて再生ボタンを押して皆に聞かせた。

『姉さん…もういい加減にしてください…一体、いつまで学校に行かれないつもりですか!?!』

『なによ、急に…別にいいじゃない、あたしのペースに合わせてるんだから…』

『そう言ってもう1か月も大学を休学してるじゃないですか!?!…いい加減にしないと単位も落として留年しますよ!』

『留年…そうなったら……また1年は就職せずに済むじゃん! 実質勝ち組じゃん!』

『屁理屈言わないでください! 学費だっただじゃないってお父さんもお母さんも言ってたじゃないですか! 本人たちが仕事で海外に居るのを良いことにサボろうとしないでください!!』

『ああくもう煩いうるさい!! 妹の分際で私を追い詰めないでよお!!』

—タタタタツ…:バタンツ!!ガチャツ!

『姉さん!…ちよつと姉さん! まだ話は終わってませんよ!! 鍵を開けてください!!』
ドツドツドン!

音声データはここで終了した。

「これ以降、姉さんが部屋から出てくることなく…一応の食事は用意して家を出た矢先に…今に至ると言った感じですよ」

「おつ…おう…なんと言うか…」

「その……なんと申しますかあ……」

「ベムの姉ちゃん……控えめに言つても引きこもりとしか言い換えられんわなあ……」

言葉を選んで何とか振り絞つた回答はやはり『引きこもり』であつた。

「姉さんは確かに今現状こそ引きこもりなんですが……元々、大学も両親からの就職押しを回避するために選んで進んだ節もあります。根は真面目な人なんです」

これほどまで姉を擁護するベムスターだが……肝心の問題はどうかやつてこの姉を説得して家を解錠させるかが難問であつた。

「そこで、姉さんが高校時代に担任の先生だつた土田先生にも協力を取り付けた次第なんです。……先生、姉さんをどうしたらよいのでしようか」

「うくん……僕もお姉さんとは3年次の時だけ担任をさせていただいた次第です。……お力になれますかはわかりませんが、一旦おうちの方へお伺いいたしましょう」

こうしてベムスター宅へと向かう羽目になつた。

・
・
・

―都内・ベムスター宅―

ベムスターの実家はもともとコンビナート地帯だつた地域を住宅街に変えて軒並み

ベッドタウンとして発展した地域だった。

一軒一軒が所狭しと住宅地を敷き詰め隣接し合ったことにより住宅街を形成した街中であつた。

「ここが……家です」

「へえ……ベムの家つて初めて来たわあ……」

家の外観は左右近所の一軒家と差ほど変わらぬ同じタイプの一軒家であつた。

「ドアは……案の定、鍵がかかっているよねえ」

ミクが確認のためドアノブを引いてもやはり開いていない。

「ベム、おうちの鍵は？」

「あいにく私が家を後にした時点で鍵穴を変更したらしくて……」

鍵まで変えて完璧なる籠城を決め込まれる徹底ぶりにどこにやる気を使っているのかわからぬ神経にゴモラは肩をすくめた。

「とりあえずインターホン押してみようか」

「そうだね……ベムスターさん、お願いできますか？」

「はっ、はい！」

ベムスターは玄関に取り付けられたインターホンを押して見た。案の定テンプレートな『ピンポーン♪』と言う音が流れたが……ガチャッ……

『あつ、荷物は玄関前に置いといてくださーい』

意外とあっさり出てきたが…宅配業者と間違えている様子だった。

「姉さん、私です！開けてください！」

『げっ！我が妹!!…今更何しにきた!!』

「お願い、姉さん！話を聞いて…」

何とか通じた繋がり糸を切らんとベムスターが説得に応じるが…

「こらあく！ベムを困らせるなあ!!お姉ちゃんでしょうが!!」

『はあつ？だれよアンタら…』

弱腰のベムスターに代わってゴモラたちが説得に応じるが…

『誰よ、アンタたち…』

「GIRLSや！」

「はよ、開けんかいゴラツ!!」

まるでビデオシネマの警察と任侠の一幕のような場面の中でゴモラが素性を明かし、

ミクがドアをドンツ！と叩きつけた。

『余計に開けたくなくなるわあ!!』

「ええんかい、そないなことして…こつちもこつちで強硬手段に出るでえ！」

「開けるなら今の内やぞ!!」

『帰れえええ!! 帰りやがれえええ!!』—ガチャッ…

あつさりと繋がり切れてしまいベムスターの姉の籠城は続く…

「かなり深刻な上に余計に外へ出ることも叶わなくなっちゃったじゃん!…これからどうするの、ゴモたん」

「安心せい…ウチに秘策があるねん」

そう言つてゴモラは家の扉の前に立つた。

一方、ベムスターの自宅内では未だに籠城を決め込んでか食生活乱れた食い散らかしをテーブルの上に散乱させた薄暗いリビング内でテレビに向かい合いながらゲームをする姉の姿がいた。

「ふんだあ…出て来いって言われて素直に出てくるもんか! このまま一生、出てやるもんか! 親が帰つてきても出てやるもんか! ここはあたしの最後の砦でえい…あつ、パラ落ち(パラシユート落ち)したあ〜!! もお〜!!」

テレビにゲーム機を繋いでサバイバル三人称視点ゲームに没頭するが…先ほどのこともあつてか集中が出来ず凡ミスを起こしてゲームオーバーになった。

「おのれ…妹が変な連中を連れて来たせいで集中できない…そういえば、やけに静かになつた?」

あれほど騒がしかった外が急に虫の音も聞こえなくなるほどに静まり返ったことに

余計気になり、確認のため玄関のドアまで向かい、ドアに耳を当て、音を聞いてみたが
：

ーバゴキイン!!

「ギヤアアアアアア!!」

耳を当てたドアから姉の目の前で茶色い獣殻（シエル）の拳がぶち込まれドアの壁面に穴が開けられた。

「べえむうねえ〜みいつうけえたあ〜!」

しかも、その穴からゴモラが顔を覗かせホラーチックな顔つきがベムスターの姉をロックオンしていた。

「ひいひいひいひい!!」

思わずベムスターの姉は玄関先の廊下を突っ切って走り逃げて行った。

「あつ、逃げた!…よいしょつと、開いたでえ〜」

ゴモラは空けた穴から手を伸ばしてドアのカギを開けて家に入った。

「家のドアがああ!!」

「ごめんなさい、ベムスターさん!あとで修理しますので…」

まさか家のドアに穴を空けられるとは思わなかったベムスターが嘆く中、一同はゾロゾロと家の奥へと足を進めていった。

「おっじやましまあ〜す!!」

「おっ、お邪魔します…って、あれ?…誰も居ない」

リビングまでやって来た一同は確実に部屋の中にいるはずのベムスターの姉を探すが…肝心の本人は見当たらない。

「ベムのお姉ちゃん、略してベムねえ!どこやあ〜!隠れてないで出てこお〜い!」

部屋の中を汲まなく探し回ってもテーブルには食事後などの生活の痕跡はあれど、リビング内にはソファアアの上のぬいぐるみ、床下には怪獣のマットレス、その他なかなかのデザインの家具家電を揃えた空間だった。

「まだそう遠くに行ける猶予もない筈なんやけど…どこに消えたんや?」

ゴモラは部屋の中を物色して見る中で大きな足がズタズタと踏みしめて歩き回っていたら…

「ぐえっ!?!」

「んんっ?なんや…今の?」

周囲を見わたしても先ほどの声を出せる者が検討つかず頭を人差し指で搔いた。

「どうしたの、ゴモたん?」

ゴモラが何かに気づいたと思ったアキは彼女に近づくと道筋で…

「ぐいいいいいい!!」

悶えるような金切り声がどこかで発していると思い、周囲を見わたしても何も誰も居ない。

「なんなの、さつきからこの声…」

「どっから発しとるんや?」

二人は段々と恐ろしくなってきたて背中合わせで周囲を警戒するが…

「おつ、おつおつおつお前らいつまで人の上に乗つとんじやい!!」

「うおつ!」「うわっ!?!」

突然、ゴモラとアキが揺れる床からバランスを崩してソファアに転がった。

「ゴモ!アギラー!そこよ!そこに姉さんがいるわ!」

ベムスターが指さす方向は…怪獣のマットレスかと思われていた物体が実はベムスターの姉であった。

「ギヤアアア!マットレスから人が出て来た!!」

「アホか!元から人だよ!!」

思わず絶叫するミクに人であることを明かしたのが正真正銘のベムスターの姉…そして…

「ええつと…ご紹介しますと、姉のベムスター…:正真正銘の宇宙“大”怪獣ベムスターの怪獣娘です」

「おつ、お姉さまも…怪獣娘さんだったんですか!」

「そうだよ!…ウチの妹がベムスターって言われているけど…本来はあたしがベムスターなんだよ!」

怪獣娘ベムスター…その見た目を一言で表すなら、頭に怪獣を被った自堕落な女子大生と言った印象であつた。

「なんで?…ベムがベムスターじゃないん?」

「ゴモ…実は私の怪獣の正式名称は宇宙怪獣『改造ベムスター』だよ…元はヤプールっていう異次元人がベムスターを改造して生み出された再生怪獣、けれど厳密には別個体同士…つてことになっているの」

意外にもベムスター姉妹の怪獣娘としての経緯は仁科姉妹同様に姉妹揃つての怪獣娘であり、初代と二代目のような姿形の違う怪獣同士を別個体として扱つた場合と同じく通常のベムスターと改造されたベムスターと言う同じなように別個体の怪獣同士の姉妹怪獣娘であつた。

「お前ら揃いも揃つて…人の家をズケズケと…つて、なんで土センが居るの!」

「やあ、お久しぶりだね」

「ちよつと、姉さん!土田先生でしょ…土センなんて軽がるしく呼ばないの!失礼ですよ!」

思わぬ形で元恩師との再会となつてしまつたが…自分の今の格好を自分自身が自ら
の目で確認するベムスター（姉）は胸部の範囲だけ布面積しかない服、足元はおろか太
ももさえも隠しきれていないホットパンツ、所謂部屋着程度の動きやすい姿だが決して
人前に出れるような恰好ではないと悟るなり徐々に顎から額まで真っ赤になり始めた。

「うわああああああああ!!見るなあああああああ!!」

突然、痙攣を起したとばかりにコウタを始めとする怪獣娘たちへぬいぐるみなどを投
げつけた。

「わっ、ちよっ…姉さん!やめて下さい!!」

「うるさい!うるさい!!よくもあたしを辱めてくれたなあアア!!妹の分際で…いつもそ
うだ!!あたしは怪獣を被つただけみたいな姿、アンタは怪獣娘としてしつかりとした造
形、なぜ姉妹でこれほどの差が生まれるんだアア!!不公平だ、不公平だアア!!姉
より優れた妹などこの世に存在などするもんかああ!!」

思い思いに今までの鬱憤をベムスターとその他の協力してくれた怪獣娘たちとコウ
タに対して物を使ってぶつけ尽くすと物が尽きるのはあつという間であつた。

「うっ…うううっ、うわああああああああ!!」

ベムスター（姉）は走り去つて二階の自室へと更に立て籠もつた。

—ガチャン!ガチャン!ウイーン!ガチャガチャン!

しかも部屋のドアから幾層もの施錠までかけて完璧に塞ぎ込んでしまった。

「ベムねえが二階に上がって行つたでえ!？」

「ああなつたら本格的に引き籠つちやつたね」

「なんてことだ…しかもよりによつて二階は姉さんのテリトリー…地味に部屋を魔改造して嚴重な電子ロックまでされているから本人が内側から開けないと出てこない仕組みになつてゐるんです」

「なんでそこまでしてゐるのさあ」

「姉さんはアレでも結構優勝な理工学部生なので大学から無駄に知識だけを抽出して引きこもりに特化したせいで自分から殻を強化するから非常に厄介なんです」

「なんでそこまで出来るのに真面目に学校へ行かないの!？」

普段は自分でも真面目とは言い難いミクですらベムスター（姉）が引きこもるためにする行動力があるもはや常軌を逸しているとさえ思えた。

「申し訳ない…僕が顔合わせるのは余計に悪かつたようだね」

「いつ、いえい!そんなことございませぬ!…寧ろ、お呼びしておいて姉が変わらず失礼を…本当に申し訳ございませぬ!」

ベムスターは姉に代わつて皆に深々と頭を下げた。

「打つ手なしなんかなあ……そないやつたら万事休すやで」

「彼女の気持ちに変化がなければ出る事など叶わないのかもしれない…一応、こういったものも持参してきたんだが…」

コウタはブリーフケースから「ある物」を取り出して皆に見せると…ゴモラは不気味な笑顔を見せた。

「ごっ、ゴモたんが…悪魔みたいな顔をしている」

普段の彼女を知るアキたちですらゾツと背筋を凍らせるような笑顔に何か不穏な気配を感じた。

「あーあー、マイクテス、マイクテス…聞こえるか、ベムねえ！」

ゴモラはソウルライザーのマイク機能を使って声を拡大させ家中に響くような音声でベムスター（姉）に訴えかけた。

「何よッ…うるさいわねえ…もう出てやるもんか！一生ここから出ないぞ！」

ベムスター（姉）も部屋の壁越しに負けじと抵抗の意思を示して一歩も出ないことを誓った

「出たくないのは構わへん…そんなに出たくないんならそのままいなはれ！これからベムねえの先生からありがた〜いお話があるでえ…では先生、お願いします」

ゴモラはソウルライザーをコウタの口元に近づけた。

「わかりました…ベムスターくん！聞こえるかい？…あえて君の本名は言わずに僕もベ

ムスターと呼ばせてもらうよ!…君は本来、感性豊かな子だった!僕は今でもそう思っている!卒業の日に君が渡してくれた…この手紙を見てそれを実感した!

その手にはかわいらしい刺繍で彩られたメッセージレターだった。

「フアアツ!?卒業式の手紙…つて…ちよつと待った!!」

ベムスター(姉)はその手紙が意味することが何なのか即座に理解した。

「ええかあ!はよお出て来んと、今から先生にはベムねえが渡したラブレターを読み上げてもらうでえ!」

「やあめえろお!!ちよつ、それ、ラブレターとかじやないから!!卒業の日の感謝の手紙的なヤツだから!!みんな誰しもが書いたヤツだから!!」

ドア越しにドンドントン!と音を立て抵抗するが全く抵抗にならない、止めたければドアを開けるしか手段は無かった。

「出て来へんなら読み上げてもらうでえ! それじゃあ先生、お願いします」

「では、僭越ながら…んんっ!……拝啓、土田先生——」

「ふああああああ!!やめろお!!読むなあ!!マジで読むなあ!!わかった!!今、開けるから!!開けるから読まないでえええ!!」

とうとう読み上げられ始めた途端、ベムスター(姉)は部屋を出ることを決意したが

…

「あつ…あれ?…これ、どうやって開けるんだっけ!?ちよつと待って!マジで待って!!ちよつ、開かない!!自分で作ったロックが開かないよおお!!」

「そないな嘘で誤魔化されるかああ!!では先生、続きをどうぞ」

「——始めてお会いした日から私は先生のことか……」

「ふああああああ!!やめろおおマジでやめろおお!!」

絶叫して読み上げるコウタの声をかき消そうとするがドンドンと読み進められていった。

——10分後——

「——以下、卒業しても先生のことを忘れません」

手紙の末まで読み終えたコウタだったが…部屋からあれだけ大きな声で妨害しようとしていたベムスター（姉）の声が途端に聞こえなくなっていた。

「ベムねえ、出てくる気になったか!」

「ふざけんなああああ!!出ようとしたのに出れず、堂々と手紙を全部読みやがってええ!!あたしは社会的に殺されたも同然じゃないか!!」

「そんなことないよ、姉さん!とても素敵なお手紙じゃないですか!姉さんが人に素直な気持ちを手紙にした様子が重々伝わりましたよ!」

「いや手紙というか…」

「ほぼほぼ、ラブレター…」

「でしたね」

手紙の内容をすべて聞いたアキたちからはラブレターとしか受け取れないような内容に苦笑いするしかなかった。

「死ねえええ!!もうぜえええったいに出てやるもんか!!部屋どころか、布団からも出てやらんぞ!!」

とうとうベムスター（姉）は部屋から出ていくどころか掛け布団に包まってベッドから出てくることさえも拒否した。

「おいしいツ…あとちよつとなんやけどなあ〜」

「あのさあ、ゴモたん…ベムスターさんのお姉さん、手紙の途中で出ようとしたけど、なんか部屋のカギが開かなかった様子だったよ…これって、施錠した本人が部屋から出て来れなかったんじゃないの?」

アキは不思議と出ようとしていたベムスター（姉）の行動を理解した。単に出たくても出られない状況であることが余計に籠城を決め込むきっかけになっていたのである。

「それって…緊急事態やん!せやったら人命救助優先やな!…ほな、先生…ちよおくと失礼しますう」

ゴモラはコウタの背中を押しして部屋の前を自分一人にさせた

一方、部屋の中では掛け布団に包まってベッドの上でシクシクと泣きじゃくるベムスター（姉）がいた。

「ううっ…もうこれじゃあ部屋から出るだけでなく、GIRLSにすら顔出せないじゃないの…死んだ！あたしの人生はここで死んだも同然だ！…ここがあたしの棺桶だ！」
先生への手紙を堂々と人前で読まれた反動はかえって自分を卑下にして人生さえも諦め切っていた。

そんな時だった…

「超ッ振動波ああああああああ!!」

—ズウドオオオオン!!

「ギヤアアアアアアアアアア!!」

ロックが掛った部屋のドアごとゴモラのツノから発せられる超振動の破壊光線で無理矢理こじ開けられた。

「いやあく久々に超振動波つこおたわ〜」

「まさかこんな形でゴモタんの『超振動波』を拝む結果になるとわねえ〜」

続々と破壊したドアを踏み越えてベムスター（姉）の部屋に全員が入って来た。

「姉さん！もういい加減に出てきて…でないとゴモたちに家を壊されちゃうよ〜」

妹のベムスターは掛け布団に包まる姉を揺すって何とか説得を試みようとしたが…

「知るか！既にあたしの部屋にズケズケと入ってきた奴らの言う事なんぞ聞いてやるもんか！」

布団はより固く捲れることさえも無いほどの饅頭状に丸まって開くこともできないが、唯一の頭から生えた黄色いツノだけが掛け布団の隙間より露見していた。

「コラアアア！人と話す時は…面と向かって喋りなはれ!!」

ソコへすかさずゴモラはベムスター（姉）の角を掴んで引つ張り始めた。

「ちよつ、やめえつ、ツノはヤメロ！ツノを引つ張るなあ!!」

「今や、ベム！掛け布団の方を持って!!」

「うつ、うんツわかった…姉さん、ごめんなさい！」

「みんなも手伝だあてなあ！」

ベムスター（姉）の強情な抵抗から抜け出させるために強引にも力づくで彼女を引きずり出すことを決意したゴモラ率いるGIRLS勢は全員が頷いて理解し合った。

「ソウルライド!!」

「アギラ!」「ミクラス!」「ウインダム!」

残りの3人もそれぞれ怪獣娘へと変身してゴモラの後ろから彼女の腰、アギラの腰、ミクラスの腰へとそれぞれが手を回して連結した力を発揮した。

「おんどりゃあああ!!」

「やあめえろおおお!!マジで抜ける!怪獣と人間の狭間の頭皮があああ!!頭皮が抜けちゃううう!!お坊さんになっちゃううう!!」

ベムスター(姉)は懸命にも抵抗するが…力の差は歴然、1対5の総力戦は人数最多のゴモラたちが有利である。

ズルズルと布団から頭と胴体が出てくる。

「もう少しやあ!踏んじ張れえい!!」

「踏ん張るなああ!!やばい!抜けそう、抜けちゃいそう!!女にとって抜けちゃダメなモノが抜けちゃううう!!」

最後の最後まで抵抗するベムスター(姉)…しかし、終わりは突然、やって来た。

—…スポオオン!

「ふぎやアア!」「ぶえっ!?」「ぐびい!!」「ごぶう!!」

先頭からゴモラが腰から崩れ、アギラはその衝撃を伝い、ミクラスを挟んで、ウインダムを最後に玉突きのように要撃が走った。

「うわあああ!!抜けたああ!!とうとう抜けたああ!!あたじの髪の毛があアア!!」

「ねっ、姉さん!落ち着いて!落ち着いてください!」

「落ち着けるかああ!髪が抜けたんだぞ!あたしのチャームヘヤーがあああ!!」

「だから落ち着いて!大丈夫です!髪は抜けてませんって!驚くほどに何ともなってい

「ませんから!!」

勢いよく抜けたモノが髪の毛だと勘違いしたベムスター（姉）は実際に頭皮を触りまわっても確かに抜けた髪は一本もなかった。

「いったたあゝ…何い?今…スポン…って…」

起き上がってゴモラが自らの手でベムスター（姉）より抜き取ったモノが何なのか…その答えは自らの右手に持っていた。

「へギャアアア!!へギャアアアア!!」

「ギャアアアアアア!!なにこれえええ!!」

ベムスター（姉）から抜き取ったのは…普段より彼女が怪獣娘としての特徴とされていた唯一無二の獣殻（シェル）…それが自ら意思を持って勝手に動いていたのであった。

「べっ、ベムスターさんのお姉さんのベムスターが…」

「勝手に動いているうう!!?」

「って言うか、着脱式だったんですか!?!」

あまりの衝撃に怪獣娘たちは困惑した。事実、ベムスター（姉）の一部であったベムスターの部分は今も部屋の上をグルグルと飛び回っていた。

「ねっ…姉さん、アレは一体どういう事なんですか!?!」

「おっ、お前すっぽ抜ける上に喋って動けんのおお!?!」

何がどういふことなのかわからないベムスター、肝心の持ち主たるベムスター(姉)も自分の怪物である部分が生きているとは思っていなかった。

「へギヤアアア!へギヤアアア!!」

ベムスター(姉)から分離したベムスター(殻)は部屋の上を飛び回り続けると…やがて下降してアギラに飛び掛かった。

「へっ?フギヤアアアアアア!!」

飛び掛かって早々にお腹の口部分が開いて彼女の顔面に張り付いた。

「ギヤアアアアアアア!アギちゃんグロい食べられ方されてるうう!!」

「あつ、アギさん!大丈夫ですか!」

「うげええ!!変な汁が出て来たし、臭いよおお!暗いよおお!助けてよおお!!」

アギラは精いっぱいベムスター(殻)を引きはがそうとすると…ベムスター(殻)が飽きたのか、アギラから剥がれて次はミクラスに飛んで行った。

「うぎやあああ!!今度はあたしの方にいい!!うげえくつさあああ!!くざいいいい!!顔がなんか熱くなってきたああ!!うがああああ!!」

ミクラスはアギラよりも簡単に引きはがしたが…今度はウインダムの方へと飛んで行った。

「うわああああ!!眼鏡があああ!!眼鏡に変な緑色の汁が付いてますうう!!しかも、

中が凄くグロいですううう!!」

眼鏡をかけている分、余計に鮮明な光景を目の当たりにしていた。

「うおおお!!ダム子から離れろおお!!」

ゴモラはウインダムにへばりつくベムスター（殻）を剛腕で引きはがすと…ベムスター（殻）を右手で掴んだまま飛び上がり…

「うおおおおおおお!!テールアタアアアクツウウウ!!」

臀部より生えた自慢の尻尾で振りかぶりベムスター（殻）に殴打すると窓ガラスを突き破って外に飛ばしていった。

「うわああああ!!あたしの怪獣娘としてのアイデンティティがあああああ!!」

ベムスター（姉）は自身のベムスターとしての一部が窓より打ち飛ばされて消えたことに手を伸ばしても届くはずもなかった。

「ごっ、ゴモたん…あのベムスターさんのお姉さんのベムスターの部分って…外に逃がしてもよかつたんだっけ?」

「…あつ、やつばああ…」

慌てた拍子に打ち返してしまつたが…アギラに言われて考えても逃がすとマズいことになると段々とゴモラは顔を青ざめ始めていた。

ーベムスター宅 玄関前ー

『なあくくくしているんですかあああ!!』

ソウルライザーからこれまでに無いほどの大声量で音割れするピグモンの怒号はゴモラたちを震え上がらせた。

「ごっ、ごめんちゃん…ピグちゃん!…それよか、この通り…」

「おりやああ!!」

「いだっ!何すんのさあ!!」

「ミクちゃんに骨を折るつもりで殴ってもらったけどベムねえは無傷な所を見ると…あのベムスターヘッドがベムねえから外れても外見上ベムねえは人間体でも怪獣娘のままみたいやねんけど…どゆこと?」

ベムスター(姉)は『骨折るつもりだたん!?!』と驚きながらもソウルライザー内のピグモンは深く考えた末に結論を出してきた。

『結論から言つて、ベムベムのお姉さんの怪獣さんは? 離型なのかもしれません…滅多に居ないケースですが、怪獣娘の一部として生まれたテルテルことツインテールのグドンと同じケースかもしれませぬ』

「つまり、漫画で言う所の『能力の一人歩き』みたいなものなんでしょうか?」

ウインダムは自身の漫画知識の中で理解できそうなイメージを例に挙げた。

『まさにそんな感じですよ！…とは言っても、怪獣娘の変身が解除されたわけではありませんが、ベムベムのお姉さんは怪獣さんを用意に遠隔操作しているような状態、それも一歩間違えば形の変えた暴走状態になるかもしれません！直ちにベムスターを確保してベムベムのお姉さんの頭に戻さないと大惨事になるやもしれません!!』

事態は深刻を有すると判断したGIRLSは今いるメンバーで無人遠隔操作状態のベムスター（殻）を確保することになった。

「けど、ゴモたんが吹っ飛ばしちゃったから…どこに行つたんだろう?」

「あつ、あのさあ…一大事な時に申し訳ないんだけど、なんか急にお腹が…いっぱいと言うかドンドン膨れ張つて来た!!」

ベムスター（姉）はお腹を押さえて便秘気味のような感覚に襲われていた。

「それって…あのベムスターヘッドが食事をしているってこと?!」

『今しがた都内のSNSアカウントから上野公園付近で風船配りのイベント会場に黒い物体が飛来した目撃情報が入って来ています!』

「風船の空気の原料は…ヘリウムガス!」

ベムスター（殻）の目的は食事、その詳細を詳しく調べるためにウインダムはソウルライザーの図鑑から宇宙大怪獣ベムスターの項目に辿り着いていた。

「載っています! 図鑑にはベムスターが地球に飛来してきたのには豊富なガス燃料を求

めて来たとありますよ！」

『ガスであれば何でも良いのかもしれませんが！手短かに摂取できるヘリウムを求めて上野公園内に向かったかもしれません…至急、アギアギたちは先行して上野公園を搜索！ゴモゴモとベムベムはそのままご自宅で待機しててください！遅れはしますが双方に応援を向かわせます！』

GIRLSの指令室からピグモンからの命令に合意の上に従い行動に移した。

「ボクたちは先に上野公園に向かおう！」

「アギちゃんたち…：御願いなね」

「了解です！」「わかりました！」

「行こう、上野公園に！」

アギラたち3人は上野に早急に向かつて行った。

「こんなことになるなんて…：土田先生、お呼びしておいて申し訳…あれ？…：先生？」

ベムスターは姉を介抱しながら後ろを振り返ったが…そこに土田コウタはいなかった。

その代わりに穴の空いたドアには『また会いましょう 土田』と置手紙が添えられていた。

—上野公園内—

上野まではベムスター宅から少し走れば着く距離に上野公園へ3人は入った。

園内は既に避難誘導で無人となり、混乱時に破壊された形跡が残る現場となった。

「アギちゃん、あれッ！」

ミクラスが指差す先には弾けた風船の残骸、転がる穴の空いたヘリウムボンベ、ベムスター（殻）が襲った形跡が至る所に転がっていた。

「御二人とも……この網、使えるかもしれせん」

ウインダムは破壊された売店内から虫取り網を持ち出してアギラとミクラスに手渡した。

「それじゃあ、三手に分かれて搜索しよう！……ミクちゃんは上野動物園側を……ウインちゃんは美術館側を……ボクは博物館、手分けして回って探そう！」

「了解ッ！」「了解です！」

三人はアギラの提案通り3カ所の上野公園の名所付近を重点的に回るためそれぞれ分かれて向かった。

—ヒョッコッ！

しかし、ベムスター（殻）の居場所は意外な所での灯台下暗しだった。

実際はアギラたちが上野公園内に入った地点の銅像の陰に隠れていた。ベムスター（殻）には気配でアギラたちが自分を探しに来ていることなどお見通しであった。

「ヘキヤアアア！ヘキヤアアア!!」

自由の身を謳歌するかのようにはベムスター（殻）は銅像の上を旋回して遊び回った。

「…灯台下暗しとは正にこういう事なんだろうけど…一般的には灯台を連想するのは大抵が岬や港の灯台だが、実際は鎌倉時代より『燭台』で表現されることわざ何だけどね…まあ、どちらで使おうが身近なところほど見落としがちと言う意味であれば良いだけ」

ベムスター（殻）はちりじりになって自分を探しに向かった怪獣娘たちでは見つける事の出来なかった自分を最初から気づいていた者に…敵性の脅威を感じた。

野性的に判断した結果、気づかれた以上は始末することを選んだ…が、襲い掛かった矢先に自分の中で何か急ブレーキを掛ける本能のようなモノを感じ取った。

「良い子だ…僕の教え子の一部なだけあってとてもいい子だが…詰めが甘いようだね」
ベムスター（殻）の目の前には人間の中では何ら脅威にすら感じていなかったこの男が突然、凶暴で危険極まりない大怪獣のような気配を感じ取った。

「君にもわかりやすい…自然界社会のシンプルなルールを授業しよう。 虎の尾を踏む

ときはそれ相応の同格な実力を兼ね備えてコレに挑め……だが、それは動物の中での話だ。怪獣はそもそも行かない」

男はネクタイを外してキツチリとワイシャツのすべてのボタンから第一第二のボタンを外して首元を晒した。

「怪獣は強者蛮行、強いものほど身の程弁えぬ力に溺れやすい……今の君にピッタリの言葉じゃないかい？まあ、たつた今考えた造語四字熟語なだけどね」

ベラベラと長い話をする人間の男……しかし、脅威を排除しようとする本能に従ってベムスター（殻）は男に突っ込んだ。先手はベムスター（殻）のツノから発せられる光弾だ……だが、どういうわけか真っ直ぐ跳ばしたはずの光弾は軌道を反れて地面へと落ちた。

「へギャアアア!？」

何が起きたか分からぬままベムスター（殻）は自らの身体を男へと突っ込んで行った……が、これもまた得体の知れぬ力場に囚われ、ベムスター（殻）は地面に突如押し付けられるかのように落ちてめり込んだ。

「へギャアアアアアッ!？」

「コラコラ……人を見た目で判断することなかれ、一見弱そうに見える人ほど怒らせると怖いってよくあるだろう……怪獣であれば猶更だ」

男の姿は擬態だ。ネクタイを締めていたワイシャツも、仕立て上げられていたスーツも、すべて擬態だ。

真の正体は犬歯類のような顔つきにアンテナのような大きな耳、ベムスター（殻）と同じく黄色いツノだがこちらは眩いほどに輝いているが、輝かせる光に照らされるその目は充血を超えて獰猛性さえも認識させられるほどの赤い目つきをしていた。

「僕はバラゴン…君と同じ怪獣だけど、人間の知恵を持つ矛盾したような存在さ」

怪獣の身体に人間の恐ろしさを兼ね備えた存在を目の当たりにしたベムスター（殻）にもはや戦意はあるはずもなかった。相手は地面から自分を引き合わす未知なる力を秘めた最脅威だ。自分の居場所さえ分からなかったあの怪獣娘三人よりも危険な存在だと脅威判定が変わったのである。

「さてと…君にはもう敵意を感じなくなった…でも、君は違うだろうか？」

—チャキツ：

自らの身体を怪獣へと変異させたバラゴンの背後に銃火器を構えた青い鎧を着た警察官『アルトリウス』がバラゴンを至近距離まで捉えていた。

「おやおや、そのやけに物騒なモノ…僕に向けられているのかな？」

バラゴンは自身の身よりもベムスター（殻）の身を案じて能力を解除して手で払うジェスチャーをしてベムスター（殻）を逃がそうとした。

当然、その仕草に従ってベムスター（殻）は即座に飛び立った。逃げることに一択に全力を費やしてまで飛んで逃げた。

しかし、アルトリウスが向けた銃口をバラゴンではなく…飛んで行ったベムスター（殻）に向けた。

そして、発砲!!…したが、弾丸は放物線を描いて地面に落ちて来た。向ける相手を変えて今度はそのままもう片方の拳銃と共に二丁で発砲を繰り返すが全弾バラゴンに着弾することなくずつと地面に突き刺さるが如く落ちていた。

「なるほど…君が、ゴジラの言っていた警察の対怪獣兵器くんかい?…となれば、要るんだらう!?警察の皆さん!!」

バラゴンは大きな声を挙げて周囲に警察が控えていることを見透かしていた。

「そこを動くな!!監視庁特異生物対策部です!通報を受けてあなたを確保します!!」

公園内の茂みから沖田と坂本を始めとしたアヴァロン・ユニットと共に武装した機動隊とS A Tのチーム編成部隊がバラゴンを取り囲んでいた。

「なるほど、大佐さんの言う通り…僕たちを捜査対象とする警察組織が内在していたとは…」

「口を慎みなさい…怪獣のくせにベラベラとお喋りね…まさかあなたを始めとした現状6号個体も同じく人間と言うワケ?…一体どうなっているの?」

「おつ、沖田さん…どうします？これって逮捕に該当するのでしょうか？」

沖田と坂本の手に警察では見られない独特の形状をした拳銃を構えてバラゴンに向けているが…

「坂本さん！ユニット長の権限でスペシウム兵装の許可を下しているんですよ！…いざとなつたら『スペシウム光線』出しちゃっていいってお墨付きです！」

「まじかあ〜！訓練は受けているけど、アレツ肩やるんだけどなあ〜」

坂本と沖田は話し合った末に携行する特殊拳銃の認証を解除して弾丸を収める六連のシリンドラーから何らかの青白い液が充填されてチャージが完了した。

—Anti-singular creature execution gun
 “Speral Canon”
 Specium filling complete, aim locked on target—

しかも、拳銃から英語の音声の流れ出し銃口部分からI字状の青白く光る更なる銃口が露出した。宛ら近未来的な電子制御の拳銃のようであった。

「おや、穏やかでは無いですね…けれど、この状況を追い詰めたと思われていらつしやるようですから…逆転の発想をしましょう…もう出てきていいですよ!!」

バラゴンを囲む警察部隊の周囲に生い茂る木々より飛び出して現れたのはバラゴン

以外の怪獣戦士（タイタヌス）たちだった。その面々は、ガメラ、コング、アンギラス、ラドン、バトラの5体だった。

「とつ、特生怪獣：第2、第3、第4、第5、第6…ああもう、どんだけ居るのよッ!」「こつ、これは想定外すぎますよ!?!どうしましょうか!?!」

想定外のあまり誰に拳銃を向けるべきか沖田と坂本は困惑していた。

そして、警察部隊の目の前には見るからに凶暴で凶悪な面構えをした携行する銃火器など無意味にさえ感じさせられる戦力差に機動隊員もS A T隊員もフェイスガードやゴーグル内の皮下から汗が滝のように滴っていた。

— 東京国立博物館 —

館内・日本館

そんな緊迫する現場に先ほどまで居たことなど知る由もないアギラは公園内の博物館に訪れていた。

館内は避難誘導で人気が無くなり無人となった博物館を一人で虫取り網を両手で握りしめながら1歩数センチ単位でゆつくりと進んでいた。

「ううっ…無人の博物館って…なんか怖いなあ…」

恐る恐る足を近づけたのは特別展示室『日本の出現怪獣展』なる場所へヒョコツと顔を覗かせると…無人のはずの博物館に人影がいた。

(ひいつ!?だっ…誰かいる!?)

思わず隠れたアギラは虫取り網を強く握りしめて…恐る恐る、展示室内を再度見るとやはり誰かいた。

「あつ…あの…避難に逃げ遅れた方でしょうか…ここは危険ですので避難誘導に従ってください!」

アギラは展示のレプリカの等身大怪獣標本を眺める何者かに声をかけるが…返答はない。

「…哀しいですねえ、この生き物はこの地球上の生態系内で出現するはずの無かった生き物…生まれただけで滅せられなければならない存在とは実に哀しい」

しかし、見学者は自分から喋り出した。面と向き合う怪獣を見つめて思う所があるのか、怪獣をただ『哀しい存在』だと言った。

「なっ…なんのことですか?それよりも早く逃げてください!館内に暴走中の怪獣娘…の一部?…みたいなのがいるかもしれないのでボクの誘導に従って…うっ!!」

ワケが分からないことを喋る変な見学者であつてもアギラは展示室から見学者を連

れ出そうとしたが…その手に触れた瞬間、恐ろしいほどに冷たさを感じた。

「おや、あなたの手…なんだか妙な温かさを感じますねえ…：人はこういうのを『不愉快』と感じるのでしょうか？」

「あつ、あなたは…誰なんですか？」

「おや失礼しました…：私は緒確タケル、警視庁特異生物対策課の警視です」

「けっ…警察？」

その見た目からは到底警察官とは思えなかったアギラだがその男からは何か恐ろしい気配を感じるほどにシャドウに対する喉の奥がざわつくような感覚ではなく、内なる神経を逆なでられ、見透かさる感覚に素肌部分の産毛が鳥肌を立てていた。

「…宮下アキ、カプセル怪獣アギラの怪獣娘、年齢は16歳、戸籍家族構成は祖父、父親、母親、兄、あなたの3世代家系、しかしながら父親は生まれつき行方不明、3年前に母親が病で他界、以後祖父の下で3年間共に同居したが今年に祖父も他界、以後後見人の保護下のもとで生活…：今年の4月頃に怪獣娘として自覚後にGIRLSへ入所、1ヶ月と半月にて同組織の指導課に配属…：お間違いないありませんか？」

「なっ…なんでボクのことそんなに詳しく知ってるんですか!？」

アギラは突如、自分の経歴まで知っている緒確に向けて虫取り網を構えた。

「ただの職務質問です…：警察官らしいでしょ」

「警察官がそんな細かいボクの情報を把握しているなんて…プライバシーの侵害です！」

アギラはプルプルと震える手であっても強く虫取り網を握りしめて緒確に構えるが…得体の知れない緒確に恐怖を抱いていた。

「その通りです…アキさん」

ふと、背後から聞き覚えのある安心する声のアギラの耳を通ると彼女が振り返った後ろでは近い距離でアギラの傍に寄り添うダグナが居た。

「ダツ、ダグナさん！」

「遅れて申し訳ありません…エリアス王女の一件で処理に手間取ってしまいました、何とか間におおせたようですね」

そつとアギラの肩に手を置いたダグナの手はアギラ以上に温かな安心感に包むよう、で自然と手の震えも恐怖心も薄れていた。

「ほう、あなたが宮下アキの後見人ですか…若干、私とキャラが被りますね」

「いいえ、まったく…お噂はかねがねお伺いしております、緒確タケル警視」

向かい合つて一直線上の展示室、アギラの後ろに入口、緒確の後ろに出口、そして周囲は博物館が誇る怪獣標本の展示品が立ち並ぶ場で出会ってはよろしくない者同士が睨み合う…必然的に危険と言えよう。

「一先ず…任意で署までご同行願えますか?」

「断ると言えば…その腰に装備された液化スペシウム充填式の拳銃を抜くおつもりでしょうか?…ならば、お断りします」

一見は穏やかな物言いを双方語り、出方を伺う薄ら笑いの表情…直後、互いに拳銃を抜いて構える臨戦態勢の状態になった。

「ダツ、ダグナさん!? けつ、拳銃!? 拳銃なんか持っていたんですか!」

「はい、モーゼルC96…長らく私の愛用として使用してきた骨董品ですが整備は万全です」

「そうじゃなくて!! 銃刀法違反!! 銃刀法違反ですよ!!」

どう考えても明らかにアギラ側が刑法違反をしているが…それを超えて相手側も通常拳銃とは思えない形状をした近未来染みた拳銃を向けていた。

「ご明察の通り…これは液化スペシウムをシリンダーに装填した特殊弾薬放出型の拳銃です。早い話が『スペシウム光線』が撃てる武器ですよ」

よりにもよってアギラですら聞いた事のある『異性からの助力者』『怪物の天敵』『人類の救世主』たるあの『ウルトラマン』が用いていた必殺技『スペシウム光線』が撃てるというとんでもない武器を警察が持ち寄っていることに驚いていた。

「ひいひい! なんてそんなものを…」

「アキさん、私の後ろに隠れていてください」

アギラは撃たれる恐れを感じてダグナの後ろに回るが…それでも現状拮抗状態は変わらないかった。

「互いに銃火器を向け合う…一触即発とは正にこのことなのでしょうね」

「いいえ、それはまだこちらの手の内を明かさぬ内は拮抗するのもわけありません…そうですね、ユウゴ君」

「フンツ、互いに武器をちらつかせ…撃つ撃たぬの拮抗なぞ『核抑止』の体現だとしても。

馬鹿馬鹿しい」

「おつ、お兄ちゃん…」

更に後ろの入り口から入って来たのは肉体を硬質な黒曜の体表で覆いつくしたユウゴことゴジラの姿で緒碓の前に現れた。

「おく、君が怪獣王ゴジラ的能力者…お初にこの目に掛けて光栄だ」

「こんにちは、干物化石野郎…そして、消え失せろ…俺の視界に1ミリでもそのニヤつたれたツラを見せるなボンクラ!!」

「おやおや、仮にも国家権力の組織に属する私に対して侮辱的なまでの発言!!…聞き捨てなりませんねえ…ならばこちらにも相応をお答えせねばなりません」

そういうと緒碓は構える拳銃とは逆の手で指先をスナップして音を響かせると…誰

も居なかつたはずの出口側に人影が立っていた。

そして、その人影は手にペン型の何らかの装置を持ち出してボタンを押すと光輝く真つ赤な異空間を形成して姿を変えるとコートのみを残した顔にヒビ割れた傷のあるウルトラマンがその姿を現した。

「ご紹介しましょう……今は無き『光の戦士の生き残り』 最後の超常人種” 外宇宙からの助力者” ……貴方がたもご存じの『ウルトラマン』 ……と、言われるのは彼は望まないものであえてご紹介する名は『アルトリウス』、光を失い巨大化することは叶いませんが十分に現世界に蔓延る怪獣モドキと張り合える力を持つ者です」

「ウソツ……あれって本当に……ウルトラマンなの!？」

アギラも思わずその姿に疑いたくなくなってしまふ変容ぶりに後ずさりして腰が抜け、尻もちをついて床に腰が落ちた。

さらに紹介された真のアルトリウスは手からあの機械仕掛けの鎧の時の姿で所持していた両刃の剣をレプリカ標本と言えど展示品の怪獣に突き刺した。

「私は影より出でた者、父なるケンの威光の下、母なるマリーの慈悲の上、星の大地に仇を為す愚かしき獣たちを滅する刃にして砦、光を持って闇を祓いて、恐れを無くして勇敢なりて汝これを滅す、不条理に怒れ、不変に抗い、我は星の戦士、星の戦気は我にあり、星の使徒とは我がなりけり、我が名はアルトリウス……お前たちを狩り立て滅する者

なり」

アルトリウスは突き立てた怪獣のレプリカ像を歩きながら斬り落として胴体から横を真つ二つに歩き進んで緒確まで辿り着くと計10体分のレプリカ像を斬って持ち構えた。

「眼前のまな板上の魚を前にして何が警察機構か、何をもって警備組織だ、宇宙警備隊として有無を言わさず抹殺してやる、大トカゲ!!」

「ほおう……いつぞやの鉄仮面野郎が、どの面下げて来やがった? ぶち殺すぞ、銀メッキ: どうした? 殺るのか? 殺れんのか? 仏頂面!!」

同じくゴジラも相手の至近距離まで近づいてお互いに罵詈雑言を吐き捨てながら睨み合っていた。

「ちよつ! おつ、お兄ちゃんたち!! ここ、博物館!! 博物館だからね!! 貴重な展示品とかいろいろ重要文化財的なあれやこれやがあるんだからこんなところで争わないでよ!!」

常時臨戦態勢の二対の間に静止を促すアギラだが: 彼女にも襲い掛かる脅威が降りかかった。

「ぐがああああああああ!!」

「へっ? ……ギヤアアアア!!」

それは飛び掛かって大きな口に並ぶ鋭利な牙を持ってアギラに噛みつこうと飛び出

して着たスカルゴモラだった。

「誰ツ!? 誰なの!?! なんでボクに噛みつきようとしてるのさあ!!?」

「がああああああ!!」

「いだけああああツ!! 噛まないで!! 食べないで!! ボクなんか食べてもおいしくないよ!!
うわあああ、トサカはやめてえええ!! 尻尾を齧らないでえええ!!」

齧る、齧る、とにかくアギラの部位と部位の至る所を齧り続けるスカルゴモラにとつてはアギラなど噛むオモチャ同然であった。

「誰かあああ!! たずけでえええ!!」

「自分で何とかしろ!」

「申し訳ございません、アキさん…今、手が離せません」

必死になって2人の内どちらかに助けてもらおうとするが拮抗状態のダグナもゴジラも助けに来てくれなかった。

「そんなああ!! うわあああ、首はやめてえええ! 首だけは本当にやめてえええ!!」

アギラはうつ伏せに腕と足と尻尾までも押さえつけられ、全身の身動きが取れない中で獣殻（シエル）が最も薄い首筋を噛みもせず、焦らしながら嘗め回すスカルゴモラにいいように遊ばれていた。

「ひぎいつ…やつ…やめて…食べないで…助けて…嫌だあ…いやだああ…うぎゅつ

…ひいつ…ひゃあん！」

ざらつく湿った舌、生暖かな息、今にも食い込んできそうな鋭い刃状の歯、これだけ噛みつくに絶妙な場面でスカルゴモラは噛まずにアギラの恐怖心を楽しんで堪能しているような鋭い目つきの際にある瞳の中に噛まれて生き血をすすられるかもしれない恐怖と嘗め回されている恥ずかしさに頬を赤くする恥辱と言う複雑な気持ちが入り乱れ苦悶の表情を浮かべるアギラを捉えていた。

襲われるアギラと襲うスカルゴモラ、一触即発のダグナと緒碓、俄然殺り合う気のゴジラとアルトリウス、上野の博物館内のただの展示室内が異様なまでのカオスに満ちていた。

そんな時だった…

「はあく…い！特別展示『日本の出現怪獣と現代の怪獣社会の縮図展』はこちらになります!!」

なだれ込むように外国人観光客を引き連れてツアーガイドの如く旗を掲げて引率するミオことベムラーが双方を止めに来て来たのである。

「は…い、こちらは『防衛任務を奪い合う組織間の抗争』をテーマとした像でございませう!!」

銃を構え合うダグナと緒碓を像と評して紹介する双方の周囲を外国人観光客たちは

フラッシュを焚いて各々が写真を撮りまわった。

「更にこちら、『光の戦士とバカデカトカゲ怪獣の一幕』にございます!!」

ゴジラもアルトリウスも怪獣と巨人の戦いと言うテーマの展示と勘違いされたまま『AMAZING』だの『BEAUTIFUL』だのと鑑賞されていた。

「お次は本展示の目玉、『怪獣娘同士の日常』にございます!!」

アギラの頬つぺたに噛みつきながら周囲に観覧されているこの状況に困惑するスカルゴモラは微動だにせず固まっていた。それはアギラも同じであった。

「さあ、お次は『バラージの神秘展』にございます!お急ぎの方はエスカレーターをお使いください!」

—ピッ!ピッ!ピッ!ピッ!—

ベムラーはなだれ込む観光客たちをホイッスルで誘導しながら「ウエルカム」のプラカードを掲げるビーコンの先導と共に別の展示へと向かわせた。

カオスを一変させる外国人観光客の雪崩一掃は状況を払拭させ『それどころではない』と言う状況にさせるものだった。

「…殺し合いの雰囲気では、ねえな」

「ああ、どうやらそうらしい…」

先に警戒を解いたのはゴジラとアルトリウスであった。お互いに手を引いてゴジラ

は入口側へ、アルトリウスは出口側へ各々向かう。

「帰ってバーの清掃でもしている」

「ええっ、お好きなように…」

そう言い残してゴジラは展示室を去った。

「緒確…ここはいい博物館だ、地球の歴史を感じる」

「おや、気に入りましたか？」

「フンツ、皮肉だ…次は滅する…必ず滅してやる」

アルトリウスは皮肉交じりにゴジラを葬り去ることのみを考えながら去って行った。

「ああ〜！待ってくれよ〜アニキイイ！」

先ほどまで野性的にアギラを襲っていたスカルゴモラは突如流暢に言葉を発してアルトリウス達の元へと駆け寄って3人は出口の方へと去って行った。

「……お怪我はございませんか？アキさん…」

「ううっ、怪我だらけですよおお!!うわあああ、酷いよ二人とも!!ボクは嘔まれて、嘗め回されて、穢されているってのに助けてくれないなんて酷すぎるよおお!!」

泣きじやくるアギラに対して深々と頭を下げて『申し訳ありません』と言うダグナの下に外国人観光客を誘導して状況を打開したベムラーとビーコンが戻って来た。

「お待たせ〜うまくやったわね！」

ベムラーは親指を立ててサムズアップをするが…

「うわあああ!!ミオざあああん!!」

「ありやりや?どうしたの急に…」

最早何かに縋りたいと言う気持ちが強まってアギラはベムラーに飛びついて彼女に抱き着いて肩を涙で濡らした。

一方、その頃…

「ようやく捕まえて網にかかったコイツに引つ張られてきたけど…」

「一体全体これはどういった状況なんでしょうかッ!」

ミクラスとウインダムは網に捕らえたベムスター（殻）に引つ張られて戻って来た入口付近の銅像前では6人の怪獣戦士（タイタヌス）たちと警察鎮圧部隊による一触即発の睨み合う現場を物陰に隠れながら見ていた。

「……えっ!?あつ…はいつ…てっ、撤収ですか!?緒確監視ッ!」

無線から緒確に連絡を受けた沖田は彼からの撤収命令に困惑した。

「ええッ!?どうするんですか、沖田さん!!」

「どうするも何も、通報を受けて出勤したのに…撤収って、ユニット長がなんて言うか…」

困惑する現場の沖田と坂本はどうすればいいのか指示も一向に出ない部隊の警察官達にも動揺が走っていた。

しかし、困惑する一同に更に困惑を招かぬない人物がやって来た。

「やあくどうも皆さん！ご苦労さまですう〜！」

手をヒラヒラと振りながらキツチリとしたスーツで身を固め、クセの強いうねった海藻のような髪型の薄ら笑った表情を見せる役人のような出で立ちの男がやって来た。

「えっ？誰ッ？」

「いやあく申し訳ない、この場はわたくしにお任せいただけませんか…あつ！私はいさようでした者です」

そう言って男の胸ポケットから一枚の名刺を差し出して年長者の坂本に手渡した。

「ええつと…ぼつ、防衛省?!」

「はい、防衛省情報調査部別室の北村シンイチと申します…あつ、『別班』じゃありませんよ『別室』です。よく間違われますが、前者は都市伝説です」

「はあ…それで、なんで防衛省さんが急に出張ってこられたと?」

「無論、彼らの事…見なかったことになっていただけませんか?」

手を合わせ願わくば怪獣戦士（タイタヌス）たちを見なかったことにしろと言う無茶な願いを申し出て来た。

「そんなの無理じゃないですか！現にこうして私たちの目の前に出現しているついでにッ!!」

「いや、そう申されましてもですねぇ…彼らも一応は人権も市民権も持ったれつきとした日本国民ですので…何ならこの内の3名は公務員ですし、その1名はあなた方と同じ警察官の方もいらっしやいますよ？」

北村は怪獣戦士（タイタヌス）たちの素性を知っている上で沖田たちが手を引かざるを得ない事情を語った。

「どういう事ですか!?彼らが…人間ツ!？」

「ええ…正直もうお気づきでしょう、やけに流暢に日本語も喋るし、二足でしつかりと立ち歩いている様子も見ている…どう考えても人間としか考えられないでしょう」

「いや、しかし…」

「おや、そうこうしていたら…彼ら、帰られたみたいですね」

沖田たちが困惑する内に怪獣戦士（タイタヌス）たちが人目にさえ触れぬ速さでその場から立ち去っていた。

そして、そこにはもうだれ一人の人間はおろか、怪獣なぞいなかったかのようなほど

に奇麗に消えていた。

「おつ、沖田さん……どうしましょうか……」

「ええつと……てつ、撤収く!!」

沖田による撤収の合図と共に警察の鎮圧部隊として編成されていた機動隊もS A Tも一糸乱れぬ連携で移送車両に乗り込ん行った。

「賢明なご判断で……では、私はコレにて……」

「待つて!一つ聞きたいんだけど……ああ言つた連中は、あとどれくらいこの国に居るわけ?」

沖田は素朴な疑問を事情知る北村に尋ねた。

「さあ……私の口からは、あなた方の身近にもいらつしやるとしかお答えできかねます」
うやむやにされた答えではあるがそれだけ聞けたのに満足した沖田は装着衣のアルトリウスに『配属そうそうに大変ですね』と語る坂本達と共に護送車へと乗り込んでいくのであった。

「ふうむ……さて、そちらに御隠れになっている怪獣娘さん方もそろそろ出てきてもよろしいかと……」

北村にはミクラスとウインダムが隠れていることなどお見通しであった。

「あつ、バレてた……」

「ええつと、どうしましょうか…ミクさん」

「まあまあ。そう警戒せず…自己紹介は省いて私はこういった物です」

「またも胸ポケットから名刺を差し出して2人に北村の素性を明かした。」

「もう何がなんだか…あたし頭わるいからわかんないよ、お！」

「私も…正直、言葉が出て来ません」

「無理ありませんね…しかしながら彼らに比べてあなた方怪獣娘さんはこの世界では新参者なんです。人間界があれば怪獣界もある、そういうだけの単純な話です」

「ええつと、それはつまり…あの『特生怪獣』さんと呼ばれる方々が古くから私たち怪獣娘よりも以前から存在しているという事でしようか？」

「はい、そういう事です…既にあなた方の組織も彼らについて情報を共有される日が来るかもしれませんので…まあ、その時になったら受け入れてあげてください…それじゃあ、私は次の仕事を立て込んでいますのでコレにて…」

「そう言い残して北村はミクラスとウインダムの前から立ち去って停めていた路上の黒い車に乗り込んで去って行った。」

—後日—

ブディ・マガザン原宿店は定休日に貸し切りでメンズスーツのお披露目と写真撮影のためユウゴに完成したスーツを着せて見せた。

「あらら……結構似合ってるじゃない、ユウゴ君」

「なかなか似合ってるつすよ、ユウゴさん！」

「私たちまでお呼びいただいてありがとうございます、アギさん」

「いいよ、別に……本当は少しでもお兄ちゃんに恥ずかしい思いをしてもらいたかったけど、無駄に様になってるのがちよつとムカつくかな」

「意外と不純な考えでしたッ!？」

ミオとアキだけでなくミクとレイカも呼び、メンズスーツの撮影会は店舗の店員たちからも盛況なほどに好評を博していた。

「さらに、モデルの様々な体格にも考慮してこの方々にも試着していただきました！」

エミリの紹介と共にユウゴのみならず、トオルとジャックにも2人に合う色のスーツを着せてモデルに登場させた。

「うお、似合ってるつすよ! 師匠!!」

「師匠?……ミクちゃん、いつからジャックさんに師事されていたの?」

「この間のパーティーの時にどうしたらそんなムツキムキになれるのか気になって……話

している内にあたしもザンドリアスにとつてのレッドキングさんみたいな師匠が欲しかったからその日の内に弟子入りしたんだあゝ！」

ミクが筋肉の壁が如きジャックと同じ筋肉を搭載したイメージがアキの頭の中で過つたがフルフルと首を振つてミクの両肩に手を添えた。

「んんっゝなんか首回りがキツイなあ」

「ネクタイ締め過ぎたんじゃないかい？どれ、貸して見せて」

首回りが気になるユウゴにトオルは彼のネクタイを緩めて見たが…その光景を目の当たりにしたレイカは鼻血を出して倒れた。

「ウインちゃんツ!?どうしたの!?!」

「…がつ、眼福ですうツ」

その顔はどこか安らいだ表情ながらも魂が天上へと向かつて召されているかのようであつた。

「それでは、撮影を開始しますのでこちらにお願いします」

3人はエミリの指示の元に続々と撮影場所まで向かつた。

「ねえねえ、お兄さんたちゝ撮影終わつたらお姉さんと遊びにいかなあゝい」

「こゝんの色欲魔!まだ懲りてないのかい!!あの子たち、まだ18よ!」

「それが何よ!年下趣味の何がいけないのよ!源氏物語なめんじやないわよ…つて1

「8 いい!?あの見た目で!」

ミオに引き止められながらも抵抗するカレンだったが、ユウゴの年齢を聞いてビツクリした。更にジャックは『私は19だ』と答えたことに更に波紋を呼ぶこととなった。

「はあ…みんな、楽しそうで何よりだなあ…」

そんな様子を見守るアキだったが…彼女の表情は少し穏やかでない心情を現していた。



—前日—

G I R L S 東京支部

「どつ、どつ、どういうことですか?ピグモンさん!…おにい… “特生怪獣” の正体が判明したって!」

それはアキが兄のことも含め、他の怪獣戦士(タイタヌス)たちの素性が暴かれないように隠していた彼らの素性が割れたと最初は思っていた。

「まだ一部しか確認が取れていませんが…先ほど米国G I R L Sの方から支部長より連絡が回って “特生怪獣” さんたちの怪獣名が判明したのですが、现阶段では共有はアギ

アギのみと私が判断しました」

それは同じく指導課として、また後輩としても信頼を寄せるアキにのみトモミは明かすことを決意していた。

「そつ、それで……どんな名前でもどんな怪獣何ですか？」

「お教えしますが……ここからは他の怪獣娘さんたちには内緒でお願いいたします」

「わっ、わかりました」

深刻な表情に対して重大な責任感さえも感じるアキも今まで見たことのないトモミの表情から兄に関わる怪獣の正体が今まさに判明しようとしていた。

「それでは……こちらを……」

そこに載っていたのは普段見ているわかりやすい怪獣大百科のような図鑑形式の怪獣記録ではなく、堅苦しいピンボケしたような写真しか載っていない怪獣詳細表だった。

資料形式のプリントには『CODE NAME: King of Monsters』と表記されていた。

「キング……オブ……モンスターズ？」

「別名『怪獣の王たち』……本来であれば合衆国大統領、国連事務総長、以前GIRLSを訪れていたいただいた御姫様の国のインファント王国の女王陛下の三者の許可を経て公表

されるトツプシークレット……私たちの間でも “抹消された50年代” と都市伝説チツクに読んでいる案件なのです」

怪獣の王と呼称される伝説めいた存在の詳細が事細かく記載された内容にアキは目を凝らして、その内容に衝撃が走った。

特に『ゴジラ』に関する記述には……1954年にて初出現、当時の東京都の人口の半数を直接と関節だけでも被害を受けた人数と被害規模、壮絶な記録が残されていた。